

# 凡才錬金術師と天才錬金術師

はごろもんフース

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「今日のオレ様も可愛いだろ?」「……………」

「……………ちっ」「判った……………判ったから運ぶな!引きずるな!」

オリ主とグランブルーファンタジーのカリオストロをゼロ魔につっこんだお話です。

追記:話の都合上、ルイズの性格が少し柔らかくなっております。

※投稿日について活動報告に追加しました。

## 目次

外伝

if・烈風の騎士姫	1
ボク／オレ様が世界で一番可愛い!!	18
ハッピー☆バレンタイン（軽くネタバレあり）	26
一章：出会い	
プロローグ：召喚	36
一話：契約	48
二話：パンツ買い取ります	58
三話：パンツは作れません	70
四話：トリステイン危機一髪	81
五話：君がツ 泣くまで 殴るのをやめなйтツ!	96
六話：ウロボロス食事の時間だよ☆	103
七話：傷の代価	114
八話：た〜んとお食べ☆	120
九話：意地を張れ	138
十話：友よ	147
十一話：罰と交渉	160
十二話：こういうのも悪くないか、悪くない	177
十三話：ドキッ!地雷だらけのアトリエ!	187
十四話：ここに旗を立てよう	197
十五話：ヴァリエール家跡継ぎ問題	205
十六話：挑戦状	216
十七話：これが私の御主人様	227
十八話：彼と彼／彼女の恋愛事情	238

十九話：杖を掲げ、名を示せ	247
二十話：二人だけの舞踏会	259
二十一話：月下美人	270
エピソード・難易度HELL	279
二章：白き国の王子様	
プロローグ：脱出	282
一話：必殺技	292
二話：ストレスでどうにかなりそうです	302
三話：ルイズ泣く	309
四話：ルイズ癒される	316
五話：朝っていつき！ 日が昇ったら！	324
六話：餌	333
閑話：最悪	346
七話：プレゼント	352
八話：亡者の群れ	360
九話：それぞれの戦い	376

## 外伝

### if・烈風の騎士姫

人が多い。王都の門をくぐったときに少年？ が最初に思った事だった。

何処を見ても人、人の波。辺りを見渡せば、人々が少年？ を見つめた。

本来であれば人をそれも貴族をじろじろと見るのは失礼にあたる。しかし、少年？ の格好や容姿がそんな常識を忘れさせていた。

その少年？ は一昔前に流行った衣装に身を包んでいた。

王都でそんなダサイ格好をしていれば、道行く人の嘲笑をかうものだが、この少年？ に送られたのは感嘆であった。

色鮮やかな桃色がかった長いブロンドと、幼いながらも綺麗な顔立ちが衣装とのギャップを生みだしている。

そんな美少女にも見え、美少年にも見えるその若い貴族に道行く人は興味津々で眺めていった。

「……あつー！」

そんな人々の注目を一身に浴びていた少年？ だが、辺りを見渡しとある場所に目を向け嬉しそうに微笑んだ。

少年？ の目の先には銀色に輝く綺麗な甲冑を着込んだ騎士達が巡回をしているところであった。

それを見て少年？ は緊張した面持ちで見つめた。

この少年？ 、いやこの少女の名前は、カリーヌ・デジレ・マイヤールという。

彼女が王都に来たのには理由があった。彼女には夢があるのだ。

故郷で通りすがりの騎士に助けられてから、ずっと夢を見ていた……騎士になる 夢を。

どうせなら、国一番の騎士……。

この国で一番の騎士と言えば、王様を警護する近衛の魔法騎士団しかない。

その騎士団に入るため、こうして男性の格好をしてまでカリンはここにやってきた。

そして目の前にはその夢見た騎士団が居た。

「よしっ」

カリンはこれはチャンスだと思い、左手に勇気と言う言葉を書き込み舌を少し出して舐めた。

これはカリンの癖であった。昔助けてもらった騎士に怖くないのかと聞いた事がある。

その時にその騎士がこうすれば怖くないんだ……と呪いを見せてくれた。

それ以来この呪いを行なうと体の底から活気があふれ出し、自分は無敵だと思えるほどの勇気が湧いて来る。

「何が何でも入れてもらわなければ……」

カリンは勇気が湧いてくるのを感じしっかりとした足取りで騎士団へと足を進める。

そんな様子をカリンを見ていた人々が心配そうに見つめた。

それでもカリンは止まらない、止められない。

本来であれば父親から紹介された人物の元に行つてからのほうが良かったのだろうが、見てしまったのだ。

自分が憧れ続けた人々を……。

「すみません」

「……」

カリンが声を掛けると巡回をしていたであろう騎士がカリンを見た。

じつと無言で見つめてくる騎士に少しばかりカリンは怯むも用件を少し口早になりながらも告げる。

「私は……カリンと申します。田舎者ではありますが、騎士団に入団したくて参りました」

「……」

「どうか上の人にお取次ぎお願いできませんか？」

ドキドキと胸が鳴る中、カリンはしっかりと頭を下げ言葉を待つ

た。

「……？」

一分待ち、二分待ち、三分が経過した頃になりカリンは顔を上げる。ずっと待っているが特に言葉も相手も動く気配もない。

それを不思議に思い顔を上げれば、さきほど同様の視線を騎士はずっとカリンに向けていた。

「……あの？」

「……ざーい」

「は？」

不思議に思い声を掛ければ、ようやく騎士が何かを発した。

小さい物であったが為に聴こえなかつたが、確かに何かを言った。

カリンは首を傾げ、ほかの騎士のほうに視線を向けるも他の騎士は辺りを見渡して警邏を続けている。

仕事の邪魔をこれ以上する訳にもいかず、イライラを溜めながら待っていれば騎士が大声をいきなりあげた。

『ウイル様バンザーーイ!!』

「ひう……」

『カリオストロ様一番可愛い!!』

それはあまりにも大きな声でカリンは思わず身を竦ませた。

騎士は、ウイルとカリオストロと言う人物の名前を連呼して両手を上げては降ろす動作を繰り返した。

「なっとなっとなっ……!?!」

「ああ……三時か」

「早いなーもう三時か」

目の前の騎士の行動にカリンが驚いていれば、道行く人はカリンから目を離し我に帰るとそう言つて去っていく。

あまりな出来事にキョロキョロとカリンが辺りを見渡すと辺りの人も慣れたような態度ですごしていた。

この騎士の行動に驚いていたのはカリン一人であった。

「……あつ、失礼。魔法騎士団入部希望者ですね？」

「え？ あ……はい」

「騎士団に入るには軽い面接と入団テストをして、合格すれば晴れて騎士習いとして入っていただきます」

「そう……なんですか」

先ほどの事など何もなかったように振舞う騎士にカリンは薄ら寒い物を感じた。

それでも逃げ出さなかったのは急な事と夢に一步近づいたためだ。教えてくれた騎士が案内しますね、と言って隊長格の人物に抜ける事を言つてカリンを案内する。

そんな騎士にカリンは先ほどの事を思い出し、本当に付いていってもいいのかと自問自答するも結局は付いていくことにした。

カリンがテストに合格してから三カ月後、王城の執務室で二人の男性が椅子に座りテーブルに齧りついていた。

ガリガリと音を立て、あるいは幾つもの書類に目を通し判子を押していく。

二人の作業はこれの繰り返しである。

「なあ……」

「なんだ」

暫く二人の男性がそんな事を続けていれば、片方の男性が言葉を発した。

その男性は、二十前半かそこらと思われる男性でスラっとした体つきでありながらも腕などは筋肉が付いていた。

髪は夜を思わせるほど黒く、少しばかり伸びた髪が所々だらしなく跳ねている。

十人に十とはいかないが、そこそこのハンサム顔で女性受けも良さそうな男性、ウイル・ツチールが目の前の同僚へと声をかける。

「王様が、戦じゃー!!! とか言つてさつき走つて行ったぞ」

「ふくん……はっ?」



「王様が嬉しそうに戦の準備をしていた……OK?」

「聞いてないぞ!!!」

何気なくウイルが言えば、もう片方の男性は机を力いっぱい叩き、怒りを表す。

その男性もウイル同様の年齢と黒髪であった。

ウイルと違い、その男性は黒髪を後ろに撫で付け切れ長の鋭い目をしている。

トリステイン王国の若き大公のエスターシユだ。

若いながらも宰相を務めており、トリステインの政治・経済を一手に引き受けいる人物だ。

この二人は同じ魔法学院出身で友人同士であり、今現在同じ職場で頭を悩ます仲であった。

「あんの戦馬鹿！ 戦にどれだけの人と金と時間が掛かると思っているー！」

「あつはつは、大変だなー！」

荒々しく立ち上がったエスターシユであったが、すぐに力なく椅子に座り込むとそのまま項垂れた。

そんなエスターシユをウイルは笑い、自分の書類を片付けていく。

そのウイルの余裕そうな態度にエスターシユは一縷の希望を持った。

「……なあウイル」

「なんだ？」

「俺達……親友だよな」

「そうだな」

そんなことを言ってくるエスターシユにウイルは遠い目となり、昔を思い出す。

様々なことをして馬鹿騒ぎして争って……実に楽しかったなと思いに心に馳せた。

「頼む！ 書類を手伝ってくれ！」

「いよ」

「……無理か、え？」

「構わないぞ」

頭を下げ無理を承知で頼んでみればウイルスは呆気なく答えた。

その答えにエスターシユのほうが呆気にとられるぐらいで口を開けてウイルスを見つめた。

ウイルスは、自分の終わった書類をまとめ机で整えながら、隣の書類へと手に掛けた。

「いいのか？」

「おう！」

「っ!! ありが……「俺の仕事も後で手伝ってくれたらな」……なに？」

「いや……戦終わって書類が片付いたらでいいんだ」

「なるほど……確かにそれなら問題ないな」

ウイルスの言葉にやっぱ裏があつたかと思うも、次の言葉で霧散した。

ウイルスは手伝うのは落ち着いたらでいいといってくれた。

これにはエスターシユも涙が出るほど嬉しく心に来た。

やはり持つべき者は親友だよなと思い、一度国の転覆も考えたが白紙にして良かったと思った。

「……それじゃ」

「……待て、お前の仕事ってなんだ？」

「ちっ」

そんなことを思ったが、ふと思い出した事がありエスターシユは質問をした。

ウイルスはその質問に気付いたかとはかりに舌打をかました。

エスターシユは政治と経済を自分が担当しているのを思い出したのだ。

この国の大きな事柄に置いて仕事を分けると三つ。

そのうちの二つをエスターシユが。残りの一つをウイルスが行なっている。

「……お前の担当は外交だったよな」

「そうだな」

「……今何処と外交を行なっている」

「……」

エステルシュの言葉にウイルは笑みを浮かべたまま明後日の方向を向いた。

そしてポツリと呟いた。

「吸血鬼とオーク……」

「さてと仕事に戻るか……あつ、先ほどの件はなしで頼む」

ウイルの言葉を聞いてエステルシュは先ほどの手伝いの件を取り消した。

これに慌てたのはウイルのほうだ。よほど仕事が大変なのだろう、急いで取り繕うように声をかけてくる。

「オークのほうだけでも無理？」

「吸血鬼はいいのか」

「あつちは元々人間と共存しなきゃやっていけない種族だし楽なんだ」

ハルケギニアにおいて吸血鬼とは亜人の中でもポピュラーで非常に恐れられている種族である。

人間同様の姿をしていて異常な力と生命力、更には先住魔法を使い血を吸って殺した相手をグールにすることが出来る。

グールは生前と姿かたち変わらず、更には吸血鬼本体の苦手な太陽の下でも活動が可能だ。

そんな種族相手に外交などしたくないとエステルシュは思うも、ウイルにとってはオークよりましらしい。

「……オークってそんなに大変なのか？」

「同盟組みませんか？ よし！ 戦うか！ 案件持って来ました！

よし！ 戦うか！」

「……」

「この繰り返しだ、知性も人間同様であり筋力が凄い戦闘種族……毎回話し合いの度に死闘なんだけど……」

そう言つて今度はウイルが机へと倒れこむ。

よく見ればだ。ウイルの体のあちこちに包帯が巻かれており、その

オークとの死闘を傷が物語っていた。

「……よく死なないな、あんな奴等と対峙して」

「オークつつても種類があるからな、よく人間に危害を加える奴は知性からして論外の奴だし。俺が相手をしてるオークはむしろ紳士だ」

「……オークがか？」

「おう、よく誤解されるけど基本人は襲わないぞ？ 強い人間以外はだけど」

「そうなのか」

ウイルの言葉にエスターシユは眉を潜め、一度見てみるのもありかと思いつつ。

外交を繰り返しているということは、近いうち議題に上がり政治や経済面としても見ていかなければいけなくなる。

今度ウイルが行く時にでも何人か腕利きを連れて行き様子を見るかとエスターシユは考えた。

「ちなみに戦いつてどんなのだ？」

「二対一の戦いでほぼ近接戦闘」

「パス、無理。というかメイジにそんな事をさせるな」

そう考えていたが、ウイルの言葉を聞いて方向転換した。

メイジとは後ろで魔法を撃つて戦う者、間違っても近接メインではない。

しかもだ。オークの筋力は人間をはるかに越えており、丸太をぶん回すような相手に近接で挑みたくない。

むしろ目の前の友人はどうして生きているのだろうかとエスターシユは不思議に思った。

「そこは……ほら『フライ』で移動し、『ライトネス』を相手にかけて重さをなくして投げ飛ばしたり。後は振ってきた棍棒が当たりそうなら『レビテーション』で速度を殺し、『硬化』の魔法で防ぐ」

「……」

『念力』の魔法で相手の服を操り、服を絡ませて動けなくしたり。鍊金で相手の服を金属に変えて動けなくして……まあ、やり方次第？」

そこまで聞いてエスターシユは頷き察した。

「お前以外は無理だ」

「……ですよねー」

この返答が返って来ることをウイルも察していたのだろう。

机にぐったりとしながらも領き、姿勢を戻し書類を手に取った。

結局の所、互いに自分の仕事で手一杯で相手を気遣ってる余裕がない事だけが分かった。

「というより何で外交が亜人中心なんだ？」

「カリオストロが素材は近くにあったほうがよくね？ とか言い出して王様がやれと」

「……ロマリアの神官共はどうした」

「何かカリオストロと個室で話し合っていた神官が『カリオストロ様可愛い！ 世界一イイイイイ!!』とかしか叫ばなくなってるね」

「……」

「異端だ！ とか騒いでた連中も声をかけるたびにそんな奇声を発する同僚を見て寝返った」

これにはエスターシユも書類を置き頭を抱えるしかない。

そういえば、最近ロマリア関連がやけに大人しいなと思っていたがそんな裏があるとは思わなかったのだ。

「というより、あの変な事を叫んで街を巡回する魔法騎士団もやっぱりお前等のせいか」

「俺のせいにはしないでくれ」

最近になり魔法騎士団の一部が街を定期的に巡回するようになったのだが、とある時間帯になると叫びだすのだ。

その叫びを住人達も最初こそ怯えながら見ていたが、暫くすれば害がないことが分かり慣れていった。

むしろいつも同じ時間帯に叫ぶので最早時計代わりにすらなっている。

そんな報告を受けエスターシユは頭を抱えていたが、関わっているであろう人物が容易に想像出来、無視した。

下手に藪を突っついてカリオストロが出てきたら目も当てられない。

「というか、お前の使い魔だろう。どうにかしろ、この国が殆ど乗っ取られてるじゃないか」

「出来るもんならお前がしてみる……あれを俺にどうしろと？」

エスターシユが今現在のトリステインの状況を思い出し、提案するもウイルが跳ね除けた。

今現在の国の状況は至って良好だ。法も整備され、経済は発達し回りだし、外交も上手くいっている。

その国で暮らす一般人にとってはまさに幸せな時期だ。……あくまで一般人はだが。

ことの始まりは、ウイルの使い魔であるカリオストロの容姿が至って美しいとの噂を聞き王様が謁見をさせたこと。

身長が低く子供に見られがちなカリオストロであつたが美貌は本物だ。

フィリップ三世は大層気に入り、気分を良くしてカリオストロに手を出した。手を出してしまった。

本来であれば相手は王様、手を出せないような存在で抵抗の余地なしなのだが、そこはカリオストロ。

手を出してきたフィリップ三世を滅多滅多に叩きのめし吊るし上げた。

それを見て周りの貴族も応戦するも全て十秒足らずに叩きのめされ、抵抗する人も出ず呆気なく城が制圧をされる。

とは言うもののカリオストロも国が欲しいわけではないので直ぐに開放し、オレ様にそんな趣味はないと強くフィリップ三世に言つて騒動が終わった。

ここでカリオストロには手を出さないと誓い終われば良かったのだが、そうは問屋を下ろさない。

フィリップ三世とは、元より武人の類の人間だ。戦に出れば恵まれた体格と才能で幾多の敵を打ち破る『英雄王』。

そんなフィリップ三世の琴線にカリオストロは触れてしまったらしい。それ以来、よりカリオストロを気に入りに言ひなりました。

「不幸な事件だった」

「……どうすんだよ、これから」

「……知るかよ。最近さ、王様の俺を見る視線が怖いんだけど……あれだよあれ、嫉妬や恨みで燃え上がってるよ」

ウイルは最近自分を見る王様の視線を思い出しゲンナリとした表情をした。

男に興味がないカリオストロが唯一傍に置く存在が己の主人であるウイルのみである。

王様なのに部下の使い魔に手を出せず、部下は使い魔とイチャイチャとします。

そんな悪循環の中、フィリップ三世とウイルの苦悩は続く。

「……王がお前を恨むのは他にも理由あるけどな」

「……まじでやめて欲しい」

「何がですか?」

「出たよ」

「出たな」

「??」

そんな話題を続けていれば噂話をしていた人物が執務室に顔を出した。

その人物は、十二、三歳ほどの利発そうな少女だ。

その少女は少しの間、エスターシユとウイルを見比べ不思議そうにするも直ぐに気を取り直し、ウイルの背中へと回り込み抱きしめた。

「はしたないのでやめてもらえませんか?」

「むーっ、ウイルは相変わらず私に冷たいですわ」

「お仕事中ですし、異性である自分に姫様がそのようなことをするのはいかがかと」

至極当然の事をサラっと言えば、少女——マリアンヌ姫殿下は頬を膨らませて離れる。

そう、このお姫様こそがウイルの最近の悩みであり、フィリップ三世からきつくされる理由の一つでもあった。

マリアンヌ姫殿下、フィリップ三世の娘で彼は彼女の事を大層大事

に大事に育てている。

フィリップ三世は正に目に入れても痛くないとばかりに親馬鹿なのだ。

そんな可愛い姫の恋する相手がウイルであった。

マリアンヌにとって周りの男性からチャホヤされるのが日常だ。

栗色のまばゆい髪に、大粒の瞳。見れば誰もが傅くような気品と雰囲気醸し出していた。

そんなマリアンヌを見て誰もがうっとりとする中、ウイルだけが特に何の反応を見せない。

それが姫様がウイルに執着する理由である。

ウイルとしては姫様も可愛いがそれ以上に可愛い子？ が傍に居る為の反応であったが、それでも姫様は気に入らないらしい。

初めて会ってからというものの暇を見つければこうやって誘惑をしてくるのだ。

それがフィリップ三世の怒りを買っていくこととなっていた。

「手を出せば？」

「マリアンヌ姫君がカリオストロに銅像にされる」

友人であるエスターシュは解決策とばかりにとんでもない発言をした。

それをウイルは首を振り即座に否定する。そんなことを姫様の目の前ですればマリアンヌは更に膨れた。

なんと言う悪循環、ウイルが相手にしなければマリアンヌの攻勢が強まり、フィリップ三世が怒り。

手を出せば、カリオストロが何をするか分からない、更にフィリップ三世の怒りを買う。

どちらにしろ詰んでいる状態である。

「ほら……俺以外にも居るじゃないですか、朴念仁が」

どうにか自分から視線を外させようとウイルは、マリアンヌに反応しない人をあげた。

「サンドリオンにはカリリーヌが居るではありませんか」

魔法騎士団のサンドリオンをあげるも即座に反論されて終わった。



サンドリオン、酒ばかりを飲むが腕前は凄い魔法騎士団員である男性だ。

女性に興味がないと言っていて、近寄り難い雰囲気を出していたのだが、この間生き別れた恋人と会ったとかで熱に浮かされている。

もう少し早めに姫様のお相手をさせていけばよかったですと後悔するも遅かった。

「ですよね……ならカリンなどいかがですか？ 年も近いですし腕も立ちます。俺よりも容姿が優れ素晴らしい貴族ですよ？」

「最近分かりましたけど……カリンって女性ですよね」

次に上げたのはカリンだ。

カリンは魔法騎士団テストで素晴らしい腕を披露し、一ヶ月の見習いの後正式に騎士へと成り上がった。

容姿と魔法の腕にも優れて、年も近いと言う事で姫様の護衛を即座に任せる。

男装をしており、少年に見えるも中身が女性なので姫様に手を出す心配もないと言う安牌で逸材であった。

出来れば少年と騙されて姫様の関心が其方に向かないかなと思っていたのだが……見事にバレたらしい。

「……あー」

「水浴びしてる所を見てしまいました」

なんと言うか、やはりと言うべきか詰めが甘いところがカリンにはあった。

今回はそれが見事に嵌りバレてしまったらしい。

最近姫様の攻勢が弱まったと思っただけでほっとしていたのにとウイルは内心呟いた。

「姫様!!」

「あら、カリン」

「……仕事したい」

そんな事をしていけば、執務室の扉が壊れるほど叩き付けられ開いた。

エスターシュとウイルが互いに顔を合わせて疲れた表情で見合わ

せ、扉のほうへと視線を向ければ、怒ったカリンが立っている。

カリンは姫様を見て少し微笑むも直ぐに近くに居たウイルを見て顔を顰めた。

「姫様、お離れ下さい。そいつは卑怯者です」

「もう……カリンはいつもそればかりね」

「はあ……」

何度も行なわれた行為にウイルはため息を吐いた。

カリンと顔を合わせるといつもこうなるのだ。

前にカリンが手合わせをお願いしたいと言って来た事があり、それを受けたのだが……。

それ以来ずっと目の敵にされ、こんな態度を取られ続けていた。

「卑怯って……一応戦術だ、戦術」

「うるさい！ 私は認めないぞ！」

「……前から思ってたけど、何をしたんだ？」

本来であれば上官とも言えるウイルに楯突く事は許されない。

それなのにカリンはお構い無しとばかりに噛み付いてきた。

エスターシユはそれを眺めるばかりであったが、流石にここまで執拗に行なわれる行為に疑問に思い質問を投げかけた。

「何って……『念力』でカリンのマントを操って簀巻きにして降参するまで擦った」

「あー……」

「わ、私をあんな目にあ、遭わせて……た、ただで済むと思うなよー」

ウイルの問いにエスターシユは遠くを見つめ、カリンは顔を真っ赤にさせて怒鳴った。

擦った際にやり過ぎたかなと思ったが、カリンが降参しないのが悪いと即座に決めた。

ウイルの徹底的にやる性格とカリンの負けず嫌いな性格は見事に一致し、更に悪循環を生む。

「……そこまで言うなら本気の本気で相手をしてやってもいいぞ。今度は泣いてもやめないけどな」

「っ……!!」

流石にこれ以上何かされても困るなど思い徹底的にカリンを打ちのめそうかとウイルは思った。

元よりカリンは臆病な性格をしている、此方も本気の状態だと言うことを示せば引くかも知れない。

そう……思っていた。

「そ、その……なんだ、てっ、徹底的に弄られるということか」「あん？」

顔を青くして引き下がると思っていたカリンだが、何やら様子がおかしい。

顔を青くする所か顔を真っ赤にさせ、しどろもどろになり視線をあちら此方に彷徨わせ始めた。

そんなカリンを見てウイルはたたりと冷や汗を掻く。

今まで負けず嫌いな性格と騎士道精神に赴いて此方に突つかかっ  
てきていたと思っていたのだが、些か違うらしい。

「……いや弄らないけど」

「そ、そうか……そうか」

何やら期待した視線を此方へと向けられていたので試しに否定すればシユンと怒られた子犬のように大人しくなった。

そんなカリンの様子にウイルは確信を得た、得てしまった。

「……やっぱりやるか」

「そうか！」

パーと輝くカリンを見てウイルはがっくりと肩を落とし、机に倒れこんだ。

カリン——カリーヌ・デジレ・マイヤール。

その本性は臆病で弄られるのが大好きなDMだった。

「ねえ、ウイル……今度遠乗り行きませんか？」

「姫様、今からこいつはわ、私が成敗され……するので」「……タスケテ」

ゆさゆさと揺らされながらウイルは痛むお腹を押さえ、相方へと視線を送った。

しかし、エスターシユはそれを見ないようにしながら自分の書類へ

と取り掛かっており、完全無視を決め込んでいた。

「ねえねえ、ウイルく。今度は……あんつ？」

「あらあら」

「……」

そんな生き地獄を味わっていれば、閻魔大王が執務室へと乱入してきた。

金色に靡く綺麗な髪にまつげから鼻、口、目と全てが計算された美貌を持ち。

可愛らしい口から出る声も聞いただけで癒され、頬を染め上げる。

そんな完璧な存在であり、ウイルの使い魔であるカリオストロが顔を出したのである。

カリオストロが顔を出せば雰囲気が一変する。

先ほどまで暢気だった雰囲気は急激に下がり、寒いものへと変化した。

マリアン又は笑っているが冷たい笑みで。

カリンは真顔となり、何の感情も籠っていない瞳で。

カリオストロはいつものように自信満々で余裕を見せて二人を見た。

「お前等、邪魔だ。退け」

「あら、私はこの国のお姫様ですもの。何処に居てもおかしくありませんわ」

「はっ！ 何がこの国だ。既にオレ様の国になってんだよ」

カリオストロがしっしと猫でも払うように手を動かせば、マリアンヌの額に青筋が出て言葉を返した。

しかし、そこはカリオストロ。マリアンヌの言葉など何処吹く風で呆気なく吹き返す。

そんな二人をカリンは腰にある杖に手をかけ今か今かと抜く瞬間を待っていた。

「くっくっく……なんだ凶星で何も言えないか？」

「っ……っ！」

「姫様、こいつは私が」

「無理だつての……てかお前等にもこの国にも執着ねーから」

そう言つて、カリオストロはため息を吐いて二人を押しのけるとウイルの膝上へと座つた。

「なあー！」

「っ……！」

「ふふん♪」

そうすれば、残りの二人が絶句し、それを見てカリオストロは勝ち誇る。

そして、カリオストロは上を向いてにっこりと笑い言い放つた。

「ここはあく……カリオストロの特等席なの☆」

カリオストロの言葉に鬼の様な表情をする二人を見て、ウイルは痛むお腹を押さえ、カリオストロが持つてきた書類へと目を向け……

『エルフとの外交について』

正真正銘、今度こそ倒れこんだ。

ボク／オレ様が世界で一番可愛い!!

どうしてこうなった。

それが現在の私……アンリエッタの気持ちである。

一年に一度の『使い魔お披露目会』で学院に来た時までは良かった。ゲルマニアから帰って来て、そのまま学院で一晩休んだ翌日。

私の慰安を込めての催し物で楽しみの一つである。

綺麗な炎を吐く火トカゲに喋る梟、今年は風竜を召喚した者さえ居た。

親友のルイズが人間を召喚して居た事に驚きつつも何事もなく進んでいく。

うん、ここまで思い返しても特に可笑しなところはない。

だというのに……。

「ボクが!!」一番カワイイです!」

「一番カワイイのはカリオストロに決まってるでしょ☆」

「はあ……」

今現在、私の目の前では二人の可憐な少女がお互いに睨みあっていた。本当に何でこうなったのかしら……。

一人は、薄い紫色の髪の毛を短くまとめ、大変可愛い顔立ちの少女。

マントと白いブラウスを着ていることから学院の生徒だと分かる。

もう一人は、長い金髪で此方もまた見た事ないほどの絶世の美少女だ。

正直、見た瞬間、ため息が漏れ少しばかり嫉妬するほどであった。

「きめ細やかな肌!この可愛い顔……完璧過ぎますね、ボク」

紫色の子が手を頬に当てうつとりとしている。

「ふふん、カリオストロも凄いから!この流れる髪の毛にこの声……かわいいを体現してるでしょ?」

金髪の子が髪を手で流し、アピールを始める。

「ボクです!」

「カリオストロ！」

未だに二人の言い合いは終わらない。

ここは私が声を掛け辞めさせるべきなのだろうか。

というより、他の人達は何をしているのか。

「——それはそつち！」

「人は見つかったか？」

「ええ、丁度良い人が居て」

二人を咎めない事に不思議に思い、辺りを見渡せば何やら騒がしく動いている一団を見つける。

兵士に教師、生徒までが何やらステージ裏でやっているようだ。

本当に何をしているのだろう。

周りに声を掛けようも私の周りだけポツカリと空いており、話し掛けられない。

なにこれ……私は嫌われているのだろうか。

むしろ、護衛まで居ないのはどうなのかと。

「むむむ」

「うー！」

「え……ちよつと、何で俺!？」

そんな事を思いながらボーとしていると何やら一人の男性がステージへと上げられていた。

その男性は、短い癖のある黒髪の男性だ。

身長は百七十後半位で中々に高い。

顔立ちもそれなりで、ステージに立っている彼を見て人気が出そうだと思った。

「え……まじで、これやるの?」

「頑張れ」

二人の少女の横に立たせられた男性は、何やら教師に紙を渡されていた。

その紙を見て、教師を見て何やら話し合っている。

一体、なんだろうか。

「姫様」

「えっ……あー、何処に行つてたんですか？」

少しばかり興味が沸き、ステージ上を見つめていると声を掛けられた。

声に少し驚き、横を見れば、何時の間にか枢機卿が帰つて来ていた。そういえば、この人もいなかったな。

「いろいろと打ち合わせがありました、さき、姫様此方へ」

「へ？」

何処で何をしていたのか聞こうとすると腕を取られ席を立たせられた。

少しばかり早足の枢機卿に追いつきながら歩けば、ステージの上へと上げさせられる。

これは……あれだろうか、二人の少女がどちらかが可愛いかで争っているのだ。

『トリステインで一番可愛いのは姫様』的なアレだろうか。

え〜……アンリエッタ困っちゃうな。

「さき、此方に」

「あれ？」

手を頬に当てそんな妄想に耽っていると椅子に座らされた。

不思議に思い辺りを見渡せば……。

『審査員席』と書かれた立て札を見つけた。

おい、枢機卿。

お姫様に対してこの扱いはないだろう。

よりによつて……審査員つて。

『あーあー……うわ、まじでマイクだし、この魔法道具』

机に項垂れてガツクリと来ていると大きな声が聴こえた。

顔を上げれば、先ほどの男性が何やら変な道具を持って驚いている。

『えー……これより『世界一可愛い決定戦』を開始致します』

「はえ？」

『おおおおおー……!!!』

え、何かが始まった。!!!



『最初に審査員をご紹介します。まず一人目、ワシのセクハラは百八あるぞ、オールド・オスマン!』

「ほっほっほ」

『おい、誰かこの爺捕まえろ』

紙を見ながら一人目の審査員の紹介した所でつつこみが入る。

読み上げる内容が酷いが、オールド・オスマンは満足らしい。

この学院大丈夫かしら……。

『次は……そこら辺を歩いていた青髭の旦那、ミスター・ガリア!!』

「わっはっはっは」

「ぶふっ」

『はい、どっからどう見てもジョゼフ王です。誰だよ、この人連れて来たの』

次に紹介された人を見て思わず、噴出す。

青い髪に青い髭、目元を仮面で隠しているが、誰がどう見てもガリア

アの王『ジョゼフ王』である。

なんで!なんでこの人がここに!?

『もういいや、次は……トリスティンが誇る一輪の花!アンリエッタ

王女様!』

「えつと……ども」

『うおおお!!アンリエッタ様!!!』

紹介されたので軽く微笑み手を振ってみると、大きな声で声援が飛んでくる。

良かった、嫌われていないらしい。

『異常の三名を迎えての開催となります』

何でしょうか、今文字が違ったような。

異常って言いました?異常って。

私を含めないで頂きたい、私は正常です。

『それでは、今回の参加者の紹介と行きたいところですが……この際、ここからアピールしてもらいましょう!』

何だかんだ言って、この人もノリノリの様な……。

『エントリーナンバー一番、トリスティンが誇る一輪の花!ボクが一

「番カワイイです!!サチコ・コシミズ!!」

「しよっぱな私の紹介と被ってません!?

「ふっふっふ……この完璧なボクの可愛さに見惚れなさい!」

「先ほど言い争っていた紫色髪の子が前へと出てくる。」

「何やら自信有り気で威風堂々と歩いてきた。」

「!!」

「前まで歩くと腕を上げマントを放り投げる。」

「全員が上のマントに視線が行くとマントが不自然な風に煽られ回転し始める。」

「くるくると回るマントを見てみると急に落下し、少女の体を隠した。」

「え?」

「一瞬の出来事だった。」

「マントが少女の姿を隠したと思うと直ぐにマントが退けられる。」

「そのマントの下から出てきた少女の姿に驚く。」

「彼女の衣服が替わっていた。」

「白いブラウスと制服のスカートだったが、黒を基調としたドレスへと変化している。」

「頭には小さな悪魔の様な角を生やし、黒いドレスには金の線が入っていて美しい。」

「更に背中には悪魔の羽が付けられており、まさに『小悪魔』と言った姿である。」

「少女は、そのまま地面に落ちたマントの上にペタンと座り込み、一指し指を頬に当てる。」

「そして軽く微笑み、もう片方の手を観客へと差し出した。」

「もう、勝手にいなくならないで下さい!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「さっちゃん!!」

「さっちゃん!オレだー!腹パンさせてくれー!」

「かわいいよ!さっちゃん!!」

「その瞬間、会場が爆発した。」

声と声の大合唱で耳が痛くなり、手で押さえる。

ビリビリと空気が震え、体が肺が心臓に振動が襲ってくる。

『ト、トリステイン魔法学院一年生 サチコ・コシミズ嬢でした』

「ふふん♪流石はボク、この短時間でこの人気ですが、いやー自分が怖いです」

『……………えーと、審査員の方、今のはどうだったでしょうか』

「ほっほっほ、流石と言う所かの。驚きと可愛さのコラボレーション。胸がないのはちつと惜しいがお尻はええのお……………」

『おい、まじでこいつ捕まえろ。生徒に手を出したら不祥事所じゃないぞ』

とりあえず、お城に帰ったらこの爺を追放しよう、そうしよう。

『えー……………次は、ジョゼフ王』

「ミスター・ガリアだ」

『どうでもいいです』

「むう……………まあいい」

あ……………認めた。

「そうだな、小悪魔といったらイタズラ好きで強気な性格と決まっている。しかしだ、あの格好でのあのセリフと仕草。思わずギャップできゅつと来た素晴らしいものであった。しかも小悪魔らしく、自分の我侷な部分も……………」

『コメントながつ……………つまりは、素晴らしく可愛いってことですね。

はい、次アンリエッタ様』

「えつと……………可愛かったと思います」

『はい、無難なコメントありがとうございます』

なんか扱いが雑の様な気がし、じろりと司会者を見れば視線を逸らされた。

『はい、次は……………世界で一番可愛いのはオレ様だ！開闢の美少女錬金術士!!カリオストロ!!』

「……………」

次は、先ほどの金髪の少女が前へと歩いてくる。

先ほどのミス・コシミズと違い、静かな立ち上がりだ。

「……………えい☆」

「なっ!!?」

今度も驚かされた。

ミス・カリオストロが手を上げた瞬間、彼女が光に包まれ一瞬で服装を変える。

頭の尖っていた髪飾りは丸まり、新しく髪飾りが追加され、胸元には大きな赤いリボンが付く。

上半身は、白いシャツだけだったのが、今では青い上着を着ている。中に着ていたシャツも茶色の物へと変わりオシヤレになっていた。

腕には大きな鞆をぶら下げており、中からこれまた大きな本が顔を覗かせている。

「とどめに、これ☆」

衣服が変わった瞬間、上げていた指をパチンと鳴らす。

その瞬間、ステージが盛り上がり、一つの小さな机と椅子を作り出された。

ミス・カリオストロはそのまま机に座ると足を組み、ウインクと共に一言言った。

「ねえねえ、カリオストロとおく一緒に……………せーしゅんっ!……………しよ?」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

『カリオストロー!オレだー結婚してくれ!』

『青春!青春をもう一度!!』

『カリおっさん!ぜひともオレと保険体育をつ!』

先ほど同様に声が爆発した。

今度はしっかりと耳を押さえていた為に被害はない。

被害はないけど……………何人かやばい発言をしてる人がいるような。

特にその髭子爵、お前の青春は既に終わっただろ。

『はい、ありがとうございます。オールド・オスマンどうでしたか?』

「うおー青春!ワシも、もう一度青春をやり直すんじゃない!!」

『はい、ありがとうございます。兵士の皆さんその人連行してください』

オールド・オスマンが兵士に両腕を抱えられて連れ去られていく、  
ざまあ。

『あー……ジョゼ……ミスター・ガリア』

「まさか、まさか！ガリア魔法学院の制服を持ち出してくるとは」

「あれってガリアの制服なんですか？」

「ああ……極秘の極秘に開発していた物でジョゼフ王が直接デザイン  
を……」

あんたかーい、王様がデザインした服を子供たちに着せる。

何だろうか、この危ない構図は。

「まあ、イザベラもシャルロットも着てくれなくて、ボツになったが」  
「……着せようとしたんです？」

「二人に言ったら冷たい視線でゴミでも見るように見られた。しかも  
シャルロットはトリステイン魔法学院に留学してしまったし」

……この人今サラッと重大なこと言いませんでした。

え……マジでトリステイン魔法学院に王族が留学してるの？  
何も聞いてないんですけど。

『取り合えず、お題は……』

あつ、これ続くんだ。

一刻も早く帰りたいんですけど……駄目？そうですか。

席を立とうとして枢機卿に肩を押さえられた。

終わるまで居させるらしい。

おい、慰安はどうした。

視線を逸らさないで、こっちを見てください。

## ハッピー☆バレンタイン（軽くネタバレあり）

日にちは、バレンタイン当日。

「本当にお祭り騒ぎね」

既に何人も男女のカップルを見かけ、少しばかりげんなりとした。

左を見ても右を見てもイチヤイチャと学院全体が桃色に侵食されている。

（そういう私もなんだけど）

桃色の空気に気落ちするも顔を振り気分を入れ替える。

みんなは戦争が終わり、日常を目一杯楽しんでるのだ。それを鬱々とした気持ちで受け止めるのはいかがな物か。

（まさかウイルの発案を学院が受け入れるとはね）

気分を入れ替え、別の事を考える。

元々バレンタインというイベントはハルケギニアにはなかった。

カリオストロがサイトに日本のイベントを根掘り葉掘り聞きだし、ウイルが学院に提案したのだ。

『戦争も終わり、心が荒んでいる生徒もいるでしょうし、イベントを試みては？』

と学院側も早く日常に戻れるようにとこれを承諾。

サイト含め教員と色々話し合った結果、バレンタインと言うイベントの開催が決まった。

元より学院は未来のパートナーを見つける為の場所ともなってるので相性が良かったらしい。

「受取ってくれるかしら……受取ってくれるわよね♪」

廊下を歩いていたルイズは、手に持っていた可愛らしいラッピングをされた袋を見ながら呟く。

少々不恰好な出来になってしまったが、味見をしっかりとしている為、味は問題ない。

本当は『ちよこ』と言う物を渡すらしいが残念ながらハルケギニアになかった。

なので『クッキー』を焼いてみた。

試行回数三十回、そのうち十五回は作り方を間違えて失敗し、八回は隠し味を入れまじった。

残りの六回は、普通に失敗した。

それでもなんとか形になり、こうして渡せる物が出来ただけでも僥倖だ。

(キュルケはコルベール先生にアタックしてるし。サイトはシエスタとティファと一緒に部屋に隔離。ギーシュはモンモランシーに付きつ切り。姫様はそもそもこの行事を知らない。そして……)

頭の中で邪魔をしそうな人物を除外していく。

今日のバレンタインデーに合わせ、それぞれが何処で何をしているのかは把握済みだ。

これも全ては愛する人と共に今日を過ごす為。

(うん、大変だったわね。大変だったなー……特にカリオストロが)

一番の強敵であった彼女の事を思い出す。

どちらがウイルと今日を過ごすか争いに争い、最終的に分けることとなった。

朝八時から十六時がルイズで十六時から零時まではカリオストロだ。

本当であれば、今日と言う特別な日を丸一日一緒に過ごしたかった。

(どちらかが、あぶれるよりましよね)

争って、どちらかが過ごせないよりはましと思ひ込む。

負けると思っていないが、もしも……もしも負けたのが自分だったら立ち直れないだろう。

(これを食べてもらって、ゆっくりと寄り添って今日を過ごす)

特別な事は要らない。ただただ、今日と言う日を一緒に過ごすのだ。

(寄り添って、寄り添って……でもでも、それで少しだけ大胆になつて)

歩きながらニヤニヤと今後の時間を妄想して楽しむ。

脳内では、ウイルスと寄り添い、抱きしめられ幸せそうな自分が思い浮かんでいた。

(キ、キスぐらいならいいわよね……婚約者だし、学院を卒業したら結婚するんだし)

脳内でウイルスとキスを交わす光景が思い浮かび顔が真っ赤に染まる。

体の奥から熱くなり、カツカと火照る顔を両手で押さえる。

(やん♪……駄目よ、それ以上は……それ以上は結婚してからじゃないと)

頭の中では、押し倒され、唇から首筋、胸、お腹と軽くキスをされていく。

キスをされた場所が火傷のように熱くなり体が火照る。

そして……どんどんと口付けは下へ下へと移動し――。

「きゃあー……」

興奮し思わず、その場で嬉しい悲鳴をあげる。

片手は頬に当てたまま、もう片手を振りまわした。

やばい、やばい……考えただけで幸せ過ぎる。

「……えっと」

「……んん、ほん」

そんな妄想に耽っていると通りかかったメイドの一人に見られ、意識が戻る。

頬を引きつらせているメイドから視線を外しワザとらしく咳をして何事もなかったように歩き出した。

(ほ、本当は……け、結婚してからだけど、男性は我慢出来ないものって聞いたし……うん、しよ、しよがないわよね!)

心の中ではない、しよがないと呟きながらも期待をしつつ小屋へと向かう。

暫くすれば小屋が見え、胸が高鳴ってくる。

ドキドキと鳴る胸を押さえ、少し落ち着かせ中へと入った。

「ウイルス……えっと、ね?クツキーを作ってきたんだけど……あれ?」



なるべく自然に自然に入って渡そうとするも中には誰もいない。  
いや、正確には一人だけいるのだ。

ハンモックで寝そべりながら本を読んでいるタバサしかない。

「……………」

右を見るもない。

左を見てもタバサだけだ。

お風呂場とアトリエも見てみるが誰もいなかった。

(あれれ?)

きよとんとし首を傾げる。

今日はここでお父様から送られてきた書類の整理をしている筈だ。

昨日の夜にすっかりと聞いていたのだが、いない。

「ねえ……タバサ?」

「……………」

外へと出たのだろうか。

しようがなく、タバサに声をかけウイルの居場所を聞くことにする。

タバサは、本から視線を外すとじつと此方を見てきた。

「ウイル知らない?」

「……………んっ」

タバサに聞けば、大きな杖を机の上へと指した。

視線で辿り、机の上を見ると一枚の紙が置かれている。

それを拾い上げ中身を読んでいく。

— やっぱり、一日全部貰うわ by カリオストロ☆ —

「えつと……………」

もう一度読んでみる。変わらない。

下から読んでみる。やっぱり変わらない。

今度は……………。

「……………」

「……………」

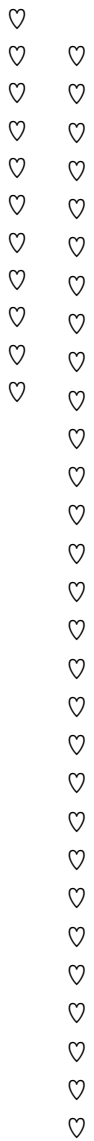
ぺらぺらと本を捲る音だけが部屋中に響き渡る。

理解できなかつた頭が始動し、書かれている内容を理解した。

『か、カカカカッ!!カリオストロオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』  
部屋の中を怒号が響き渡る。

沸点が一気に限界を超え、魔力が全快を越え回復した。  
今なら、タルブ戦以上の物を撃てそうだ。

「よく理解出来たわ。やっぱり……アイツは敵ね!!敵!!」  
そして、ドアを壊れるぐらいに叩き付け外へと飛び出した。



「むふふ〜♪」

「……………」『待てー!!』『そっち行つたぞー!!』『まわれまわれ!!』

オレ様は機嫌が良かった。

好きな人の腕の中で抱き上げられ、お姫様だっこをされている。  
ものすつごく幸せだ。

「ん〜♪♪」

ウイルの胸をぎゅつと掴み、頬を鍛えられた胸板に摺り寄せる。

なんだろうか、これは。

たったこれだけの行為、それなのに幸せ過ぎる。

息を吸い込みウイルの匂いを嗅げば、きゅんとお腹の奥が鳴り、体が火照る。

心は落ち着き、自然とウイルに身を任せる形で力を抜いた。

(あああ〜、やべえ……これはやばい。本当に幸せだ、癖になる)

もう一度頬を摺り寄せ、忘れないように感じ続ける。

猫になったようにごろごろと喉を鳴らし、擦り寄る。

「なあ……ウイル」

「……………なんだ?」

『ファイアーボール!!』『馬鹿、カリオストロちゃんも燃えるだろ!』

『燃やすのは奴だけだ!』

上を見上げ、お気に入りの奴を見た。

必死な表情もやっぱり好い。

「最初はな。何が特別な日だと思ってたけど……いいなこれ」  
「……………」

「特別な日を特別な人と過ごす、幸せだ」

こんな事なら、もっと早めに過ごせばよかった。

他にも特別な日などいっぱい、あっただろうに……。

これはサイトが帰ってきたら他にもないか問いただすべきだな。

「ああ……そうだな。好きな人と特別な日を過ごす、すっごい幸せだ」  
「だろ？」

「だけどな……」

「うん？」

うっとりとした表情で問いかければ同意をしてくれる。

同意してくれて嬉しくなるも、ウイルの顔が曇った。

「追われてなかったらの話な!!」

『さてや!』『てめーばかり、なんでだ!!』

ウイルの言葉に、後ろを見れば複数の男子学生が追いかけてきている。

なんでも『カリオストロちゃんファンクラブ（非公認）』だとか、正直しつこいから嫌なんだが……あいつら。

折角二人つきりで過ごそうと思ってたのに見つかってこの有様だ。

「ウイル……がんばれ?がんばれ?」

二人つきりになる為、ウイルの応援を始める。

頑張つて引き離してくれ。

「てっめー!!」「オレも応援して欲しい」「くっそ、いいな!」

なんか火に油を注いだみたいだ。

「お前等も彼女作ればいいだろ!いい機会なんだから!」

「うっせ!」「出来たら苦労しねーよ!」「あつ……ごめん、オレ婚約者いるわ」「おい、こいつも吊るそうぜ」

堪り兼ねてウイルが叫べば、何やら仲間割れをし始め、廊下に魔法が飛び跳ねる。

なんと言うか、嫉妬つてのは醜い物だなと再認識出来た。  
どうせするなら可愛くやるべきだ。

そんな事を思っているとウィルが医務室へと入り込み、すぐさま『ロック』の魔法で鍵を閉める。

鍵を閉めた後、オレ様をベッドに置くと扉に耳を澄ませ安全を確認している。

それを見つつもベッドに座り、辺りを見渡す。

特に誰も居ないのか人の気配はない。

これはある意味でチャンスではないだろうか。

扉は閉まっている上に今日は学院は休みだ。

此処に来る生徒も先生も少ないだろう。

「……………」

チャンスと思えば、すぐ行動。扉の前で耳を済ませているウィルへと近づき、腕を伸ばす。

扉に集中しているせいで此方には気付いていない。

「か、カリオストロ？」

「なくに……………時間が勿体無いからな」

腕を伸ばしきり、ウィルをその場で押し倒す。

上に跨るように乗つかるとポケットから予め用意していたチョコを取り出す。

それを一粒口に啜える。

「なんでチョコが此処に？」

「おいおい、オレ様を誰だと思つてやがる。前の世界で食べた事あつたしな、鍊金でパパッと作れるさ」

不思議そうに啜っていたチョコを見ていたウィルに説明する。

その際に喋る為に啜っていたチョコを口に入れ食べる。

ほんのりとした甘みと苦さが大変美味しかった。

「えっと……………」

「んんんん」

もう一度チョコを啜えると困惑するウィルの顔を両手で掴み、その

まま口移しでチョコを食べさせる。

最初こそ驚いていたウイルであったが、チョコを口に入れば舌で絡めとり食べた。

「なんだ、結構乗り気じゃないか」

「そりや……な。俺も男だし」

以外に積極的なウイルに驚きながらもニヤニヤと笑う。

「それじゃ……もう一個、んっ」

口にもう一個チョコを咥え、そのまま口移しで食べさせる。

チョコが無くなるまでお互いに舌を絡め続ける。

「んっ……ちゅ、……はぁ」

「甘ったるいな」

「カリオスト口溶けちやいそう」

チョコが無くなり、口を離せば唾液が糸となり舌と舌を繋げる。

暫く伸び続け、糸が切れる。

それを合図にもう一個、もう一個とチョコを食べ続けた。

最後の一個となるとウイルがオレ様の頭を抱え込み、深く深く繋がりあう。

「……もうないか」

「そりや残念だ。美味しかったよ、カリオストロ」

「そうか、ま、まあ……オレ様が作った物だしな！美味くて当然だ」

暫くすれば、熱で溶け合い、最後のチョコは無くなる。

少し残念になるもウイルの素直な言葉に照れ、胸を張り答えた。

なんとというか、初めて人の為に料理をしたが……嬉しいものだ。

「それで……そろそろ退いてもらえるとありがたいんだけど……」

「あぁん？……ここままでしたんだ。どうせならあくもつと先も楽しめばいいよねえ？」

そう言つて、先ほどからお尻に当たっている物を擦るように腰を動かす。

「あー……」

「しよがないよなー……オレ様見たいな美少女にだもんなく……」

「あははは」

ウイルは気まずいのか頬を染め、視線を逸らす。

それをニヤニヤと見ながら腰を動かせば、すぐに元気に……。

「なあ……いいだろう？」

「……………はあ」

舌を出し指を舐め、濡れた指で唇をなぞる。

ウイルは少し呆れるも直ぐに笑い、抱き寄せてくる。

「カリオストロ、あつまあ〜いのが食べたいなっ☆」

「思いつきり甘ったるいのだな」

抱き寄せられ、口を……………

「あたっ……………」

合わせようとして扉が開きウイルの頭に直撃する。

ウイルが痛みに頭を押さえ、横に退いたので仕方が無く、上から降りる。

(ちっ……………良い所だったのに誰だよ)

そんな事を思いつつも扉を開けた人物を見て硬直する。

外には桃色の悪魔が此方をすごい目で睨んでいた。

「カ〜リ〜オ〜ス〜ト〜ロ〜!!」

「あ〜……………あははは、よ、ようルイズ」

午前中の時間はルイズの時間だ。

それを奪い、潰したので些か気まずい。

「分かってるわよね……………あんたの時間私が貰うから」

「それは断る」

まあ……………ルイズの言ってる事は正論だ、正論。

裏切ったのはオレ様のほうなので悪いのはオレ様だ。

しかしだ、好きな人との時間を取って何が悪い。

奪われる方が悪いのだ。

「あのね!!」

「そもそもだ、オレ様は認めてないぜ？」

「……………そうだった、そうよね……………一人でもいいものね」

「あ〜……………やばい。ちよつと待った!二人共!」

アハハ、ウフフとお互いに笑い合い、睨み合う。

どちらにしても譲る気はない。

そもそも……だ、結婚だあ？

そんな物は認めてないし、正妻もお前じゃない。

『エオルー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ オス・スーヌ・ウリユ・  
ル・ラド………』

『ファンタズマゴリア!!そして……!!これが、真理の一撃だ!』

『エクスー／アルス………』

『プロージョン!!!／マグナア!!!』

この後、夜まで戦うも決着は付かず、結局の所バレンタインは終わりを迎えた。

余談だが戦いの余波でウィルは全治一ヶ月の怪我をした。

## 一章：出会い プロローグ：召喚

何処までも続くような緑色の草原を春風が吹き抜けていく。

そんな草原の真ん中でトリステイン魔法学院の生徒達は、今か今かと待ちわびていた。

今日は待ちに待った春の使い魔召喚の儀式、生徒達が期待するものもしょうがないだろう。

既に召喚を終えている者もあり、猫、犬、あるいは風竜などの様々な種族と戯れている。

体が生徒の何倍もある生物も多々いるが、生徒を襲う素振りすらなかった。

呼ばれた使い魔達は、主人や周りの生徒を襲わず大人しく待つっており忠実の一言だ。

全ての使い魔には体のどこかに『ルーン文字へ契約』の証が刻まれていた。

使い魔として『呼ばれたへサモン・サーヴァント』生き物は、『契約へコントラクト・サーヴァント』されることで体のどこかにルーン文字を刻まれ、主人に対して忠誠と愛情を植えつけられる。

この契約は主人が死ぬまで、もしくは使い魔が死ぬまで契約が続く一生の物だ。

一方的に思える契約内容だが、召喚される側にもメリットは存在する。

使い魔は『メイジへ魔法使い』の生涯のパートナーとなり大事に大事にされる。

メイジにとって使い魔は、自分の実力を周りに知らしめる一種の証なのだ。

『メイジの実力を見るには使い魔から』と言われているほどであり、メイジも貴族が大半である。

貴族の加護を得れ大事にされるならと召喚に応じる者は少なくな



い。

そんな大事な儀式の最中で一組の男女が、何やら騒いでいた。騒いでたと言っても少年は本を読み無関心で少女が一方的に喋っているだけである。

うんともすんとも言わぬ少年に構わず『少女―ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール』は不安をぶつけるかのようにひたすら喋りかけた。

「私大丈夫よね」

「……………」

「あつ！心配してるわけじゃないのよ？私の事だし最後はどうかなるー……………はずだし」

「……………」

ルイズの可愛らしい口からマシンガンの様に言葉が流れ出る。

その様子を他の人が見れば、緊張で喋っているのが丸判りだ。

先ほどから足をこつちへあつちへと世話しなく動かし、たまに呻り声すら上げる。

それでも緊張や不安が消えないのかため息をついて頭を軽く掻き寄った。

「ねえ！聞いているの！！ウイル！！」

「……………」

緊張がピークに達したのだろう。

ルイズは幾ら話しかけても一言も喋らない唯一の友人に大声を上げた。

ルイズの大声に周りに居た生徒達は、何事かと視線をルイズに向けるがルイズは気付かなかった。それほどまでに神経を張り詰めさせ、すでに一杯一杯だった。

「ルイズ……………君のその『私は大丈夫』は昨日から100回も聞いているよ」

「数えてたの？」

話しかけられていた『少年―ウイル・ツチール』は本を閉じゆつくりと視線をルイズに向ける。

その向けた視線は呆れと疲れが見え実に面倒そうであった。

それでもルイズの相手をする辺り二人の仲が好ましい事がわかる。

「いや、数えてないけどさ」

「あんたねー」

「数えてるほど暇じゃないし、さっきのはそれほど聞いたって言う言葉の綾さ」

「うー……」

落ち着かせるように出来るだけゆっくりとゆったりと言葉を口にし軽く微笑む。

噛み付くかのように会話を続けようとしていたルイズもこれには呻り声を上げるしかない。

言い負かされたせいかわイルの心遣いが伝わったのかルイズはそれ以上は言わず、涙目になりウイルの横に座る。草原の広場なので下は地面なのだが、ルイズは気にしない。

ウイルとルイズの足元にはシートが敷かれており汚れる事が無い為だ。

「まあ……なるようしかならないし、俺なんかミミズを召喚するかもだぜ？」

「……流石にミミズはないんじゃないかしら？ 『ドット』のギーシュだってジャイアントモールを召喚したのに」

「いや、判らないぞ。使い魔は実力と言うより相性で呼ばれることも多いらしい」

「そうなの？」

ルイズはウイルの言葉を聞きながら視線を一人の生徒へと向けた。その生徒はルイズと同じ背丈ぐらいの青髪の少女である。

青髪の少女は先ほどのウイル同様木の下で本を読んでいた。

だが、彼女の使い魔の風竜は彼女に構って欲しいのか何度も何度も頭で軽く少女を小突く。

次第に鬱憤が溜まってきたのだろう、少女は大きな不恰好な杖で自分の使い魔の頭をはたいた。

「……タバサは風竜を使い魔にしたわよ？」

暫し1人と1頭を見てルイズが疑問を口にする。ルイズの疑問ももつともだろう。

メイジは『ドット』『ライン』『トライアングル』『スクウェア』に分けられる。

一般的にメイジの強さは、同系統の重複も含め各系統を幾つ足せるかで示される。

ドットなら1系統　ラインなら2系統　トライアングルなら3系統と足せるのだ。

そして風竜を召喚したタバサは同じ学年でも二人しか居ない、トライアングルだ。

ルイズには相性ではなく、実力で呼んだようにしか見えなかった。

「ルイズ……オールド・オスマンの使い魔を思い出してみろ」

「あつー！」

「そういうことだ」

首を傾げるルイズにウイルは淡々と答える。

ウイルの答えにルイズは『オールド・オスマンヘトリステイン魔法学院学院長』の使い魔を思い出した。オールド・オスマンの使い魔は『ネズミ』である。

もしもメイジの力量で使い魔が召喚されるのであれば、オールド・オスマンはドットとなってしまう。だが実際はどうだろうか、オールド・オスマンがドットなぞ聞いたことすらない。

むしろ立派なメイジで誰もが尊敬するような人物だ。

そのことを思い出しルイズは自分の無知具合に顔を真っ赤にさせ俯いてしまう。

そんなルイズを見てウイルは苦笑した。

判らない事を聞くのは恥ずかしい事ではない、むしろ好ましくも感じる。

自分で考えて調べて分からないなら他の人に聞く事はとても良いことだ。

ウイルはそう思い大丈夫だと意思を込めルイズの頭をポンポンと軽く撫でた。

「はあ……ウイルは良いわね。いつも落ち着いていて」

「そんなことないけどな……」

「あるわよ。知識量も多いし優秀よね」

「……………」

ルイズの言葉にウイルは自分の行動を思い返し「落ち着いてるのか？」と疑問に思う。

思い返した自分の姿は、落ち着いていると言うよりコミュニケーション不足で黙り込んでいるだけである。それを見てルイズは落ち着いていると評価していたらしい。

更には知識量や優秀とも言われ「どうしてそうなった」とばかりに頭を抱えそうになった。

知識量は『転生前』ではなかった魔法と言う未知の力に興味津々で研究しているだけ。

どうせならオリジナルの魔法作ろうぜ！とか色んな魔法を使える俺かっこいいー！等も含まれる。

優秀かと言われれば微妙としか思えない。魔法の腕前もライン止まり、知識も魔法以外はてんで駄目だ。領地経営や相手の言葉の裏を読むなど、時間をかけないと分からない。

正直な話、ルイズの方が才能があり優秀だと思っている。

そのことを言えばルイズが「私なんか……」と落ち込むので言わないが。

「はあ……」

「ため息つくと幸せが逃げるぞ」

「なにそれ、そんな言葉があるの？」

「どこかの本で読んだことがあってな」

本当に物知りねと呟くルイズを見て本当に仲良くなつたな俺達と苦笑する。

ウイル・ツチールは『転生者』である。

転生者と言ってもよくあるSSの神様転生と言うわけではない。

生前の記憶が、『地球の日本』に住んでいた頃を覚えているだけだ。

神様に会ってないのでチート特典など貰っていない。

日本に暮らしていた頃も普通の職場で大した知識も持ち合わせていなかった。

主人公補正もご都合主義も無く使える知識も少ない、男爵家の次男坊として生まれたのだ。

魔法学院に来るまでも特に何事もなく主要人物との交流すらなかった。

ただただ、将来に向けて魔法を鍛え研究し未来を見て行動をする日々。

魔法学院に入学しても適当に友人を作り、程よく接する程度。

ルイズやキュルケなどと交流する気も物語に足を突っ込むつもりもなかった。

だと言うのに今自分の隣にはルイズが居る。何故そうなったかと言えば簡単だ。

『自分はルイズを笑わなかった』ただそれだけの事だ。

ルイズが虚無を使えるという事も魔法が合わず爆発することも知っていた。

無論努力家で必死に魔法を学ぼうとするルイズの姿勢などもあり、更に笑えないのだが。

そんな自分がルイズには異端に希望に見えたのだろう。

どれだけ努力しようが笑われる日々、その中で笑わず居る自分……。

ルイズが接触してくるのは目に見えていたが、ウイルは接触されるまで気付かなかった。

『ウイル・ツチール』

「呼ばれたわね」

「呼ばれたな」

そうこうしていると恩師でもある『ジャン・コルベール』に名前を呼ばれた。

遂に召喚の順番になったらしい。ウイルは本を置きゆっくりと立ち上がり伸びをする。

暫し体をほぐすとルイズに行って来ると声をかけ静かに微笑んだ。

「ミミズじゃないこと祈ってるわ」

「……あははは」

ルイズの真剣な表情に渴いた笑いが出た。

まじでないだろうなと思うも盛大なフラグを立たせられた気がして心配になってくる。

(さて……何が呼ばれることやら)

一步、また一步とゆつくりとマイペースに時間を掛け歩く。

これがルイズと会う前なら何も考えず期待だけを胸に召喚できただろう。

しかし今は違う。ルイズと出会い何か補正でもかかったのではないかと不安になるのだ。

既にルイズに懐かれており物語に関わる事はほぼ確定と言っても良いだろう。

だからこそ……自分には力が必要だ。

どんな困難も乗り越えられるような、そんな力が。

願わくば——自分の隣に立ち、目標となり、光となり、自分を支えてくれるパートナーを

それこそルイズとサイトのような信頼関係を結べる相手を——そう願わずにはいられなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………」

先ほどの春風が吹く草原と違い、本や何か書かれた紙、実験に使っているであろうフラスコが乱立した部屋。その部屋の中で1人の少女が、本を読み続ける。

「……………」

ある程度、読み終わると少女は本を閉じ静かに部屋を出た。

部屋を出るとボタンと軽い音が鳴り後ろの木で出来た扉は閉じた。少女は扉が閉まったことを確認するとそのまま無言で石畳の通路を歩き始める。

通路は下から上まで白い石で出来ており、何処か神々しきすら漂わせていた。

そんな通路を歩き続けると広い広間に出る。広間も通路同様白い石造りであった。

1つ違う所を言えば、あちらこちらが欠け、あるいは柱が折れたり等しいて廃墟同然と言うところか。そんな今にも崩れそうな廃墟を少女は気にせず、歩き中央へと赴く。

中央には何やら廃墟に似合わぬ大掛かりな機械が設置しており、その機械を中心に魔方陣が描かれていた。少女はその機械と魔方陣を興味深気に何度も何度も見ては調べて見ては…を繰り返す。

「ふう……………おらあー！」

暫くして満足したのか深くため息をついて肩を叩いた。

少女に似合わぬ些か年寄り臭い行動を取り、更に気合の籠った一発を機械に蹴りこんだ。

もしもこの場に他に人が居れば少女の行動に目を開き幻覚を見たかなと思っただろう。

それほどにこの少女の見た目には似つかわしくない行動であった。

パツチリと開いた大きな目に透き通るような瞳。

日焼けやしミミなど知らないとはかりの白い肌。手で髪をかき上げれば綺麗な金髪が光の滝のようにさらさらと流れる。小柄な体であるが、肉が付いている所はしっかりと付いており健康的でもある。残念と言えば胸が些か小さい事だけであろう。まさに絶世の美少女、10人が10人美少女と答えるであろう容姿を持った『少女―カリオストロ』は不機嫌さを隠さず、目つきを悪くして吼えた。

「ちっ、何か目新しい事が見つかるかと思っただが何もありませんねー」

忌々しげに呪詛を込めるかのように言葉を吐きその場を立ち去る。

(外の状況もわかんねーし、確かめる手段もない。いい加減出来る事も少なくなってきたがった)

今の自分の状態を考え暗い気持ちとなった。

普通に暮らすのであれば此処にいても問題は無い。

食料は、森などで調達すれば良いし、寝床も部屋で寝れば大丈夫だ。

問題なのは『娯楽の無さ』と『自分以外の人が存在しない』ことだろう。

「相変わらずな光景だね☆……虚しいな」

外へと出ると見慣れた景色が目に入る。

何処までも続くような白い雲の絨毯。その隙間から見える青い青い広大な海。

そんな光景を見て景気づけに『女の子モード』を試してみるも人が居なければ虚しいだけであった。

掘ねるかのようにその辺の小石を拾いポンつと『大陸』の外へと投げ捨てる。

小石は重力に引かれ雲をつき抜け下の海へと落ちていった。

ここで小石が重力に逆らい上へと行けばカリオストロは喜んでその研究に没頭したであろう。

だが、現実はその行かず、何も起きない、特別などありはしない。

(せっかく封印も解けて、この体を見せびらかす事が出来るのに無駄じゃねーか)

しようがなく、廃墟となった神殿の階段に座り込みぼーと過ごす。

考える事はどうやって退屈を紛らわせるかだ。

カリオストロが封印されていた島は、この世界においても辺鄙な所にあり、人が立ち寄るのも珍しいぐらいだ。何より、この島に上陸するには『飛空艇』がなければ入れない、なにしろ空に浮いている『浮遊大陸』なのだから。そして運がないことにこの大陸には人が存在しない。

その為、他の大陸に辿り着く手段がなく、この大陸で待ちぼうけとなった。

せっかく作りだしたこの体を見せることが出来なく、カリオストロは不満げに呻った。

「本当にどうしようない……お前は喋らないし愛嬌ないし」



「……………」

暫く考えるも何も浮かばず、自分の傍に居た『ウロボロス』を睨む。睨まれたウロボロス―赤い竜は、何も言わずただただ、そこに存在するのみである。

カリオストロは早々に睨むのを止め、また景色を眺め始める。前にずっと見ていればウロボロスが反応をするのではと考え一日中見ていたことがある。

結局の所何も変わらず1日を無駄にしただけであつたがその教訓もあり、今度はヘマをしない。

(まじで暇だ。この大陸で研究できる事も無くなつちまつたし、どうすつかな)

大陸を出ようにも船を作る部品が足りない。

他の大陸へと連絡手段も無ければ、ウロボロスに乗って移ることも出来ない。

幾ら天才といえどもお手上げであつた。

転移魔法を作ろうも封印されてだいたい経っており他の大陸がどうなつてるか分からないのだ。

転移した瞬間空の上でした―なんてやりたくもない。

(転移は無理……なら呼び出すのはありか?)

腕を組み考えて考えたのは他の生物を呼び出すことだ。

鳥などを使い魔として呼び出せば他の大陸に連絡を出来るかも知れない。

そこまで考えると良い案だなと思えてきてやる気が出てくる。

「やってみるか」

カリオストロは立ち上がりスカートに付いた砂を落すと意気揚々と部屋へと戻る。

今まで何故思いつかなかつたのだから。

長距離を飛べる生き物を配下にすれば連絡が取れるじゃないかと思ひ。

先ほどの憂鬱な気分と比べ明るい気持ちとなり、駆けた。

「準備はこれでいいな」

部屋へと戻ったカリオストロは、部屋の中心に魔方陣を描き必要な媒体を用意する。

準備が整うと早速とばかりに媒体を中心に置き魔方陣に魔力を流し込む。

魔方陣は魔力を通され紫色に輝きだし、フラスコに入れていた媒体が沸騰するようにぼこぼこと唸りを上げる。準備が出来た事に満足しカリオストロは呪文を唱え始める。

呪文の内容は簡単だ。自分の望む使い魔の要望を言うだけである。長距離を飛べる存在を……そんな使い魔を呼ぶはずであった。

だが、実際に欲しかったのは本当にそういう存在だったのだろうか。呪文を唱えるカリオストロはそんな事を思ってしまった。

本当は自分でも気付いていた、本当に欲しいのは大陸を渡る手段ではなく

ただただ自分の……

「我が名は——」「オレ様の名は——」

異なる世界、二つの異世界がほんの少しだけ繋がる

呪文を唱えている時にどんな人が傍に居て欲しい

そう聞かれた気がして

「誰よりも俺を支えてくれて目標になってくれる人を」

「誰よりもオレ様の退屈を、寂しさを埋めてくれる奴を」

二人は、本当の欲しいものをただただ願うように呟いた

「なんだこれっ!!」「おいおい、まじかよ」

呪文を唱え終わった瞬間。二つの力が異世界を超え交じり合いせめぎ合う。

次第にその力は増していき、反発しあい膨大なエネルギーへと変化される。

最後には耐え切れず、太陽に衝突したような光を発し爆発した。

光が治まった部屋には誰も居らず、爆発の影響か様々な物が壊れたような惨状となった。

誰も居なくなった大陸を数日後に1つの騎空団が上陸する。

これは、凡才と天才が互いに切磋琢磨し支えあい、笑い合うそんな物語

## 一話：契約

「いたたた……」

「げほげほ」

「おい、『錬金』のウィルが平民を呼んだぞ！」

「平民……なのか？」

「にしては可愛いよな。マントもしてるし」

眩いほどの光の後の爆発、召喚を行なった本人並び周りを囲んでいた人達も混乱に陥る。

数秒とも数十秒とも思われた現象は、すぐに何事もなかったかのようにならなくなった。

現象が無くなり訳が分からず呆然とする者、暴れだした使い魔を大人しくさせようと躍起になる者。

それぞれが多様に動く中、召喚を行なったウィルはかすかに腹部に感じる痛みと重みに目を白黒とさせる。先ほどの光のせいで上手く目が開かない。

それでもなんとか状況を確認しようと自分に乗っかっている物を触り確かめた。

「ひ、人……か？」

「こんな美少女捕まえておいて、その反応はないだろ」  
手が触れた感触を頼りに確認していくと人だと判る。

それでも確信が持てないので声に出し聞いてみれば反応が返ってきた。

その声にやはり人かと思ひ、変な所を触らないように慎重に相手の肩と思われる場所を掴み押す。

「あゝつ、悪い、目やられたのか」

「暫くすれば……大丈夫だと思おう」

見えないので分からないがどうやら上手く相手を引き離せたらしい。

目が慣れるまで座り込んだ状況で相手と会話を試みる。  
未だに見えないが、声から察するに若い女性のようなうだ。

(参ったな。盛大にフラグを回収しやがった)

「まだ開けれねーのか」

苦笑しつつそんな事を思う。

ルイズと知り合い、何かしら起こるであろうと思っていたが、まさか人を召喚するとは思いましなかった。開けれない目を開けようとしていると冷たい手が瞼に触れる。

未だに目が見えない自分を心配してくれているのだろう。

冷たい感触と撫でるかのような動きに癒されつつも目を開けた。

目を開けて最初に見えたのは、金色だ。

強い光を浴びたせいで普段より明るい世界に現れた少女。

暫しの間、呆け見惚れるのはしようがないことであった。

「指何本に見える」

「……1本」

「うっし、見えてるな。……交換する手間が省けたぜ」

ぼーとしていると指を突き出され聞かれる。

素直に立っている指の本数を答えると相手はニカッと笑い、何か物騒な事を呟いた。

取り合えず、聞かなかったことにしようと思った。

「ほら、手」

「ああ……ありがとう」

「おう」

これからどうしようかと頭の中でぼーと考えていると少女は立ち上がり手を差し伸べてくる。

それをきよとんと見ってから理解し手を取って起き上がった。

爆発の影響か少女を受け止めたせいか、立ち上がると体のあちこちが痛む。

痛む体を少しばかり眉を潜め問題ないか確認する。

特に酷い怪我もなく、改めて少女へと視線を向けると少女は落ちていた自分の髪飾りを頭に乘せていた。

「ふう……ようやく話せるな」

「だな。まずは自己紹介から……トリスティン魔法学院に通っている

ウイル・ツチールだ」

しつかりと相手に礼を持ってお辞儀する。相手に合わせたせいか少々話し方がフランクになってしまったが。ゆつくりと頭を下げ上げれば、少女は「トリステイン？」と眩き表情を曇らせていた。何か嫌な事があつたのだろうか、それとも知らないのかと疑問に思う。

マントを付けているのでハルケギニアの貴族かとも思ったが、今の反応を見るにサイトと同じく異世界から呼ばれた可能性も出てきた。

出来れば直ぐに確かめたい所だが、相手の自己紹介がまだだった為、静かに待つ。

「オレ様の……あー……私は、天才美少女錬金術師のカリオストロちゃん☆よろしくね！」

「……………」

いきなり豹変したかのような変わり様に声が出ない。

少女―カリオストロは片足を後ろに上げ、両手を口にもっていき拳を作りウインクをして自己紹介をした。最初の一発目がこれなら素直に可愛いと言えるのだが、残念ながら先ほどの地のような姿を見ているだけに言葉にならなかつた。何故彼女がいきなりこんな事を出したのだろうか、啞然としながら考えていると後ろから声が聞こえる。

「大丈夫かい。ウイル君」

「ええ、大丈夫です。コルベール先生」

声に振り向けば、コルベールが立っており心配そうに此方を見つめている。

少しばかり寄って来るのが遅いのではとも思ったが、眩しように目を細めるコルベールを見て改める。先ほどの光を直接浴びたのだ、自分同様やられていたのだろうか。

「……………」

(ああ……なるほど)

そして理解もした。カリオストロが急に急変した理由が……。

コルベールはウイルに、にっこりと笑いかけるが、カリオストロに向ける目は笑っていないかつた。

「初めまして、ジャン・コルベールと申します。二つ名は『炎蛇』。トリスティン魔法学院で教鞭を取っています」

「初めまして、さつきも紹介したけどカ・リ・オ・ス・ト・ロって言います。二つ名は『開闢の錬金術師』だよ☆」

「なんだろうか。この居づらい空間は二人はお互いに向き合いニコニコと笑っているが空気が重い。」

「カリオストロもコルベールを警戒しているのだろう。先ほどとは違い猫かぶり様子を伺っている。」

「マントに……二つ名。ミス・カリオストロはメイジと言うことよろしいでしょうか？」

「うん……ちよつと判らないかな」

「判らないとは？」

「カリオストロの知っているメイジとそっちが言っているメイジが同じか判らないから……」

「カリオストロの言葉にコルベールが眉を潜めた。」

「そんなコルベールを横にウイルはカリオストロをじつと見つめる。」

「別に見惚れたとかそういう理由でなく、何処と無く懐かしい感じがするのだ。何処かで見たとような気が……。」

「カリオストロはトリスティン魔法学院なんて聞いたことも見たこともないの」

「聞いたことが無い？」

「うん！世界地図とか見た事あるけど……トリスティンなんて国、書かれてなかった」

「……………」

「なのでカリオストロは異国の地から『召喚』されたと思うの。だから常識と定義がそちらと一緒になんて判らないよねー☆」

「……………」

「カリオストロの言葉にコルベールが動揺した。」

「無理もない、ハルケギニアに居てトリスティンを知らないと言う事は、ありえないのだ。」

「つまりカリオストロは遠い異国の地の人間となる。異国となれば」

常識も定義も習慣も違うのだ。

「そ・れ・と☆カリオストロって被害者だよね？」

「え？」

カリオストロの追撃するかのような鋭い言葉がコルベールを襲う。

これには動揺していたコルベールも反応できず口を挟めなかった。

「まずは、何故私がここに居るかだけど……召喚事故だよね？」

「っ!!」

怯んだコルベールを見てカリオストロが深い笑みを浮かべる。

「それとなーく周りを観察してたけどお——これ使い魔召喚の儀式だろ」

「……………」

カリオストロの笑みが悪い物へと変わり口調も先ほどの様なドスの聞いた声に変わる。

「あんたは、トリステイン魔法学院の教師と名乗った。『魔法学院の教師』だ。つまりは周りの奴等は魔法使い……メイジで生徒になる」

「……………」

カリオストロの独白が続く。

「生徒と教師が揃ってこんな広場に集まる。考えられる中で当てはめれば……授業もしくは試験だな」

「当たってるだろと自信満々に言い切る。」

その推測は的を射ているのでウイルは素直に頷き何も言うことができない。

「更には周りの奴等の連れてくる様々な生物。しかもアレだけの数や種類が居て全員が大人しく従っている。ただ手なずけてるだけじゃ、ああは、ならねー」

「……………」

「大人しくなるよう、または命令が効く様に処置が施されていると考えるのが妥当だ。だから『メイジらしく』使い魔召喚の儀式」

「……………」

「ついでに言えば、人を召喚するのも初めてか珍しいだろう？ 最初召喚された時に周りの奴等が『平民を召喚したぞ!』って驚いてたし



な」

「……………」

「なあ、異国の地の『人間』を『貴族様』が事故とは言え召喚しちゃうのは……国際問題じゃねーか？コ・ル・ベール・ル・先生☆」

「……………」

そこまで言い切るとカリオストロは、キャハ☆つと笑い見せ付けるかのようにマントをたなびかせる。それを見てウイルは隣のコルベールから哀愁が漂ってるのを感じた。

「なあ、送り返せねーのか？」

ふとカリオストロは思いついたかのように此方に聞いて来る。残念ながらコルベールは話せる状態じゃないのでウイルが答える。

それに対してウイルはどうしようかと考える。過去に返した例はないのだが、『未来』になら返した例があるのだ。

伝えようにも場所が場所の上にこれから先、自分の知っている未来と異なる可能性もあり、結局は言わないことにした。

「過去の例を紐解いても、返した……という例はありませんね」

「……………呼び出すだけ……か」

此方が加害者なのでウイルは先ほどと違い口調を直し丁寧に話しかける。

カリオストロの拗ねるような呆れたような声に何も言えない。

ウイル自身、原作を読んだ時は酷い魔法だと思ったりもしたからだ。

「ならオレ様じゃなくて代わりのは？」

「それも無理ですね。使い魔召喚の儀式は神聖な儀式で基本1度つきりです」

「……………ちつ。基本って言うのは？」

「使い魔が死んだ時、もしくはメイジが死んだ時、契約が途切れます。途切れた後にもう一度召喚する事が出来るので」

「代わりは無理か」

「残念ながら」

そこまで話し終わるとカリオストロは腕を組み考え始める。

頭の中で今の会話を纏めているのだろう。

ウィルはそんなカリオストロをただただ黙って見守る。こちらから出来ることは無い。

カリオストロに情報を与えた上で彼女に決めてもらおうしかないのだ。

「契約内容は？」

暫くするとカリオストロは顔を上げ真面目な視線を問いかけた。

「契約すると使い魔の体のどこかに『ルーン文字』が刻まれ、さまざまなお恩恵を与えます」

「さまざま？」

「言葉を喋れるようになったり、体を強化したり、頭が良くなったりなど……」

「なるほどな」

「次に契約期間ですが、一生となります」

「さっき言った死亡した時を除けば……か」

「そうなりますね」

そこまで話すとまたもや考え始める。

流石に一生となれば考えるほうも色々あるのだろう。

「補償については？」

「取り合えず、人権、衣食住、望む物を出来る限り用意します。帰りたいたいと言うなら方法も見つけます」

「まあ……当たり前だな」

「ですね」

腰に手をあて偉そうにするカリオストロに苦笑する。

偉ぶっている姿は様になり大変可愛らしい。

「使い魔にならないと都合悪かったりするの？」

「俺が学院を退学となります」

「試験か……何と言うか運が無かったな」

「ええ……でもこんなにも可愛らしい人に会えたから運は良いほうかも知れません」

「当然だな。オレ様が世界で一番カワイイに決まってるんだから」

どうせ最後かもしれないのだ、と素直に言ってみればカリオストロは当たり前だとばかりに胸を張る。

この少女は一体どれだけの自信家なのだろうか、何処となくルイズを思い出し笑いそうになる。

「ああ、それと使い魔になってやってもいいぞ」

「……………本当に？」

「条件があるがな」

「あ……………」

断られるだろうと思っていた矢先に言われカリオストロの言葉に変な声が漏れる。

だが、一喜一憂もした。当たり前と言えば、当たり前なのだが、条件付と言われると嫌な思い出ししかない。

「ウイル……………お前は今日からオレ様の助手な。勿論さっきの補償つきで」

「……………はい？」

「だから、助手だ」

カリオストロの言葉を聞き返し、間違いでない事を知る。

助手……………助手……………と頭の中で考える。これまた嫌な条件を突きつけてくるものだと思いい顔が渋る。

助手と言えば聞こえは良いが、言ってしまうえば使いパシリ、奴隷、言うことを聞く人間。

カリオストロの言う助手はそう言った意味のほうであろう。

だが、それでも飲むしかない。此方は頼む方なのだ。

「判りました……………それで構いません」

「うっし、なら契約だ。どうすればいい？」

「うっ」

渋々と答えるとカリオストロは機嫌よくそう聞いて来た。

それに対してウイルは契約方法を思い出し言葉に詰まる。

「呪文を唱えて……………キスをすれば……………」

「……………」

「……………」

方法を伝えると沈黙が降りた。

カリオスト口は正気かと言うような目で此方を見ている。

「なあ……この魔法を考えた奴は……むぐっ」

「しーっ」

そんな視線に耐えているとカリオスト口が口を開きだした。

何となく言おうとした事を察してウィルはすぐさま近寄り口を塞ぐ。

口を塞いださいに何をするんだとばかりにギロンと睨まれるも構っている暇はない。

すぐさま口をカリオスト口の耳元に持つてくると手早く内容を伝える。

「この国では魔法は神聖な物で大事にされています。魔法やメイジを馬鹿にしないようお願いします」

「……………」

真剣な声でささやくように言うとかリオスト口は睨むのを止めて大人しく頷いた。

それを見て手を離すとカリオスト口と目が合った。

耳元に口を近づけていたので距離が物凄く近い。

「このまま契約しちまうぞ」

「っ……はい、あとルーンを刻まれる際に苦痛が訪れるので注意を……………」

「もうちよい早く言いやがれ」

言い忘れていた事を言う足踏まれる。

痛みが足に走るがこれから目の前の少女に起こる苦痛を考えれば安いものであった。

つんと唇を盛り上げ此方に差し出してくるカリオスト口に喉がごくりとなる。

キスは初めてで、体が震えた。更には絶世の美少女であることが輪にかけた。

「それと……その気色悪い口調やめろ。最初に会った時と同じでいい」

「あ、ああ……分かり、わ、分かった」

「くつくつく、どんだけ緊張してんだよ」

「……しようがないだろう。慣れてないんだ」

「まあ、これだけの美少女だ。緊張するなと言うだけ無駄だな。ほれ、早くしろ」

「我が名は『ウイル・ツチール』。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ……むぐっ!?!」

「んっ」

呪文を言った瞬間、ネクタイを引つ張られ口を塞がれる。

驚き目を見開くと綺麗に輝く目と合う。その目は楽しげに揺れ好奇心と何処か期待に満ちた目であった。

二話：。パンツ買い取ります

「ぐっ……がぁ……!!」

「っ!!」

キスを終え、ネクタイから手を離すと激痛が走る。

これまでに感じた事のないような痛みに襲われ、知らず知らずの内に近くに居たウィルの肩を掴み思いつき握る。握った際にウィルの呻いた声が聞こえたが、カリオストロには気にしている暇は無い。首に何かが刻まれる感覚と激しく熱い痛みを感じ息も絶え絶えとなり、汗が吹き出る。

体を折り視線を地面へと向けるが、決して地面に膝を付けなかった。

永劫に続くかのような痛みであったが、数秒ほどの時間で治まった。

治まると同時に慎重に息を吸い込み、吐き出すと頬から一滴の汗が流れ落ち地面へと吸い込まれていく。それを見届けると静かに顔を上げ、心配そうに此方を見守っていたウィルに視線を合わせる。

「っ……はぁ、よ、余裕だったな」

「……………これ使ってくれ」

「おう」

吹き出る汗を軽く腕で拭き取り、にっと笑う。

未だに先ほどの件が尾を引いているのか汗が止まらないが、無理しなくても余裕を持たせた。

カリオストロが——天才のオレ様がこんなことで屈するかと気合で立ち続ける。

それでもやはり、無理していることは誰が見ても分かるのだろう。カリオストロはウィルにハンカチを手渡され素直に受け取る。正直な話、ここでウィルが何かしら声を掛けるであろうと予測していた。「大丈夫か」「お疲れ様」などの労いの言葉を掛けられたら蹴ってやろうと思っていたが意外と自分の召喚主は頭は良いらしい。カリオストロは自分の召喚主がバカでなく察する事ができる人間だと分かり、

にっつと笑みを浮かべた。

(バカは嫌いだ。話が通じねーからな)

そんな事を思いつつもハンカチで汗を拭き取った。

「……………」

ウイルは本当ならここで労いの言葉を掛けたかった。

だが、それをぐつと押さえハンカチを渡す程度で抑える。

見るからに高そうなプライドとわざわざ余裕を見せ付けるかのよ  
うな行動を取っているのだ。

ここで労うような事を見せれば不機嫌になりそうだと考えてやめ  
た。

そしてそれは正解であった。機嫌の良さそうなカリオストロを見  
てほっと一息を付いた。

本当にプライドが高い人間は面倒だ。

「それでルーン文字は、何だった？首元にあると思うんだが」

「B 《ベルカナ》だな。意味は母性、再生、開放、成長だな」

カリオストロの言葉に従い、首元を見ると確かにルーン文字が描か  
れていた。

その言葉を読み取り素直に口にするとカリオストロは訝しげな視  
線を此方へと向けてきた。

「本当にか？」

「ああ……………そう書かれている」

「オレ様が……………ベルカナねえ？」

間違いないと言われ、カリオストロは少しばかり考え込む。

ベルカナ―母性、再生、開放、成長 を意味合いとするルーン文字。

(母性は、土属性である事と女性の体から。再生と開放は、錬金術だ  
な。問題は——成長だと?)

母性などに対しては納得いかない所もあるが、まだ領ける。土属性は大きく取れば大地、母なる大地や恵みと言う面で合っている。

再生と開放もなるほどと領ける内容だ。もとより『今の体は再生した物』だ。

カリオストロの体は作り物の体であり、元の体から解放されている事を見抜いた魔法に少しばかり賞賛を送った。絶対に口には出さないが。他の所は納得したが最後のだけは納得できなかった。

成長―言い換えれば『成長を見守る』とも取れる。自分の成長とも取れるが、既に完成していると言って良いほどカリオストロの技術は成熟し切っている。

体も作り物で『これ以上成長しない』ように設定している。だとすれば、自分が誰かの成長を支え見守ると言う結論に辿り着く。

カリオストロは考えながらもチラつとウイルを見てそんな筈は無いと首を軽く振った。

自分より才能も時間もない奴を見守るほどお人好しではない。

いつだって自分は最先端に居てひたすら前だけを見てきた人間だ。

今更、自分の横に誰かが立つなんてことはありえないのだ。

「どうかしたか？」

「いや、なんでもない。これで契約は終了か？」

「ああ、問題ない。……コルベール先生！」

いい加減、視線も鬱陶しくなってきた。

さっさと終わらせて部屋でのんびりしたいと思い始め、ぐつと腕を上に乗ばした。

背筋を伸ばし、一息つけば原っぱを駆け抜ける風に体の熱を冷まされ気持ち良かった。

「……ん、いい風だ」

カリオストロは呼ばれるまでの間、静かに遠くを眺め風を感じた。

「それではオールド・オスマンに異国のメイジと言うことをお伝えし



「おきます」

「よろしくお願いね！きやはっ☆」

「……………まだ、それ続けるのか」

声を掛け復帰したコルベールに契約を終えた事を伝える。

その際にカリオストロの事は、異国のメイジで押し通すと言う結論になった。

貴族に設定すると面倒な事になる上に、これ以上の補償をカリオストロがいらないと突っぱねた為だ。

「本当によろしいので？……………交渉などすれば学院からも補償が出ると思われますが」

「面倒だし、いらなかな☆そっちで適当にやってくれればいいよお」

何度も確認してくるコルベールに疲れつつも頑なに受け取らない。

確かにウイルだけからの補償だとあまり期待は出来ない。まだ子供の身で親におんぶに抱っこなのだ。正直受取れる金額や用意できる物も少ないだろうと理解している。

それでも面倒事を押し付けられるよりはマシだと考えた。

もしここで学院側から補償を受け取ると考えた場合、後々厄介な事を言い渡されそうだ。

貴族なんて輩はまず信用しない、信頼出来ない。

平然と掌を返すような奴等ばかりである。

「わかりました。顔合わせ位はあるかと思われませんがその時はお願いします」

「は〜い」

「次は……………ミス・ヴァリエール!!」

次の生徒が、呼ばれ二人は解放される。

ウイルに促され着いて行くと桃色髪の少女とすれ違う。

「大丈夫だ」

「うん、行って来る」

横を通り過ぎる際にウイルが少女の肩を軽く叩き励ました。

少女はそれに力強く頷き、歩いていく。

(……………まあまあカワイイな。オレ様ほどではないけど)

「……」  
「ちっ」

そんな事を思いつつ横を通り過ぎると目が合った。  
合ったのは一瞬だったが、ルイズの目に含まれる感情を読み取りカリオストロは面倒そうだと舌打した。

「……さっきのは彼女か？」

「……友人だよ。いや、むしろ妹分かな？」

ニヤニヤと笑いからかう気満々のカリオストロに肩をがっくりと落す。

正直な話、ルイズとの関係を疑われた事は二度や三度ではない。  
誰も頼れない状況の上、唯一の友達なのだ。休憩中も放課後も休みの日も、カルガモ見たいに後ろに着いて来るルイズを見て生徒が色めき立つのも無理は無い。

しかもルイズも自信満々に嬉しげに手紙に書いて家族に送るのだ。  
学院に来たルイズの父親に追っかけられたのは記憶に新しい。

「あれは依存してるだけだから……恋人関係にはならないよ」  
「だろうな」

ルイズの気持ちは依存だ。  
頼る相手が、友人が、恋人が、姉妹が、親が……全ての要素を入り混じり自分を見ているだけ。

これから先、才人やキュルケ達と関われば自然と今の状態からも抜け出すだろうとそう思っている。

「——そうなるといいがな」  
「何か言ったか？」

「なんも……楽しい事になりそうだと思うただだけだ」  
そんな事をカリオストロに伝えると何やら含みを持って返された。  
楽しい事になりそうだと言ったカリオストロの表情はどこまでも真剣であった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「それでこの子どうするの……ウロボロスに食べさせる？」

「うっ……」

「完全に伸びてるな」

使い魔召喚の儀式が終わった広場で3人は地面に横たわる1人の少年へと視線を向ける。

青色につるつとしていた繊維、服の形状はフード見たいな物が付いていると不思議な服装であった。髪の毛はウイルと同じく黒く、ハルケギニアには珍しい色であった。

「しよ、しよがなないじゃない！行き成り思いっきり叩けって言ったんだもん！」

「それで本当に叩くかね。てかあれは蹴りだろ」

「……うげ、そう言う性癖なのかこいつ」

「うっ」

ルイズは頬を膨らませ呻り、ウイルは呆れ、カリオストロは才人から身を引いた。

倒れている人物の名前は『平賀才人』……原作において主人公であった少年だ。

事の始まりはルイズの召喚の儀式から始まる。

原作と違い、儀式は以外にもすんなりと1回目で召喚に成功する。これには周りの生徒も何も言えず頑なに見守ったりもしていたのだが、その後がいけなかった。

自分の友人同様、人を召喚した事に驚くもウイルみたいに落ち着いて対処を試みていたルイズだが、『返してくれ』『ふざけんな！』と喚く才人にカチンときた。

才人はただの高校生であり、このような状況で落ち着いて対処しろと言うのは無理な相談であったがそんな事ルイズが知るわけもない。元よりルイズは感情で動くタイプの人間だ。カリオストロと比べ落

ち着きの無い才人にイラつき喧嘩を始め、勢いで契約までしてしまっ  
た。

ちなみに身元の確認をする前に契約するルイズを見てコルベールの髪は数本程抜け落ちたのも明記しておく。そこからの流れは原作通りの流れで他の生徒達に『歩いて帰って来い』などと言われ才人とまた喧嘩を始めた。

それを遠くから雑談しつつ眺めていたウイル達であったが、流石に止めようかと近づいた時それが起きた。

「ははは、そうかこれは夢なんだ」

「何言ってるのよ。あんた」

「殴ってくれ、俺は夢から覚める！」

「…………殴って良いのね」

「思いつき頼む！」

「なんであんたなんか召喚されるのよ！」

「こつちが知りたいわ！」

「歯を食いしばりなさい！」

「こい!!」

などの会話をした後に綺麗な回し蹴りが才人の顎を狙い打った。  
あつ…………殴らないんだと思いつつ才人は意識を手放す。

ちなみに才人の口から出た最後の言葉は『ありがとうございます!!』であったが、何を見たかは、何故そう言ったかは本人のみぞ知る。

「取り敢えずは…………浮かして運ぶか レビテーション 《浮遊》」

「へえ…………これがこつちの魔法か」

杖を取り出し魔法を唱えるとそのまま浮かぶ才人を引きつれ歩き出す。

カリオスト口は此方の魔法に興味を持ち浮かぶ才人を眺め、そこら辺の木の棒で突つつく。

「落ち込むことないだろうに…………召喚に成功したんだから」

「そうは言っても…………カリオスト口見たいに落ち着いていれば良かったのに」

「それは無理だろ、あれでもカリオスト口は経験豊富だ」

「そうなんだ」

「そうだよ」

カリオストロは、そんな事を話す二人を見て少しばかり眉を潜めた。

(オレ様が経験豊富……そんなこと話してないぜ?)

確かにカリオストロは経験豊富だ。

元の世界でも侵略者である『星の民』を退けたりなど様々な事をしている。

だが、そのことは話してもいない上にこの体だ。

何処の誰がこの可憐な少女を見て経験豊富だと言うのだろうか、見てくれはルイズと変わらないのに……。

これは話すことが増えたなどカリオストロは思考する。

「な、なんだこれくくく!!」

「おっ、起きたか」

さてどうやって聞き出そうかと悩んでいると隣から大声が上がる。

うるさいなと思いつつも見れば浮かんでいた才人が空中で手足をバタバタとさせていた。

「うおうおおお?!」

「うるさい!静かにしなさい!」

才人の反応にルイズが顔を真っ赤にさせ怒鳴る。

人の前で見つとも無いとでも思っているのだろう。

そんなルイズに苦笑しつつウィルは空中で回り目を回す才人に言葉かけた。

『ようこそ、ハルケギニアへ《魔法と危険な世界へ》』

丁寧にお辞儀をしてニコッと笑う。幕開けは上がったのだ。カーテンコール

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「つてことは本当に異世界なのか」

「そうなるね」

あれから混乱する才人を落ち着かせ、事情を説明する。

最初こそ信じていなかった才人であったが、ウイルが魔法を次々に見せていくとすんなりと納得した。

「帰ることは……出来ないんだよな？」

「無理ね。聞いた事ないもの」

「……………はあ〜」

才人は何度目かになる質問を投げかけて肩を落す。

「ところで……その赤い竜はなに？こいつも使い魔なのか？」

「ああん？」

肩を落とした後に思い出しかのように才人は隣を恐る恐る見る。

そこには赤い竜がカリオストロを乗せ浮いている。正確には蛇なのだが。

歩くのが面倒になったカリオストロがウロボロスを呼び出し乗っていた。

「すごい竜……よね？見たことがないわ。翼もないしどうやって浮いてるのかしら？」

「げっ……………こつちの世界って竜も居るのか」

ゼロの主従は興味津々にウロボロスを眺める。

ルイズは翼も持っていない竜を見て先住魔法か何かかと聞き、才人は竜が闊歩する様子を思い浮かべ顔を青くする。

「この子の名前はウロボロスって言うんだ。仲良くしてあげてね☆」

「仲良く……食われそうなんだけど」

「確かに」

カリオストロの説明にもなっていない紹介にルイズとウイルは少しばかり顔を引きつらせる。

名前を呼ばれたせいにか此方に顔を向けてくるウロボロスは大きさもあり威圧感バツチリである。

「な、なあ……………本当にそれウロボロス？」

「そうだよお〜何か文句ある？」

「いや……………そのさ。ウロボロスって尾を飲み込む蛇だろ？」

「ふーん」

「よく知ってるな。才人」

才人はゲームで覚えていた知識を元に疑問をぶつけた。

そんな才人にカリオストロは目を細め、ウイルは素直に賞賛した。対応や行動を見てる限りでは普通の少年かと思っていたが、意外にも知識を持ち合わせているらしい。

カリオストロの中で才人への好感度が上がる。どうやらこの少年は馬鹿ではないらしい……と。

「……これって蛇なの？」

「そ……の筈、どっからどう見ても竜にしか見えないけど」

「それに何で杖が刺さってるのかしら？」

「尾を噛まないようにさせてるからねえー☆」

「えっ……なんで」

「そうしてないと尾を噛んで自分の身を食っちゃうの☆」

ウロボロスは、何本もの杖が体に刺さっており痛々しい見た目をしている。

それを気にして聞いてみれば、そのような答えが返って来て二人は顔を引きつらせる。

自分の体を食べる事もだが、それを防ぐ為に杖を刺すと言う発想に到るカリオストロに少し引いた。

「そ、それでこいつって本物なのか？」

「うん☆そうだよー！」

空気を変える為に聞いてみると本物だと言われ才人の目は輝く。

未知の体験、未知の魔法、未知の領域、伝説の生物。

様々な事を体験し才人は感動する。元より才人は好奇心の強い少年だ。

これで興奮すると言う方が無理があるだろう。

「すげー！」

「でしょー☆乗ってみるう？」

幼い子供のように騒ぐ才人にカリオストロは鼻を高々に自慢する。ついつい興が乗りそんな事を提案すれば才人は喜び飛び乗った。

(ふむ、度胸もありと……案外ルイズも当たりを引いたかも知れねーな)

「おおーすげえ、俺ウロボロスに乗ってるぜ!!」

「わ、私も!」

そんな事を思いつつ自分の横でウロボロスに乗ってはしゃぐ二人を眺める。

なんとも判りやすい二人についつい頬が緩む。

(それに比べて……こいつは謎すぎる)

そんな二人を静かに見守るウイルをチラつと横目で見てそんな事を思う。

ウロボロスの事を才人が話しても知っていたとばかりの態度、自分の事を知っている風でもあり謎だ。よく思い返せば、才人が召喚された時も一息ついただけで何の反応もなかった。

人間が召喚された事は今まで無いとコルベールが言っていたのにも関わらず、それこそ当たり前だとばかりな反応だ。

最初こそは、人当たりが良い奴と思っていたが時間が経つにつれ不気味でしようがない。

(一体腹の中に何を抱えているんだか……)

いつのまにか腕を組み何かを考えるウイルにカリオストロは鋭い視線を投げかける。

そんなカリオストロの視線に気付いたのだろう。

ウイルは真剣な表情で何かを頷き、此方へと歩み寄る。

じつと見ていると用事は自分ではなく……。

「ルイズ!」

「ん、なに?」

ルイズは真剣な表情で名前を呼んでくる友人に首を傾げる。

ここままで真剣な表情なのはお父様に追われたあの時以来である。

「頼みがある」

「……私に出来る事なら」



頼みと言われルイズは重々しく頷く。

ここまで自分を頼ってくれる友人に少しでも何かを返そうと思っ  
た。

今思えば、自分は彼に我俣をかけっ放しだ。

愚痴を何も言わずに大人しく聞いてくれて、一緒に自分の失敗する  
魔法を研究してくれて、何時だって傍に居て支えてくれていた。

そんな彼の力になれるなら、自分が出来る範囲で役に立とうと思っ  
た。

ただし——彼から言葉が発せられるまでであつたが。

『下着を俺に売ってください！お願いします!!』

地面に勢いよく頭を付け土下座したウイルスがそんな事を言っ  
た。

真剣に本気に……大真面目にだ。

三話：パンツは作れません

「……………」

「……………」

「……………」

トリステイン魔法学院の入り口で4人が4人とも無言を貫く。

サイトは意味が判らず首を傾げ、ルイズは徐々に何を言われたのか理解したのか顔を真つ赤にさせた。ウイルの事を警戒していたカリオストロは何とも言えない表情をし眉を潜める。

このような状況を作り出した張本人と言えば、ただただ頭を下げて動かなかった。

別にウイルが突然自分の性癖を暴露したわけで訳でもなく、発狂した訳でもない。

何故ウイルがこのような事を言ったのか、どうして恥を捨ててまでこの様な事になったかと言えば『カリオストロ』のせいとも言えた。

時は少し戻って、契約後のお話。

(何処かで会った事あったっけか)

己が契約した人物に既視感デジャヴに記憶を探る。

人形と言わんばかりの綺麗な容姿にコルベールに見せた頭の良さ。猫被りをしたと思えば時折見える地。更には『開闢の錬金術師』と言う二つ名に、カリオストロと言う女性に似つかわしくない名前。自分の隣に立つ少女をじっと見つめて行くうちに1人の『男性』へと行き着く。

(あれ……俺が契約したのって『カリおっさん』じゃね?)

ポンと思いつ出したのは、グランブルーファンタジーと言うゲームに出てきた1人のキャラクターでカリおっさんと言う名前で親しまれていた、カリオストロだ。

『世界で一番カワイイ☆』と自称し、自分の可愛さを追及することが趣味で、ついでに世界の真理を解き明かすことに探求心を燃やす錬金

術の開祖。使い魔として二匹のウロボロスを引きつれ、空の世界に影響を及ぼした『星の民』に誘われるも断り1人で撃退した実力者だ。

そして……何より――。

(だが、男だ)

男性であった。そうカリオストロは『男』である。

元は男性であったカリオストロは、病弱であった。大人まで生き残れない自分を治すために錬金術を学び圧倒的才能により開祖と到る。

体を定期的に作り出し、体を入れ替える事で擬似的な不老不死を實現させてもいた。ある意味で真理に到達している最強の錬金術師……それが己が呼び出した人物であった。

作り出した体は女性の物で『出来る限りやったぜ☆』とばかりの趣味嗜好を含ませたものであるが。

(……まじかよ)

驚愕の事実にはウイルは何も言えず唾然とする。

よりによって最強のチートを呼び出したのだ。ルイズとサイトと合流し、これからの付き合い方に対して考え始める。

(取り敢えずは……敵対行動を取らなければ問題はないだろう)

思い出せる限りのカリオストロの情報を引き出し、そう結論つけた。

カリオストロの性格は、『ナルシスト』で『唯我独尊』、自分以外を見下し『無能』とと思っている。いい意味に取れば、皆を平等に見ているとも取れた。

(グラン達と交流を重ねる内に周囲へ関心を寄せた描写もあつたな)

原作において、カリオストロは交流を重ねるうちに態度も柔らかくなり、関心を寄せていた。

自分が呼び出したカリオストロがどの段階の人物かは不明だが、これからしっかりと付き合っていけば関心を持たれるだろう。カリオストロは好きなキャラクターであった為に、こうして会えた事は純粋に嬉しい、良い関係を築いていきたいと思った。

その為、不機嫌にさせないように呆れられないように、これからの対応を模索する。

(まずは学園に戻ったらマルトーさんの所に行って、夕飯とこれからのカリオストロの食事の手配)

空を見れば、夜にはまだ早く、問題なく夕食には間に合うだろう。

(次は研究の為の道具は……注文しないといけないな)

此方の魔法や世界の事を研究するであろう、カリオストロの為に研究器具を買わなければと心に誓う。自分の使っている物をも思っただが、研究するにあたって他人の道具を使うのはあまりよろしくない。少々値が張るがしっかりとした物を用意した方が良さげだ。

街に行つた際に小物類や衣服と纏めて注文をしよう。

(……ってあれ?)

ふと次のことを考え、思考が止まる。

その思考を止めた原因へと視線を向ける。カリオストロを足から頭までじつと見つめて頭を抱えそうになった。

(替えの服と下着持ってないよな!?)

頭を抱える原因となつたのは衣服の問題だ。

生きているのだから汚れるのは当たり前。自分の可愛さを追求するカリオストロの事だ。

見た目は勿論、服装や清潔さにも心配りをしているであろう。

それなのに衣服を整える手段がなかった。トリスティン魔法学院の周りには店などなく購買もやっていない。必要な道具があれば虚無の日に街に行くか、実家から取り寄せるの二択である。

(虚無の日まで……5日もある)

学院が休みとなる虚無の日まで5日もの間があり、その間の衣服をどうしようかと悩む。

原作を読んでいる時は気にしていなかったが、これは大きな問題であった。

学院を休んで行けば問題は無いだろうと思うかもしれないが、ここはハルケギニアである、現代ではない。現代のように作り置きなどしていなく下着の全てが『オーダーメイド』なのだ。

貴族用でもある為、その人その人に合った下着を作る為に異様に時間が掛かり費用も高い。

衣服が手に入っても下着が手に入らなかった。

(くっ——どうする！どうするよ！俺え！)

メイドに頼みドロワーズを譲ってもらおうと言うのも考えはした。だが、それはカリオストロの好みの時点でアウトだ。

容姿や態度、服装に到るまでカリオストロは趣味嗜好を反映させている。

ミニスカートなのもその為であると何処かで読んだ記憶があるのだ。

それなのにミニスカートが、穿けなくなるドロワーズを穿くかと言われれば……無理であろう。

メイド服と合わせて「こういうのも可愛いんじゃないかな」と提案すれば着てくれるかも知れない。だが、結局は時間稼ぎにしかならず意味をなしていない。

(何か……何か……対策は)

「ウロボロスに乗ってるぜ！」

「わ、私も！」

ルイズ達のはしゃぐ後ろで腕を組み考える。

何か良い手は、全てを解決してくれるであろう、妙案を……。

(……ってルイズ?)

ふと気づいた事があり、ルイズを眺める。

ルイズを眺め、カリオストロを眺める、交互に繰り返しお互いの身長や体型を見比べた。

(身長は20 سانتばかり違うがいけるか?)

ルイズの身長が150 سانت、カリオストロの身長が130 سانتぐらい。

些か違うが体型的には近いものがあるので試してみても良いかもしれない。

そこまで考えて目が合ったカリオストロに対して「任せろ」とばかりに神妙に頷いた。

(これで駄目だったら……タバサしか居ないよな)

ゆつくりとルイズに近寄りながらそんな事を思った。

これがウイルが土下座をした経緯、他の人から見れば呆れるような事かもしれないが本人は大真面目であった。

「ぷっ……ぶわははははは、ひいー……お腹が痛いっ」

「えっと……しゅ、趣味は人それぞれだしな！」

「あう……あう……あう」

カリオストロは大笑いし、才人には背中を叩かれ励まされる。

ルイズに到っては顔を真っ赤にさせ俯いてしまった。

「というか、カリオストロの為に恥を忍んでいるのにその反応は酷いと思う。」

ウイルは納得いかない気持ちを抑えルイズを見る。

「さて……ルイズは下着を売ってくれるだろうか——。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(えっと……えっと、なんで私の下着を?)

目をぐるんぐるんに回し、ルイズは混乱に到る。

普段真面目なウイルの突拍子もない行動に頭を抱えなくなった。

「意味が判らず、何も言えない、ただただウイルが自分の下着を欲しがっているという事だけが事実で残った。」

「ひいー……笑った、笑った。そんなに女性の下着欲しかったらオレ様のを売ってやろうか?」

「それじゃ意味無いだろ……。ルイズでないと駄目なんだ」

「っ……!!」

カリオストロがスカートを少し持ち上げひらひらと振りそんな事を言っている。

それに対してウイルは真剣な眼差しでカリオストロの言葉を否定した。

これには少しばかり胸に来るものがある。

カリオストロはルイズから見ても、とてもとても可愛らしい人物だ。

そんな人からの提案を断り、自分が良いと自分でなければ駄目だと言ってくれているのだ。

(そ、そそそこまで言われたら……あつ、あげないといけないわよね！)

普通の人であれば、何言っつんだコイツとばかりに冷たい視線を向ける場面であろう。

だが、残念にもここに居るのは異性との関わりも人との関わりも薄い残念なルイズである。

原作においても才人と反応に困るような事をしでかすのだ、ある意味必然であった。

ルイズは、部屋にある自分のパンツを思い出し、どれをあげようかと悩む。

白い方がいいのか、縞々がいいのかと、ウイルが喜ぶであろう下着を選別しだす。

(……水色がいいのかしら。それとも——勝負下着?)

ふと思いつ出したのは、母親に渡された一枚の下着だ。

ウイルが父親と鬼ごっこを興じているときに渡された物。

ルイズが持っているいなかった黒い下着、紐の様な形状で殆ど丸出しに近く、渡された時には口をぱくぱくと開き目を見開いた。

(だだだだだだ、だめよ、だめよ、ルイズ。あれは、はしたないわ!)

頭の中をお花畑全開でルイズは、両手を真っ赤になった頬に当ていやんいやんと体を振る。

そんなルイズを珍獣でも見るかのように3人が見ているのだが、気

付かない。

(……そういえば、下着なんか何に使うのかしら?)

少し冷静になり、ふとそんな事を思う。

女性の下着が欲しいのであれば、お店で買えば良いのだ。

それなのにわざわざ、自分のを?と考える。

(そういえば、サイトが『趣味は人それぞれだしな』って言ってたわね)

才人の言葉を律儀に思い出し、考え一つの結論に到る。

部屋に置いてある物ではなく、今自分が穿いている物が欲しいのはと……。

そういう趣向の人が居ると噂で聞いた事もあったが、まさか自分の友人がとは思わなかった。

本来ならここで諭すのが友達と言うものだろう。だが、もしも失敗すればウイルが我慢出来ずに他の子のを盗むかも知れない。

アンリエッタは忘れた初めての友達なのだ、犯罪者にする訳にはいかないと思い、スカートに手を入れるとズルリと下着を下ろした。

(えっ……何してるのこの子)

何やら百面相しているルイズを大人しく見守っていたが、ルイズの行動に引いた。

いきなり、スカートに手を突っ込んだと思ったら勢い良くパンツを下ろしたのだ。

これには3人ともがポカーンとし固まってしまった。

「」

パンツを太股まで持ってきた時にウイルの頭の中で一つの言葉が出てくる『オレの命が危ない』

何故ルイズがここで脱ぎだしたかは判らないが、原因は自分だろう。公爵家の娘の下着を公然の場で脱がしたとなれば命がない。気付けばルイズの太股にしがみ付き必死に脱ぐのを阻止していた。

「ちよ、なななななにしているのよー!」



「むしろこっちが聞きたいよ!? 何で脱ぐんだよ!!」

「脱がないと渡せないじゃない!」

「はあああー!?!」

必死に太股にしがみ付き、脱がないように阻止するウイル。

それに逆らい暴走して脱ごうとするルイズ。

カリオストロは、笑いすぎてお腹が引きつり痛み苦しみ転げ回る。

才人は興奮し羨ましいなど指を咥えた。

「ルイズ! ルイズ! 俺が言ったのは『カリオストロの為に替えの下着を』ってことなんだ!」

「ふへ?」

「え?」

「なんだって?」

ここでようやく誤解に気付き、ウイルが叫ぶように懇願した。

このままでは自分は公爵家の娘、しかも友人に公然とあなたの穿いている下着を売ってくださいと言った変態になる。必死に諭すように、若干泣きながら首を振った。

ウイルの必死の言葉でようやく全員が悟り、唾然として固まる。

「ね、ねー……カリオストロお聞きたいんだけど☆」

「……うん」

一番早く復帰したカリオストロが汗を流しながら猫撫で声で聞いてくる。

笑みを浮かべているものの頬がひくひくと引きつっていた。

「この辺りにお店つてあるのかな☆」

「ない。街に行きたいなら馬に乗って片道2時間だ。しかも下着はオーダメイド製で時間も掛かる」

「……」

「ついでに言えば、費用も高くて。次の休みは5日後だ」

カリオストロは気まぎれに視線を逸らし頬を掻きぼそりと小さな声で呟く……「下着を売ってください」と。

自分の為に行動していたと気付かず、先ほどまで笑っていたのだ、気まぎれ……気まぎれ過ぎる。

「えつと……なら私が脱いだのは？」

「俺の伝え方が悪かったのと勘違い……ごめん」

ルイズがきよとんとして聞いてくるので太股から手を放し立ち上がると素直に謝罪した。

「ふあ

……

「ア

!!!!!!」

ルイズは恥ずかしさのあまり、下着を半ばまで脱いだ状態で絶叫した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………」

「あははは……」

「あー悪かった。オレ様も謝るからよ」

（リンゴみてー）

あの後、誤解を解き、ぶんすこと怒るルイズを前にウイルとカリオストロは再度土下座をして頼み込んだ。暫しの時間が掛かったが、今度の虚無の日にクツクベリーの好物を奢るといふ約束で手を打たれ下着を譲り受ける事になった。

「それで部屋に向かうでいいのか？」

「厨房、二人の食事を頼んでおかないと」

「なるほど……な」

ルイズの絶叫の後、4人は次の目的地へと歩く。

何処に行くのかを尋ねた才人は素直に頷き、お腹に手を当てる。

夕食にはまだ早いが色んなことがあってお腹が空いたのだ。

（あれ……そういえば）

建物が珍しくてきよろきよると辺りを見渡している才人はあることに気付いた。

「なあ……聞きたいことあるんだけどさ」

「なんだ？」

興味を引かれ声を掛けるとウイルが振り返る。

自分のご主人様は未だに怒り、此方を見向きもしない。

「魔法で下着を作ればよかつたんじゃない？」

先ほどの件を思い出し、そんな事を思ったのだ。

「この世界を教えてもらう際にウイルに様々な魔法を見せてもらっており、可能だったのではと思ったのだ。」

『無理だ』<sup>無理だな</sup>

ウイルとカリオストロ、二人の言葉が重なり否定する。

「そうなのか？ 錬金とかでパーっと出来そうな物だけど」

脳内で石が鉄に変わる様子を思い出す。

「面倒なんだ」

「面倒？」

「こそ」

ウイルが空中で下着の形を描き、ダルそうに言った。

「原材料は簡単に作れる」

「……」

「問題はその後、『加工』が出来ないんだ」

「加工が？」

口に出すとウイルが頷く。

「布ってどうやって出来てると思う？」

「どうやって……糸を重ねるんだろ？」

「そうだ、1本1本の細い繊維を上から横へと組み合わせさせて一枚の布を作る」

「……」

「その工程を魔法でするのが難しい」

鉄など比べ布は繊維の集まりだ。

1本1本を重ね、組み合わせ織り込んで布を作っていく。

その工程を魔法で行なうと脳内での処理が膨大となり難しくなる。なら糸でなく布を作ってしまったえばと思うかも知れないがそれは出来ない。

魔法を行なう際に大事な物はイメージだ。布の形状や仕組みをしつかりと記憶して無いと不純物が多い紛い物になってしまう。形状や仕組みを知っていれば嫌でも加工の仕方が頭にこびり付き、逆にイメージがしにくくなり。結局の所、手や機械で織り込んだ方が早し楽である。

更に言ってしまうと、布を作れた後も問題だ。

下着に関してもサイズや足が出るところの幅、胴回りの窮屈さや緩みを計算で出さなければならぬ。脱げ落ちないようにゴムも必要になるだろう。結局の所、手でやった方が早い。

まだまだ問題もある、ハルケギニアの錬金ではどれだけ上手く作った物でも不純物も多く雑な出来になる事が多い。そんな物を使った下着なんて絶対に売れないし、穿きたくもない。

「ということとは……」

「パンツは作れません  
魔法は万能じゃない」

厨房に着いたところでそう締めくくった。

## 四話：トリステイン危機一髪

厨房に着き扉を開けると五月蠅い位の喧騒が聴こえてきた。

中を見れば白いコック服に身を包んだ幾人もの男性が慌てながら調理をしている。

ウイルやルイズと言った貴族が来ているのにも関わらず誰も挨拶をしないが二人は気にしなかった。時間は夕暮れ時、もうすぐで夕食の時間帯だ。

生徒や先生方の為に料理を作るのが彼等の仕事で頭を下げる事ではない。

「マルトーさんっ！」

「おう、ウイルの坊主とルイズの嬢ちゃんか」

邪魔をするのは気が引けるが、食事が抜きになるのは勘弁したいと思いうイルは1人の男性に声を掛ける。その男性は他の大人と比べても体格が良く、見た目は30台半ばのおっさんだ。

ウイルにマルトーと呼ばれた男性は、人好きのする笑みを浮かべ歓迎してくれた。

「此方は、トリステイン魔法学院で料理長をしているマルトーさん」

「おうマルトーだ。ここで料理を作るだけの無能者だ！」

ガハツハツハツハと大きな笑い声をあげるマルトーを見て他のコック達も笑った。

「……………ふくん、やるな」

「カリオストロ……………いつのまに」

「おう、嬢ちゃんは味が判る奴か」

そんな騒ぎも気にせず。いつのまにかカリオストロは椅子に座っており、用意されていたスープを飲んでいた。一口飲んだカリオストロは目を細めニヤリと楽しげに笑う。

勝手に飲んだカリオストロを怒る事もなく、マルトーも機嫌良く豪快に笑った。

「それで嬢ちゃんは？」

「オレ様は 世界一の天才美少女錬金術師 カリオストロ様だ！」

「れんきんじゅつし…？嬢ちゃん貴族か何かか？」

カリオストロが椅子の上に立ち上がり、腰に手を当て胸を張る。

そんな様子を見て、マルトーは困惑した。

「いんや、オレ様は違う。錬金術師で使い魔だ」

「あー……、ウイルの坊主はまたやらかしたのか」

何故、そこで自分の方を見て納得したのだろうか。

周りを見れば他の人も頷いており、ウイルは納得がいかなかった。

「ついでに言えば、そっちの奴も使い魔だ」

「俺はついでなのか」

椅子に座り直し、モグモグと食べ続けるカリオストロに指を指され才人は、がっくりと肩を落す。

「そう言う訳で、この二人も今後学院に住む事になる。すまないが食事の方をこつちで取らしてくれ」

「別に構わないぜ、それが俺の仕事だしよ。賄いでよければ何時でも食いに来い！」

「おう」「えつと……平賀才人です。よろしくお願いします」

二人がそれぞれ挨拶を交わした後、食事を頼み、その場を後にする。

「それじゃ戻るか」

「ようやく部屋でのんびりできるね☆」

「ああ……うん。ところでカリオストロって二重人格なのか？」

「……………」

外で行なう事を全て終え、部屋へと二人を案内する。

サイトはたまに人格が変わるような豹変をするカリオストロに困惑した。

ルイズは未だに怒っているのか、頬を膨らませるばかりで何も言わない。

言わないが、文句もなく着いて来るので問題はないだろう。

「ここがオレの部屋だ」

「……………なあ」

「なんだ？」

暫し歩き、ようやく部屋へと辿り着く。

辿り着いて自信満々に招待すれば、才人が不思議そうに首を傾げた。

「なんでこんな所に？ 他の奴等はあっちの塔に入って行ってるけど」

「……………」

才人の指摘は正しい。他の人が塔の中に入る中、何故かウイル達だけは外の城壁の方へと向かわせられたのだから。もう1個言えば、ウイルの部屋は横に部屋二つ分ほど伸びた小屋であった。

「あー……それはな？」

「追い出されたのよ」

「は？」

その質問に答えたのは、黙っていたルイズだ。

ルイズの答えに才人は頭の中で意味を考える、『追い出された』……ああ、なるほどこいつは何かを仕出かしたのかという疑惑の目を向けた。

「ウイルは、研究が趣味だから。それを寮の部屋でやって騒音を出してうるさかったり、異臭騒ぎに発展させたり……………」

「……………」

ルイズが指折り、これまでの経緯を話します。

それを横で聞いていたウイルはきまりが悪そうに、目を逸らした。

「あーうん、追い出された理由が良く分かった。けど……………注意とかやめろとか言われなかったのか？」

そこまで来た才人は疑問に思いそう聞いた。

もしもそんな騒ぎを起こしたなら、教師に先に注意や、やめるように説得される筈だ。

それがあってもやっているのなら大した度胸で迷惑な奴だとも思う。

「そりゃ、軽い注意はされるが、やめさせる様な事はしないだろうよ」「なんで？」

才人の疑問に小屋を眺めていたカリオストロが答える。

自分と同じく此処に来たばかりだというのに理由を知っているらしい。

なんというか、色々と規格外の少女だなと才人は苦笑した。

「ここは仮にも学院……学校だ。学校は学び舎、騒ぎを起そうと一生懸命勉強している奴を止められるか」

「あつ」

「これは予測でしかないが、大多数の奴はあまり勉強してないんじゃないか？ 貴族様だろうしよ」

「……………」

カリオストロは面倒そうに欠伸をしつつ核心を突いてくる。

カリオストロの考えは当たっている。貴族であり、ここに通っている二人は何も言えなかつた。

ここに通う貴族の大半は真面目に学ぼうとしていない。

ある程度、将来を約束されている者が殆どで真面目に学ぶ生徒はほぼ居ない。

それこそ学ぶ意思を持っているのは将来お城で勤めようと思っている者か軍隊に入る人ぐらいだ。

魔法と言う未知で不思議な力を持っているのに、使おうとしないのかとも思うがしょうがない話でもあつた。最初こそ魔法と言う力に感激するもそれは最初だけ、使えるのが当たり前、日常で扱われていく魔法に特別視する人間は少なくなっていく。

ある程度の魔法があれば、特に困る事もなく、勉強しようとする気すらなくなる。

故に魔法学院で行なう事は、勉強ではなく。将来の婿や花嫁を見つける事、友人を作り人脈を増やす事。この2点が重視されている状況だ。

このような風潮に教師達は嘆くも人脈を作る大切さも判っており、臍を噛む毎日だ。

そんな中で魔法を真剣に学ぼうとしているウィルとルイズには少々甘くなるのも仕方がない。

そういう理由もあり、特別に部屋兼研究室を与えたのが経緯とな



る。

「はー……なるほどな。俺なんか毎日使うけどな」

「日常になれば……便利になればなるほど人は止まり停滞する。まあ……そんな奴等オレ様は嫌いだけどな」

カリオストロはそう締めくくり、扉を開け中に入っていく。

その際に視線をウイルに合わせ『お前は違うよな』とばかりに目を細めた。

それに対してウイルはしっかりと頷き答える。

転生前は勉強が嫌いであった。全くと言っていいほど勉強もせず、友達と遊ぶ毎日を送っていた。

だが、今は違う。魔法を学び、腕を磨き、研究していく毎日が愛おしくなるほど楽しいのだ。

しかも目標となる人物を呼んだのだから足を止める道理はなかった。

「おーすげえ！ 貴族って感じだ！」

「……なによそれ」

中に入ってみると外見に比べ物凄く豪華であった。

暖炉が備え付けられており、少し離れた所に二つのソファーとその間に設置されている机。

其処から更に奥に視線を向ければTVの中でしか見た事のないような大きなダブルベットが置いてある。床には高そうな手触りが良い絨毯も敷き詰められている。

家具一つ一つが丁寧な作りとなっており、こういうことに疎い才人さえ高い物だと感じた。

「うん、なかなかだな」

「もう！勝手に！」

既に上がり込んでいたカリオストロが座り心地を確かめるようにソファアに埋まる。

気に入ったのか機嫌良く、気持ち良さそうに目を細めていた。ルイズは玄関で靴を脱ぎ、カリオストロへと駆けて行く。

(靴は脱ぐのか。日本みてーだな)

靴を脱いで上がるルイズにその様な事を思った。

外見も名前も外国人らしかったので、欧米同様靴を履いたままと思っただけに少しばかり驚く。

「カリオストロ、こっち！」

「ああん、なんだよ」

「下着！ 選んで頂戴」

「あー？」「え？」

才人が靴を脱いでいるとそんな会話が聞こえる。

ルイズの言葉に二人は何を言っているんだとばかりに眉を潜める。

ここはウイルの部屋と聞いていた。

なのにだ、何故ルイズの下着がここにあるのだろうか……。

「なんでルイズの下着がここに？」

「泊まる事も多いし、面倒だから家具を置かせてもらっているのよ」

これには二人共黙り込む。

若い、いい感じの男女が一緒に部屋で寝過ごすのはどうなのだろうか。

「あー……両親とかはなんて？」

「……学院に来た時にウイルが追っかけられたわ」

「だろうなー」

カリオストロの言葉にルイズは気まずそうに視線を逸らす。

当たり前と言えば当たり前だ。

年若く、多感な時期に友達とは言え一緒に部屋の部屋で寝て心配しない親は居ない。

「それでも此処に居ると言う事は認められたのか」

「ええ、しようがないって。それからは実家から家具が届いたからこうやって置いてるのよ」

嬉しそうに話すルイズに才人は、苦勞してるんだなと同情した。

(あーこいつ分かってねーな)

そんな才人とは逆に何も判っていないルイズにカリオストロは微妙な表情をする。

仮にもルイズは貴族なのだ。親がそんな事許すわけがない。

もしも、仮に男女関係などが起きてしまえば、他の家に嫁ぎに行けなくなってしまう。

貴族は大半が外面を気にし、プライドが高い。

そんな人間が傷物の女性を娶るだろうか？

渡されたら馬鹿にされていると思われても仕方がない。

それなのにルイズの親が許したのはそう言う事なのだろう。オマケに家具まで送られている確定だ。それとなくヴァリエール家の事情を理解し深い深いため息をついた。

(男爵家の次男とか言ってたけどアイツ大丈夫かよ)

着々と外堀を埋められている自分の主人に心配するも直ぐに首を振った。

あれでウイルは要領が良く頭も悪くはない。

こう言った事もしっかりと対処しているだろうと。

(……なんでオレ様があいつの心配をするんだ?)

とそこで、自分の心に抱いた感情に困惑した。

自分とウイルは、先ほど数時間前に会ったばかりだ。

それなのにもう情が移りこうやって心配をしている。

何かがおかしい、おかしすぎた。

自分以外を見下し平等に見ている自分が、何故かうイルだけを特別視している。

この異様な状態に疑問に思っていると、首元のルーンが少し熱を放ったように感じて手で触れる。

「カリオストロ！」

「ああ……今行く」

考え込んでいると自分の箆笥を開け下着を選ぶように急かされた。考えるのは後かと思いい直し、カリオストロは下着を選んでいく。

「こういうのはどう？」

「ん〜……もうちよつと可愛らしいのがいいな☆」

カリオストロは様々な下着を広げては見ていく。

横から後ろから、自分の穿いている姿を見てしつかりと選ぶ。

（こっちはこういうデザインか）

白から水色、黒にピンク。

様々な色の下着を見て観察していく。

少し前に錬金で下着が作れないと言ったが、正確にはカリオストロは作れる。

体を作成出来る技量があるのだ、人間の細胞や血管に比べたら布織維などあつてない様なものだ。

なら、何故作ろうとしないのかと言われればデザインの問題と答えた。

下着を作れるには作れるが、此方の世界のデザインも見ておきたかったのだ。

自分で考えたデザインで着飾り可愛くなるのもいいが、こうやって他人の考えた物で可愛くなるのも必要な事と思っている。

（ふむ、下着の触り心地にデザインもいいな。これで少しはマシか）

一枚に下着を手に取り満足げに頷いた。

「……………」

下着を広げて話をする二人に才人は顔を赤くして気まずげに頬を搔いた。

「ただいまっ」と

「お帰り、お風呂沸かしてたの？」

「お風呂あるのー？ カリオストロお、疲れたから入りたいな☆」

「あー後で入ってくるかいよ」

外でお風呂の釜に薪を入れて来たウイルが戻り、お風呂の内容となる。

即座にカリオストロが反応し女の子モードへと入りすすつと体を

寄せてきた。

そんなカリオストロに苦笑しつつもウィルは、ソファアへと座り込む。

「お風呂あるんだな」

「そりやな。ちなみに学院のほうにもあるぞ、でつかいの」

才人の問いに親指を立て学院のほうへと指を向け答えた。

「そっちには入らないのか？」

「あつちは……その薔薇とか入ってたりして匂いがきつい」

大きな風呂があるならばそちらの方が良いのではと思い聞いてみればその様な答えが返ってきた。

「ちなみに貴族専用だから才人は入れない」

「そつか……まあいいや。平民用のもあるんだろ？」

「あるぞ。蒸し風呂だけど」

「……蒸し風呂？」

何気なく言われた言葉に才人は固まる。

才人は現代人だ。蛇口を回せば水が出て、スイッチを押せばお風呂が沸く。

お風呂にお湯が入っているのが当たり前、蒸し風呂などサウナでお風呂のついでに過ぎない。

それなのに平民はお湯の張った風呂に入れないと言われ愕然とする。

「どどど、どうにかならないのかよ！」

「なに、あんた平民の癖にお湯の入ったお風呂に入りたいの？」

「当たり前だろ！」

ルイズからしたら平民が蒸し風呂に入るのが当たり前。

何故そんなにも入りたがるのか良く分からなかった。

「風呂！ 風呂！ 1日の疲れを癒す大事な物！」

「へー……サイトの国は豊かだったのね」

うがーと自分の心内を曝け出す才人の言葉にルイズが反応した。

その言葉を聞いて才人は「豊か？」と首を傾げた。

「毎日お湯の張ったお風呂に平民が入れるなんて豊かじゃない」

ルイズの言葉に才人は固まる。

才人は知らなかったが、毎日お風呂に入ると言うのは贅沢な事なのだ。

現代と違い湯沸かし器などないトリスティン。

お風呂を沸かす為に薪を作り、あるいは買い、大量のお湯を作る余裕など平民にはない。

その事を知らない才人は、改めて自分の居た世界との違いを見せ付けられショックを受けた。

「丁度いいし、国について話しておくか」

「——お願いします」

才人の事を見ていたウイルが立ち上がり壁の前へと立つ。

そこには大きな地図が掛けられており、才人の読めない文字で何か書かれていた。

たぶん、町の名前なのだろう。

「まずはここが『ガリア』、ハルケギニア最大の国で『無能王』ジョゼフが治めている」

「……………」

ウイルが最初に示したのは青く塗りつぶされている大きな国だ。

国と国の間には大きく太い黒線で国境が描かれており大変判りやすかった。

「無能王？」

「魔法が使えないからそう呼ばれている」

カリオストロの問いにそう答えた。

「ふくん……………それで国は荒れてるのか？」

「荒れてないね。むしろ徐々に国力を伸ばして前王より優秀」

「……………無能って名づけた奴の方が無能じゃね？」

「……………」

カリオストロは呆れたようにため息をつき、そのような事を言う。

それに対してウイルは、苦笑する事でしか答えられなかった。

「なんで魔法が使えないと無能なんだ？」

「貴族の条件が魔法を使えることと浸透しているからだ」

「なんでそれだけで……」

「それは追々、その事を話すとハルケギニアの成り立ちの説明にまで遡る羽目になる」

才人の言葉にウイルはそう答え、ルイズをちらつと見た。

ルイズは黙り込み、自分の手を堅く握っている。

「次はガリアの下のロマリア。『ロマリア連合皇国』だな。こっちは王ではなく『教皇』が治めている。神官の最高権威「宗教庁」が存在し、始祖ブリミルの予言および「虚無」を研究している所だな」

「ブリミル？虚無？」

「そっちも成り立ちに関係するから、ブリミルは……そうだな。魔法を作り出した人で神様として祭られていると覚えておけばいい」

「なるほど、ロマリアは宗教が盛んなんだな」

「そういうことだな」

才人の言葉に頷き、今度は上の赤い部分を杖で指した。

「こっちは『帝政ゲルマニア』。皇帝を中心に貴族が利害関係で集まり興した国だ。元は都市国家。現在の元首は皇帝アルブレヒト3世。元々は小さかったけど周辺地域を併吞して版図を広げた国だな」

「へー……」

「ちなみにゲルマニアから留学生が1人だけこっちに来てる」

「むーっ」

ウイルがゲルマニアの話しをしだし、留学生の話しをするとルイズが呻る。

「なにかあるのか？」

「あー……留学生とルイズの家には因縁があつてね。キュルケって言う赤い髪の子なんだけど……才人も接触する際は気をつける。ルイズが不機嫌になる」

「ああ……判った」

キュルケの事を思い出したのだろう。

ルイズの表情が凄い事になってきている。

それを隣で見ていた才人は顔を引きつらせて関わる場合は注意を

しよう」と心に誓った。

(まあ……注意をしても無駄だろうけどね)

ウイルは、そんな事を思って話を進める。

「次はここ、『アルビオン王国』」

「一つだけ離れてるけど島国なんだな」

地図を見て一つだけ離れた国を見て才人が納得したかのように頷いた。

「残念ながら違う。アルビオン王国は『浮遊大陸』だ」

「……………」

「浮遊大陸!?!」

地図の上に置いた杖をアルビオンからトリステイン、ゲルマニアと通って元の位置へと戻し答えた。その答えにカリオストロは少しだけ反応し、才人はファンタジー!きたー!きたー!と興奮気味に喜んだ。

「ちなみに内戦勃発中」

「え?」

『神聖アルビオン共和国』……『レコン・キスタ』を名乗る人達が王族を攻めている」

「まじで?」

「本当に」

才人の引きつらせた表情を見てウイルはにっこりと笑いかけ答えた。

そして……最後に水色の国を杖で指し示した。

「そして……俺達が所属している国『トリステイン王国』だ」

「……………」

少し得意げに答えたウイルを見て、才人はガリア、ロマニア、ゲルマニア、アルビオンを見てトリステインを見る。

そして……

「小さくね?」

思った事を素直に口にする。

口にした後に、しまったとばかりにルイズとウイルの様子を伺う。



才人やカリオストロと違い、この二人は実際にこの国に所属しているのだ。

自分の国を悪く言われて怒るのではと思った。

だが、実際には二人は怒りもしない。

ルイズは悲しげな表情をして、ウイルはただただ真剣な表情で受け止めた。

「怒らないのか?」

「本当の事だし……な。少しばかりトリステインは詳しく話すよ。二人共ここに住むんだし」

一息付き、ウイルは何やら小さなタルを取り出し机に置いた。

その机に置かれた小タルを3人は興味津々に見る。

小タルは何やら見た事もないような材料で作られており、木とは違いますがすべすべしている。

周りには小さい穴が均等に空いており、中は空洞だ。

「これで完成つと」

才人は「何処かで見た事あるような形ナンダケド」と思いつつ嫌な予感がして冷や汗をかく。

ウイルはそんな才人を残し錬金を唱えると一体の人形を作りだし、タルの真ん中に置いた。

タルに置かれた人形は可愛らしい少女の物であった。

髪が紫色で綺麗な白いドレスを着ている。

「ぶほっ」

その人形を置いた瞬間ルイズは理解し才人と一緒に噴出した。

才人は遊び方を知っているが為に、ルイズは遊んだ事もあり、人形のデザインになった人も知っているが為に噴出す。そんな二人を置いてウイルは楽しげに剣を一本刺した、そして言葉を続ける。

「最初に言いたいの……トリステインは現状国として成立してないということだな、うん」

「国として?」

「今現在王国なのに『国王』がない、空席だ」

「はあ!?!」

ウイルの言葉に才人は立ち上がり、絶叫する。

国なのに国王が居ない、意味が分からなかった。

そんな才人を尻目にウイルは剣を一つタルに刺した。

「先王が亡くなつてな……しかも息子、王子も生まれてなく。居るのは年若いお姫様と王妃様。本来ならマリアンヌ王妃が席に着くはずなのだけど……」

「おいおい、まさか!」

「そのままか、喪に服して拒否し続けている」

これにはカリオストロも驚き、呆れ何も言葉が出なかった。

「まあ……これでも問題点としては序の口なんだけど」

「うわ……」

「次は貴族の数の問題だな。トリステインの人口は150万人、それに対して貴族は1割程度、多くて15万、少なくて10万程度か。勿論そんな数に与える領地もないので殆どの貴族が宙ぶらりん、金食い虫。伝統を大事にして抱え込み、国力を削っていくんだ。これだけ小さくなるのも無理はない」

ここまで言い切り、一息ついた。

喉が渇き何か飲み物をと思い立ち、コップを取り出し水受けから4人分入れると魔法を使い3人に運ぶ。運び終わり、自分も一口だけ飲み大きなため息を付いた。

そしてこれまた剣をタルに突き刺す。

「さてと……続きだけど」

「もういい! じゅーぶん分かったから!」

先を話そうとすると才人に止められた。

才人の顔は現実を知り真っ青で気分も悪そうだ。

本来ならここでルイズの家の話題を出し、才人にも現状を知ってもらおうとしたのだが。

この様子では説明しても頭に入らないだろうと思いやめた。

最後に剣を刺すと中にあった『アンリエッタ人形』が勢いよく飛び机の上に転がった。

『トリステイン危機一髪』

そんな言葉がルイズと才人の脳裏を過ぎった。

五話：君がツ　泣くまで　殴るのをやめないうッ！

話を終えると、軽く扉を三回叩く音が聞こえた。

その音を聞き、すぐさま杖を振りアンリエッタの人形を砂へと変える。

こんな所を見られれば侮辱罪、反逆罪として捕まるかもしれない。才人に判りやすく伝える為にやった事だが、些か危ない橋を渡っていたと反省をする。

「どなたでしょうか？」

相手を待たせるのもいけないので声を掛ければ、落ち着いた声で「夕食をお届けにまいりました」と告げられる。そういえば、マルトーさんに頼んだきりで未だに何も食べていない。

入ってくれと声を掛けると二人のメイドが入ってきて丁寧に辞儀をした。

それに軽く手を上げ答えるとそのまま机に持ってきた料理を並べ始める。

(あれ……この子って)

その様子を見ている時にあることに気付く。

自分と同じく珍しい黒い髪の毛のメイド。

カリオストロ同様、既視感を覚えた。どこかで見た事があるなど暫し考える。

(なんだろうか、記憶に引っかかるな)

「シエスタ、それはこつちよ」

「えっ?……ごめんなさい!」

(そうだ、シエスタ。メイドのシエスタだ)

お皿を置く場所を間違えたのか、同僚に注意され慌てるシエスタを見て思い出した。

幾分、原作を読んだのは、前世含めて36年前の話。

覚えていないのも無理はない。むしろよくぞ、思いだした物だと我ながらに感心した。

確か才人に惚れる一人でよくルイズと才人をめぐり喧嘩を……し

ていた筈。

それ以外を思い出そうとするも、中々に思い出せない。

「ちよつと、ウイル」

「んっ……？あー、ごめん。君達ありがとう。下がっていいよ」  
考え込みすぎたのか、気付けばルイズに服を引つ張られ注意された。

思考の海に沈んでいたので時間の感覚は分からないが、彼女達には負担を掛けてしまったと反省をする。貴族二人が居る空間でさぞ居ずらかっただろうに。

「心ここにらずって感じだったね☆」

「ああ……ちよつと考え事」

食事を取る為に席に座るとカリオストロが話しかけてくる。

内容は先ほどの考えの話しで少し言葉を濁せば、ルイズが「いつものね」と答えた。

それに対して何も言わず、ルイズが得意げに二人に説明している姿をサンドイッチを食べながら見守る。昔から考え込む癖を持ってしまっている。

凡人が故に、誰秀才よりも誰天才よりも考えなければならなかった。

そうしなければ自分なんて簡単に埋もれてしまう。

そんな思いを抱き、結果を残す為に幼い頃から考え続けていた。

「なるほどな。お前の頭の良さはそこからか」

「……………そうなるのかな」

「いいぜ。その努力する姿勢。そういうのは好みだ」

ルイズの説明を聞き終え、カリオストロが傍でそう呟いた。

ああ……自分はどうかやら相当カリオストロに心掴まれた様だ。

カリオストロの言葉に胸がふわふわとする。

誰に言われてもそんな感情を抱かなかつたのに、カリオストロ本物の天才にそう言われると嬉しくなった。

会って数時間と言う短い時間の中で――

「…………カリオストロ」

「なんだ？」

「俺の使い魔になってくれてありがとう」  
本当に本当に彼女が彼が気に入ったようだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふう……。いい広さだ」

「そうかしら？」

夕食も終え、お風呂へと入る事にした。

お湯の関係などもあり、1人ではなくルイズと入る羽目になったのは些か不満だが。

二人共に体が小柄な為、問題なく湯船に二人が入れる。

「カリオストロって本当に綺麗ね」

「当たり前だろう？オレ様が一番カワイイツに決まっている！」

風呂場で椅子に座り体を洗っていると髪の毛を触られる。

髪の毛はルイズの手を抜けさらさらと綺麗に流れた。

その様子を見てルイズは感嘆の言葉をあげた。

褒められるのは悪くない。だが、何度も触るのはヤメテくれとも思  
い、

「くすぐつたいだろ」

「あっ……ごめんなさい」

軽く唇を突き出し、注意すればすぐにやめてくれた。

これで体を洗うのに専念出来るとカリオストロは喜び。

注意をされたルイズは大人しく湯船へと戻る。

カリオストロは、スポンジを使い指1本1本丁寧に洗っていく。

可愛さを保つのに必要な事なので何時間と掛けようが苦ではない。

目の前の鏡に映る自分に「ああ……本当にかわいいなオレ様」と頬

に手当てうつとりする。

「カリオストロってナルシストよね」

「ああん？当たり前だろ。オレ様にはそれだけの価値がある」

ルイズの言葉に何を言ってるんだとばかりに呆れた。

天才的頭脳と才能、それに伴った容姿、全てが重なり合い価値を見出している。

胸を張って答えられ、ルイズは何も言えずに湯船に口まで浸かりぶくぶくと泡を立てた。

「……………」

「ナルシストってのは言い換えれば自己愛、自分の事をしっかりと理解している事だ。自分を理解し、自分に何が足りないかを見極め足りない部分を補う。自分が好きなきに努力し！自分が最高だと思ってるが為にそれを周りに魅せる！オレ様達は向上心を常に抱く」

手を大きく広げ、鈴の音のような凜とした声が風呂場に木霊する。

いつの間にか立ち上がり、腕を組みルイズを見下ろすカリオストロは、確かにこの世の物とは思えないほどの美しさで、それを隠そうともしない姿はカリスマさえ感じる。

カリオストロは自分の考えに一片も疑いなく、真つ直ぐ前へと向かっていく人のそれであった。

「へくちっ」

「取り合えず……………入れば？風邪引くわよ」

自分の面前で呆気にとられたルイズに満足し湯船へと浸かる。

その際に湯船のお湯がざざーっと流れ、心地よい音を辺りに響かせた。

先ほどの演説のせい、二人は互いに喋る事無く無言で湯船に浸かる。

そんな若干重い空気を打ち壊したのは外からであった。

「ルイズ！お湯加減はどうだ？」

「少し温いわね。ウイル」

(むっ……………)

外から聞こえてきたのは、ウイルの声だ。

お湯を沸かし時間が経っているので温くなってないか聞きに来たのだろう。

ウイルは、ルイズの声に「少し待ってろと」答え、何やらごそごそと動き始めた。

たぶん、外にある釜戸に薪をくべるのだろう。

だが、そんな事カリオストロにはどうでもよかった。

ウイルがルイズに問いかけた瞬間、胸がモヤつとして嫌な気分になる。

何故、自分も居るのに先に声を掛けないのかと……。

(ちっ。なんだこれは――)

ルイズとウイルの続く会話を聞いているとムカムカとしてくる。

心が落ち着きなく動き、早鐘のように胸を急かす。

無理矢理嫌いな物を食べさせられてるようで全てを吹き飛ばしたくなるほどに……。

「それじゃ戻る」

「うん、ありがとう。……カリオストロ？」

「……なんでもない」

気付けば用事も済んだのかウイルは、離れ部屋へと戻っていた。

自分も話しに加われれば良かったと思うも時既に遅く、声は届かない。

そのことにカリオストロは、不機嫌になり。

先ほどのルイズと同じように口を湯船に付けぶくぶくと泡を立てた。

そんな不機嫌そうなカリオストロにルイズは不思議そうに眺めた。

「ところで……さつき何を言われてたの？」

「……さつきっ。」

「食時の時にウイルに笑顔で何か言われてたじゃない」

ルイズの疑問の声を聞き、カリオストロは顔を真っ赤にさせた。

『俺の使い魔になってくれてありがとう』

あの言葉が脳裏に蘇り、心がむず痒くなる。



心臓が熱を持ち締め付けられるような感覚がもどかしく、涙が出るほどに切ない。

それでいて、心臓が心が何かを急かすかのように——早鐘を打つかのようにドクンドクンと脈打った。自分はこの感情を知らない、今まで生きてきていて初めて味わう気持ちだ。

—喜びとは違う

似ているが違った、これはそれ以上のものだ

—怒りとは違う

体がカツカと熱くなるが心地よい熱さだ

—哀しみとは違う

切なくなり涙が溢れるもそれがまた愛おしい

—楽しいとは違う

これを楽しいだけで終わらずのは勿体無い

ああ……この感情は一体なんなのだろうか。

得体の知れない感情なのに不安はなく、むしろもつともつと感じていたいと思う。

カリオストロは、魅入られた、魅入ってしまった。

この狂いそうになるほどの感情に——。

(ああ……なるほど。そういうことか)

意外にも感情の正体に行き着くのは早かった。熱に浮かされてながらも、それでもカリオストロの冷静な部分は簡単に答えを導き出したのだ。

脳裏に甦るのは、広場で仲良さげに触れ合う使い魔達、会ったばかりだと言うのに懐く彼等を思い出す。才人もそうだ。他の世界から拉致されたというのに直ぐに馴染み、ルイズに心を許している。

たぶん……そういう事なのだろう。

これはルーンの効果で抱く、ご主人様への——。

——感情だ。

それに対してカリオストロは怒りを感じなかった。むしろ納得し

た。

他の人でなら——だと気付いた時点で怒り、これからの自分を思い嘆く。

だが、カリオストロは違った、逆に感謝をした。

(きつとこれは与えられなかったら、一生理解出来ない類だ)

ナルシストが故に、自分を良く知っているが為に、自分が得られないと思っていた感情が手に入った為に喜ぶ。この感情の行き着く先がどうなるかは判らない。憎悪か愛情か、はたまた妄想か。

ルーンの効果が切れた時に感じる感情はなんだろうか、楽しみでしようがない。

(ブリミルにウイル……感謝するぜ)

いいだろう、この気持ちに流されてやる。

「カリオストロ？」

「……………」

ルイズの問いに答えず、湯船から上がり、振り向き様に

オレ様を惚れさせた事を後悔させてやる  
『秘 密 だ』

ニヤリと笑い、そう言い切った。

## 六話：ウロボロス食事の時間だよ☆

『アルヴィーズの食堂』

トリステイン魔法学院に通う生徒及び先生方が朝食、昼食、夕食を取る食堂だ。

1階の上にロフトがあり、広く全てのテーブルは豪華に彩られている。た。

トリステイン魔法学院では、魔法以外にも様々な事を教えている。貴族社会に出ても恥ずかしくないように一人前にさせる為であった。

普段なら生徒や先生が歓談して、和やかな雰囲気食堂であったが、今日ばかりは違った。

喧騒と言ってもいいほどの賑わいで品位も何もあつたものではない。

使い魔を召喚し終えた翌日な為に、上級生も先生もしようがないと黙認しているようだ。

しかし、どうも違うと言うことに、数人の生徒が気付きその喧騒の先へと目を向けた。

そこには1組の男女がおり、どうやらその二人がこの喧騒の理由らしい。

「なあ、あれって……」

「昨日……」

「なんでここに？」

「異国のメイジ……とか聞いたぜ」

二人を遠巻きに見て生徒達が会話に興じる。

男性は顔を赤くし、女性はほうとため息を付いた。

それほどまでに注目を浴びているカリオストロが綺麗であったのだ。

人形のような綺麗さと可愛らしさを兼ね備えた容姿を持つ少女に、見惚れ誰も近寄ることができない。

そのせいもあり、両脇の席には誰も座らず、ポツカリと穴が空いて

しまっていた。

「あつ……ギーシュが行ったぜ」

「流石、ギーシュ……」

周りが様子を伺っている中痺れを切らしたのか、何も考えてないのか、1人の生徒が近寄って行った。

「おはよう！ウイル、今日もボク達を祝福するような気持ちのいい朝だね！」

ギーシュと呼ばれた少年は、二人の目の前に行くとき自慢の金髪をふわりと手でかきあげ優雅にお辞儀をしている。行動とセリフがキザだったらしくはあったが、少年の容姿と相まって自然に見えた。

「おはよう、ギーシュ」

「知り合いか？」

それに対して、ウイルは手を軽く挙げ答え、カリオストロはウイルの膝の上から見上げ、小さな声で聞いた。ウイルはそれに対して無言で軽く頷いた。

カリオストロはそれで納得したのか、頷き膝から降りるとスカート裾を掴み少し持ち上げ優雅にお辞儀をした。その際に幾人かの男性生徒は少しばかり背を低くして屈み込む。

「はじめまして……ご主人様ウイルの使い魔になりましたあ。カリオストロって言います☆」

「……ああ、昨日……の、」

すっかりとした挨拶を受け言葉を返そうとすると、ギーシュは次第に口数を減らし、目を見開かせ動きを止めた。そんなギーシュにカリオストロはきよんとし、ウイルは深い深いため息を付いた。暫く待っているとギーシュが機敏に動き、地面に膝を着きカリオストロに視線を合わせ手を取った。

「お嬢さん、ボクと一緒に遠乗りでも……」

「ギーシュ……モンモランシー」

「う」

カリオストロを口説き始めたギーシュにウイルは何やら人の名前のような言葉を口にした。

その声は低く、近くに居た二人にしか聴こえないような音量であった。

その言葉にどのような意味が込められていたかは分からないが、ギーシュには効果覲面であったようで、ギーシュが呻いた。体をわなわなと震わせ、唇を噛み、ウイルとカリオストロへと視線を彷徨わせる。暫くすると、何か覚悟を決めたかのような目に変わり手を離し、立ち上がり

「残念ながら僕には、君と言う花を楽しませられないようだ」

「え？」

「それじゃ……僕は行くよ。また教室で会おう！ウイル！カリオストロ！」

「おう」

先ほどの口説きが嘘であったかのようにギーシュは颯爽と去っていった。

それを見てウイルは軽く笑みを浮かべる。

逆にカリオストロは何処か不満そうにしウイルをギロつと睨むとそのまま膝上へと戻った。

「おい、さっきのはなんだ。なんで引き下がった。オレ様みたいな美少女を口説くチャンスだぞ」

先ほど同様に膝の上に乗りながら、低めの声で話す。

但し、今度は体をウイルと正面で向き合うようにし、ウイルの首へと両手を回して座っている為に抱きついてるようにしか見えない。

ただ、そのお蔭もあり、カリオストロのかなり不機嫌そうな怖い顔が他の人からは見えなくなった。

「……………そうだな。愛かな？」

「あ、あん？」

ウイルの言葉を聞き、カリオストロから聴こえてはいけない声が響く。

表情と相まって恐ろしい事になっているが、ウイルは苦笑するだけで終わらせる。

「なんだ、つまりはオレ様よりそっちを優先した……と？」

「そうだね」

「世界一の美少女だぜ？」

「どれだけ容姿が綺麗で可愛くても……譲れない物がある人も居るんだよ」

ウイルは臆する事無く、そんな事を正面からカリオストロに告げた。

それに対して、カリオストロは口を閉ざし、表情も困惑へと変える。

「わかんねー……わかんないな」

「分かんないか……カリオストロは恋愛とかしたことないの？」

「ない……いや、ありえねーな」

首を振り、カリオストロは否定する。

「ないのか」

「だから、今のこの感情ルーションを利用させてもらって調べるんだけどな」

「……気付いてたんだ」

「オレ様を誰だと思つてやがる」

困惑から一変、胸を張つてカリオストロは答えた。

そんなカリオストロに周りは悩ましいため息を付くが、ウイルは苦笑するばかりである。

「怒らないの？」

「怒ると思うか？」

「ないな」

「だろ？……まあ解けた時は、覚えてろ」

「……覚悟しておくよ」

カリオストロの地底から響くような声にウイルは冷や汗をかきつつも頷いた。

「ななななな、なにしてるのよっ!!」

「……先ほどぶり、ルイズ」

「おはよう☆」

声を掛けられそちらを向けば、顔を赤くしたルイズが立っている。

口をぱくぱくと金魚のように開き、動揺しっぱなしだ。

「どうかしたの？ルイズ☆」

「そもそも、それ！それ！なんでウイルと抱き合ってるのよ！」  
「あつ」

ルイズの言葉に二人は、今知ったとばかりに声を揃えた。

二人はお互いにもう一度視線を合わせ頷くと、カリオストロが体を元の位置に戻し

「先ほどぶり、ルイズ」

「おはよう☆」

「普通になかった事にしないでもらえるかしら？……会ってからたった1日なのにずいぶんと仲良いのね」

先ほどの件をなかった事にしようと試みた。

そんな二人に呆れながらもルイズは頬を膨らませる。

「気が合うんだよ。研究者同士」

「こそ、それにカ・リ・オ・ス・ト・ロのおくご主人様だもん☆」

「ごご、ご主人、主人様」

媚びるように甘い甘い声をだし、カリオストロが体をウイルへと摺り寄せる。

その際に周りから怨念の籠った様な声があちらこちらからウイルへと飛んできた。

ウイルは知らぬ顔でお茶を飲み続けるもその手は震え、ガチャガチャと音を鳴らしていた。

「カリオストロ、降りなさい！……ほらこつち！ここに座ればいいわ！」

「ル、ルイズ！そこ俺の席なんだけど！」

「あ、ああん？」

「なんでもないです！お使い下さい！」

ルイズは慌てながら隣の席を指差し移るように進言する。

それに対して丸っこい体をした少年が声を挙げ抗議するもルイズに睨まれた。

その際、何故か少年は体を震わせ歓喜の表情をし引き下がった。

はあはあと荒い息を付き、震える少年に若干ルイズは体を引いた。

そんな二人を気にせず眺めていたウイルは眉を少し顰め声をかけ

る。

「いや、ルイズそれは無理だ」

「どうしてよ！なら椅子を持ってくれば……」

「もう朝食の時間だ」

「あ……」

ウイルの視線の先を見て気付く、他の生徒も席に座り始め前を向けば先生方も揃っている。

そのことにルイズはむっとし、怒りの表情を浮かべるも黙って席に着くと朝食が始まった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あー……やっぱり、カリオストロはこっちに居たのか」

「才人に伝えておかなかったのか？」

朝食を終え、教室へと向かう途中にサイトと合流する。

その時になって伝えてなかつたなと思うも、何故、オレ様が動くの  
に何か言わなければならぬんだと思ひ直す。

「忘れてた、ごめんね☆」

「っ……だ、大丈夫！大丈夫！うん！」

片目を瞑りウインクし軽く頭を叩きながら謝るとサイトが顔を赤くし喜ぶ。

何と言うか、本当に単純な奴、コイツの事だからオレ様を探すか  
待っていたはずだ。

(それなのにこんな事で許すとは……オレ様だったら絶対に許さない  
けどな)



「それじゃ行くか」

「ああ、それはいいんだけど……。なんでルイズは膨れてるんだ？」  
そんな事を思っていると、一言も喋らないルイズが気になったのだらう。

サイトが疑問の声を挙げる。

ルイズは先ほどの件もあり、不機嫌になり頬を膨らませていた。  
使い魔も使い魔なら主人も主人かと分かりやす過ぎて呆れた。

膝の上が気にいらなかったかと思うも渡す気はない。

ルーンから与えられる感情のせいだったとしても居心地が良かった。

（今度から、ああやって食べるか）

「!？」

「どうかしたのか、ウイル？」

「いや……。なんか悪寒が」

居心地悪そうだったウイルには悪いが、これも実験だ。

暫くの間、飽きるまでの間はああやって食事を取らせてもらおう。

「それにしても…随分授業するの遅いな？」

「食事のマナーを学ぶのも授業だからな。午前中はよっぼどのがなければーっただけだ」

「うわ……。羨ましい」

「本当にこの連中は、学ぶ気ないんだな」  
なんとも呆れる。

やっぱり、ウイルとルイズは特別らしい。

「最初の授業は……。たぶん、復習かな」

「復習？」

「ああ、使い魔の顔見せの意味も込めてるし、新しい事はしないだらう」

その話を聞き、納得し安堵する。

確かに授業やこっちの魔法に興味はある。

だが、毎回のように授業に参加しなければいけないのは勘弁してもらいたい。

自分が強制するのは好きだが、強制されるのは嫌いだ。

「着いたな」

「何処に座る……か」

教室へと入れれば生徒の視線が一斉に此方を向いた。好奇心の満ちた目で見られる。

ウイルとルイズは気にせず、サイトは若干戸惑いながらも付いていく。

少しばかり歩けば丁度良く空いてる席があつたので4人して席に滑り込んだ。

「おお……すげーなやつぱり、あれなんだろう……」

席に座るとウイルはルイズの機嫌を直す為か、声を掛ける。

ルイズの隣に座つたサイトは物珍しそうに辺りを見渡す。

辺りを見渡せば、様々な使い魔と思われる生物を横目に生徒達が話をしている。

（オレ様が可愛いのはしょうがねーけど。あまり見られすぎるのも面倒だな）

幾度となく浴びせられる視線に鬱陶しくなってくる。

別に見られるのが好きな訳ではなく、可愛くなるのが好きなのだ。そんな事を思っているとドアが開き、中年の女性が入ってくる。

ふくよかな体型で優しい笑みを浮かべた雰囲気の良い人であつた。

生徒の視線がカリオスト口達から先生へと移る。先生は一番前の卓の前に立つてにつこりと笑つた。

「皆さん。おはようございます。春の使い魔の儀式は大成功みたいです。すねー」

（おいおい）

「こうやって春の新学期に、様々な使い魔を見るのがこのシユヴルズとても楽しみなのですよ」

辺りを見渡しながらそのような事を言った。

「おやおや。変わった使い魔を召喚した人もいますね」

（ありえねー。なんだこの先生）

黒板の前に立つシユヴルズにカリオスト口は呆れた。

こんな大勢の前で言う事では無いだろうと。

(それにサイトは勿論、オレ様の事も珍獣扱いしやがったな)  
すつと先ほどまで作っていた表情を崩し、目を細める。

この時点でシュヴルーズへの好感度はマイナスとなった。

(人間が変わってるだと？馬鹿かむしろ当たり前だろうが)

心の中で舌打ちし罵倒を吐く、和ます冗談だとしても笑えない。

何をどう思うも生徒をだしに使ったのだ、この時点で先生として  
駄目過ぎた。

次に起こるであろう出来事に予測がつきカリオストロは、ちつ、と  
イラつきを隠さず舌打をした。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺の平民連れてくるな  
よ！」

1人の生徒が笑いながらルイズへと罵倒した。

その生徒を咎める者は居らず皆がくすくすと笑った。

ルイズは立ち上がり、桃色の髪を揺らしながら可愛らしい声で怒鳴  
り声を挙げた。

「違うわ！……きちんと——「しかも錬金のウィルも巻き込むな。失  
敗を移すなよ」——っ!!」

言葉が続けようとした瞬間に、横から口をだされ言葉が詰まった。

先ほどまで赤かった顔は、カリオストロから見ても真っ青となり、  
がたがたと震えている。

それをウィルが無言でルイズの手を取ると優しく席に座らせる。

そしてルイズが俯く中、手を離さず無言で前を向いていた。

ウィルの横顔を見れば、無言、無表情で前を向いていたが目だけが  
感情を表していた。

熱い熱い火を灯し、原因を作ったシュヴルーズを見ている。

(利口だな。ここでルイズが何を言おうが言い返せない……事実だか  
ら)

それを見てカリオストロは静かにウィルを評価をした。

ここで何を言おうが、ウィルがルイズと同じく人間を呼び出した事  
実がある。

ルイズがどれだけ訴えても、何を必死になっているのかと馬鹿にされるだけだ。

言い合えば余計にルイズの傷口を広げるだけ、ここはただただ耐えるしかない。

ウイルも同様だ。公爵家の娘であるルイズが馬鹿にされているのだ。

ここで男爵家であるウイルが援護しても鼻で笑われるだけだろう。

「このっ……」

「座れ、才人」

笑い続ける生徒に怒りが湧いたのか、サイトが飛び出そうと立ち上がるもストーンと強制的に座らせられた。見れば、ウイルが手を繋いでない方の手で杖を振っている。

「ここでお前が飛び出したとしてどうなる？ここで本当に行動を起さないといけないのは先生だ」

「っ!!!」

ウイルの言葉に才人は唇を噛みしめ拳を震わす。

サイトが飛び出したところで何も変わらない。

平民がと笑われ、下手したら魔法で痛めつけられる。

平民を助ける貴族なんてまず居ない。

周りには、何も言わない事にいい気になったのか、笑い続ける。

シュヴルーズを見れば、こうなると思っていなかったのだろう。ただただ慌てている。

(……………)

カリオストロは黙り、声を聞き続けた。

普段ならカリオストロは行動を起そうとは思わない。

自分以外を平等に見下し、自分に被害や敵意が向かない限り何もしない。

自分には何も関係ないのだから——だが、

「友達を選べよーウィツ……えっ？」

ダンツと大きな音を立て笑っていた生徒達の前に大きな剣、槍、斧と言った様々な刃物が飛び出す。それは生徒達の顔ギリギリを通つ

ており、あと数サント近ければ顔が斬られていただろう。

何の気配も感じさせず行なわれた現象に全員が訳が判らず混乱しうろたえた。

少しも魔法の気配がなかったのだ。

恐怖し泣き出す者、誰がやったと怒りに燃える者、動揺しうろたえる者と様々だ。

そんな中で1人の少女が悠然と立ち上がり片手を腰に当て立ち上がる。

もう片手には輝く本があり、風も吹いてないのにパラパラとページが捲れる。

「おいっ！お前……」

少女の異様さに気付き声を荒げ罵倒しようとする、少女の手が高々に上がりパチンつと指を鳴らした。

その瞬間、少年の前に新たな剣が突き抜けてくる。

「あ、ああ……」

腰が抜け、椅子から転げ落ちるように地面に倒れた。

それを少女——カリオストロはそんな生徒を冷めた目で見て直ぐに興味をなくし外す。

（別にオレ様に関係ねーし。好きにやってろ。だが——）

ルイズが賢い奴だと知っている。

サイトは馬鹿だが、好い馬鹿だ。

ウイルは自分の——

「おいおいおい、オレ様のご主人様パートナーを罵倒しといて——」

残念ながら今此処に居るのは偽りとは言え、恋に燃え、愛情に燃え、怒りに燃えた天才錬金術士だ。

『ウロボロス、食事の時間だよ☆ただで済むと思うなよ？』

手で髪の毛をかき上げニヤリと笑った。

## 七話：傷の代価

「こい、ウロボロス」

カリオストロが、指を鳴らすと空間が歪む。

そして放電するような音が鳴り響き、そこから恐ろしい何かが這い出てくる。

誰も声を出さず、出せず、動かず、動けない。

裸で雪におおわれた冬の山に投げ出されたかのように体が震え凍えてくる。

両手で自分を抱きしめても歯がガチガチと鳴ってしまい、どうすることもできない。

使い魔達は、即座に逃げるか気を失い精神を守った。

だが、主人である生徒達は気を失う事が出来ず、出来るのは原因を作り出した少女を見ることだけ。

それはまるで、蛇に睨まれた蛙の様に捕食されるのをただただ待ち続けていくように。

「っ……あああああ」

「……………」

そしてそれは無差別に行なわれた。

隣に居たウィルは勿論、ルイズや才人さえ巻き込んだ。

才人は早々に机に突っ伏し意識を失っている。

現代日本、ハルケギニアより危険が少ないせいもあり、こう言った事に耐性がなかったのだ。

少しばかり耐性があり、耐えることが出来てしまった他の生徒に比べ、ある意味幸せである。

「っ——」

「……………」

ルイズは先ほど以上に震えてウィルにしがみつく。

それをウィルが片手で抱きしめ返すと、静かに涙を流しルイズも意識を失った。

カリオストロはそれを冷たい視線で見下ろすと、もう一度手を高く

上げ指を鳴らした。

その瞬間、カリオストロの後ろで回っていたウロボロスは、大きく轟かすように咆哮した。

生徒達の意識があつたのはそこまで。

ウロボロスが吼えた瞬間意識を根こそぎ奪われた。

「ふう……やっちゃった」

そして辺りを見渡し、誰も起きてない事を確認するとカリオストロは頭を抱えた。

正直ここまでやるつもりはなかったのだ。

所詮は子供同士のじゃれ合い、何千年と生きているカリオストロにはどうでもいい事であつた。

それなのに――。

（――危険か？……勿体ねーが早々に消した方がいいか）

ウィルの事を馬鹿にされた瞬間、頭に血が上り大人気なく行動を起こしてしまった。

こんなにも怒つたのは、星の民の話聞いた時以来である。

首のルーンを触りながらそんな事を思った。

研究の為、残しておくつもりであつたが、毎回こんな風になるのはカリオストロも勘弁だ。

「はあ……しようがな……ああん？」

ルーンを消そうと力を入れた瞬間、誰かに服を引っ張られた。

「カ……リ……オス……トロ」

怪訝そうに下を見れば、ウィルが涙を流し青い顔をしながらも此方を見ていた。

これにはカリオストロも驚くほかない、本気でないとはいえ、それなりの力を出したのだ。

耐えるとは思いもしなかった。

「……なるほどな」

「っ……っ」

「無茶すんな。お前も」

どうやって耐え抜いたか考えるまでもなくわかった。

ウイルの足に短剣が刺さっていた。

なんとも無茶をしたものだ、こいつは……意識を飛ばさないように足を自分で刺しやがった。

「はっ！何頑張ってたんだよ。素直にそんな事せず、気を失ってれば良かっただろ」

「……かが、意識を保って……ないと」

「……ちっ」

目を細め、カリオストロの表情が暗く冷たくなった。

1日だけの付き合いだ、信用するほうが難しい。

何を仕出かすか判らない人間を野放しにはしないだろう。

それでも……ルーンの効果か、

(そんなにもオレ様が信用できねーか)

心に来るものがあつた。

故に本に力が入り、ウロボロスが静かに回りだす。

「っ……はあ、意識を保ってないっ……カリオストロが悪者になるだろう」

「……なんだって？」

聞き間違いかと思ひ、目をパチクリと開き、もう一度ウイルを見つめる。

ウイルは息も絶え絶えながらも、カリオストロを見つめ返した。

その目には脅え、恐怖、が混じっているものの、ぴくりとも目を離さない。

「カリオ……ストロも遣り過ぎたが、元々の原因はあいつらだっ」  
「……………」



「俺が意識を保ってないと……説明しないと、カリオストロが一方的に悪者になるだろ……」

「っ——!!」

ああ……参った、本当に参った。

サイトと違い自分の方だけ洗脳の効果が高いなと思っていたが、理由が良く分かった。

「ねえ、庇ってくれるのは嬉しいけど☆このままだと大勢の貴族を敵に回すよ?」

「俺はな……昔から、大勢の友達より1人の親友を選んだよ」

「……まだ会って1日も経ってないぜ?」

「ルイズを笑うあいつ等と、どっちを選ぶか言われたら……カリオストロだろ」

「……」

見誤った、まじで見誤った。

こいつは……あれだ、大馬鹿者の人誑しだ。

しかも才能無しの癖に決して諦めない類の悪質な奴。

足掻いて足掻いて最後には、なんとかしちまう、理不尽の根元。

「あーあー……だいぶ厄介な奴に当たっちゃったな」

「……」

「でだ、何時まで泣いてんだ」

ため息をつき、ウイルスを見れば今だに涙を流し青い顔で倒れ込んでいる。

そうだった、こいつ短剣を足に刺してたんだ。

「泣くぐらいならすんなよ」

「思ったより痛いし、気持ち悪い」

「ああ、もうまったく。しまんねー奴だな」

しくしくと泣き続けるウイルスに呆れ、頭を掻き目を逸らす。

原因が自分にあるだけに気まず過ぎる。

「取り敢えず、治すか」

「……っ、てっえ」

この程度の傷なら流れた血を代価に使えば楽に治せるだろう。

短剣を引き抜き、指を鳴らす。

すると足から流れていた血と地面に滴っていた血が綺麗に消えていき、傷が塞がる。

血と傷ついた細胞を代価として、傷の部分だけを新しく練成して当て嵌めたのだ。

「うっし、これでよしと」

「……………」

「おい、何とか言えよ」

「……………無理っばい」

ウロボロスの威圧を痛みで耐え切っていたのだ。

むしろ良くぞここまで意識を保ったものだと関心するべきだろう。

「あーもう、どうせ全員寝てるんだ。人が来たら起してやるから寝とけ」

「……………」

「たくっ……………ああ、本当にいい天気だ」

ウイルが意識を失うように目を瞑るのを見届けると

首に当てていた手を退け、ただ1人窓の外の空を眺めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふあゝ……………なんで寝てるんだ？」

「知らない。使い魔も寝てるし」

「先生は……………寝てるな」

次々に生徒達が起きだし、不思議そうに辺りを見渡す。

辺りを見渡すも特に何かが変わってる訳でもなく、普通の教室であつた。

「うみゆ……ういる？」

「おはよう、ルイズ」

「……顔真っ青だけど大丈夫？」

「あー……午後は休むよ」

机に肘を乗せ顎を支えながら待っていると隣で寝ていた、ルイズが起きた。

目を擦り、ルイズもまた不思議そうに首を傾げ辺りを見渡している。

「どうかしたか？」

「うう……ん、何か怖いような、嫌な夢を見たような」

「………気のせいだろ、こんなにも天気がいいんだから」

ルイズは納得してないのか、そのまま腕を組み考え始める。

そんなルイズを横目で見た後に、ふと隣に座っていた筈のカリオストロへと視線を送る。

「………」

カリオストロは窓の縁に座り、遠くを眺めていた。

窓は開いており、風がカリオストロの髪をふわりと浮かし、後ろへと流した。

暫く見ていると此方に気付いたのか視線が合わさる。

「」

カリオストロは、静かに何かを言っつて首のルーンを指でなぞった。

その瞬間、ルーンが淡く光り輝く。

「何を——っ」

何を言っつたかは聴こえなかったけど——カリオストロのあの表情は決して忘れないだろうと思った。

## 八話：た〜んとお食べ☆

「本当に大丈夫？」

「問題ないよ、ちよつと気分が悪いだけだから」

「これで何度目だろうか。」

顔を青くしているからか、ルイズから何度目か判らない質問をされた。

確かに、少し顔が青い為、心配になるだろうが、そこまで酷い物ではないと笑う。

軽く笑みを浮かべ、じつと見つめてくるルイズに小さく頷く。

数秒ほどじつと見つめられた後、ルイズも納得したのか小さく頷いてくれた。

「それじゃまたな！」

「おう、放課後辺りにでも」

「も〜……何かあったら報告ね！」

「はいはい」

流星にお腹も空き、手を振り合いその場を後にした。

才人とルイズはそのまま食堂へ、自分達は医務室へと歩く。

「……………」

「……………」

「……………なあ」

「なんだ？」

二人で歩いているとカリオストロに声を掛けられる。

その声は、少しばかりの躊躇いが含まれているように感じた。

それをウィルは隣に立ち静かに聞き返す。

「……………やっぱり、なんでもない」

「そっか」

「ああ……………」

頭を軽く搔き、恥ずかしそうに目を逸らした。

会話は途切れるも二人の間には、特に嫌な雰囲気はなかった。

お互いに歩調を合わせるように歩く。

「ねー、ウイル」

「んっ……」

「だいぶ具合悪そうだけど血とか苦手なの☆」

「あー……」

歩いて居て暇になったのだろうか、カリオストロはまた声を掛ける。

カリオストロの言葉に、暫くウイルは立ち止まって上を向いて考えた。

「……そうだな。苦手だな……怪我したり、怪我をしてる人を見るとな」

「気が弱いんだね☆」

「ああ、これだけは慣れないな」

「……」

カリオストロが急に黙ったので不思議に思い首を傾げた。

声を掛けてもカリオストロは、何かを考えているのか腕を組み黙ったままだ。

「どうかしたか?」

流石に気になり、足を止めて後ろを向きもう一度声を掛ける。

「……いや、お前も色々あるんだろうなとな」

「まあ、あるさ。カリオストロほどではないけど」

カリオストロは顔を上げると真剣な表情でその様な事を言った。

それに対してウイルは何を今更と言わんばかりに表情一つ変えずに返す。

「……」

「いや、どうした?」

「あー……いや、軽く受け取られるとは思わなかった」

「そら、カリオストロの経歴と比べれば……俺なんて軽いだろ」

カリオストロの方が自分の何倍も苦労も努力もしてるし、様々な経験をしていると軽く予測がつく。何せ、2000年近くもの間、生きているのだ。

転生前と合わせて60もいかない自分と比べて差が歴然としてい

る。

「そりゃ、オレ様は凄い事ばかりしてきたからな………つて……おい、お前やつぱりオレ様の事を知ってるだろ！」

そんな事を思い、素直に口に出すとカリオストロに飛びかかられた。

特に速いものでもなく、飛びかかってきたカリオストロを抱き止め、思わず持ち上げてしまった。

持ち上げた後に、どうしようかと悩むも丁度良く開いている窓があつたので、その縁に乗せた。

「やつぱり、知ってたな。お前」

「まあね。そりゃ知ってるさ、錬金術士の開祖様だし」

窓の縁に座り、此方をギロつと睨むカリオストロは、容姿が整っている事もあり迫力がある。

今まで以上に睨むカリオストロに苦笑しつつも答えた。

どうせカリオストロの事だ、自分の正体など既にほぼ分かっている事だろう。

それならば嘘をつく必要がない。

「……ちっ」

「悪かったよ。知っていた事を言わなかったのは」

「別にそれは気にしてねーよ。問題は……」

「………ここには奴等は居ないよ」

「………そうか」

カリオストロが心配しているであろう事を伝えておく。

まあ……カリオストロの場合は、心配などしないだろうが。

「信用するんだな」

「嘘つく必要ないしな。それに……」

「それに？」

「それに……何が来ようと全てオレ様が追い払ってやる」

そう言っつて、彼女は快活に笑った。

暫くの間、見惚れて黙り込む。

風に揺られる彼女はやはり魅力的で……だがふとウィルは思い至

る。

「……なあ、カリオストロ」

「なにかなく☆」

「その角度といい、全て計算してるだろ」

「当たり前だろ？ こういう女の子好きだろお？」

「くっ」

教室の時から気になっていたが、やはりあの時と言い、今と言い計算していたらしい。

相変わらず、どうすれば自分を可愛く出来るかの一点だけに絞られている。

なんとも彼女<sup>彼</sup>らしい。

「んで、どうなんだ？——ぐつときたろ？」

「あー……うん。教室の時はな」

いじわるく笑い此方を見てくるカリオストロから目を逸らす。

こう言った対応はあまり経験しておらず、正直対応に困った。

なんとか話を逸らせないかと考え、聞きたかった事があつた事を思い出す。

「そうだ……ウロボロスって飛ぶ速度速いか？」

「ん〜……馬よりは速いよ☆」

流星に頭の回転が速い、今の会話だけで自分が何を言いたいか理解したらしい。

「それじゃ……『決闘だー！ ギーシュとゼロのルイズの使い魔が!!』……うん？」

今日の予定を話そうとすると、丁度自分達の下が騒がしくなってくる。

カリオストロと共に下を見れば、何やら生徒達が集まり、ざわめきあっていた。

お互いに不思議そうに眉を顰め、耳を澄ます。

『ギーシュと平民が……』『そうそう、なんでも平民が喧嘩を……』

『ギーシュが二股？』

「……………」

「……………」

聴こえてきた声にカリオストロと目を合わせ不思議そうに首を傾げた。

「なあ……………」

「なんだ？」

『譲れない物があるんだ』キリつとか言ってたのは誰だ』

「……………」

今朝の事をカリオストロは言っているのだろう。

これには何と言葉にすればいいか分からない。

正直な話、ギーシュが才人と戦うという事でさえ、意味が分からないのだ。

「譲れない人は居るが……………女癖は……………」

「あく……………なんというか」

「言うな。あいつの家は代々そんな家だ」

何ともいえない表情をしているカリオストロに疲れた表情で声を掛ける。

冗談でもなくギーシュの家は、女癖が酷い。

父親も兄もギーシュも可愛い子が居れば口説くのだ。

そもそも貴族で複数の嫁を貰う事は別に普通の事でもある。

それだけの経済力と権力があればの話だが。

「それでも貴族の中では真面目だ。平民の扱いも俺の次にまじだしな」

「ん……………平民の扱いがましね。あいつの家系って軍属か商売人か？」

「良く分かったな。ギーシュの親父さんは元帥だ」

「そらな……………軍を預かるような家系なら子供の頃から平民の兵隊と触れ合うだろうしな」

簡単だと言わんばかりにカリオストロは、つまらなそうに答えた。

「商人とも思ったが……………損得を考える奴等がこんな事をする訳もないし」

「……………そうになると、軍関係？」



「そうだった。此方の貴族の貧富の差もわからねーしな。今ある情報からだとして位か」

カリオストロは、つまらなそうにふん、と鼻を鳴らして、下の祭り騒ぎを見下ろす。

下を見て耳を澄ませば、大勢の生徒が『平民がどんな目に合うか』を楽しそうに話し合っている。

これには正直頭を抱えた。カリオストロも呆れて黙り込んだ。

「んでだ、助けるのか？」

「いや、助けない。正確には大怪我を負いそうになったり、死にそうになったら助ける」

自分の言葉に納得したのか、カリオストロは小さく頷き、視線を戻した。

「才人にとってもこれは、大事な一戦になるだろうし」

「魔法がどういものか身を持って知らせるのか」

「それもあるけどな」

カリオストロの言葉に頷く。

確かに言って聞かせるより、遥かに分かりやすく、覚えやすい。

「才人はたぶん……大きな痛みを負った事は無いと思う」

「かもな。あいつの話の話を聞いていると争い事とは無関係の場所らしいし」

「だけど……ここで魔法痛みを受けた時……彼はどの様な行動を取るのだろうか」

「……………」

「逃げるか、謝るか、立ち向かうか、泣き喚くか……どんな行動を取るか分からないけど……………」

「……………」

「これから先、この世界で生きていく上で彼の在り方を決める物だと思っんだ」

「なるほどな」

「逃げれば……一生逃げ続ける羽目になるだろう。謝れば、相手の様子を伺う一生を過ごす」

正直な話、こんな事があった事すら忘れている。  
この決闘の結末がどうなるか既に覚えていない。  
だけど……願うならば――。

「彼には……立ち向かって欲しいな」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ルイズ、オレはこっちだから」

「あつ……。午後は使い魔との交流の授業だから、食べ終わったら迎えに来なさい」

「おう！」

厨房へと向かう為にルイズと別れる。

ルイズは先ほどの事を気にしているのか、少し上の空だ。

ウイルの青い顔を思い浮かべると確かに不安になる。

授業も何時の間にか寝ていて覚えてないのだ。

何があったのだろうかと生徒や先生も不思議そうに首を傾げていた。

(まあ……ウイルはカリオストロも居るし問題だろう)

あまりに心配しすぎるので苦笑すら出てくる。

なんと言うか、親友とかより、親と子供だ。

ウイルの後ろを付いて回るルイズが簡単に思い浮かべられる。

その事に笑い声が漏れ辺りを歩いていたメイドに才人は笑われてしまった。

「~~~~~！」

「くすっ、めんなさい」

「いや、大丈夫、大丈夫」

くすりと笑ったメイドは、カチューシャを着けた綺麗な黒髪にそばかすが可愛い子であった。

才人は何処かで見たことあるメイドさんだなと思い、少しばかり悩む。

「……何処かで見たような」

「昨日の夕食の時にお食事をウイル様に届けた者です」

「ああー」

メイドは、そう告げると恭しくスカートを持ち上げお辞儀した。

昨日の夜に才人と同じ黒髪だったのでよく見ていた、胸を見ていたわけではない。

そのことを思い出し、才人は合点がいき手を打った。

「あの時の……えーとっ、確か名前は……シエスタ！」

「はい」

同僚の子が言っていた名前を思い出し、口にするるとシエスタは嬉しそうに微笑む。

その笑みに才人は頬を赤くし、なんだか恥ずかしくなり頭を掻く。

それを見てシエスタは、またくすくすと口に手を当て笑った。

「あっ……」

「お腹空いてるんですね」

何か話題を振った方がいいかと思っていると才人のお腹が鳴る。

慌ててお腹を押さえるも音は鳴り響き、シエスタにも届く。

更に恥ずかしくなり顔を真っ赤にさせているとシエスタの笑い声が聞こえた。

どうも、女の子に笑われてばかりだと思っても泣かせるよりは、ましだと思い直す。

とりあえずは……。

「……厨房つてどっちだっけ？」

「案内しますね」

……ここが何処なのかを聞いた。

「ぷは〜……美味しかった!」

「たくさん食べましたね」

正直な話不安も結構ありはした。

だが、それも美味しい料理の前では些細な事。

満腹になったお腹を擦り、幸せな気持ちになる。

「あれ、シエスタは何処に行くんだ?」

皿を片付け、どうしようかと悩んでいるとシエスタが外へと出ようとしていた。

やる事もなく、暇になり興味もあつた為、横から覗き込む。

シエスタが持っていた銀のトレイには色とりどりのケーキが置いてある。

「デザートを貴族様にお配りするんですよ」

「そっか……ならオレも手伝うよ」

「いえいえ、貴族様の使い魔さんにお仕事を手伝わせるわけには……」

「別にいいって、それとオレは平賀……平賀才人。才人って呼んでくれ」

彼女の持っていた銀のトレイを預かり、陽気に笑った。

「それじゃ……お願いしますね! サイトさん!」

「おう!」

少し恥ずかしそうに、はにかむ彼女(シエスタ)に才人は元気に答えた。

「おー……優雅にお茶飲んでるな」

「丁度いいお時間なので、それに日当たりもいいんですよ?」

シエスタに付いて行くと生徒達がそれぞれの椅子に座り優雅にお茶を飲んでいた。

今日は天気も良い為か、外でお茶を飲んでいるようだ。

才人が銀のトレイを持ち、シエスタがケーキトングでケーキを一つ一つ配っていく。

「こっちにも貰えるかしら」

「はい、ただいまー」

「げっ……」

「げっ……とはなによ。げってー!」

シエスタに釣られ笑顔で配っていくと見知った人——ルイズが座っていた。

「それでなんでアンタが、ケーキ配ってるのよ」

「あく……オレも何か仕事しないと」

ルイズの疑問にそう答えた。

働いているシエスタ達を見て焦りが生まれた。

「1日目だしいいかなと思っていたが、何もせず待っているのは性に合わない。」

「なるほどね。うくん……いいんじゃないかしら」

「いいのか?」

理由を話せばルイズは、納得したかのように頷いてくれた。

「昨日は教えてなかったけど、使い魔の仕事って…秘薬の材料を探したり、主人を守ったりなのよね」

ルイズが指を折り、一つ一つ丁寧に仕事の内容を教えてくれる。

どれもこれも自分には、厳しく、出来そうもない仕事に少しばかり肩を落す。

秘薬の材料などは、知るわけもなく。ルイズを守ろうにも……。

「喧嘩とかした事あるの?」

「殴り合いとかはないです。はい」

カラスにも負けそうと言われ、反論しようとするも出来ない。

良く考えれば、特に体を鍛えている訳でもなく、本気の喧嘩もしたことがない。

人を守るなんてとても出来そうになかった。

「あ、あのー!」

「何かしら?」

「シエスタ?」

ルイズとそんな会話を続けているとシエスタが声を掛けてくる。視線を二人揃ってシエスタに向ければ、シエスタは顔を真っ赤にさせうろたえた。

それでも言葉にしようと必死に口を開いた。

「ががが、学院の……お手伝いとか……は」

少しずつ尻窄みになっていく言葉をルイズは静かに聴いていた。

「ん〜っ、それもありがしら?」

「ほ、本当ですか!」

「え……ええ、実際サイトにやらせる事ないし……」

シエスタの勢いに押されてかルイズは驚きしどろもどろになる。

「……確約は出来ないわよ? 学院長にも相談しないと」

「ええ、ええ! 分かっています! ありがとうございます!」

引き気味に答えるルイズにシエスタは満面の笑みを浮かべケーキ配りに戻っていった。

そんなシエスタにルイズも才人も呆気を取られポカんと見送ってしまった。

「なに……あの子、彼女なの?」

「いや、違う。会ったのもついさっきなんだけど……」

「……そんなに人手足りないのかしら」

「……男手少なそうだもんな」

シエスタの行動や気持ちが変わらず、二人揃ってきよとんと顔を見合わせた。

自分の何処を気に入ったのか分からず、諸手を挙げて素直に喜べない。

前に自分の机に入っていたプレゼントを自分に贈られたと勘違いをした事があり、

好意に対して少しばかり臆病になっているのだ。

「口説いた訳じゃないのよね?」

「ないない」

ルイズの疑うような目に才人は手を振り答えた。

思い出してみても、自分の情けない姿しか見せておらず、口説く所の話ではない。

「それもそうか……流石にギーシユみたいに口説かないわよね」

「ギーシユ?」

聞き慣れない名前が出てきたので聞いてみれば、あいつよ、と目をそちらに向けた。

ルイズの視線を追いそちらを見れば、何人かの男子生徒が集まり談笑をしている。

「真ん中の金髪でバラを持つてるのが『ギーシユ』ね」

「……あいつか」

「こそ、よく女子生徒を口説いてるわね」

「チャライのか」

「チャライ?」

「あーつと……軽いつて意味かな?」

「軽い……どうなのかしら?」

思った事を口にすれば、ルイズはうーんと呻り悩みだす。

「違うのか?」

「あー……色んな子と遊ぶけど、最後はモンモランシーを選ぶのよ」

ルイズの言葉にそれはそれでどうなのだろうかと本気で悩む。

一途と言えば……これは一途と言えるのだろうか。

正直微妙な部分だ。

「ルイズも口説かれたり?」

「入学当初は……」

少し思った事を聞けば、ルイズは、ぼつが悪そうに目を逸らす。

これは、ギーシユを手酷く振ったのか、口説かれてないかと結論つけた。

「あー……その、どんまい?」

「うっさい!!別にいいもん!ウイルが居るし!!」

取り合えず、フォローを試してみれば、ガーッと吼えるかのように怒られた。

なんと言うか、ウイルの前でのルイズと違い怒りっぽくなってるよ  
うな気がする。

大人しく優秀なルイズと怒りっぽく子供っぽいルイズ、どちらが本  
物なのだろうか。

「ところでサイト」

「ん……ああ、悪い。少し考え事してた」

腕を組み考えているとルイズに服を引っ張られた。

考え込み、聞いてなかった事を謝罪するも、それはいいのだけど、と  
眉を顰められた。

「ケーキ配らなくていいの?」

「あつ……やべえ」

慌ててシエスタを見れば、苦笑しながら此方を見ている。

ルイズと話をしているという事もあり、待っていてくれたのだろ  
う。

手に持ったトレイを落さないように急ぎ足で向かっていく

「ん?」

と、足で何かを蹴っ飛ばした。

拾ってみたら、何かが入った小瓶であった。

オシヤレな小瓶に紫色の液体が入っている。

匂いを嗅げば、微かに花の香りがした、どうやら香水らしい。

「これお前等のか?」

「あん?」

取り合えず、誰が落としか分からないのでそのまま近くのテーブ  
ルの生徒へと聞く。

手で小瓶をゆらゆらと揺らし、誰のか聞いてみた。

生徒達は、一斉に怪訝にサイトを見る。

「お前か?」

「いや、俺じゃないな」

生徒達は、お互いに顔を見合わせ違うと否定していく。

そんな生徒達の中、1人だけ会話に参加をしない人が居る。

その生徒は優雅に足を組みお茶を飲んでいたが、手が震え、お茶を



零している。

才人が気付き、じつとその生徒を見ていると他の生徒も気付き、そこに居た全員がギーシユ震えているを見た。

「なななな、なにかね？」

じつと見ていると汗を掻き、どもりながら答えた。

誰が見ても分かるその態度に才人は呆れ、目の前に小瓶を置いた。

「今度は落すなよ。色男」

「これは……僕の……僕の……」

小瓶を見て否定するのでもなく、何やら難しい顔をして言葉を続けたようにしていた。

暫く待っているとぶつぶつと小さな声で何かを呟き、キツと顔を上げた。

「ありがとう、そうだ。これは僕のだ」

そう言つて、すぐに小瓶を手に取りポケットに仕舞う。

取るまでに些か時間がかかったが、何か事情でもあるのかと不思議に思った。

そんな事を思っていると、他の生徒が小瓶の出所に気付いたのか大きく騒ぎ始めた。

「おいおい、それモンモランシーの香水だろ!!」

「ああ……どつかで見たことあると思つてたらモンモランシーのか!」

「確か、あれつてモンモランシーが自分の為に作成してる奴だろ？」

「つまりは……だ。それがギーシユの物だとすれば……今付き合つてるのはモンモランシーだな!」

「あー……やつぱり、こうなつたか。しょうがないよな……」

ほとんど箱庭のような学院では、娯楽に飢えている生徒が大半なのだろう。

他の生徒はガラガラとした目でギーシユの話して盛り上がり、大声で笑つた。

正直な話、気障な態度に澄ました表情、見ているだけで恥ずかしく死んでくれとさえ思つたりもした。だが、今のギーシユを見ていると

同情しか湧いて来ない。

「ギーシユ……様」

「ああ……ケティ。これはだね」

そんな事をしていると、栗色の髪をした、可愛らしい少女がギーシユに声を掛けた。

ケティと呼ばれた女の子は今にも泣きそうな表情をしている。

「ミス・モンモランシーと付き合ってたんですね」

「ああ……泣かないでくれ、モンモランシーとは、付き合っただけはないな……」

なんとか泣き止まそうとギーシユが慌てて言葉を告げるも、ケティは思いつきりギーシユの頬をひっぱたいた。

「信じられませんーさようならー!」

「……ああ」

ギーシユは、去っていくケティを見て頭を抱える。

すると、遠くの席から一人の女性がずんずんとした足取りでギーシユへと向かって来ていた。

そのことを才人は、注意しようかと悩むも相手の方が早くギーシユへと辿り着いてしまう。

「ギューシユ?」

「……ああ、モンモランシー」

モンモランシーと呼ばれた女性生徒は、見事な巻き髪の女の子であった。

モンモランシーの表情はにこにこ笑っているものの、どこか寒気すら感じる。

それをギーシユも感じ取ったのだろう。顔を真っ青にしてモンモランシーを見上げた。

「その……すまなっ」

「さ……いっ」

謝ろうとしたのだろう。

頭を下げた瞬間にモンモランシーが、テーブルの上に置いてあったワインの瓶を掴むと、中身を全てギーシユの頭へとかけた。

全ての中身をギーシュへとぶちまけ、鼻を鳴らし去っていった。場に沈黙が流れる。

ギーシュは、ゆつくりと頭を起こしハンカチを取り出すと顔を拭いた。

そして、首を振りそのまま燃え尽きたのかのように椅子に深く深く座り込む。

そんなギーシュに煽っていた友人達も慌てた。

あれこれ、とギーシュを元気付けようにもギーシュは落ち込んだままだ。

「それじゃ……俺はこれで」

災難だったと思うが、浮気をしていたのはギーシュである。

同情はするが、それだけで才人はケーキ配りに戻る。

「そうだ！待て！そこの平民!!」

「……俺？」

戻ろうとして、生徒の1人に捕まった。

その生徒を見れば、気持ちの悪い嫌な笑みを浮かべており、才人の感が嫌な気配を感じ取った。

「そうだ、お前のせいだ」

「は？」

「お前が小瓶を気を使って持っていたら良かったんだ！」

この生徒は何を言っているのだろうか。

確かに才人が拾いはしたが、騒ぎ立て事を大きくしたのはこいつ等だ。

「お前が軽率な行動を取るからこうなったんだ！」

「はあ〜!?!」

これには才人も驚き呆れた。

「謝れよ！」

「……………」

生徒の1人にそう言われ、どうしようかと悩む。

この色男が全面的に悪いが、自分のせいとも言えた。

最初こそ嫌悪感しかなかったが、今のギーシュは同情が湧いてく

る。

「あー……その色男。悪かった」

「ああ……気にしないでくれ。僕が悪かったんだ」

素直に謝罪すると力ない笑みで軽く手を上げた。

二股をしていたのは気に食わないが、意外といい奴かもしれない。

「それじゃ、今度こそ俺はこれで」

「まてまて」

「今度はなんだよ？」

今度こそを去ろうとするも先ほど同様捕まった。

同じようなやり取りにいい加減飽きてきた。

「俺達にも謝れ」

「……………はあ」

胸を張ってそんな事を言ってくる生徒に大きなため息が出た。

結局は、自分に謝らせて今回の事を全て自分に着せようという事なのだろう。

「いやだね。勝手にやってろ」

「ふん……」

付き合い切れない、そう思い、背中を向け歩き出す。

「ああ、そうか、お前はあのゼロのルイズが呼び出した奴か。頭もゼロって訳か、期待した俺達が馬鹿だったよ」

生徒の言葉に足が止まり、振り向く。

そして思いつきりに手に持っていた銀のトレイを顔面に向けて放った。

「ぶべっ……おい！てめー!!なにしゃがる！」

「ああ……悪い、悪い。あまりにケーキを食べたそうにしてたからな」  
顔や服にケーキがべったりとついた生徒は怒り狂う。

そんな生徒に才人は、メンチを切り顔を合わせた。

ゼロのルイズと聴いた瞬間、先ほどの授業の事を思い出したのだ。

あの時、確かこいつも教室でルイズを笑っていたと……覚えていた。

別にルイズが好きだからとかそういう訳じゃない。

正直好みだが、胸が足りないし。時たま偉そうだし。それでも……ルイズは女の子だ。女性を泣かせる奴は、ただただ許せない。

「よく判った。平民……貴様は丸焼きがお好みか」

「……上等。殴ってやるよ」

生徒は杖を取り出し、才人は拳を握り構える。

そんな喧嘩殺し合いが、始まろうとした時……そこに待ったを掛けた人物が居た。

「まった」

「ギーシュ?」

「なんだ、色男」

先ほどまで落ち込んでいたギーシュが颯爽と立ち上がり、バラを綺麗に振る。

「その勝負は、僕が受けよう」

「何言ってる? ケーキをぶつけられたのは俺だぞ!」

横槍をしてきたギーシュに生徒が掴みかからんばかりに吼えた。

しかし、ギーシュはそれを軽くないなし、笑みを浮かべる。

「君がケーキをぶつけられる原因を作ったのは、僕だ」

「いや……でも」

「僕の為に怒ってくれてありがとう。君のかつこいい風貌がケーキで台無しだ。そのままだと、多くの女の子を悲しませてしまう。君はケーキを落とし着替えてきたまえ」

「……ちっ」

ギーシュは優しい笑みを浮かべ、諭すように友人へと話す。

暫しの間、サイトとギーシュを見比べていたが、舌打ちをして去っていった。

「そういうことだ。君との決闘喧嘩は僕が受ける」

そう言い切るギーシュの表情は、先ほどの澄ました顔でなく……。覚悟を決めた真剣な表情であった。

## 九話：意地を張れ

「諸君……決闘だ」

「やつちまえー！」「ぶっ潰せ！」「怖いねー」「ねー」

「……………」

広場の真ん中でギーシュが颯爽と立ち、バラを口に咥える。

容姿が整っており、大変様になっている。

それでも何処か気障つたらしめて、気に食わない。

「なあ、なんでオレがお前と戦わなくちやいけないんだ？」

「……………君は、貴族と言う者を知らないんだね」

決闘の方法を伝える為に、近寄ってきたギーシュへと才人は、問いかけた。

ケーキをぶつけた相手となら、まだ納得も出来た。

なのに相手がギーシュでは、気落ちしやる気が出ず、困惑しかない。

「君は平民と認識されている」

「ああ……そうだな」

「平民が貴族に楯突いた。しかも大勢の前で……君は貴族に恥を掻かせたんだ。その責任を取ってもらわなければならない」

「そりや……手を出したのはオレだし悪かったけど」

ギーシュの言葉も分かり、少しばかりばつが悪そうに頬を掻いた。

「残念ながら、言葉で収めるには遅すぎたし、やりすぎてしまった」  
「……………」

「だから、君は……他の生徒の自尊心を満たさなければならぬ」

真剣な表情で此方を見てくるギーシュに何も言えない。

周りを見れば、既に大勢の生徒が集まり、今か今かと嬉々とした表情で待っていた。

つまりは……見世物、自尊心を満たす為の生贄に自分はされていると才人は感じた。

「君に残された選択肢は3つ、一つは貴族に手を出した大馬鹿者として倒される事。一つは泣き喚き謝罪し笑い者になること。そして……最後は」

3つの指をサイトに見せ、一つ一つ教えるように折り込んでいく。

「最後は……僕に勝ち、己の正しさを証明する事」

ギーシュが目を細め、最後に無理だろうけどね、と付け加える。

「つ……!!なんで無理って決め付けるんだよ」

ギーシュの言い様に少しばかりカチンと来た。

最初から出来ないとい決め付けられ、少し気分が悪い。

「平民が貴族に勝つ事は出来ない。そう認識されているんだ」

「やってみなくちゃ……」

「やってみた結果が……それなんだよ」

先ほどの真剣な表情ではなく、さめた目を向けられる。

軽快さも軽さもなく、ただただ冷たい。

才人は背中に冷水を浴びせられたような感覚を覚え、息がつかつた。

「さて……時間だ。決闘方法は簡単、どちらかが参ったと言うまでだ」

「……………」

「勿論、僕はメイジだから魔法を使う。君も好きなように戦うといい」

ギーシュは、そう言い切ると、あとはもう何も言わずに背を向ける。

「それでは、始めよう。この持っているコインを上投げる。これが地面に落ちたら開始だ。いいね？」

「ああ……」

釈然としない気持ちを抑え、神妙に頷き拳を構える。

喧嘩などしたことないのでボクサーの真似事のような構えとなった。

ギーシュが手に持っていたコインを観衆に見せ、大きく上に弾く。

太陽の光を浴び、金色に輝くコインをその場に居た全員が見つめる。

コインが一瞬だけ上空で留まり、重力により下へ下へと落ち、地面に着いて跳ねた。

その瞬間を待っていた才人は、すぐさま足を動かさず、ギーシュへと向かう。

勿論、魔法も警戒しており、すぐさま横へと飛びのけるように準備

もしていた。

そんな才人をギーシュは、特に何をする訳でもなく、ただただ見つめる。

杖であろう薔薇を片手で持ち軽く動かし、遊んでいる。

余裕を保つてる気かと思ひ、イライラが溜まり、誰が相手でも良くなった。

「がっ!？」

ギーシュまで後、数マイルと言うところで才人は突如何かにぶつかる。

走っていて思いつきりぶつかった為、勢いを殺せず全て自分が受ける羽目となり、無様に転がる。

壁にぶつかったような衝撃に体が悲鳴をあげた。

「いつ……な、何がっ」

混乱しつつも状況を確認するべく、前を向く。

そこにあつたのは、一体の鎧であつた。

淡青色に輝く金属に綺麗に整えられたフォルム。すらつとした体型で何処となく女性を思わせた。

武器などは持っていないが存在感が強く、太陽の光を浴びて立っている姿は神秘性も増し神々しい。

「な、なんだこれっ!」

「戦乙女……僕が得意とするゴーレムを作り出す魔法さ」  
ワルキューレ

「……ゴーレム」

状況を確認する為に、ギーシュが言った事を復唱する。

(これが魔法っ!!)

才人は、心の中で確認するように呟き、歯を食い縛る。

魔法があると分かっていた、使う事も予測していた。

だが、実際に見たことがある魔法は、ウイルスによつて見せられた些細な魔法。

こうして人間に危害を加えられる魔法を受け、改めてデタラメさを思い知らされる。

「……………立たないのかい？」



「やってやる!!」

周りの生徒は、倒れているサイトを見てくすくすと笑う。

ギーシュの言葉に自分の状況に気付き、顔を赤くして才人は立ち上がる。

(つつても……どうするか)

立ち上がり、拳を構えるも攻めあぐねる。

本格的な喧嘩も初めてな上に鎧なんて相手にした事がない。

殴れば自分がダメージを受ける上に下手に蹴り込むと足を痛める。

「うおりゃー!」

結局の所、選択肢は1つしかなく、足裏で相手を押し倒すように蹴り入れるしかなかった。

動かない相手にヤクザキックをかますも鈍い音が響き、足にジーンと鈍い痛みが走る。

「……………」

「くっ!」

それでもこれしか方法がなく、何度も何度も蹴りを入れていく。

ガンガンと金属を叩く音だけが虚しく響き渡った。

次第に蹴り込んでいくと、息が上がり足も蹴り込んでいないのに鈍い痛みを走らせるようになった。荒い息を吐き、ゴーレムを見れば相変わらず動かず、此方を見ている。

「あははははははははははは」 「だっさ!」 「くすくす」

「っ」

暫くすると周りの生徒がお腹を抱えて笑う。

そんな生徒達の笑い声を聞いて、才人は顔を真っ赤にさせ唇を噛んだ。

自分の滑稽さが分かる為に反論出来ず、ただただ悔しきだけが心に残った。

「終わりにしよう……やれ、ワルキューレ」

「がはっ!」

棒立ちの状態で才人は息を整えていると強烈な一撃を腹に受ける。

腹を見れば、ワルキューレの拳が容赦なく突き刺さっていた。

重い響くような音が体内から聞こえ、熱が痛みと共に襲ってくる。才人は膝から崩れ落ち、そのまま地面に転がりお腹を押さえて丸まった。

胃から込み上げてくる物があり、気にする暇なく口から出す。強い酸味のある胃液で気分が悪くなり、目の前が暗くなった。

「——っ!!」

(だれ……?)

痛みで意識が遠のく中、誰かに頭を抱えられた。

「もういいじゃない!!」

(ルイズ……?)

ルイズの声に意識が戻され、痛みでぼやける視界で見上げた。見上げると目に涙を溜め、必死に庇うように叫んでいるルイズが見える。

「もう十分でしょ……十分じゃない」

ルイズは、涙を溜めながらも目を吊り上げ、周りの生徒を睨む。

涙ながらに訴えるルイズに才人は、心が震える。

「何言ってるんだよ。これからだろ」

「ケーキをぶつけた事はこれでいいでしょう!」

1人の生徒が呆れたように見下すように否定した。

「なールイズ、その平民は貴族に逆らった。ケーキであろうと貴族を馬鹿にして当てたんだよ」

「っ!」

「貴族と平民は、等価値ではないんだよ。魔法が使えないとそんな事も忘れちゃうのかい?」

生徒の1人は、馬鹿にしたように諭すようにせせら笑う。

その事にシヨックを受けたのか、ルイズは何も言えず口を開いて

は、閉じた。

周りを見渡しても、その生徒と同じ考えなのか、他の生徒も領キルイズへの援護はない。

中には眉を顰める者も居たが、結局は黙り込み、見ない振りをするのかのように口を固く閉じる生徒が大半だ。

力なく俯き涙を流すルイズを才人は、ただただ見上げる。

何時の間にか膝枕をされており、ルイズの涙が頬に触る。

(ああ……オレが泣かしたんだよな。これ)

周りの言葉に傷つき、ルイズが泣く結果を作ったのは才人だ。

涙を手で拭こうとするも初めて味わう強烈な痛みに手がお腹から退いてくれない。

そんな自分を情けなく思う。

なんとか場を収めようと辺りを見渡す。

ルイズを罵倒する声に、もつと痛めつけろという声が周りから聴こえて来る。

(あつ……)

未だに吐き気と痛みが襲ってくる中、生徒から外れた木の下にシエスタを見つける。

遠め目で分かりづらいが、シエスタもルイズ同様、泣いているのか手で顔を覆っていた。

(………一人も泣かしちゃった)

二人の女性を泣かし、傷つける事になった自分に笑いが漏れた。

これでは色男同様ではないかと、いや……自分の方が性質が悪い。

(………)

次に見つけたのは、ウイルとカリオストロだ。塔の2階の窓から、此方を眺めていた。

カリオストロは、窓の縁に座り足をぶらぶらとさせ、ウイルは縁に肘をついてのんびりと眺めているように見える。

知らず知らずの内に、才人の手が動き二人の方へと向けそうになり、近くの草を強く掴む。

(何やってんだ。オレが原因を作ったんだ。……なのにあの二人に助

けを求めようなんて)

虫が良すぎる、今自分がこうなっているのもルイズとシエスタが泣いているのも、全て自分が招いた結果だ。ルイズを巻き込んでしまった後悔、無知な為<sup>尻</sup>に犯した自分のうかつさ。

それをあの二人に押し付け<sup>拭</sup>るのは違う。

(どうすればいい、どうすればこの場を解決できる)

痛みの中でぼーとする頭を回転させ、この場を収める方法を考える。

(ああ……そうだ。こうすればいいんじゃないか)

考えてみればそれは簡単な事であった。

最初から解決方法を言われているではないか。

「くっ……があー！」

「だめー！」

体にムチを入れ気合で立ち上がる。

体を起すだけでお腹が痛み口から胃液が零れる。

それでもなんとか体を起こし、前かがみになりながらもふらふらと立ち上がった。

「動いちゃ……」

「悪い……これしか思い浮かばねーや」

涙目で服を掴み止めようとするルイズに笑いかける。

痛みのせいで今の自分は笑えているか分からないが、これが今の精一杯だ。

「ちよつと……ばっかし、ケリつけてくるぜ」

「……サイト？」

ふらつく足で立ち上がり、ギーシュを見る。

ギーシュは、周りが笑う中で1人、苦しそうな表情をしていた。

(悪かったな……色男)

今となつては何故ギーシュがこの決闘をしたかを理解できた。

もしも、決闘の相手がギーシュ以外であったならば、自分もつと酷い目にあっていただろう。

自分を庇う為に、これ以上場を荒らさないように調停してくれたのだ。

二人の女性に逃げられ、悲しみに暮れる中……本当に女性関係以外は、いい奴だ。

(悪いけど……最後まで付き合ってもらおうぜ)

そんな事を思いつつ不敵に笑えば、呆れたかのように首を振りギーシュも笑い返してくれた。

(場を収めるのは簡単だ。オレがボロボロにやられればいい)  
周りもそう望んでいる。

これ以上、自分のせいでルイズが笑われるぐらいなら、痛みなんか気にしない。

「……受け取り賜え」

「……！」

拳を握り、息を荒くして立っているとギーシュが薔薇を振り才人の前に一本の剣を作り出す。

「平民の牙だ。素手のままだと格好がつかないだろう」

「……はっ。後悔すんぜ?」

「ああ……見せてみたまえ、君と言う男を」

薔薇を嗅ぐ様に鼻に持っていきギーシュが答えた。

それに返すように才人もまた、剣を握り締める。

「そういえば……名前を名乗ってなかったな。僕はギーシュ・ド・グラモン。二つ名は『青銅』。君の名は?」

これから自分はボロボロにされるだろう。

だが、見ている。お前等が笑った女の子が召喚した奴を。

どれだけボロボロにされようと退かず、無様に倒れるまで抗い続ける様を。

お前等に真似が出来るか。やれるもんならやってみろ。

「才人……平賀才人。『ゼロの使い魔』のサイトだ!!」

剣先をギーシュへと向け、名乗り上げる。

その瞬間、体の痛みがなくなり、ルーンが眩しいほどに光り輝く。  
「意地を張らせてもらうぜ」

## 十話：友よ

「うおおおおお!!」

気合を入れ、最初の一步を踏み出す。

剣を握ってから才人は、不思議と痛みも恐怖も感じない。

ただただ、体の奥から湧き上がる衝動を声に出し、ワルキューレへと足を進めた。

「なっ!」

気付けば、たった一步で数メートルを移動しワルキューレの目の前へと辿り着く。

ギーシュが驚いたのか目を見開く姿が目についた。

(羽の様に軽い)

指先から足先まで全てが滑らかに動き、頭が冴え渡る。

武器をどう扱えばいいのか、どう振れば効率よく斬れるか。

様々な情報が頭の中を巡り、広がる。

「ここだ!!」

「ワルキューレっ!!」

剣を横に構え、勢い良く振りぬく。

イメージは居合いの形に近い物で、頭の中で考えた動きとピッタリと合う形で剣が動いた。

ギーシュも慌てながら薔薇を振り対応するが、全てが遅い。

スローモーションの様に動くワルキューレのパンチを掻い潜り、剣が胴体に当たる。

胴体に当たった剣は何の抵抗もなく、熱したナイフでバターを切る様に入った。

「」

剣を振りぬいた形で体を止めると周りの喧騒が止む。

たった1秒ほどの時間の中で行なわれた動きに理解が出来ず唾然

としているのだろうか。

「ふう……」

才人がその状態で深く息を吐くと、ワルキューレの胴体が横にズレ地面へと落ちる。

胴体が金属の甲高い音を立て落ちると才人は顔を上げ、ギーシュを見た。

ギーシュは、ポカンと口を開き唾然とするも才人の視線を受け、真剣な表情で薔薇を振る。

振るわれた薔薇の花びらが何枚か散り、地面に落ちると新たなワルキューレが作り出される。

「……力を隠してたのかい？」

「いや、隠してないし。オレ自身も驚いている」

ギーシュの問いかけに嘘偽りなく答えた。

「そうか……理由は分からないが……僕も本気を出してよさそうだ」

そう言った直後、ワルキューレが完成しギーシュと才人を分ける壁のように湧き出た。

(武器が出てきたか)

出てきたワルキューレは4体。

その内の3体が先ほどは持っていなかった武器を持っていた。

大きな盾を持つている者、2メートル近い棒を持つている者、50センチほどの刃を持つ片手剣に小さな盾を持つ物。

最後の1体は、これまでのワルキューレと違い、頭がなく、胴体が椅子のような形状をしていた。

他のワルキューレはいいとして最後のワルキューレは一体何だろうかと首を傾げる。

不思議そうに見ているとギーシュも視線に気付いたのか、イタズラが成功した子供のような笑みを浮かべ、ワルキューレに乗り込んだ。

「……それ椅子なのか」

「高い位置の方が指示を出しやすいのさ」

素直に聞いてみれば、教えてくれた。

確かに椅子のワルキューレに乗ったギーシュは背が高くなり、あれ



なら辺りを見渡せるだろう。

「さあ……君にこれが崩せるかい？」

「やってやるよ」

剣を横に倒し、駆ける。

やはりと言うべきか、先ほどと同様に、身体能力は段違いに上がっており才人は数メートルの距離を瞬く間に埋めた。

(……………なっ！)

相手の動きを見てカウンターで仕留めようとして才人は驚く。てつきり最初に向かって来るのは、片手剣か棒を持ったワルキューレと思っていた。

大盾のワルキューレで自分を守り、ギンシュ他で攻める。

そう、才人は思っていたのだ。

「盾で突っ込んでくるのかよ!!」

そう、意外や意外、最初に突っ込んできたのは大盾を持ったワルキューレであった。

大きな盾を持ったワルキューレが才人に突進し、才人は壁が迫ってくるような感覚を味わう。

(落ち着いて斬ればいい)

先ほどの自分であれば、驚き戸惑っていただろう。

だが、今の才人には身体能力の向上により、周りを見渡せるぐらいの余裕があった。

先ほどのように剣で薙ぎ払い、盾ごと斬ってしまった方がいい。

そのような事を思い剣を薙ぎ払……………

「!!」

わなかった。

薙ぎ払おうと手に力を入れた瞬間、背筋にゾワッと冷たい感覚が走る。

(やばい、やばい、やばいー！)

才人は、自分の感を信じ全力で後ろへと跳んだ。

その直後だ。大盾のワルキューレが突如横へと体を動かしたのは

……。

大盾のワルキューレが避けた直後、長い長い棒が才人を串刺しにする勢いで迫り来る。

既にバックステップで後ろに跳んでいる才人には、これ以上避ける手段がない。

50 سانت、40 سانت、30 سانت……と近寄ってくる棒に才人は冷や汗を掻く。

「ぐあっ！」

棒は、才人のお腹の数 سانت 手前で止まった。

その事にほっとするも、着地も何も考えず後ろに跳んだ為、勢い余って後ろへと転がった。

ごろごろと後ろに転がり、服や顔、頭に土が付くが気にしない。

「あぶな……」

「まさか、後ろに避けるとはね」

何とか体勢を整え、何が起きたのかを確認するべく目を凝らす。

目を凝らした先には、棒を持っていたワルキューレが存在し。

その後ろには片手剣を持ったワルキューレも今か今かと、待ち構えるように立っていた。

(大盾で視界を遮り、引き付けた所を棒楯を持ったワルキューレで仕留める)

片手剣を持っているワルキューレは、横に避けた場合の保険なのだろう。

才人は今更ながら顔を青くし、自分が助かった事に安堵した。

魔法ばかり頭があり、まさか戦術を混ぜてくるとは思いもしなかった。

目の前の男は、自分が平民であろうと油断もしなければ悔りもしない。

(調子に乗るな……オレ、いつもそれで失敗してるだろ)

そんな事を思い、息を整えるとワルキューレがまた、隊列を組む。

大盾のワルキューレを筆頭に後ろに隠された2体は才人の目からは確認できなかった。

(どう攻めればいいんだ！)

才人は、じりじりと横に動きながら様子を伺う。

一步、また一步と動けばワルキューレもギーシュを中心に少しずつ動く。

どれだけ歩こうが走ろうが、才人の前にワルキューレは立ち塞がる。

もう一度、突っ込んで見ようか……先ほどのような目に合うだけだ。

なら下に避けようか……体勢が崩れている所を盾で潰されてお終いだ。

横に避ける……片手剣の餌食になるだろう。

才人は、頭をフル回転させ悩む。

どう相手を攻略しようかと……。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(まさか……この陣形を使う事になろうとはね)

険しい顔で此方を睨んでいる才人を見て、ギーシュはそんな事を思った。

学院に通っている間は、使う事はないだろうと思っていたが、人生何が起こるか判らないものだ

と苦笑しつつそんな事を思う。

(本来なら弓兵も置いておく所なのだけど……流石にこれ以上は精神力が足りないか)

自分の作った兵隊を上から眺め、若干拗ねる。

どうせなら完璧な状態で彼と戦ってみたかったとそう思ってしまった。

ギーシュには、平民や貴族といった隔たりが余りない。平民でも凄い人……尊敬できる人がいっぱい居ると理解しているのだ。

故に平民でありながら、誰かの為に貴族に立ち向かう才人に最大限の礼儀を持つて接する。

ギーシュの父親は元帥の席に着いている人だ。

元帥となれば実家に軍を置いておく事が許される。

その為、ギーシュは他の貴族に比べて平民と触れ合う機会が多かった。

『人が居て戦が起き、戦もまた起せる』

幼少の頃、父親に何度も何度も聞かされた言葉だ。

それほどに戦や軍には人が必要になってくる。

そこには貴族や平民といった括りはない。

ただただ、優秀な人が、役割をこなせる者がそこに入る。

言ってしまうえば実力主義の場所であった。

10歳の頃に連れて行かれたオーク討伐の遠征の時に、1人の平民の指揮官の下に連れて行かれた。最初こそ、なんで平民の指揮を見なければいけないのかと不満たらたらに思っていた。

だが、それも討伐が始まるまでの間である。

圧巻、まさにそう呼ぶしかなかった。

本来なら手も足も出ない筈の平民がオークを討伐していくのだ。

オークと言う存在に怖がっていた事も全てが吹き飛ばすほどの出来事であった。

いつもは冴えない奴と思っていた平民の指揮官は、真剣な表情で的確に指示を出していく。

見事に全ての相手を策に嵌め魔法を使わず駆逐していく。

それを見て胸が高鳴り、憧れ自分もあそこにと思ってしまうものもしょうがない。

ギーシュの進む道が決まった瞬間でもある。

(そういえば……彼と会ったのもあの時か)

ふとそこまで思い返して、友達の人を思い出す。自分と同じく討伐に参加していた同じ年の男の子。いつも物静かで何処か達観していて、大勢の人に流されず自分の道を行く親友を。

「……さて、流石にこれは無理かな？」

「……見てろよ」

意識を戻し、目の前の相手に集中する。

見れば、彼は何度も何度も前から軽く当たってくる。

少しでも盾を動かせば守りに入り、棒が飛べば全力で避ける。

周りがそのことで笑っているが、ギーシユは違う。

(間合いを計られたか)

注意してみればよく分かる。

サイトは無理な突撃を考えなしに行なったわけではない。

棒が何処まで延びるのか、間合いは何処までなのかを正確に測っていた。

間合いが分かれば、何処までが安全で何処までが危険なのかが分かり、攻撃を受ける回数が格段に減る。

そんな地道な作業が戦いにおいて重要なのだ。

『彼を知り己を知れば百戦殆うからず』

戦の話をしている時に親友に言われた言葉だ。

それを忠実に築き上げていくサイトへの評価が格段に上がる。情報の大切さを彼はよく知っている。

(くるか)

「……よしっー」

刻むような突撃を終え、息を整えるサイトに対して身構える。

一目見れば分かる。彼は次で決めるつもりだ。

(来るなら来い。全力で迎え撃とう!!)

何があろうと対応できるように頭の中で考えられる事をシミュレーションする。

既に此方は万全だ。どうでる……サイト。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(うん、これしかないな。てかこれしか思い浮かばねー)

何度か突撃し、結論に辿り着く。

成功する確率も低ければ、失敗すれば袋叩きで自分は負ける。

それでもギーシュに勝つにはこれしかない。

(……ははは、最初はボロボロになるつもりだったのに)

覚悟を決め、最後まで情けなくても戦おうと思っていたのに。

今では目の前のギーシュに勝ちたいと心の底から思っている。

日本に居た時には感じなかった気持ちに知らず知らずの内に口角が上がる。

「いくぞー!」

「(うー)」

残された体力は少なく、これで打ち止めだ。

それでも足は軽快に動いていく。

駆ける、翔ける——背を低くして前倒れになりつつ加速していく。

「っ!!」

目の前で盾のワルキューレが動く、タイミングを合わせろ、掴め。

その為に何度も何度も危険を顧みず突撃したのだ。

(1……2……3!!)

盾が横にズレ、最速の槍が迫り来る。

それを剣の腹で受け止め、体を回転させ横へと流す。

だが、相手も予測をしていたのだろう。

既に避けた先には盾を持ったワルキューレが待ち構え、潰そうと盾

を突きつけてくる。

その後ろには片手剣を持ったワルキューレが構えていた。

盾を斬った所を迫撃する為に用意をしていたのだろう。

軽く後ろに下がり、盾をギリギリの所で避け、体勢を前に押し倒しているワルキューレの肩に足をかけ跳んだ。

「なっ!!」

「喰らえ!!」

少々無理な姿勢で跳んだ為に体が横に向きになるが問題はない。

剣を振ればいいのだ。

跳んだ勢いのまま、最初から目標としていた、棒を持ったワルキューレに切りかかる。

棒を持っていたワルキューレは、間合いに入られた上に伸ばし切った状態だ。

避けれずに、剣を受け最初のワルキューレ同様切り裂かれ土へと還る。

「っー」

そのまま、受身も取れず地面に落ちるが、呻いている時間はない。すぐさま、剣を横に薙ぎ払い他の2体のワルキューレの足を狙う。

「させるかっ!!」

倒れながらも横に振るった剣は、ワルキューレの足を切断する事に成功する。

崩れ落ちたワルキューレが、金属音を立て倒れる中、横へと転がり体勢を立て直す。

「……はあ、はあ」

息が上がり、体中が痛む。

仕留め切れなかった。

ギーシユは、足を切られたワルキューレを土に戻し残ったワルキューレを構えさせる。

(盾のワルキューレを見捨てて生き残らせたのか)

荒い息を吐きつつ、状況を確認する。

ギーシユは、全てを倒されないようにわざと1体だけを残し、残り

の1体を動かすのに集中したのだ。

(負けたかな)

ははは……と軽く笑いそんな事を思った。

既に体力を使いきり、動けない。

肺が苦しい程に酸素を求め、手足は石のように硬く動くのもだるい。

そんな自分に対してギーシュは2体のワルキューレを持っている。

これが残り1体であれば、まだ何とかなったかもしれない。

しかし、現実には片手剣を持った奴とギーシュが座っている奴の2体を残している。

いや……まだギーシュは、ゴーレムを作れるかも知れない事を考えると完全な敗北だろう。

「っ……！」

涙が溢れそうになった。悔しい、とても悔しい。

周りの生徒達に笑われた時よりも悔しく、強く歯を食いしばり懸命に涙をこらえる。

歯が鳴るほどに敗北を強く噛み締め才人は、ギーシュを見据える。

「ふう……！」

「は？」

見ているとギーシュが椅子にしていたワルキューレを土に還した。

「なにしてるんだよ……情けか？」

「違うね。僕は君に勝つ為に崩したんだ」

わざわざ不利な状況に持っていくギーシュに問いかける。

「君には分からないかも知れないが魔法でゴーレムを複数運用するのは頭を使うんだ」

とんとんと頭を指で叩きギーシュが少しだけ笑う。

ギーシュの顔には大量の汗が噴き出ており、顔も少し青白い。

本当の事なのだろう。

「君が動けるかも知れない事を考えて……残りの1体に集中するのさ」



「ははは……そうか」

無理矢理……体を起すと、体のあちら此方から悲鳴が上がる。

それでも……それでも無理矢理に才人は立ち上がり、震える手で剣を構えた。

視界が滲む、手が震え剣先がぶれる。

足は言う事を聞かず、小鹿のように震えるも気合で押し込み立つた。

「決着をつけようか」

「ああ……この一刀で真正正銘の打ち止めだ」

言葉を言い終わり、才人は走り出す。

先ほどの速さが嘘の様な速度しか出ないが、構わない。

ここで全力を……全力以上を出さなくて何処で出すというのか。

「うおおおおお!!!」

「ワルキューレツ!!!」

お互いに叫び最後の一撃へと力を入れる。

突っ込んでくる才人に合わせワルキューレが片手剣を上段に構え振り下ろす。

それに対し才人もまた剣ごと斬り裂くように全力で振るった。

金属の鋭い音が響き、剣が宙を舞う。

舞った剣が地面に刺さる頃、1人が崩れ落ちる。

「くっ……そ……」

悔しそうに倒れ伏すのは才人だ。

涙を流し自分が持っていた剣へと視線を送る。

視線の先の剣は刃先が半ばから折れていた。

青銅で青銅を斬っていたのだ、才人より先に剣がもたなかった。

「邪魔するよ」

「……………」

悔しそうに涙する才人の横でギーシュも同じように寝転がった。ギーシュは肩で息をしながら空を見上げる。

そんなギーシュを才人は悔しそうに眺めた。

「まったく……………してやられたよ」

「……………え？」

「あ……………気付いてないのか。ワルキューレを見てご覧」

何がおかしいのか楽しそうに嬉しそうに笑うギーシュの言葉に沿い顔を動かす。

「あ……………」

「この勝負引き分けだね」

花びらがなくなった薔薇の匂いを嗅ぎながらギーシュが言う。

才人の視線の先にあった物は、真つ二つにされたワルキューレの姿であった。

「君も僕も動けない……………引き分けだろ？」

「ははは……………そうか、引き……………分けか」

別の意味で涙が溢れる。

才人もまたギーシュの様に空を見上げ腕で顔を隠す。

「次は……………勝つ」

「それは此方のセリフだよ……………サイト」

「覚えてろよ……………ギーシュ」

二人は笑みを浮かべ、お互いに同じ空を見上げた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「それで……………どうしますか？学院長さん」

「むう……」

一つの部屋の中で老人が呻る。

問われた事に対してどう言えばいいか考え、悩んでいるのだ。

「時間があるので、ゆっくりと考えるといいですよ」

ニツコリと人の好い笑みを浮かべる少年に老人は、舌打をしたくなる。

本来であれば生徒の少年にこんな事したくないが、今の心境ではしようがないと思った。

何せ、話せば話すほど嫌味を言ってくるのだ。

今も時間があるのでと言っているが、裏を返せばないと言われていくような物だ。

「分かった……許可しよう」

「あなたのご決断に感謝と賛辞を」

深いため息をついて答えれば、少年はしっかりと深くお辞儀をしてそのような事を言ってくる。

何をどうしたらこんな性格に育つのだろうか。

(家庭訪問とか取り入れた方がいいんじゃないか)

つついっついそんな事を思い老人——オールド・オスマンは現実逃避を  
行う。

「それじゃ、急ぐのでこれで」

「またねー、お爺ちゃん☆」

そう言って、足早に去っていく二人組みを見送り、オールド・オスマンは静かに涙した。

## 十一話：罰と交渉

「ルーンの効果か？」

「そうだろうね。あれほどに輝いてるし」

春特有の暖かい風がオレ様の体を包み込む。

下では、春の陽気に当てられ喧しく騒ぐ馬鹿な奴等が居てそれを見る。

そして、足を空中に投げ出しながら、もう一度サイト達を見る。

サイト達は、楽しそうに物騒なおもちやを持ってじやれ合っていた。

子供なら子供らしく、もう少し健全な遊びをすればよいものと思うも、これはこれで健全なのかも知れない。青春と言う名の青臭い遊びか……オレ様には決して真似出来ない遊びだろう。

「それにしても……酷いな此処の連中は」

先ほどから、うつとうしくて、喧しい人の群れを見る。

正直、優雅さなど錬金術士であるオレ様にはもつとも縁遠い言葉だが、

ここまで優雅さも何もない貴族は珍しく、この国の現状を表してるかのようだ。

「まあ……彼等も被害者だからね、同情の余地はあるんだよ」

「は？」

オレ様がそんな事を思っていると、隣で見ていたウィルが正気を疑うような事を言った。

被害者とは、一体誰の事を言ったのか、一瞬だけ理解する事を拒否してしまう。

もう一度下を見れば、サイトを『殺せ』だ『ぶちのめせ』だのと、表情を嬉々とさせて優雅さの全くない言葉を叫んでいた。

何処からどう見ても奴等が被害者には見えない。

「痛みをね、知らないんだよ」

「痛み？」

「自分達は受けた事がないから、他人の痛みを理解することが出来ない

いんだ」

そう言つて、オレ様を見たウイルの瞳は、深い憂いの光を帯びていた。

「子供は怒られて、痛みを知つて、初めて理解することが出来る」  
「……………」

「彼等は平民の扱いを親から教わるから、その事で怒られた事も、殴られた事も、ましてや注意すらも、だから平民を傷つけてもなにも思えない」

親に怒られて、親に叱られて、子供はやつてはいけない事なのだと知る。

そして痛い事をしてはいけないのだと、傷つけてはいけないのだと、他人と心から共感できて初めて理解するのだ。

ならば、叱られたことが、共感したことがなければ、どうなるだろうか。

簡単だ、下の広場のような他人の痛みを理解することも、共感することも出来ない人間となる。

逆に痛みを知つていれば、友人や家族、他人などの痛みに関心し相手を思い、怒る事もできる思いやりのある人間に。

という事なのだろう。

「もしもだ……下の子達が自分と同じ貴族を殴れば、怒られて叱られて痛みを理解する。ならば……平民を殴つたとして彼等は怒られるだろうか？」

怒られる筈がない、身分が違う、生きる世界が違う。

「ルイズも経験はなかつただろう。それでもこの学院に来て痛みを理解した」

「それでお前といい、ルイズも……」  
ウイルが小さく頷いた。

「彼等は学無知は罪なりぶ機会を与えられなかつたんだ」

「……なるほどな、お前が考えた言葉か？」

「いや、昔の人の受け売りだよ」

そう言つてウイルは小さく笑つた。

「それじゃ、行くか」

「ああん？最後まで見ていかないのか？」

「今が絶好の機会だ。予定になかったけど動く事にするよ」

そう言っつてウイルは、手をひらひらとさせ歩き出した。

何を仕出かそうというのか、情報も少なく大人しく後ろを付いて行く事にする。

正直な話、下の決闘は暇つぶしにもなりそうにない。

ルーンの効果もある程度理解できたから、詳しい事は後でもいいだろう。

それよりも今は、目の前を歩く奴へと意識を集中する。

身長は、それなりに170後半位、容姿は黒髪に黒めの真つ黒であり、髪は少しばかり外へと跳ねていた。顔もそれなりに整っており、自分の容姿の足元ぐらいには置けるぐらいだろう。

「どうかした？」

「暇だから人間観察だ。ちなみに対象はお前な」

ウイルは、『なんだそれ』と笑い納得したのか足を進める。

目的地まではまだ遠いせいかウイルに見所がないのか、観察も終わってしまった。

そもそも、自分以外の人に興味がないので人間観察しても直ぐ暇になる。

教室であつた様な胸の高鳴りでもあればまた違うのだが。

可愛く見せる歩き方でも考えようかと思つていた時、思いついたことがあつた。

そういえば……だ。

目の前の男はどの様な戦いをするのだろうか。

先ほどのサイトとキザ男の戦いを思い出し少々気になる。

「ねー、ウイルはくどんな戦い方するの？」

「いきなりだなー……そうだね」

暇つぶし程度の話だ。

急に振つても許されるだろう、てかオレ様が聞いたのだ。丁寧な態度でしっかりと答える義務があると思うのだよ。

「周りの物を使ったり、持っている物を利用して魔法と組み合わせるような戦い方かな」

「具体的には☆」

『『アースハンド』で敵の足を掴み『錬金』で鉄に変化させ、遠くから魔法連発。オークとか相手ならこれ』

「……………あー？」

「毒とか仕込んだ爆弾を投げて『発火』で爆発させたり。メイジ相手にはこれだな」

「……………うん？」

「飛べない敵には『レビテーション』で浮かせて落下させる。才人と戦うならこれだな」

「……………」

「最近やったのはオーク相手に予め作っておいた罠の奴かね。先を尖らせた丸太を用意しといて誘い込み『レビテーション』で丸太を浮かせ、木と木の間に張らしたゴムに着けて引っ張り発射とか」

「なんだろうか、この貴族らしからぬ戦い方は。」

「いや、確かに頭脳を使い魔法の威力を高める方法は、賢いし好感も持てる。」

「しかしだ、やってる事がえげつない。」

「オレ様自身、相手の足元から剣やら斧やらを出し串刺しにしてるが他人から言われると結構酷い物だ。」

「まあ勝てば良し！の戦い方だな」

「まあ……………それもそうだな」

「微笑みながら言うウイルに少しばかり照れる。」

「胸が高鳴り鼓動が早くなる。」

「なんというか、自分の好みとあっている。」

「優雅など関係なしと意地汚く勝ちを拾い上げる……………実に自分好みだ。」

「元より錬金術士の身、意地汚く真理を追い求め、暴く、傍迷惑な奴等……………実に好い。」

「はあ……………上がるのが面倒だな」

「ここ上がってくの？」

「そう、最上階まで」

そんな事を思っていると目の前には階段が見える。

螺旋を描き、先が見えない階段に帰ろうかと思いはじめ。

何をするのか気になるが、ここを登って行くのは正直嫌だ。

肉体労働はオレ様の仕事ではない。

「ウイル〜♪」

「……なにその手」

肉体労働は、助手に任せよう。

両手をウイルに差し出し、にっこりと笑いかける。

「もー分かっているくせに……カ・リ・オ・ス・ト・口をく運んで☆」

「……」

「むしろ運べ、こんな美少女を抱けるんだ、ご褒美だろ？」

早く早くと急かすと、ため息をつきつつお姫様だっこをされた。

前から思っていたが、こんな美少女に頼まれてるのにため息はないだろう。

サイトなら泣き喜び、興奮するだろうに。

そんな事を思っているとウイルは、杖を取り出し軽く振った。

すると体が浮き上がり歩くより少し早い程度で階段を翔けて行く。

空を飛ぶ場合は、ウロボロスに乗る事が大半なので正直便利そうであまり羨ましい。

空を浮かぶことが出来れば、水の上に立つ美少女とかも出来るし、

可愛さに磨きがかかりそうだ。

「へ〜……便利だな。こっちの魔法も覚えるか」

「それは無理かな」

「オレ様に才能がないとてても？」

「あー……そうじゃなくて、こっちの魔法ってブリミルの血を引いてる人しか使えないんだ」

「血縁のみか」

「ああ」

そう言った特殊な魔法や技術も理解できる。



というか、自分自身の錬金術さえ、そういった特殊な物だ。  
血か……それ位なら方法はあるな。

「作るのか?」

「そこまで知ってんのかよ」

少しばかり考え込んでいるとそんな事を聞かれた。

考えていた方法を当てられ、少しばかり渋い表情をする。

何処をどう知ったのか、ここまで自分の事を理解されていると僅かながら不気味に思える。

「なんだ……お前は、オレ様のストーカーか何かかよ」

「そんなんじゃないよ……実際に会ったのも昨日が初めてだし」

「……嘘は言っていないな」

「つく必要性がないからね」

じとーと目を細めれば、何処吹く風と言わんばかりに澄ました顔で  
答えられる。

「着いた」

「んっ、ぐっ苦労様!でだ……ここ誰の部屋なんだ」

「ああ……学院長室」

頂上の大きな扉の前で下ろされ、そう答えられる。

ウイルは、一息つくと自然に——そう、自分の部屋に入るかのよ  
うに扉を開けた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふあ?!」

カリオスト口を下ろし、一息をつくと扉を開ける。

豪快に力いっぱい開くと奥のほうで驚きの声上がる。

其方へと視線を向ければ、白髪に立派な白ひげを蓄えた老人——学院長のオールド・オスマンが目を見開いて此方を見ていた。

視線を少しばかり横に逸らせば、恩師のコルベール先生も目を細め此方を見ていた。

そんな二人を見てから奥の鏡に少しばかり目を遣り細めた。

考えは当たっていたようだ。これで優位に持っていける。

「学院長!!」

なるべく焦った様に怒りを少しを含め、足音を鳴らしオスマンの前へと歩く。

その際に後ろで小さく笑い声が聞こえた。

自分の演技を見てカリオストロが笑ったのだろう。

これでもそれなりに演技は出来るつもりだが、カリオストロには笑われる出来らしい。

「い、いきなり……なんじゃ」

「決闘の事はご存知ですね……『遠見の鏡』で見えていますし」

「あく……それは……のお?」

ドンつと机を叩き、怒ってますとばかりに学院長を睨む。

此処に来た経緯を語るべく、学院長の後ろにある鏡へと目を向けて問い詰めた。

ノックもせずに入った上に此処まで来るのに飛んできた為、隠す暇なく鏡は決闘を映し続ける。

「ごほん……待て待て、『眠りの鐘』はだ……「それはどうでもいいです」はい?」

此処に来た理由を決闘を止めさせる物だと理解したのだろう。

残念ながらそうじゃない……そうじゃない。

「自分が此処に来たのは、決闘が終わった後に才人への水の秘薬の使用許可などを貰いに来ました」

「……………ほ?」

理由を話せば、コルベール先生と共に顔を見合わせ呆気に取られたようだ。

それもそうだろう、今鏡に映っているサイトはルイズの使い魔で、ルイズと自分は親しいと判断されている。そんな自分が此処に来る理由を『決闘を止める為』と考えていても不思議ではない。

だが、残念ながら自分に決闘を止める気など一切ない。考えるのは終わった後の話だ。

「最初の時に才人はギーシユのゴーレムにお腹を思いつきり殴られています」

「そうじゃな」

「ギーシユも気絶させて終わらそうと本気で殴った筈です。腹部の怪我は酷い物だと思われます」

「それはそうじゃが……幾らなんでも水の秘薬はやりすぎじゃ？」

渋るオールド・オスマンを見て、これが演技なのか本気なのかどちらかは分からない。

つくづくこういう事には才能がないようだ。

しようがないのでいくつか考えていた正攻法を使うとしよう。

「良くて打撲、下手したら内臓を痛めています。ギーシユは知識や才能があつても『経験』は不足してますので……加減の仕方などわからないでしようし」

「ふむ……今は良くて、後で大事になると？」

「ええ……」

「それも理解はできるがの……秘薬を……ちと使うのは……」

自分の進言にオールド・オスマンは渋りを見せる。

オールド・オスマンは、平民に対して余り壁を作っていない人だ。

それでもここまで渋るのは、周りの反応を気にしてなのだろう。

高価な秘薬を平民の為に使った……それで周りが不審に思うのを避けたいのだと判断する。

「オールド・オスマンの言葉も分かりませんが、ここは使うべきです」というと……

「平民の才人に高価な薬を使ったという事は、それだけの『価値のある人間』と思わせることが出来ます」

「ふむ」

「あのオールド・オスマンが水の秘薬を使ってまで治したとなれば……才人の評価を周りも直しますよ」

「……………」

「それに……今回の事は学院の責任では？」

「いいすぎじやろ……第一これは使い魔君が先に手を出したと聞いておるが」

ああ……かかった。この言葉が欲しかった。

「ええ、ええ……才人が先に手を出したらいいですね」

「そうじやろ……学院の責任として取られるのはちと言い過ぎじやな」

オールド・オスマンの言葉に深く同意したかのように頷く。

それを見て少し安心したのか、ゆつくりと髭をなで始めた。

「だからこそ！学院の責任でしように」

「なんじやと？」

「昨日の儀式の報告でカリオストロと才人が、ハルケギニアを知らない異国の地の人間と報告が有った筈です！」

「まあ……それは」

チラッとコルベール先生を見て訴える。

確かにカリオストロを召喚した時にそう告げているし報告もお願いした。

二人で見つめているとコルベール先生は少し気まずそうに空咳を何度かした。

「た、確かにしましたな」

「そうですよね……しない筈ないですものね」

「むむむ」

当たり前と言わんばかりに笑顔を見せ牽制をする。

「異国の地の人間なら、常識も習慣も何もかもが違うでしょう。学院が才人やカリオストロから話を聞くべきだった筈です」

「それは……………」

「今回才人が手を出した原因は、常識が分からなかったからと言えませんか？」

「あー……」

「もしも学院が生徒に任せず、二人の話を聞いて此方の常識を説いていけばもつと穏便に済みますことが出来た筈です」

じとつとした目で見ればオールド・オスマンは動揺して視線を彷徨わせる。

悪いがこれだけでは終わらない、もつともつと言いたいことも欲しい物もあるのだ。

この決闘に託けて全てを貰おう。

「2〜3日ほど拘束しお互いに知識を共有すべきでしたね。ここで才人が亡くなったり重傷を負えば国際問題になりますよ?」

「子供の喧嘩で……ああ、いや……確かに此方が悪かったか」

言葉を続けようとして改め直す。

それもそうだ、その言葉の先を教育者が言っただけではないけない。

それにこれに関しては自分達にも責任がある。

昨日の晩にもう少し貴族の話をすべきであった。

しかし、そう言ったのは生徒に丸投げするのではなく、学院が責任もつてやらねばならない問題だ。

「才人の国を昨日聞いたのですが……人口は1億を越え、魔法はないものの、1秒間に何百発も撃てる銃があるとか」

「い、一億!?!」

「それに……銃を連発できると?」

「そんな所とトリステインが戦えばどうなるか……分かりますよね?」

その齎された情報に二人は、言葉を続けられず啞然とした。

それもそうだろう、なんせハルケギニアの人口を全部合わせた数と大差ないぐらいの人口の数なのだ。そんな国に攻められたら一溜まりもない。

「しかし……それは本当の事かの?」

「これ見てもらえますか?」

暫く待っていると冷静になったのだろう。

真意を問うてくる。

所詮は子供の言葉、嘘を言っている可能性もあると考えたのだろう。

昼休みに暇つぶしがてらルイズと遊ぼうと思って持って来ていた物を取り出す。

「なんじゃこれ」

「危機一髪という才人の国のおもちゃですね」

取り出したのは昨日の晩に遊んだ、『○髭危機一髪』だ。

「おもちゃ？」

「ええ……人形を樽の中に設置し『タ〜ル☆』……カリオストロ？」

おもちゃの説明をしているとカリオストロの声が聴こえてきて意識が逸れる。

何事かと皆でカリオストロへと視線を向けるとカリオストロはソファーに座り口を押さえていた。

「あく……あははは、なんでもない。なんでもないから続けて☆」

「あーうん、そうか」

何かを誤魔化すようなカリオストロに言われ、空気を戻す。

何故突如あんな事を言い出したのか判らないが、先に此方を説明しなければ。

「ごほん……人形を設置し順番に短剣を穴に差し込んで行きます」

昨日のように短剣を一つ一つ差し込んでいく、勿論人形は付属の人形で『姫様』ではない。

あれを他の人に見られたら自分の首が空を飛んでしまう。

「当たりを引けば……こうやって人形が飛ぶおもちゃです」

「ほ〜」

「これはなかなか」

遊び方を実演すれば二人は面白そうにその光景を見る。

「中々に楽しい遊びですが……これ問題があると思いませんか？」

「……………うん？」

両手を広げ、参ったようなポーズを取る。

これ位の問題はこの二人なら軽く解けるだろうし、説明するより理解が早く進む。

「そうか……穴の位置を覚えてしまえば!!」

「コルベール先生、正解です」

「むむむ」

指を鳴らし、目を輝かせてコルベール先生が答えた。

嬉しそうな先生とは逆にオールド・オスマンは悔しそうだ。

なんとかいうか、ノリがいいな、この人達。

「そう……最初は自分もそう考えました。1度当たりを見つければ次は当たらないと……しかしですね」

もう一度人形を差込み、先ほど当たった穴へと差し込む。

人形はピクリとも動かなかった。

中の仕組みが動き、当たりの位置がズレたのだ。

「これは……」

「どういうことじゃ……魔法は使われておらんようだが」

「すごいですよね……魔法も使わずにこれほどの技術をおもちゃに入れたんですよ」

驚愕する二人に説明を差し込む。

今思えば、このおもちゃは良く出来ていた。

子供のお小遣いで買える物にこれだけの技術が詰め込まれている。

「これが子供のおもちゃなんです。……才人の国では」  
「……」

オールド・オスマンは震える手でおもちゃを取り、厳しい目で見る。  
ゆっくりと手で触れ、材質などを確認するかのようにあちこち見て触る。

「1度……才人と話し合うべきです」

「そうじゃの……機会を作ろうかの」

真剣な表情で頷き合う。

これでようやく話を進められる。

「つきましては……学院の監督責任で学院の負担で水の秘薬を使用」  
「うむ」

オールド・オスマンが深く頷く。

「水の秘薬を使っても油断は出来ませんので2〜3日ほど安静にして

もらう為にメイドを一人貸してもらいます」

「分かった、話を付けておこう」

ルイズは看病なんてしたことないだろうし、貸してもらわなければいけない。

「あと明日には、生徒達に才人とカリオストロの説明お願いします」

「……先生達を納得させてからでいいかの？」

「なるべく早めをお願いします」

出来れば直ぐにでもしてほしいがこればかりはしょうがない。

我慢して次に進もう。

「才人とカリオストロの生活費の負担に」

「……うむ、うん？」

『フェニアのライブラリー』の閲覧許可と……それに」

「ちよ、ちよっと待つんじゃない？」

「何か？」

一体何を慌ててるのだろうか。

先ほど才人の国の危険性を説いたばかりだ。

変なところなど一つもないだろうに。

「まあ……生活費は分かった……しかしだ。閲覧許可は……」

「何を言ってますか、もしも才人の国がやってきた時のポーズになりますように」

「ポ、ポーズ？」

「才人を返す手段をしっかりと探してました！と言い張れるじゃないですか」

「……………」

「それに他の先生達が平民の才人の帰る手段を真面目に探してくれませんか？」

「ムリじゃな」

コルベール先生ならまだしも、他の先生方も典型的な貴族だ。

平民の為に帰る手段を研究しようと思わないだろう。

危険性を説けば、最初こそ真面目にやるかも知れないが後々『何故私が平民の為にっ！』とでも思って放棄するに決まっている。



なら最初から期待せず、此方で自由に調べられる方がよっぽどましだ。

「ということできません？」

「か、考えさせてくれないかの？」

「……………分かりました。それでは他の件をお願いします。決闘も終わったようなのでコルベール先生、水の秘薬を持って広場の仲裁に行って貰えますか？」

「分かった、学院長」

「うむ、任せた」

「それでは自分はこれで」

最後にしっかりとお辞儀をしてからカリオストロを連れて出る。

ここでの目的は達成できた。

しっかりと次の策の準備を終えたことにほっとしたら、汗が吹き出る。

やはり、こう言った交渉など人を相手にすることは苦手だ。

「中々やるじゃないか」

「好評でなによりで……………だいぶ洩られたけど」

横でからかうように笑うカリオストロに困ったような表情を向ける。

たった数分の出来事なのに心臓がバクバクと鳴り汗が噴き出す。

「別にいいんじゃないかな☆」

「うん？」

「本当に恩を売ったかった人には売れたんだし☆」

「……………」

カリオストロの言葉に答えられない。

いつだ、いつからこの少女は気付いていたのだろうか。  
自分が欲しかった物を……。

「いつから気付いてた？」

「交渉の最中、数多の件を突っ張られたのに嫌な顔をせずに頷いた時かな☆」

「……………」

「此方はあくまで正論を言っていたんだ、もうちよつと強めに出ればその場で許可を得れただろうに」

カリオストロの言葉が次第に素に戻っていく。

それを何も言わずに大人しく聞き入る。

と言うか、言いたくない……自分が何故このような交渉をしたのかを。

「結局得れたのは……サイトの治療と待遇の改善。誰に恩を売りたかったか一目瞭然だな」

「……………」

ニヤニヤと笑うカリオストロを見て理解した。

この少女は全てを理解していると。

「なあ……………」

とんとカリオストロに押しられ背中が壁へとくっつく。

見れば、カリオストロが自分のお腹辺りに抱きつき押し込まれていた。

「なあ……………誰に恩を売って、お前は何をしたかったんだ？」

「……………カ」

視線を下に向ければ、妖艶な笑みを浮かべるカリオストロと目が合う。

その瞳は好奇心と少しばかりの淡い願望に染まり綺麗に輝いている。

ごくりと唾を飲み込み、少しばかり震えた声で言葉にしようとする。

「カ……？」

「はあ……………分かった、分かったよ。売ったのはルイズにだ。どうして

かと言われればカリオストロの為だ。これでいいだろう」

「ふふーん♪そうか、そうか……オレ様の為か」

これ以上飲み込まれないように一息で言い切る。

少々不貞腐れたように拗ねる表情を作るも、カリオストロは満足げに目を細め楽しそうに笑う。

「カリオストロの容姿は……完成されているものだ」

「当たり前だ。オレ様が一番可愛い！」

「だからこそ、狙う貴族は数多い」

平民の綺麗な子を無理矢理、自分の物にする貴族も居るのだ。

カリオストロほどになれば手を出さない訳がない。

「俺は男爵家の次男坊……少し上の奴に寄越せと言われたら渡すしかないしな」

「……………」

その際に暴れて拒否してもいいが、そうなると後が面倒になる。

家族にも迷惑がかかり、命も危険だ。

「だから……ルイズに恩を売り、『ヴァリエール公爵』の名を借りる。それが今回の目的だ」

才人の待遇改善？怪我？そんな事どうでもいい。

ライブラリの閲覧許可も、欲しいが機会は幾らでもある。

お金も色々和金策をしており、そこそこは貯まっている。

だからこそ、欲しかったのはカリオストロを守れるだけの『後ろ盾』。

それを得るのが今回の目的であった。

「だが、これだけで領くのか？仮にも公爵家だぜ？」

「ルイズの手紙と一緒に手紙を出す。そうすれば絶対に読むだろうし……あちらには貸しがあるんだ」

「貸し？」

「そう、貸し。まあ少々無理な事言われそうだけど……なんとかする  
や」

深い深いため息をついて窓の外を眺める。

どうしてこうも生きるのに色々な枷をつけないといけないのだから

うかと。  
空を飛ぶ鳥を眺めそんな事を思った。

十二話：こういうのも悪くないか、悪くない

「授業が始まっていますよー！」

広場に行くとコルベール先生の声が聴こえる。

生徒達は先生の声に従い、犬に追われる羊達のようにいそいそと戻って行く。

(これで決闘の件は問題ないかな)

決闘の件で生徒達は、肅清を望んでいた。

しかしだ、蓋を開ければ才人は奮闘し引き分けとなる。

これに不満を持つ者も多いだろう。

不満を持ったらどうするか？決闘を挑む？ギーシュとあれほどの戦いを見せた才人に？

それこそナンセンス。

戦いの『たの字』も知らない学生が敵う相手ではない。

平民に負けたとなれば学生生活も、お先真つ暗となる。

故に、才人に何も言えず、しかし誇りが故に認められず棒立ちとなる。

だからこそその先生の仲介。

目上の人、それも教員者の仲介があり言われれば逃げ道となる。

今回の事で才人は『腫れ物』扱いはされるだろうが、まあ良い結果とも言えた。

「結構派手にやったな」

「あー……ウイルか」「参ったね。君にも見られていたか」

寝転び治療を受けている二人に声を掛ける。

才人とギーシュは、お互いに大の字となり仲良く並んでいた。

これも青春の1ページとなるのだろう。

「ウイル！カリオストロ！」

「やあ、ルイズ……と昨日のメイド？」

「はろー☆」

才人の隣に居るルイズに声を掛けられ、後ろをうろろと歩いていくシエスタに視線が行く。

ルイズは涙目でシエスタは、才人が心配だが貴族が多いのでどうしようかと言った所か。

「えっと……君の名前は？」

「シシシ、シエスタでしゅー！」

名前を知っているが、聞いてみる。

シエスタとは特別に交流したわけでもなく、知らない間柄なのだ。ここで何故知ってるのか聞かれるのも面倒でミスをしたくない。

驚かさないうように優しく投げかけるもシエスタは涙目で舌を噛んだ。

『……痛い』と呟き舌に手を当てている。

なんというか、仕草といい可愛らしい子とだなと思った。

同時にこれから彼女に迫られる才人を羨ましく思う。

自分であれば、迫られたら手を出してしまえそう。

ルイズといい、シエスタといい、此方の世界の女性は容姿が素晴らしい。

声も良ければ、容姿、性格、家柄と全てが完璧だ。

生前に彼女や結婚などに興味がなかった自分でも心が惹かれた。

「……シエスタか。君は才人と仲が良いのかな？」

「あのっ、えっと……す、少し前に会いました……ほ、ほかの子達に比べれば……」

才人の介抱の件もあり、渡りに船かと思いついて見れば。

シエスタは顔を真っ赤にさせ、チラチラと才人を見ている。

なんという判りやすい態度、才人よ手が早過ぎないだろうか。

いや、貴族が絶対とされた世界の中で果敢に貴族に立ち向かう才人……憧れるのもまた『真理』か。

「なら丁度いい、才人の介抱をしてくれるメイドを探していた所でね。君がしてくれないかい？」

「わ、私ですか!？」

「そう君が。オールド・オスマンに許可も頂いているから問題もないよ」

『それで構わないよね』と視線をルイズへと向ければ、ルイズも意図を

読んで頷いてくれた。

以心伝心、少しの事なら視線で判ってくれる友人に恵まれ嬉しい限り。

「どうかな?」

「ぜ、ぜひお願いします!」

軽く微笑み聞けば、シエスタが大きなお辞儀をして答えてくれた。大き過ぎて、頭のカチューシャが落ちて慌てて拾い上げる事となり慌てだす。

巨乳+ドジっ子メイドか……才人が羨ましい。

「勝手に決めてすまない。ルイズ」

「ううん、私じゃ思いつかなかっただろうし、ありがとう」

シエスタとの会話も終わり、ルイズへと声を掛ける。

無邪気な可愛らしい笑顔に笑顔で応えつつも胸がチクリと痛む。

今回の結果は、副産物だ。

ルイズに恩を売る為に行なった事で、罪悪感で素直にお礼を受取れない。

視線をルイズから逸らし、地面を見て、治療してもらっている才人を見て、空を見上げる。

「……あー……なんだ。俺としてはルイズにしてみらいたい事があつてな……その」

暫し悩むも結局の所、素直に話すことにした。

このまま抱え込むと後で思い出し、うじうじと悩むと生前で経験済みだ。

それならいつその事、素直に話そうと思った。

「くすっ、判ってる。何をすればいいの?」

罰悪そうに頬を指で掻き視線を逸らし言えば。

ルイズは、きよとんとしてから口に手を当て上品に笑い、受け入れてくれた。

なんとというか、ルイズの器が広すぎないかと思う。

普通『恩を売る為にやりました、だからこれやってね』と言われて直ぐに納得出来るだろうか。

自分だったら嫌な気持ちになり、素直に受け入れられない。それなのにルイズは受け入れ、笑顔で応える器がある。

自分とは違うなと少しばかり苦笑する結果となった。

「ヴァリエール公爵に手紙を出して欲しい。些細な事でもいいから君の手紙を」

「うん」

「その時に俺の手紙も一緒に送ってくれ」

「判ったけど……何を頼むの？」

昨日の晩に書いておいた手紙を懐から差し出しルイズへと渡す。

手紙を渡せばルイズは受け取り、不思議そうに首を傾げた。

「カリオストロの事で『名』を貸して欲しいと」

「あー……あの容姿だものね」

「ああ……あの容姿だから」

お互いに視線を合わせカリオストロへと視線を向ける。

カリオストロは魔法に興味津津なのだろう、才人の隣で治療の様子を見ていた。

ついでに隣に居たギーシュに下着を見られてるけど……構わないのだろうか……あ、蹴った。

「流石に上の人等に言われたらな」

「まあ、抗えないわよね。判ったわ、お父様に私からも言ってみる」

「ありがとう、ルイズ」

感謝の意味も込め、頭を優しく撫でるとルイズは大人しく目を細め気持ち良さそうに頬を緩めた。

ルイズの髪はしっかりと手入れされているせいか、触り心地が良く、撫で心地が良い。

なんとなく飼っていた猫を思い出す。

「あとは……ルイズが通っている仕立て屋の位置と紹介状をお願いできるか？」

「いいけど……結構いい値段するわよ？あそこ」

「それはなんとかする。オールド・オスマンから才人とカリオストロの生活費が出るから場合によっては負担してもらおうさ」



最後のお願いを告げ、手を離す。

「才人、動けるか？」

「あー…無理すればなんとか」

話を終えると丁度才人の治療も終わる。

去っていく治療してくれた先生に頭を下げてから才人へと視線を向けた。

治療を終えた今でも才人は寝転がり、少し体を起すと辛そうだ。

「魔法で運ぶから動かなくていいぞ」

「いいのか？」

「怪我人に歩けると言えるか」

「判った、ありがとう」

『レビテーション』を唱え才人を浮かせた。

「それとギーシュ……かつこよく振られとけよ」

「かつこよくか……そうだね。かつこよく振られてくるか」

最後にギーシュへと視線を向け、言い忘れていた事を伝える。

何があるうと原因はギーシュの女癖だ。

傷つけた責任取るべきだろう。

「あー……それと才人を救ってくれてありがとう。モンモランシーのフォローはしとく……」

「本当かい……!!」

決闘の原因でもあるが、才人を救い、今回の交渉の結果を作り出した1人だ。

フォローの一つでもしておくべきだろう。

モンモランシーには、朝にカリオストロを口説いた件を話せばいいだろう。

可憐なカリオストロより自分を選んだ。

プライドの高いモンモランシーなら、それだけで問題ないと判断する。

「それじゃな。先生……才人を連れて行かないと行けないので俺達はこれで」

「ああ、先生方にも伝えておくよ。君達はそのまま今日は休みなさい」

教室に戻るギーシュとコルベール先生に挨拶をしてその場を去った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「それで……どちらの部屋にするの?」

「あー……俺の部屋かね。お風呂もトイレもあるし、才人は動くのも辛そうだしな」

「ルイズの部屋じゃ駄目なのか?」

「無理ね。私の部屋3階だもの……苦痛で呻きたいって言うなら構わないけど」

ぷかぷかと浮いた才人を運びながら部屋へと向かう。

その最中に何処へと向かうのかを聞けば考えてなかったらしい。

変な所で抜けてる奴だ。

「大きなベッドはルイズとカリオストロ。才人は、裏にあるベッドを運んでそこで……俺はまたソファアで寝るよ」

「なんか悪いな」

「そう思うなら、うかつな行動は慎めよ」

「うゝっ」

疲れた様子でウイルが眩やき、才人が突っ込まれる。

才人の態度にこれは、またやらかすなと思った。

これは判ってない態度だ。

間違いを二度犯す人間のそれだ。

「ちよっと待ってろよ」

「おう」

部屋に戻ると才人をソファアに寝かせ、ウイルは裏へと引っ込む。

大きなベッドの裏には暗幕があり、その後ろへと入っていくので付

いていく。

「へー……」

「なんだ、付いてきたのか」

「あつちに居ても暇だもん☆」

暗幕を潜れば、部屋の残りの半分が姿を見せた。

4つの大きな本棚が並び、その置くにはL字型のテーブルが置かれている。

テーブルの上には様々なフラスコや中身が入っており、いかにも研究をしていますと言わんばかりに置いてある。テーブルの横には、薬品や草などが納められている棚が幾つかあり、その棚の横に一人用のベッドが鎮座していた。

そのベッドを魔法で運ぶウイルを横目に本を一つ取り出し開く。

中にはミミズが這った様な文字が続き、読めない。

(そういえば……此方の文字を覚えないな)

「あー……文字は流石に読めないか？」

「戻ってきたの？」

文字を覚えようと考えていると後ろから覗き込むように格好でウイルが立っていた。

ベッドの方を運び終わり、暇にでもなったのだろう。

「文字教えようか？」

「……基礎だけお願い、後は自力で解くから☆」

「判った」

ウイルの言葉に頷き、基礎だけ教わる事にした。

全てを教えてもらってはつまらない。

苦労した方が良く覚えられ、解ければ楽しい。

研究が再開できるまでの間の暇つぶしにもなる。

椅子に座り、ウイルが持ってきた本を見る。

本には、剣を持ち竜に立ち向かう少年が描かれていた。

物語の類の話と判断する。

「なんて題名だ？」

「これは『イーヴァルデイの勇者』だな。平民に人気な物語」

「へ〜……」

「文句言わないんだな」

「ああん？文句言う筈ないだろ。たかが物語、されど物語。伝承や絵本の類だつて立派な書物だ。中に隠された意味を読み解くのもまた一興だ」

そう、こう言つた物は馬鹿に出来ない。

深い意味が隠されている事も多々ある物だ。

「それじゃ、読んでくれ」

「判つた……」

ウイルが読み、文字の一つ一つを丁寧に教えていく。

それを頭に叩き込み、同時に物語への中へと入つていった。

「これでお終い。文字の方は大丈夫か？」

「問題ない、なるほどな……『イーヴァルデイの勇者』か……中々に楽しめたな」

物語を読み終わるとそんな感想を抱く。

竜相手に剣1本で立ち向かい勝利する平民……なんともまあ……才人のようではないか。

竜を貴族に例えればまさにそうだ。

（まずは……この物語が何時頃から読まれているのか、次に作者と……）

様々な情報を頭の中で整理し真理を読み解く。

流石に情報が少ない為、得られるのも少ない。

今後の研究の一端として読み進めていこうと思ひ表紙を撫でる。

「そういうえば……ウイルは、どんな研究をしてるの〜？」

「あー……」

研究という言葉で思い出し、聞いてみる。

聞けばウイルは、眉を潜め腕を組み呻り始めた。

何かあるのだろうか。

「森の奥とかの珍しい植物とか鉱石を拾ってきて、どんな効果があるか、どんな役割として使えるかとか……そういうの地味に調べてる」「ふくん……まあ普通だね☆」

なんとも言葉に困る回答に素直に答えれば、苦笑しつつ『普通だろ』とウイルは答えた。

「残念ながら今の俺にはこれが精一杯。コルベール先生見たいに閃きと才能なんてないからね」

「コルベール……ああ、あのハゲ頭の」

ウイルが出した人物を思い出し、眉を潜める。

どうやらあの人物も研究者らしい。

そこまで言葉にするとウイルは研究を始めるのか、ガチャガチャと器具を動かし、草を煎じていく。煎じた草を他の液体に混ぜて反応を見ては記録を取り、火に掛けて反応を見ては記録を取る。

その様な行為を何度も何度も根気よく続けていった。

その様子を椅子に座り、文字を解読しつつ横目でたまに見る。

時間を過ぎてもウイルのやる事は変わらない、劇的な変化が起きるわけでもなく、淡々と成果が得られず進む。それでもウイルは楽しそうに面白いとばかりに表情を変えて行く。

(……そういえば、他の奴等の研究している所を見たことなかったな)

横目で見つつそんな事を思い出す。

常に一人で孤高の存在として君臨していた自分。

他人などに興味はなく、ひたすら真理を追い求めた自分。

そんな自分が今では、こうやって他の人と関わりを持つようになってる。

それが少しばかりおかしく、軽く笑う。

ウイルの研究の様子を見るにど素人のそれ、才能の欠片もなく、人生の全てを研究に捧げて1度大当たりするかしないかの才能。

きつと悠久に生きる自分にとってたった100年程度の付き合い。

それでも……

「こういうのも悪くないか」

たまには人と関わりを持つこともいいかも知れない。

ただひたすらに努力し天才を見上げる凡才を見てそんな気持ちを抱いた。

辺りが暗くなり、月の光を背に本を読み、ウイルの様子を伺う。

カリオストロの異世界での二日目はそうやって幕を下ろした。

### 十三話：ドキッ！地雷だらけのアトリエ！

突然だが、この学院には関わりたくない相手が二人ほどいる。

1人は——『キユルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー』

ゲルマニアの留学生で燃えるような赤毛と健康的な小麦色の褐色肌で体型も出ている所は出ているという、大変魅力的な女性。

ゲルマニアの学校に通っていたがトラブルを起こし退学になってトリストインへ。

噂では、政略結婚をさせられそうになり此方に逃げてきたとされている。

本人に聞いても『ゲルマニアの男に飽きたのよ』と言ってはぐらかされ真意は不明。

むしろ言った言葉が真実なのかもしれない。  
性格はサバサバしており、姉御肌。

友人としては付き合ひやすく、彼女とするなら遠慮したい人である。

関わりたくない理由の一つは、彼女の男癖の悪さ。

キユルケは、気に入った男性生徒を誘惑して何人もの、男性と付き合っている。

多情な女性で熱しやすいが冷めやすく、誰も長続きはしない。

そんな彼女の為、周りには常に男性を侍らせトラブル関係も多い。  
言ってしまうと、『女性版ギーシュ』と言った所か。

関わりたくない理由のその2は、彼女の家系にある。

彼女の実家のツエルプストー家はルイズの実家ヴァリエール家とは領地が国境を挟んだ隣同士で、先祖が幾度も戦いを繰り返してきた上に、ツエルプストー家がヴァリエール家の恋人を奪ったという事例がいくつもある仇敵同士の間柄。

ルイズと仲が悪く……いや、一方的にルイズが遊ばれているだけだが。

ヴァリエール家と交流を持っている自分としては仲良く出来ない

相手である。

それ以上にぐいぐいと迫ってくる肉食系の女性が苦手と言うのもあった。

関わりたくない理由その3は、ルイズの機嫌が悪くなる為。

前に1度、お茶をしている時に話を掛けられたので一緒にお茶をした時があった。

キュルケの誘いを何度も断っている為、彼女も自分に興味があつたのだろう。

ついでにルイズと仲が良い事も理由として挙げられる。

『ねえ……今晚、一緒に熱い夜を過ごさない?』

『はあ……』

身を乗り出し、顔を近づけるキュルケにため息が出る。

顔は息が掛かる位に近く、視線を下げれば豊満な胸の隙間がよく見える。

何処をどう見ても誘惑されてるのが判る、でもこれに引つかかる男性が多いことは泣ける。

自分自身女性に興味がないこともない、しかしキュルケだけは勘弁したい。

『何してるのよ』

『はあ、いい、ルイズ♪』

『何って……お茶をしてるだけだな』

そんな事を思っているとルイズがやってきて場が急変する。

ルイズの事だから、激怒し大声を出す物だと思っていた。

しかし、ルイズの行動は意外にも意外で冷めた表情となり淡々と言葉を紡ぎ出す。

表情も能面のように無表情となり、静かに怒るルイズにキュルケと共に身の危険を感じ引いた。

『そ、それじゃ……私はこれで……おほほほ』

『ちよ!?!』

『ねえ……何してるの?』

キュルケは冷や汗を垂らし、早々に逃げ、自分も逃げようとするも



ルイズに服を捕まれ逃走が出来ず。淡々と言葉を吐き出すルイズに脅えながらも落ち着かせ、後日王都でクックベリーパイを奢りどうにかなった事がある。

それ以来、キュルケと自分の間ではルイズの前で親しくしないと暗黙の了解が出来た。

そんな事があったからキュルケとは関わりを持つことはないと思っていた……思っていた。

「あっちに行きなさいよ!!」

「いやよ、ペたんこルイズがあっちに行けばいいじゃない」

「……………ナニコレ」

「……………」

教室から戻り、部屋に戻ると修羅場がそこにあつた。

自分の目の前には、才人を挟みキュルケとルイズがにらみ合っていた。

キュルケは才人を抱きしめ、ルイズが才人の手を引っ張っている。

シエスタはその後ろでオロオロと慌てている。

才人は……胸を顔に当てられ嬉しそうだ、ほつといてもいいかも知れない。

「カリオストロ」

「なにー?」

取り合えず、何が起きているのか聞く為にソファで寝そべっているカリオストロへと声を掛ける。カリオストロは、気だるげに本から視線を外しこちらを見た。

カリオストロは、袖が肩口までない白い『フレンチ・スリーブ』に紺色の『フレアスカート』を着用している。普段の飾りが多いごたごたした服ではなく、ラフな格好であるが彼女の魅力は失われていなかった。スカートと『オーバーニーソックス』の間から見える『絶対領域』が素晴らしかった。

「アレは何がどうなってるんだ?」

「んあ……ああ、アレか」

「アレだ」

顎を少しばかりくいつとルイズ達の方へと向ける。

「なんでも才人に惚れたんだとよ」

「……………はあ」

期待通りの答えが帰って来てため息をついてしまう。どうせキュルケの事だ。

トリステインの男性に飽きた所に昨日の決闘騒ぎ…………果敢に立ち向かう才人に情熱が向いたのだろう。どうせ直ぐに飽きる癖に思うも口を出し飛び火が来るのは困る。

ここは才人に任せて研究でもしよう。

「……………」

「……………」

そんな事を思い暗幕を潜り研究室へと赴くと1人の少女と目が合う。

テーブルの前の椅子に座り込む青い髪をした少女。

この学院において一番関わりたくない少女——タバサは座っていた。

タバサはキュルケと親友の間柄であり、居るとは思っていた。

居て欲しくなかったが…………。

「……………読んでる」

「ああ……………そうか」

勝手に人の本を読んでもことに対してか、タバサは本を掲げ見せてくる。

別に本を読まれるのは構わないのだけど…………正直関わりたくない、すつごく関わりたくない。

綺麗な濃い青色の髪に140 سانت位の小柄な身長、目が悪いのか眼鏡をしており大きな杖を持っている。この少女の何処が嫌かって言う…………目立つ青色の髪だ。

ハルケギニアでは、様々な色の髪を見ることが出来る。

青、赤、水色、金色、黒、白、紫……………本当に多様多種だ。

そんなハルケギニアで青色は特別な髪の色となっている。なにせ、濃い青色の髪の毛は『王家ガリアの特徴』なのだ。青色が濃ければ濃いほど王家に近い血筋をしていると言っている。そして目の前の少女の髪の色は……濃い青だ。タバサと言う犬猫につける名前を名乗っている時点で偽名と判る。更にガリアからの留学生。どう見ても『やんごとなきお方』であった。

それでタバサは一体何者かと言われれば簡単に推測できる。現状に置いて『純粋なガリア王家の者』は4人のみ。

1人は『ガリアの王ジョゼフ』、そしてその娘の『イザベラ王女』。残りの二人は、ジョゼフの弟のシャルルの夫人である『オルレアン公夫人』、そして……最後に

(シャルル様の忘れ形見……『シャルロット・エレヌ・オルレアン』)その人である。

シャルロットに辿り着くのは単純な除外で解決できた。

ジョゼフ王は男性で除外、オルレアン公夫人は病に伏せている上に年齢的に合わない。

次は、イザベラ王女なのだが……彼女はそれなりの頻度でお見かけすることもあり、何度か見ている。姿は似ているものの、その時のイザベラ王女は眼鏡を着けておらず、身長も違った。

故に考えられるのは1人のみとなる。

(シャルル様は、事故で亡くなったと聞くがどう見ても暗殺の類、しかも夫人は謎の病に侵され伏せている。陰謀の匂いしかしかない)

王家のごたごたに巻き込まれるのはごめんだ。

ただでさえ、ヴァリエール家の厄介事を抱えている身、これ以上負担は避けたい。

というか間違つても男爵家の次男坊が首を突つ込む話ではない。

「取り合えず……本を読むのはいいけど、横に退いてくれないか?」「んっ」

テーブル前から退くように進言し研究を開始する。

決して現実逃避ではない……ない。

棚から必要な素材を取り出し、何時ものように研究を開始する。

「……………」

「……………」

「なあ……………本を読むならキュルケ達の所とかどうだ？」

「……………」

研究を開始するもタバサに後ろから見つめられ嫌な汗を掻く。

親友であるキュルケのほうへと誘うも首をふるふると横に振られる。

結局の所、タバサに見られながら研究を進めることとなり、あまり成果は得られなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「離れなさいよ!!」

「いいじゃない、恋は人の自由よ？」

(まだやってやがる)

既に2時間もの間、才人を引つ張り合い罵り合っている。

最初こそ引き裂かれる才人に笑い煽っていたが、いい加減飽きた。

見るのも聞くのも飽きて本を読み始めたが、二人の声が喧しくうんざりとなる。

本を顔から引き離し胸に置き、サイト達を見る。

才人は困り顔でありながらも嬉しそうにしでレレレとしていた。

(シエスタは……………いねーのか)

飲み物でも貰おうかと思いいどりを見渡すとシエスタの姿はない。

飽きたのか呆れたのか……………外へと出て行ったようだ。

「……………」

「あつちいけー！」

「い・や・よ」

お腹が鳴る。

既に外は暗く夕食時には丁度いいだろう。

ウイルを誘い食へに行くでしょう。

「ウイルー、夕食いこうぜ」

「あー……カリオストロ？……もう、そんな時間か、判った」

暗幕を潜り、ウイルへと声を掛ける。

自分の声に振り返ったウイルは何処か疲れた表情で憔悴しきって  
いた。

此方も此方で面倒な目に合っていたみたいだ。

人形のように動かない少女を見てそんな感想を抱く。

「……タバサも来るのか？」

「……………」

後片付けをした後に外へと出ればタバサと呼ばれた少女も付いて  
くる。

その事にウイルが更に疲れたような表情で問えばタバサは軽くお  
腹を擦った。

お腹が空いたのだろう。それにしても本当に喋らない奴だ。

「……キュルケはいいのか？一緒に食事とかどうだ？」

「いい」

「そうか、そうかー……」

タバサの短い一言でウイルがガツクリと肩を落す。

それほどにこの少女が嫌なのかと不思議に思う。

結局の所、学食手前でタバサと別れ席へと着いて食事を始める。

「あいつ……厄介事か？」

「特大級の地雷」

食事を進めながら先ほどの少女の話を切り出す。

あれほどに嫌がるのだ、何かしらあるのだろうと思うとやはりあつ  
たらしい。

「たぶん、ガリアの王族」

「あー……なるほど、それは厄介だな」

王族関係者か……確かに厄介事の匂いしかしない。関わりたくないと思うのも仕方がないことである。

「あつ……次はそれお願い☆」

「……いい加減自分で食べてくれないかな」

「や・だ☆キャハ」

「はあ……」

膝の上で座り、手を使わずとも口に運ばれてくる。

こんなに便利なのだ、使わない手はない。

暫しの間、ウイルと雑談を重ね食事を終えていった。

「ウイル！誘ってくれてもいいじゃない！」

「お取り込み中だったしな」

「タバサも！」

「……………」

食事を終え戻ってくるとルイズと赤髪の女性にそれぞれが文句を言われる。

見れば喧嘩は終わったのか、テーブルの上のサンドイッチを才人と3人で食べていた。

「あー……何か住み着いた」

「あの子、本好きだから」

文句を言う二人を無視しタバサは奥へと引っ込んでいく。

それをげんなりとした表情でウイルが見送り、赤髪がヤレヤレとばかりに首を振った。

「たぶん、全部読むまで来るわよ？」

「引き取ってくれ、ルイズと才人とカリオストロでいっぱいだ」

「やーよ、あの子本を読む邪魔すると怒るもの」

王族の娘に公爵家の娘、ルイズと因縁を持った娘……何と言うか賑やかで地雷だらけで踏み場もない。自分の主人に軽く同情の念を抱く。助ける気はこれっぽっちもないが。

幸いと言えばキュルケと呼ばれている少女が才人にほの字と言うことだろう。

これでウイルが惚れられていたら、どうしようもない。

「そういえば……お父様から手紙が届いたわよ」

「早いな」

「あー……うん、早いわね」

食事を終えルイズが口元を拭きながら手紙を差し出してくる。

それをウイルが受取り、中を開き目を通していった。

目を通していたウイルを眺めていると何やら眉がどんとどんと眉間に集まり困惑の表情となった。

「なんだ、何かあったのか？」

「……………」

手紙の内容が気になり見ようとすると身長差でまったくもって見えない。

しようがなく、腕をぐいと引っ張ればウイルが下へと手を下ろした。

「どれどれ……………」

『名の件は承諾した。虚無の日に王城へ来るように』

「……………」

「……………」

読み終わった後にもう一度上から読み直す。

何度読んでも内容は変わらない。

「良かったじゃねえか……王城に入れるぜ？」

「いやだ……絶対厄介事だ。地雷だ」

がつくりと肩を落とす、落ち込むウイルにニヤニヤと笑いながら背

中を叩く。

どうやらまだ暫く暇つぶしに事をかかないようだ。



## 十四話：ここに旗を立てよう

「っ……………!!」

『フライ』

1人の金髪の少年が攻撃を避けられ舌打をした。

綺麗に決まる筈だった一撃は、跳んで避けられた。

バク転の要領で跳んだ黒髪の少年は、空中で不自然に止まり天地が反転してる状態でくると横に回転する。回転すると黒髪の少年の付けていた籠手から伸びる50 سانتばかりの刃先がゴーレムの首を跳ね飛ばす。

「ああ……………まったく！型破りな！」

「こうでもしないと勝てないしな」

空中で止まっていた黒髪の少年が体を戻し、地面に着地する。

『鍊金』

小さな声で呟き軽く手を振ると籠手から伸びていた刃先が綺麗になくなり通常の籠手へと戻る。

それを手を開きは閉じ、何度か確認してから両手を胸の前に掲げファイティングポーズを取った。

「そういえば…………そのポーズをサイトもしていたね。流行ってるのかい？」

「すぐに拳を打ち出すには丁度いいからな。他の国で思いつく人が居ても不思議じゃないだろう」

「それもそうか…………いけっワルキューレ！」

暫く会話を続けた後に、残りのゴーレムが黒髪の少年へと送る。

金髪の少年がバラを振りゴーレムを手先の様に操り、油断なく迫らせる。

黒髪の少年は、横から前からと様々な角度で迫ってくるゴーレムを落ち着いた様子で眺める。

近づいて来るゴーレムを眺めた後、黒髪の少年は軽くその場でタントタンツと小さなステップを刻む。

そのステップを見て金髪の少年は眉を潜め、ゴーレムを数マイル手

前で停止させ様子を見る。

暫くの間、両者に会話はなく、黒髪の少年が刻むステップの音だけが周りに響いた。

「見ていてもしょうがないか」

先に動いたのは、金髪の少年だ。

目をしっかりと黒髪の少年に合わせ、一つの動きも見逃さないとばかりに睨み、ゴーレムを動かす。

槍を持ったゴーレムが牽制とばかりに軽く突きを繰り返す。

突きは、深くなく、小突く程度のもので軽いものであった。

それでも避けない訳にも行かず黒髪の少年は、後ろへとバックステップをした。

「それを待っていたよ！」

「!!」

金髪の少年は後ろに大きく避けた黒髪の少年へとバラを向けた。

『クリエイト・ゴーレム!!』

呪文を唱え魔法を放つと黒髪の少年の後ろに新たなゴーレムが作り出された。

新たに作られたゴーレムは、両手を伸ばし黒髪の少年に掴みかかる。丁度よく後ろに跳んだ所にゴーレムを作成したのだ。

バックステップで避けた黒髪の少年には距離的にも物理的にも避けられない、その筈であった。

『』

「はあ?」

小さく呪文を唱えた黒髪の少年がゴーレムに捕まる手前でピタリと停止し、空中を前へと滑空し一瞬の内に槍を持ったゴーレムの前へと詰め寄る。

詰めた瞬間、黒髪の少年は拳をゴーレムに叩き込み、先ほど同様呪文を口にする。

その瞬間、ゴーレムがビクンと動き、胸から背中へと一本の大きな針が突き出てくる。

『鍊金!!』

唾然とする金髪の少年を気にせず、黒髪の少年は呪文を唱え針を籠手に戻すと振り返り様、近くに居たゴーレムの腹を思いつき蹴り上げる。

通常であれば全てが青銅で出来ているゴーレムが人間の蹴り位では吹き飛ばない。

『フル・ソル・ウィンデ……—』

しかし、この場では違った。

蹴りを叩き込まれたゴーレムは、派手に吹き飛び、10メートルほど吹き跳んだところで地面に転がり無残にもバラける。

「ふう……どうする?」

「あ……」

足をゆつくりと戻し、金髪の少年へと問いかける。

問いかけられた少年は、呆然としながらも辺りを見渡す。

10メートル先には先ほど吹き飛ばされバラバラになったゴーレム。

目の前には胸に穴が空いたゴーレムが、その後ろでは首を飛ばされたゴーレムが転がり、更にその後ろには何も持って居ない無傷のゴーレム。

「ん……っ。負けだ。降参」

「そうか」

暫し悩むも結局は両手を挙げて金髪の少年——ギーシュは降参をした。

「それで……あのサイトみたいな速い詰め寄り、一体何をしたんだい?」

「ああ……あれか……あれは『フライ』の呪文を唱えて空を飛んだだけ」

朝の鍛錬も終わり、お互いに汗を拭きながら先ほどの戦闘を思い返す。

最初にウィルに聞いたのは、サイトの様な速さを持つ詰め寄り方だ。

普通の人間があればどの速度で動けるなんて思いもしなかった。

『フライ』……か、考えつかなかったな」

「サイトを見て参考がてらに……結構使えるかも」

「ライトネス軽量じゃ駄目なのかい？」

『ライトネス』は、体を軽くするだけだからな。『フライ』のほうが速度が出る。上手くいったよ」

上手く行つた事を喜び笑う親友に少しばかりムっとする。

この親友はいつもそうだ、落ち着いていて自分の考え付かないような魔法の使い方を平然としてくる。そこに憧れ同時に嫉妬もした。

「最後の蹴りのほうは？」

「あれは『レベテーション』で浮かして吹き飛ばした。蹴りは『魔法抵抗』が強いから直接魔力を流し込む為」

「なんとというか……君は相変わらず、ドットクラスの魔法が好きだね」「いや……近接戦闘を行なってる時に長い呪文なんて唱えてられないし、短いほうが便利なんだよね」

相変わらず良い意味で期待を裏切ってくれる。

「ふむ……今後の参考に使い方を教えてもらってもいいかい？」

「別にいいけど、そろそろ朝食の時間だし。歩きながらでも？」

「もちろん。それでだけど……」

「そこは——」

根掘り葉掘り、新しい技術を学ぶ為、一言も聞き逃さないように親友の言葉に耳を傾け、歩く。

今日も何時もの日常、新しい事を学び、胸躍る楽しい日々だ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ウイル様！」

「ん、なんだい？」

授業も終え、お昼休みを満喫しているとメイドの1人に声を掛けられた。

声を掛けられる事自体珍しく、何事かと目を向ける。

「お客様がお越しになっています」

「客？」

「はい」

自分に客ねえ？

一体誰だろうか……ヴァリエール公爵は会う約束をしているのではない。

なら金策として商品を売り出してもらっている武器屋か薬屋か。

それもないか。売り出してもらっている商品は、錬金の練習の片手に作った投げナイフと簡単な傷薬。わざわざ時間を作ってまで取りにくるほど売れてはいない。

だとすると本当に誰だろうか？

兄貴は領地の経営で此方に来る暇もない。

思いつく限りの知人達を思い浮かべるも出てこなかった。

……知人少ないな俺。

「一体誰だい？」

「それが——」

メイドから話を聞いて目が点となる。

え、なんでその人が来るわけ？

意味が分からない、分からないが……ルイズが気の毒になりそう  
だ。

「まさか……ね」

「なんでーっ!!?」

「会っていきなりそれはないでしょ!おチビ!!」

「ああ……やっぱり」

カリオストロを連れ急ぎ足で来て見れば、ルイズが金髪の女性に頬を引っ張られている。

ルイズの髪を金髪にして身長を伸ばし、目を吊り上げた様な容姿。腕を組み此方を見下すような視線が実に様になっている。

入学仕立ての頃のルイズを思い出し、つつい懐かしく笑みが漏れる。

「お久しぶりです。エレオノールさん」

「……相変わらずね。はあ……」

なんだろうか、普通に挨拶をただけなのに深いため息をつかれた。

自分としては結構好きな人なので会えて嬉しいのだが相手はそうでもないみたいだ。

そんな事を思いながら、ヴェリエール家長女である『エレオノール・アルベルティーンヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール』を見つめた。

「相変わらず……ごほん。それで今回の来訪のご用件は?」

「お父様に言われて彼女達を連れて来たのよ」

エレオノール嬢の視線に合わせて視線を向ければ、人が立っている。

「彼女達は?」

「仕立て屋」

「……ヴァリエール公爵に気を使わせてしまったようで」

「まったくよ」

エレオノール嬢が一層不機嫌になった。

俺の家はギリギリの男爵家だ。

領地も小さく正直、公爵家と比べると天と地ほどに差がある。

そんな男爵家の次男坊にここまですることが不満なのだろう。

うん、その気持ちは自分も良く判る。

ここまで公爵に気に入られるとか、何なのかと……いや、理由はよく分かっているのだ。

分かっているうえで無視している。

仕立て屋に関しては、下着や服を作るのに時間が掛かる為、わざわざ学院に呼び寄せたのだろう。

ああ……胃が痛い。ここまで気を使われると王城で何を言われるか不安になってくる。

「なんで私が赴いてここまでしなくちゃいけないのよ」

「妹に会いに来たと思っただけならば」

「ふんっ」

「カリオストロ」

「なくに☆」

「彼女達に付いて行って採寸してもらってくれ」

空気を読んでいたのか静かにしていたカリオストロへと指示を出す。

カリオストロは恭しくエレオノールにお辞儀をして去っていく。

それを見届け改めてエレオノールへと向き直る。

「本日滞在なさるお時間を教えていただけますか？」

「すぐに帰るわ。研究もあるつてのにお父様ったら！ちびルイズ、虚無の日忘れないように！」

「はひ……姉ひやま」

「お気をつけて」

「ふんっ」

頬を押さえ涙目になっているルイズを一瞥し去っていく。

その背中にお辞儀をしてお見送りをするとまた鼻を鳴らされた。

「……ルイズ、大丈夫？」

「いひゃい、まさか姉さまがいらっしやるなんて」

「まあ、予想は出来ないわな」

未だに頬を押さえ蹲るルイズに渴いた笑いが出る。

一体どれだけ強い力で引つ張ったのだろうか。

「機嫌悪そうだったね」

「姉さま……婚約破棄になったって」

「えーとっ……また？」

「うん、また。昨日のお父様のお手紙に書いてあったわ」

「あー……」

なんといかお気の毒様。

本当に大丈夫なのだろうか、ヴァリエール家は……。

これで本当に跡継ぎがいなくなったぞ。

嵐のようにやってきて去っていったエレオノールを見て不安が一層増した。

本当に虚無の日が怖くなってきたぞ……これ。



## 十五話：ヴァリエール家跡継ぎ問題

「……またババだ」

「ごめんなさいね、ダーリン」

「はっはっは」

キュルケからカードを一枚引くとピエロの姿が描かれているカードであった。

何処からどう見てもジョーカーで外れを引いてしまった。

「だーつまた負けた！お前等強すぎだろー！」

「ふふつ、サイトは顔に出やすいからね」

「そうねー……素直で素敵なのだけど」

結局の所、最後までジョーカーを持ち続け負けてしまった。

対戦をしていたキュルケもギーシユも強く、これで連続3回負けだ。

あまりに悔しくて体を後ろに倒し、他の人が何をやっているのかを気分転換に確認する。

自分より弱い人が居ないかを確認する為でもある。

（えつと……タバサだっけか？）

最初に見えたのは青色髪で小さな女の子、キュルケに付いて来た子であり話をした事がない。

常に本を読んでおり、話しかけてもまったくと言っていいほど反応をしない子である。

（強そうだし……論外、ルイズ達はっつと）

眼鏡を掛けており、なんとなく頭が良さそうなので別の人を探す。次に思いついたのはルイズだ。

ルイズなら表情に出やすいのではないかと思い、探せば直ぐに見つかる。

「相変わらず触り心地がいいな」

「結構気を使ってるもの」

ルイズは大きなベッドに座り、ウイルに髪を梳かしてもらった。

お風呂上りの為か頬が赤く染まり笑っている姿をとっても可愛らしい。

ついでにカリオストロも居り、ウイルの膝を枕に本を読んでいた。

此方もまた、お風呂上りだ。

(邪魔したら蹴られるな、うん)

一目見ただけで幸せそうにしているルイズを見て諦める。

人の恋路を邪魔するとなんやら……流石に蹴られたくない。

(カリオストロも……駄目だな。賢いし良い笑顔でボコボコにされそう)

悪い笑みを浮かべ、ボロ負けにされる未来が見え苦笑した。

ルイズも駄目、ウイルも論外、カリオストロはやりたくない。

結局の所、自分より弱い人が見つからず諦める。

「そういえば……サイト」

「んっ……どうかしたか？」

体を起こしもう一戦やろうかと準備をしているとギーシュに声を掛けられた。

「ルイズの姉君に会ったんだって？どんな人だったんだい？」

「あー……」

ギーシュの声で言葉が詰まった。

あの強烈な姉を思い出し、なんと言おうか迷う。

出てくる言葉が全てきつめになってしまい、殆ど悪口になってしま

う。  
流石にそれは駄目だよなと思いつつ直し言葉を捜すも結局の所、言葉が見つからず素直に話すことにした。ルイズには悪いが、柔らかい表現で言い表せない。

「強烈……ルイズなんか頬をずっと引つ張られてたし、ウイルは礼儀正しくしてたのに見下されてたし……。俺なんかルイズの隣に居たのに存在なんか無いように扱われてたぜ？」

「なんというか……それは」

今思い出すと悲しくなってくる。

ルイズの姉は自分に声を掛ける所か存在自体に無関心であった。そこから辺にある石ころか置物か……いや置物のほうがマシかも知れない。

「何度も婚約も破棄になつてるしね？」

「噂に聞いてたけどだいたいぶ……あれな人みたいだね」

「綺麗な人ではあったけど、あの人を嫁に貰うとかないわー」

三人で感想を言い合う。

少しばかり言い過ぎたかと思い、ルイズの反応を窺うも眉を潜めるだけで特に何も言わない。

……というよりフォローできないのだろう。

その後も『もうちよつと優しく』『貰い手がく』と話が続いていく。ギーシュも女性とはこうあるべきだと少しばかり興奮気味に言い、それをキュルケが否定した。

そんな女性の価値観で言い合う二人を苦笑しつつも見ていると『ある人』の声が耳に届いた。

『エレオノール嬢は可愛い人だと思っただけだなー……』

「……はっ？」

聴こえてきた言葉に耳を疑い、声の主へと視線を向ける。

声を出した人物は、カリオストロを膝の上に乗せ髪を梳いている……ウイルであった。

「ね、ねえ……ウイル。今なんて？」

「だから、あの人可愛いと思うよ？あの性格も経歴や今の風潮を考えればしようがないしさ」

どうやら聞き間違いではなかったらしい。

信じられないとばかりに驚くルイズにウイルが何でもないかのよう澄ました表情で答えた。

というよりルイズよ。自分の姉を可愛いと言われて驚くなよ。

「……そこまで言うなら根拠があるのよね？」

「ああ、話す？」

「お願いするよ。君が何故そんな事を思うのか気になるしね」

「分かった」

キュルケとギーシュに促され、ウイルが口を開く。

「最初に結論から言えば……エレオノール嬢は——臆病で優秀な人だと俺は思うな」

「……臆病？」

昼に会ったルイズの姉を思い出し、ウイルの言葉に当てはめる。

何処から見てもあの人が臆病には見えない。

ギーシュとキュルケにも確認するが首を横に振られた。

どうやら二人も同じく信じられないらしい。

それもそうだ、あんなに気が強い人が臆病とか……考えられない。

「あー……確かに臆病かも知れないわね」

「え？マジで？」

何を言い出すのかと三人で苦笑しあっているとルイズが、肯定した。

「えつとね、前に姉さま達と三人で廊下を歩いてた時だけ……、外の天気が悪く雷が鳴った瞬間、姉さまは隅っこで頭を抱えて震えていたわ」

ルイズの言葉に思い浮かべる。

あのきつい人が、雷に脅え隅っこで縮こまり涙目で頭を抱える様子を……。

(……そこだけ抜き取れば確かに可愛いな)

ギャップもあり、普通に可愛く思える。

「あの性格のきつきさもしようがないしね」

「どういうことだい？」

ウイルは、カリオストロの髪を梳かしつつ説明しだす。

カリオストロはウイルに梳かれ気持ち良さそうにうとうとと眠りこけている。

静かだなと思っていたら全力で癒されてたのか。

「そもそもハルケギニアにおいて、あの人って『異端』なんだ」

「異端？」

「サイト。サイトはさ……この学院に居る女子生徒が卒業後、どんな

職業に就くか分かる？」

いきなり此方に振られ慌てつつも考える。

貴族の娘のお仕事……。

腕を組み呻り考えるも特に思いつかない。

日本であれば、職業も多く分かるのだが、ここは異国の地。知識が足りず両手を挙げて降参した。

「答えは『お嫁さん』。女性が働くって難しいんだよ」

「……難しい？」

それはないだろうと辺りを見渡すもキュルケは面白くなさそうに鼻を鳴らし、ルイズは頷く。二人の女性の態度に真実と分かり絶句した。

「ハルケギニアは『男尊女卑』、どれだけ権力があり優秀な女性でも結婚すれば、表に出ず影から夫を支え、顔を立てる。政治面で女性が出る事もないし口も出さない。それが普通」

「……………」

「働くなんて持つての他、エレオノール嬢が働いている研究所でも女性には僅か、若い人はほぼ居ないだろうね」

「……………」

「さて、そんな風潮の中エレオノール嬢は学問の道を歩む事を決めたわけだ。本来すぐに結婚すべき所を……彼女は優秀が故に仕事に就いてしまった」

ウイルの淡々とした説明が続いていく。

「周りの男性はどう思っただろうね？ プライドが高い貴族の男性は……『生意気な』『女性の癖に』『常識も知らぬ小娘が』『女性の癖に男性と並びおって』。まあ……若く未婚である彼女を快く思わない。年老いた人であれば別だったろうけど」

ウイルの言葉で脳裏に少しばかり幼いエレオノールが暗い闇の中、不安気に辺りを見渡す様子が思い浮かぶ。

先ほどの雷のエピソードのせいだろう。

脳内のエレオノールは頭を抱え周りから聴こえる声から自分を守るかのように耳を押さえた。

「なまじ彼女が優秀なただけに周りの反発はすごいと思うよ？陰口、研究の邪魔、成果を上げてでも葬り去られ無視される」

「……………」

「もちろん、学問の道を行くのをルイズの両親は反対する。それでも彼女は説得し道を進む、無理を言った事は彼女も知っている。故に親にも泣き付けない。ただただ周りの言葉に傷つき耐える日々。頼る友人も少なかっただろうね、何しろ彼女は普通じゃない道を行ってしまっただ。笑われるのがオチだ」

『まあ、本人に聞いたわけでもないし予想だけどね』と付け加える。

「彼女は、社会に出て厳しさに直面したわけだ。学院の頃の輝かしい日々とは真逆の……絶望しただろうね、泣いただろうね、辛かっただろうね。本ならそこで戻れば良かったんだ、親に泣きついて仕事を辞め結婚する。そうすれば良かった」

そこまで説明し休むように言葉を切る。

ウイルは、優しく寝ているカリオストロの頭を撫でた後に言葉を続けた。

「仕事をやめなかったのは、人一倍プライドが高いせい。負けるものかーと奮起しちやっただ。臆病な自分を出せば笑われ攻撃される、だから身を守る為に強く自分を見せる」

「その結果が……あのきつさ？」

「だと思う。彼女は軽い『男性恐怖症』。または男性に強い『コンプレックス』を抱いてると思う」

「男性恐怖症……でも姉さま結婚しようとしてたわよ？男性恐怖症ならしないんじゃない？」

「彼女は公爵家の長女だ、責任がある。次女は病弱で結婚できない、三女であるルイズは……魔法が使えないしね。頑張れるのは自分だけ、ヴァリエール家を守るのは自分だけ……そんなプレッシャーに押しつけてだね」

「……………姉さま」

ウイルの言葉にルイズが落ち込む。

自分が魔法を使えばとも思っているのだろう。

慰めようにも異世界の住人である自分にはどう慰めればいいか判らない。

「結婚出来ない理由としては『優秀』『男尊女卑』の二つが問題かな。自分より『優秀な女性』を娶るような貴族は少ない、なにせ『男尊女卑』が根強く残っているんだ。コンプレックスで気を強く見せてきて、尻に敷こうとする彼女に耐えられる人がトリステインでは居ないよ」

「……………ならどんな男性なら合うのかしら?」  
「そうだね……………」

キュルケの言葉にウイルが暫し考え込む。

「包容力ある男性……………彼女の全てを優しく抱きしめ受け入れてくれる人。ああ言った人は認めてあげて心に余裕を持たせるのが大事だ。後は嘘をつくのも駄目だね、相手を不安がらせるような行動は駄目」  
「……………トリステインじゃ無理だね」

「無理だと思う。他の国よりプライド高いし、女性の顔を立てるとか無理だろな」

ウイルとギーシュがお互いに苦笑するのを見守りサイトは考える。

1人だけ当て嵌まる人物が目の前に居るなど……………言うところルイズが怖いから言わないが。

「まあ……………そんな訳で俺にとっては彼女は、『扱いを間違わなければ可愛い人』。彼女を受け入れ顔を立ててあげれば問題なしだな」

「……………もうウイルが貰えばいいんじゃない?」  
「ちよ!?!」

ウイルがそう言って締めくくるとキュルケがニヤニヤと笑い口にする。

そのキュルケの言葉にルイズが声を出し否定する。

なんとというか分かりやすいな……………やっぱり賭け事とかに弱そうだな、ルイズを今度ババ抜きに入れてやる。

「それは無理」

「そうよね……………ルイズがいるものねー」

一言でバツサリと切るウイルにキュルケが突貫する。

絶対楽しんでるなこれは。

「というより、俺がヴァリエール家の人と結婚する事、自体が無理」  
「え？」

次に出てきた言葉で場が固まる。

ルイズは悲しげな表情となり、キュルケはやってしまったとばかりに視線を泳がせる。

ギーシュは口を開くも結局は閉じ考え込むかのように黙り込む。

タバサは……先ほどから変わらず本を読み続けていた。

「勘違いしてるようだし言っておくけど……俺は『男爵家の次男坊』、ルイズは『公爵家』。同じ貴族でも『格』が違うんだよ。位が足りない」  
「で、でもほら……こんなにも家具も送られてきて優遇されて……ルイズの親御さんは乗り気なんじゃ……？」

どんどん涙目になるルイズに焦ったのか、キュルケがフォローを入れた。

「まあ……俺も馬鹿じゃないし、ルイズの好意も公爵の考えも分かってるよ」

「だったら……」

「それでも無理だ。たとえ俺がルイズと愛し合っていても公爵が認めても……『周りの貴族が許さない』」

「待てよ。なんで周りが関係するんだ？」

黙っていようと思うもついつい口を出してしまった。

納得がいかない。ルイズとウイルの関係を見ていればお似合いだと分かる。

だから一層に納得がいかない。

「貴族って言っても一枚岩じゃないんだよ。派閥と言う物が存在するんだ。『グラモン家を中心にした軍事派』『王家を尊重する王家派』『ヴァリエール家を中心にした公爵派』様々な派閥がある」  
「……だからなんだよ」

「俺みたいな『弱小の男爵家の次男坊』で何の功績もない若造を婚約者にすれば周りが黙っていない。公爵を見限り離れていくのさ。そうなれば公爵家の未来は終わる」



「……………」

場に重い沈黙が下りる。

誰も言葉を発さず、気まずそうに視線を泳がせる。

暫くの間、誰も言葉を喋らず、喋れず居るとぼそりとウイルが呟いた。

「だから……今公爵が動いている」

「……………どういふこと？」

何処か不満そうな口調ではあったが、希望が灯る。

「俺に箔があればいいんだ……誰もがこの人ならしょうがないと思うような功績を挙げればいい」

「それって……………」

「ああーちくしょー……………だから今回の王城の件もそれ関係だ!!だから胃が痛い!!」

ウイルは力なく後ろに倒れベッドに寝そべる。

その瞬間膝の上で寝ていたカリオスロが『ふみや』と声をあげ驚き飛び起きた。

カリオスロは頭を掻き辺りを見渡し不思議そうに首をかしげている。

「まじでこいつ寝てたのか。」

「俺は『若き天才 ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールド』と競い合わないといけないんだ」

「ジャン……………誰？」

聞き慣れない名前に疑問に思い声が出る。

「ジャン……………面倒だな。ワルド子爵でいいや」

「聞いたってなんだが、結構扱い雑だな……………ワルドさん。」

「26歳にして『風系統のスクウェアメイジ』で魔法衛士隊の1つ『グリフォン隊』の隊長殿で……………ルイズの『婚約者』」

「『婚約者?!』」

「あー……………忘れてた」

婚約者と言う言葉が出てきて三人同時に驚く。

ルイズは今思い出したとばかりに呆気に取られている。

……婚約者に忘れられるワルド子爵ってどんな人なんだろうか。

「婚約者がいる相手と結婚できるわけないだろ。顔良し、性格良し、誰もが憧れるワルド子爵。それに対して男爵家の次男坊で『ライン』止まりの俺。どうしろと?」

「あはははは……」

「ワルド子爵以上の功績を上げるとなれば……戦争で大活躍とか歴史に残る大発明をするとか、無理難題を吹っかけられるに決まってる」

いつも冷静なウイルが珍しくうろたえている。

それほどに追い詰められているのだろう……少しばかり同情した。

「……もしもワルド子爵に勝てない場合は、エレオノール嬢とくっ付けられそう」

「……………」

ウイルの言葉にルイズの顔が引き攣った。

まあ、想い人と結婚できず。姉に取られるとか想像したくないわな。

「もしくは……ワルド子爵とエレオノール嬢かな?」

「それよ!それ!うん、それがいいわ!」

ぼそりと呟いた言葉に目を輝かせルイズが同調する。

もうくっ付けばいいと思うなこの二人……爆発しろ!

……………駄目だ。自分がルイズに爆発させられる未来しか見えない。

「それがいいわと言われてもね……ああー嫌な事を思いついた」

「嫌な事?今度は何を思いついたんだい?」

興奮気味のルイズに揺られながらウイルが顔を青くした。

ギーシュの言うとおり今度は何を思いついたのだろうか?

「ワルド子爵に勝つ方法と同時に周りの貴族を黙らせる方法」

「むしろ……それ、朗報じゃね?」

何を言ってるんだコイツ。

むしろ喜ばしい事じゃないか、現にルイズは、飛びっきりの笑顔を  
見せてる。

まじ可愛い、天使だ。

……シエスタに会いたくなつて来たな。

「へー……それで何で嫌なんだい？朗報だろうに」

「方法が嫌な上に……公爵もその方法を考えていそうで嫌だ」

「どんだけ嫌なのよ。それでその方法は？」

キュルケが呆れ聞けばウイルが体を起こし口にする。

『大勢の貴族の前で俺がワルド子爵と決闘をして勝つ』

## 十六話：挑戦状

「いった!?」

「うるさい！我慢しなさい。痛くないわよこんなの……慣れよ慣れ」  
サイトが悲痛な声を出し尻を押さえる。

それをルイズが注意し、サイトは渋々とまた座り込んだ。

「なあ……これって、もうちよつと揺れ抑えられないか？」

「無理ね。これでも、ましなほうよ?」

「まじかよ……あいたつ!」

そんな話をしていると大きな石を乗り越えたのだろう。

大きな音を立て馬車が振動した。

そのせいで乗っていた人達の体が少しだけ宙に浮かび、打ち付けるように床に落ちる。

腰を打ち付けて痛がる姿を膝の上から静かに見守る。

「つ~~~~~!!」

「やっぱりお前も痛いんじゃないかつ!」

「うっさい!こんなの痛いに決まってるでしょ!!」

お尻を押さえルイズもまた悶絶、それをサイトが咎めた。

何と言うか……何処でも喧しい二人組みだ。

オレ様達の冷静さを少しは見習って欲しいものだ。

「あ、呆れた表情で見てるけど……あんたはズルイからね!?カリオス  
トロ!」

「あ~~~~~……オレ様の何処かズルいと?」

呆れた表情で見ていたせい、此方に飛び火がかかる。

どうにもならないからと言ってこっちにイライラをぶつけるなよ。

まったくもって面倒な。

「あんたはウイルの膝の上に座ってるから問題ないでしょうけど!痛  
いのよ!これ!」

「ああん?それこそ知らねーよ……お前も座ればいいだろ」

馬車の構造を見てこうなる事は予想できたのだ。

乗り込んだ瞬間にウイルの膝上を確保したオレ様を見習えば良

かっただろうに……しなかったルイズが悪い。

「ほら〜ルイズも座れば……あぁ〜……出来ないのか」

「ええ、ええ……で、出来ないのよね」

ルイズはオレ様同様に小柄な体型だ。

詰めればウイルの膝に二人座る位余裕だと考えたのだが、それが出来ない事も同時に理解する。

そういえば……だ。こいつが既に座っていたのだ。

「……………」

「なんでタバサが座ってるのよ!!」

珍しく怒りを隠さずルイズが吼える。

それほどにイライラが溜まっているのだろう。

ガーツと怒りを撒き散らし怒るルイズをタバサは静かに見て、また視線を本へと落す。

こいつもこいつで結構図々しいよな。オレ様に乗った瞬間すぐに確保しやがった。

「つ~~~~~~~~~〇×△QbへЯ!!!」

「言つとくけどオレ様は譲らね〜ぞ。痛いのが嫌ならサイトでも尻に敷いとけ」

タバサの態度でルイズが言葉にならない声を出す。

こいつこんなな感情剥き出しに出来たのな。

頭を掻き毟るルイズを見てそんな感想を抱く。

ウイルの前では、乙女乙女してくせにウイルの意識がない時はこうなるのか。

「サイトツ!!って……は??」

これ以上怒ると寝ているウイルを起すと判断したのだろう。

ルイズは怒りを抑えサイトへと振り向く。

サイトで妥協をしたのだろう、そこまでは良かった。

問題は……。

「なんでキュルケが乗ってるのよ!」

「私だって痛いもの、ダーリンに乗せてもらって何が悪いのよ?」

「やわらか……痛い!」

既にサイトの上にキュルケが乗ってる事だ。  
オレ様達の話聞いて乗ったのだろう。

ルイズ同様痛そうにしてたしな、膝の上には限りもある。  
ルイズの気が逸れている間に奪ったか。

「それにしても……………」

「……………」

ルイズとキュルケがサイトを挟み騒ぎ出す。

そんな喧騒の中、上を見上げる。

「こいつ起きねーな」

上にはウイルの顔があり、これだけの騒ぎと揺れの中平然と寝て  
いた。

見上げ頬を引っ張っても特に反応もない、すっごい慣れてやがる。

「退きなさいー！」

「い・や・ー！」

「あいたっ!?!」

取り合えず……………さつさと町に着かねーかな。

目の前で騒ぐ3人を見て、ため息をついた。

「……………僕の膝の上も空いて……………あいたたた。モンモランシー!?!」

「余計な口を開くのはこの口かしら?」

ついでに言えば、隅のほうに居たギーシユと金髪巻きガールも騒が  
しい。

貴族とは、優雅さとは一体何だったのだろうか?

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふあ~~~~~……………ん~~~~!!」

「よく寝れたな……ウイル」

「あく……はふ、悪環境で寝る事に慣れてるからな」

2時間半もの道のりを終え街に着くと辺りを見渡す。

これがトリステイン最大の街か……なんかちっこい。

「なあ……これが『トリステイン王国王都トリスタニア』？」

「ああ、ここがそうだ。この路地裏を抜ければ最大の市街通り、『ブルドンネ街』に行ける」

路地裏ならこんな物かと思いい後ろを着いていく。

ちなみにキュルケとタバサも着いて来ており、一緒に来る気満々だ。

ギーシユと巻きガールは、デートに出かけていない。

「まずはつと……武器屋行って、それからお昼を取って王城かな。終わったら仕立て屋行って帰る」

「おい、オレ様の研究機材はどうした」

「発注済み……お蔭で3年間溜めていた金貨が吹っ飛んだ」

大きなため息と共にウイルががっくりと肩を落す。

コレばかりはしつかりとして貰わねばいけないのでしょうがない。

オレ様が研究をするのだ。小ぢんまりとした機材などではやる気が出ない。

「ほら、フード被って」

「はあ……分かってるよ」

歩き出そうとするとフードを被せられる。

姿が姿だけに隠そうとなつたのだ。

オレ様自身、面倒事は嫌だが……こう隠れるのもなんだかな。

「あれ？市街通りに行くんじや？」

市街通りへ出ず、裏道を進むウイルにサイトが声を掛ける。

賑やかな声を聞こえる通りが直ぐ傍にあるのに何故裏道を行くのだろうかと疑問に思つてのことだろう。

「武器屋は路地裏にあるんだ。それに市街通りは人が多くてな……この人数で歩くのはきつい」

「なるほど」

「と……んこだ」

狭い上に悪臭が鼻につく路地裏を暫く歩くと一軒のお店の前に辿り着く。

銅製の剣の形をした看板がぶら下がっており、目的の場所だと一目で分かる。

「邪魔するぞ」

「お〜!!なんかファンタジーっぽい!」

「ふあんたじー?」

石段を登り跳ね扉を開け、店の中へと入る。

お店の中は昼間だと言うのに薄暗く、ランプの灯りだけが頼りだった。

壁や棚には幾つもの剣や槍といった物が乱雑に所狭しと置かれ、その横には立派な甲冑が飾ってあった。

「ありや……旦那、随分早いですね」

「この後、王城へ出向く事になつててね」

「王城へ!旦那何かしたんですかい!」

「ああ……うん。まあ……面倒事」

奥へと進むとパイプを吹かしていた五十がらみの親父が、ウイルへと話しかける。

話の内容的に前もって来る事を伝えておいたようだ。相変わらずこういう所で気が利く。

「デルフは?」

「へい、既に用意しております」

カウンターの前へと行くとウイルが名前を告げる。

剣の名前だろうか、記憶を探り幾つもの武器の名前を思い出すも該当するものはなかった。

辺りを見渡しながらも大人しく待っていると親父がカウンターの下から布に包まれた一本の剣を取り出す。

「サイトー!」

「おう?」



ウイルがサイトを呼ぶ。

辺りを見渡し、手にしていた剣を柵に置くと嬉しそうに駆け寄る。学院を出る前に自分の剣を買おうと伝えられていたので楽しそうだ。

「こいつ?」

「そう、こいつがお前に用意した剣……『デルフリンガー』だ」

「これ?」

「これ」

だが、そんな嬉しげなサイトもカウンターに辿り着く前までだ。カウンターに置かれた剣を見てサイトは何度も何度も聞き返す。

「ボロボロなんだけど……」

錆の浮いたボロボロの剣をサイトが受取り持ち上げる。

(ああん?……はあ?!)

それを見て叫びを上げそうになった。

なんだあれは……?

何でこんな所にあんな物がありやがる!

サイトは気付いてない様だが、オレ様は分かる、同類だけに分かってしまう。

『剣に込められた魂』が、はつきりと見えている。

『ボロボロだけど一級品だよ……。そうだろ?カリオストロ』

(こいつ……知ってやがったな)

驚くオレ様を見て、イタズラが成功としたとばかりにウイルがウインクを飛ばす。

そんなウイルの態度にギリつと歯を噛み、気持ちを抑え聞く。

「おいおいおい、まさか。まさか——?」

「そのまさかさ……この世界にも居るんだよ『天才』が」

吼え高鳴る気持ちを押さえ、聞き返せば欲しい言葉が返ってくる。

天才、オレ様レベルの奴がいるだと?

それは——それは——とても——とても!!

(ああ……!!胸が躍る!!高鳴る!!)

胸の内が熱くなる。

ドクンドクンと心臓が強く胸を打ち、燃え盛る業火のような熱が体

中を燃やし尽くす。

血管一本一本を熱い熱が通り過ぎオレ様を駆り立てる。

(無機物に『魂』を吹き込むだと……?なんだそれは、オレ様でも思いつかなかった事だ!狂ってやがる、この剣を作った奴は狂っている!!)

歓喜で顔が歪む。

自分でもやったことがないような事態が目の前にあるのだ。

天才だと思っていた、自分の横に並ぶ物は居ないと自分の先に居る者はいないと。

だが、実際はどうだ?目の前の剣はなんだ?

オレ様でも思いもなかった事を成し遂げた奴がいる。

(ははは——いいだろ、この挑戦受けてやる。オレ様が一番だと思いつ知らせてやる)

天才はオレ様1人だけで十分だ。

他にはいない、横に並ぶ奴が居てはいけない、故に『乗り越え』『排除』『跪かせる』。

(何時以来だ……オレ様が挑戦者側に立つのは……はは、アハハハハハハハハハハ)

ああ、楽しい、楽しい、楽しい、実に楽しみだ。

『……あの嬢ちゃん、怖いんだけど』

「ウン、ナンカスツゴクコワイ」

「そうかな……実に楽しそうで可愛いと思うけど」

「やっぱりウイルって変だわ」

笑っているところの人の声が聴こえる。

其方に視線を戻せばサイトの持っていた剣が刃の根元の金具を動かして喋っている。

どうやらあの剣は喋る事も出来るらしい。

一体どうやって声を発しているんだ?テレパシーの類か……帰ったら研究だな。

『ふあ!?ナンカ寒気が!』

「お前、剣だろうに……なあ……ウイルもつと立派な奴じゃ駄目なの

か?」

「サイトは剣を振った事ないだろ?」

「ない!」

『なんだ相棒ド素人か』

自信満々に胸を張るサイトにデルフが呆れたような声を出す。

「だからこそそのデルフだ。デルフは長い間、様々な剣士に振られてきた剣だ」

「そうなのか?」

『おうよ、掘り出し物だぜ?』

「故に素人の才人に指導を行なえる訳だ。ぴったりだろ?」

「なるほど……な」

カチャカチャと鎧を鳴らしデルフが誇らしげな声をあげた。

「代金の方は……」

「へい、百で結構です」

「あれ……お代はウイルが払うのか?」

店主の声に従い、ウイルは懐から袋を取り出し金貨を置いていく。サイトとしては自分の主人であるルイズが出すものだと思っていたのだから。

不思議そうに首を傾げ、キュルケとまた言い合っている主人へと目を向けていた。

「学院からの給付金だ。スリも多いから俺が預かっていたんだ」

「スリとかいるのか!」

「居ますぜ。最近だと盗賊なんか城下町を荒らしてます」

「……盗賊?」

「そうでき。なんでも『土くれ』のフーケとかいう、メイジの盗賊が居るみたいです」

「へー……」

「それじゃ、また来る」

「はい、またのお越しをお待ちしております。旦那」

代金を払い、まだ言い合っているルイズ達を伴い外へと出る。

薄暗い店内に居たせいで目が慣れて日差しが眩しい。

腕で顔を隠し、そつと空を見上げた後に一言声を掛ける。

「サイトく……」

「な、なに？」

「ソレ、カ・リ・オ・ス・ト・ロにい貸して☆」

骨の隅々まで研究してやる。

だから、寄越せ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

『相棒ー！相棒ー！助けてー！』

「あーあー何も聴こえない」

「いいのあれ？」

「別にいいだろ、分解しないって本人も言ってるし」

「ダーリンならもつと高い剣が似合うと思うのに」

「……………」

あれからサイトに剣を受取り、探りつつ昼飯を終える。

王城へと歩きながら軽く見てみるもすごいなこの剣。

人の魂を移したただけでなく、様々な機能が隠されている。

（本気で何者だ……？『魔法吸収』『魔力を溜めた分使用者を自分で動かす』『剣が崩壊した場合、自動で他の剣に魂を移させる』……なんだこれ）

軽く調べた機能だけでこれだ。

正直、『跪かせる』とか『オレ様以上の天才は居ない』と豪語したが、顔が引き攣る。

ここまでの強敵なんか2千年以上、生きてきて初めてだ。

「止まれ、王城に何用か」

「トリステイン魔法学院に所属しております。ウイル・ツチールです。今日はヴァリエール公爵に呼ばれて参上いたしました」

「そうか、確認してくる。暫し待たれよ」

研究に没頭をしていると王城に着いた様だ。

門番に止められ礼儀正しくウイルが告げれば、門番の1人が確認に走った。

「というより、キュルケとタバサは……入れるのか?」

「えー入れないの?」

「キュルケ達は呼ばれてない上にこの国の人間じゃないしな。微妙だな」

「……………」

普通に付いて来たけど、この二人は無理だろう。

お友達も入れてください!とかで入れたら正気を疑う。

そう簡単に王城には入れるなら苦労はないな。

「確認が取れた、此方へ」

暫く雑談で時間を潰していると門番が戻ってきて綺麗な敬礼をした。

その後、手を奥へと差し出し、通してくれた。

その際にウイル達がキュルケとタバサに目を向けるが特に何事もなく通れたので黙り込む。

それでいいのか、トリステイン。

「入れたな」

「入れたね」

「王……城?」

思わず、疑問を投げかけてしまう。

そんな会話を案内をしてくれる門番に聞かれないようにこそそそと話す。

「お連れしました」

『……………入れ』

暫く歩くと、一つの部屋の前で止まり、門番がドアをノックした。中から1人の男性の声が聴こえる。

男性の声は、聞くだけで重みがあり、威厳が感じられた。門番が扉を開き、ドアノブを持って横に立つ。

入れと言う事だろう。

最初にウイルが案内してくれた門番へとお辞儀をしてから入っていく。

次にルイズ、キュルケ、タバサ、オレ様で最後がサイトだ。

中に入ると二人の男性が居た。

1人はソファアーに座り、此方を見てニヤリと笑う。

何処か、イタズラ小僧めいた笑い方で中々に好感が持てそうな、中年であった。

もう1人は……髭を生やし、仏頂面で此方を睨んでいる男性。

「よく来たな」

ソファアーに座っていた中年が口を開く。

その声は先ほどの扉の前で聞いた声だ。

何処から楽しげな声にウイルが肩を深く深く落とした。

## 十七話：これが私の御主人様

「些か、人が多いようだが……」

「すいません、学院の友人でして」

隣に居た男性を見て、肩を落としたが切り替えていく。

なつてしまったものはしょうがない、この為に徹夜して作戦も考えたのだ。

どうにでもなれ。

「……………う……………!?!」

(あつ、気付いた)

公爵は、イタズラめいた顔で友人達を見渡していたが、1人の少女に目が移った際に困惑の表情となる。

1人の少女——タバサに目が行った際、次第に口を大きく開け顎が落ちそうなほどに驚いていた。

タバサの正体に気付いたのだろう。

驚くのも無理はない。

娘と俺を呼んだら、ガリアの姫君も付いてきました。

意味が分からないだろうな。

俺も意味が分からない、いや……………タバサの態度でなんとなく察してるけど、考えたくない。

これ以上厄介事を抱えて胃を痛めたくない。

青髭のおじ様に監視されてるとかナニソノ死亡フラグだし。

気付いて反応すれば、過剰に反応を返されそうだがなく放置をしている。

諦めてくれないかなー、無理かなー。

そもそもタバサの態度があからさまなのだ。

わざわざ、追い出されるような事をずつとしている。

勝手に部屋に入り、本読み漁り、居つき、俺の好きなハンモックを奪う。

全てが俺に対する嫌がらせ、自分を追い出せと……………そう言ってる風に見えた。

キュルケが才人にくっ付いているので、俺を監視すればキュルケにも被害が行く可能性がある。

と考えての事だろう、そうでないと俺に懐く理由がない。

「あー……………」

「ごほん、彼女達は学院の級友でして、キュルケと……………」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプ  
ストーリーと申します」

「ツエルプストーリー……………」

今度は別の意味で表情が困惑となった。

そりやそうか、お隣同士で因縁があるツエルプストーリーの娘なのだ。  
タバサ同様に一緒に居る意味が分からないだろう。

そのまま頭を痛めて欲しい、俺の胃と同じぐらいに。

「そしてキュルケの友人であり、ガリアからの留学生タバサです」

「ガリア……………タバサ？」

意趣返しも済んだし、フォローを入れる。

賢い人なので名前を言えば察してくれるだろうと思えば、その通りだ。

名前の部分で俺を見つめてくるので頷く。

「そうか……………いつも娘がお世話になっている。これからも良く付き  
合ってくれ」

「ええ……………分かりましたわ」

「んっ」

気を取り直し公爵が人の好い笑顔で二人へと申し出る。

それをキュルケとタバサは特に何も言わず素直に頷く。

自分達が押しかけた側だという事を理解しているのだろう。

「それでヴァエリエール公爵……………其方の方をご紹介してくれませんか  
？」

「おお、すまない。忘れていた」

ワルド子爵え……………」

婚約者に忘れられ、その父親にも忘れられるとか可哀想だなこの  
人。



ワルド子爵も頬を引き攣らせてるし。

「ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。グリフォン隊の隊長をしている者だ。そして……『ルイズの婚約者』さ」

帽子を取り、華麗にお辞儀をしてにっこりと笑う。

その姿は男性の俺でも唸らせるほどかっこよく様になっていた。

これでしつかりとルイズと連絡を取ってれば完璧なのに、何処となく残念だ。

「あー……オヒサシブリデス。ワルド様」

子爵の考えでは、この場面でルイズは婚約者を意識し顔を真っ赤にさせ俯き、もじもじとしたのだろうけど。

現実はそうはいかない。

ルイズは二日前まで忘れていた己の婚約者に罰悪そうに視線を泳がせ空笑いをしている。

何処となく、口に出した言葉もカタゴト交じりに聴こえた。

「……？」

「あはははは」

ルイズの態度を見てワルド子爵も不思議そうだ。

むしろ今まで連絡取らずにいた婚約者に対してはましな反応だろうに。

「よろしくお願ひしますね。子爵様」

「ああ……公爵から君の話をよく聞いているよ」

一体、どんな話をしたのだろうか、俺の話なんて数分で終わるような事だろう。

ラインメイジで男爵家のツチール家次男坊で変わり者。

ほら……数分も要らないな、むしろ10秒も要らない。

「それで公爵様、今日のご用件の程をお聞きしても？」

「ああ、何少しの会話と手紙に書いてあった使い魔が気になってね」「そうでしたか」

『娘を欲しくばこやつを倒すが良い!!』とか言われるのかと思いついていたが、そうでもないらしい。

ほっとしつつも思考し、こうなるのも当たり前前かとも思った。

人間を召喚し、あまつさえ名前を貸して欲しいと言われるほどの使い魔。

興味が惹かれて当たり前だろう。

「カリオストロ」

「んっ」

名前を呼び、近くに来るとカリオストロがフードを……外さない。いや、顔を見せる為に呼んだのだが、カリオストロが分かってない筈もないしと考え、不思議に思い覗き込む。

「……………」

「……………」

カリオストロの顔を覗きこみ察した。

カリオストロは此方を見てニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている。

——分かってるだろう？ 察せ——

「……………」

そんな事を視線で投げかけてくるので、ため息を付きつつもリクエストに答える。

カリオストロのフードに手を掛けると恭しく自分がフードを取った。

つまりは……自分で外すより、他人から外された方が印象強いということだろう。

「っ——」

「——」

フードを取り外し、顔を晒せば公爵と子爵が固まる。

まあ、無理もない。

綺麗に全てが整えられて完璧なのだ、完璧過ぎるのだ。

髪の毛一本一本にも気を配り、作られた体。

身長が低く、子供と間違えられる以外はほぼ完璧だ。

誰もが将来絶世の美女になるだろうと確信するほどの美貌。

見惚れるのも仕方がないことであつた。

「…………お父様、ワルド様？」

「はっ！」

「いやいや、うむ。うむ……な、なるほど公爵家の名が必要だと良く判った」

「……………」

女性陣の冷たい視線に晒され、二人は急いで取り繕う。

やっぱり、公爵も人間なんだと再認識した。

ルイズに継り付き、夫人に言わないように説得している公爵を見てそんな事を思った。

「もうこんな時間か、遅くなる前に帰りなさい」

「そうですね。お暇させてもらいます」

あれからお茶を出され、皆で座り話し込む。

話と言っても婚約などの話は一切せず、ただ『学院の生活』や『使い魔』の事等当たり障りもない事だ。

本当にカリオストロの顔を見るだけに呼んだのだろうか、もしくはルイズに会いたかったただけか。

「少しいいかい？」

「ワルド？」

「ワルド様？」

そんな事を思っているとワルド子爵に呼び止められる。

ここに來てきたかと思うも、そんな事をおくびにも出さずに不思議そうに首を傾げる。

「君の実力が知りたい」

「……………はあ」

「これほどまでに公爵に気に入られる君が気になってね。少し話しただけで、君が聡明だという事は分かった。なら……魔法の腕はと思っ  
てしまっ  
てね」

「ワルド子爵ほどではありませんよ。ラインメイジですし」

「何、それならそれで構わない。将来の為に経験を積んだと思ってく

ればばいいよ」

「そうですか」

そこまで言われて考え込む。

正直な話、戦う事自体は構わない。

元よりその気でやってきていたので準備も出来ていた。

問題なのは……勝つか負けるかだが。

「分かりました。やりましょうか」

「そうか！」

「ウイル？」

「うん、スクウェアメイジと戦う機会なんて滅多にないからね」

心配そうに寄って来たルイズの頭を優しく撫でる。

「公爵様、構いませんか？」

「ふむ……あい、分かった。訓練場を借りるとしよう」

「ありがとうございます」

「それでは、先に行っているよ。許可も取っておく」

それだけ言うと子爵は、公爵に頭を下げ微笑み出て行く。

「ウイル……大丈夫かよ？」

「問題ないな」

子爵が居なくなると才人が心配そうに聞いてくる。

流石に公爵の前で俺を殺すようなこともしないだろうし、重症を負

わせるような事もないだろう。

本人としては、自分との実力差を知らしめる為に軽く捻るといった

所か。

「怪我しないでね？」

「多分」

「随分落ち着いてるのね？」

扉を開け、公爵に案内されるまま付いて行くとルイズとキュルケに  
声を掛けられる。

先ほどから皆に心配され続け、苦笑する。

心配される事がむず痒く、少しだけ悲しかった。

自分が負けると思われる事に対して若干気が落ちる。

「ねえ、カリオストロも何か言ったら？」

「言うって何を？」

「ほら、怪我しないでね。とか頑張ってるね！とか」  
ルイズがカリオストロへと声を掛けた。

先ほどからフードを深く被りなおしたカリオストロは、特に何も言わず。

心配もしてなさそうだ。

その事に少しばかりルイズがイラついてるようが見えた。

「心配ね……するわけないだろ。どうせウイルが勝つんだ」

「え？」

カリオストロが何気なく言った言葉に微笑む。

「そうだろ……ウイル？」

「ああ……そうだね、カリオストロ」

カリオストロは、フードを少しだけ上げて視線を合わせてくる。

紫色の綺麗な眼をしっかりと見つめ返した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「大丈夫かよ。あいつ」

「無茶しなければいいけど」

「流石にね？」

「……………」

訓練場に着けば、既に髭子爵が真ん中に立ち待っていた。

それを見た瞬間、笑いそうになるのを堪える為に口を押さえる羽目

になる。

かっこつけている髭を見て笑いを堪えているとサイト達が見当違いな事を言い出し、更に笑いそうになった。

「くくく……」

「カリオストロ」

「ああ、わりい……笑いが漏れた」

「カリオストロ!？」

「甲高い声で叫ぶな、耳が痛い」

「あのね！」

我慢が出来ず、笑いが漏れるとルイズに睨まれ怒りをぶつけてくる。

「はっ、お前こそアイツの強さを知らねーのかよ」

「え？」

驚くルイズを見て本当に知らないのかよと驚く。

毎朝ギーシュと模擬戦をしているのを見てないのかと。

「あいつは負けねーよ。ほら始まるぞ」

「……………」

此処まで言っても他メンバーの顔は優れない。

それほどまでにこの世界では魔法の優劣がハッキリとしているのだろう。

公爵の顔を覗くように見ても半信半疑のようだ。

「それじゃ金貨を弾く。地面に落ちたら始めていいね？」

「分かりました」

少し前に見た決闘の始まり方にサイトの方をチラっと見る。

サイトは、少しばかり眉を潜めた。

自分の事を思い出したのだろう。

キンつと音が聞こえコインが空中に浮かぶ。

全員が見守る中、コインは特に何事もなく、地面に落ち、二人が動く。

先に動いたのはワルドだ。

ワルドが真っ直ぐウイルに杖を向け、口を開く時にウイルが丁度杖

代わりの籠手をワルドに向ける。

この場の誰もが、ウイルが間に合わずワルドの魔法が先に完成すると思っていた。

そう思っていた、ウイルが行動に移すまでは。

ウイルは、籠手を持ち上げたと同時に指に挟んでいた何かをワルドに投擲した。

「くっー！」

呪文を詠唱しようと口を開いていたワルドは、詠唱をしながら体を逸らす。

さすがは隊長をしているだけあり、反応も良い。

だが……

「はっ！」

ワルドが体を逸らした瞬間、彼が宙へと浮かぶ。

丁度空中で寝そべるような体勢で暫く留まり、地面にそのまま胴体から落ちた。

見ていた誰もが口を開き啞然とするのかもしれない。

誰がどう見てもワルドが、体を逸らし足を滑らせ転んだようにしか見えないのだから。

「くっ」

ワルドから苦痛に呻く声が聴こえる。

彼自身転ぶと思っていなかった為、受身を取れず体をしこたま打つたのだろう。

その衝撃のせいで詠唱も途切れたようだ。

『アースハンド』

「なあ?!」

訓練や実践の経験だろう。

ワルドは転びながらも素早く体を動かそうとして囚われた。

『鍊金』……これでお終い」

「……………」

土で出来た手に囚われ、逃げ出そうとするも慈悲のない声が響く。土で出来た手は、土から鉄へと変化させ完全に動きを止めた。

ワールドが、もがくも鉄を払いのけるほどの筋力もなく、次第に諦め動きを止めた。

「……………えっと、ラッキー？」

「馬鹿か。何がラッキーだ……………あれは実力だ」

あつという間に幕が下ろされ、誰もが呆気にとられる中、サイトが見当ハズレの事を言った。

「ああ……………運も実力のうちっていうしな」

「アホ、あれは狙ってやってんだよ」

「へ？」

微妙な場の空気を変えようとするサイトを一刀両断する。

場の空気を変えようとしたサイトは偉いが、流石に検討外れの事を言われれば文句も出てくる。

「まずは……………最初に投擲しワールドの体勢を崩す、その後籠手を上げる間に唱えていた『錬金』でワールドの足元に『氷を練成』」

「……………氷を？」

「そうだよ、葉っぱであんな勢い良く滑るわけないだろ」

呪文を唱え魔法を撃つより物を投擲した方が断然に速い。

しかも詠唱を唱えながら投げれるので効果的だ。

ワールドは多分、魔法で打ち落とすか避けるかで悩んだろう。

しかしだ、ウイルが呪文を詠唱している事に気づき、避ける事を選択した。

魔法で投擲物を排除すればウイルの魔法の餌食になると考えての事だ。

だが、それもウイルの策の内だ。

唱えていたのは『錬金』、足元に氷を『練成』し滑らせ転倒させる。

あとは、拘束の魔法を詠唱してお終いだ。

「どれだけ凄い魔法を使えようがよ……………唱えさせなければ問題ないよな？」

物を使い、頭を使い、魔法を効率良く使う。

これが――

『これがオレ様の御主人様だ』



ニヤリと笑い自慢げに胸を張った。

## 十八話：彼と彼／彼女の恋愛事情

「くっ……」

「……………」

ゆつくりと近づき、見下ろせば子爵は親の敵を見るような目で見てくる。

人の良さそうな笑みを浮かべていても貴族か……一端のプライドを持つているようだ。

ラインである俺にやられ、誇りを傷つけられたと怒ってるらしい。

「ははは……参ったね。ここまでやるとは……っ！」

「いい勉強になりましたね、子爵」

子爵は取り繕うに笑みを貼り付ける。

それでも怒りが抑えきれないのか口元がヒクヒクと動いていた。

そんな子爵に此方も笑みで答える。

「だけど……まだだ!!風は偏在する!!ユビキタス・ゲル——」

『フル・ソル・ウインデ、レビテーション』

子爵がニヤリと笑い、まだだと宣言した瞬間魔法を詠唱する。

『レビテーション』を子爵の握っていた杖に掛け、吹き飛ばす。

「……………」

「……………」

最初から詠唱しとけば勝てたかも知れないのに……なんでこの人無駄口が多いのだろうか。

吹き飛んでいく杖を見て、何やら悟ったような表情をしている子爵を見てそんな事を思う。

「ちなみに……他に何かありますか?ないなら降参お願いします。じゃないとこのまま土の中に沈めます」

「……………参りました」

『錬金』を唱え地面を水に変え、少しだけ子爵の体を土に埋めれば降参してくれる。

良かった、首だけ地面に出す子爵を見ずに済んだ。

杖を振り、拘束を解くと、そのまま動かない子爵を置いてカリオス

トロ達の下へと戻る。

「ただいま」

「おーおかえり」

戻れば、カリオストロだけがニヤニヤと楽しげに笑い、他の人は啞然としていた。

何やら信じられないものを見るかのような視線で少しばかり不愉快だ。

「ウイルって……強いんだな」

「なんだそれ」

才人の言葉に苦笑する。

別に俺は強くない、ただただズル賢いだけなのだ。

「子爵に『偏在』を放たれてたら詰んでたし、弱いよ」

「へん……ざい?」

「分身かな。自分と同等の思考を持ち魔法まで撃てる奴」

「なにそれ……反則じゃないか!?!」

「本当に強い魔法だね。撃たせない為に必死だった」

軽く苦笑し本音を語る。

実際にやられていたらジリ貧で負けていた。

子爵クラスのを敵をこんな所で複数も相手にするとか考えたくもない。

やりようによっては勝てるが、褒められた戦い方ではないので人目が多いところでは出来ない。

「怪我は……する訳ないわよね」

「むしろ子爵の方が大丈夫かな……氷の上に落ちたから少なくとも打ち身はしてそうだ」

ルイズがペタペタと体を触ってきて怪我を確認する。

何もされていないので怪我などある訳もなく無事だ。

俺より、先ほどから動かない子爵を診て上げた方が良いと思うのだが……。

「あぁー……なんだ。前々からあれは考えて……?」

「二日前に考えて、昨日朝に友達に頼み相手にしてもらい実践しました」

公爵が聞いてきたので素直に答える。

「まだ四つほど策はありますけどね」

「……………あつ、子爵が倒れたわね」

キュルケの言葉に振り向けば、立とうとしていた子爵が膝を突き崩れ落ちるように地面に戻る様子が見える。

ごめんね、子爵。あと4回ほどならアナタに勝てるんです。

これに懲りず頑張り、越えることを願ってます。

「ところで先ほど『投げナイフ』使いましたけど……………どうなのでしょうか？」

「文句を言う奴も居るかも知れんが戦術面では画期的だな。グラモンの奴なんかは嬉しがるだろう『呼んだか？』……………む」

子爵から目を離し、公爵へと問いかける。

自分でやつといてあれだが、ハルケギニアの価値観だと、どう判断されるか分からない戦術なのだ。

その事を問い公爵が答えていると後ろから声が掛かる。

公爵の後ろには、少し薄れた金髪をした中年が立っており不思議そうにしている。

何処となくギーシュに似ている雰囲気を持つ人で話とか合いそうだなと密かに思った。

「グラモンか……………なに、ワールドとウイルが決闘をしたのだ、面白い結果になった」

「模擬戦です。公爵」

何時の間にか決闘扱いとなっていたので訂正する。

口を出したせいで此方に注目をされお辞儀をした。

「ウイル……………」

「トリステイン魔法学院所属のウイル・ツチールと申します」

「ウイル……………ウイル……………何処かで聞いたような？」

「元帥の息子である、ギーシュとは仲良くしていただいています」

「ああ……………そうだ。ギーシュから話を聞いた事が」

そう言つて元帥が後ろを振り向き、立っていたギーシュへと視線を投げかける。

「やあ、ウイル。行き成り決闘なんて頑張るね」

「決闘じゃないよ。模擬戦だギーシュ」

ギーシュは此方につこりと笑いかけ軽口を叩く。

ギーシュの後ろにはモンモランシーも居てカチカチに彼女は固まっていた。

「……………親父さんに会わせただな」

公爵と元帥が話をしているので自然とギーシュと会話する流れとなった。

「君が言つたんじゃないか。『城下町に行くなら、ついでに親父さんに顔を見せて来たら』って」

「言つたけどね。別に彼女を紹介しろと言つた訳ではないのだけど」

「そうなのかい？ てつきりそれかと……………」

個人的に会いに行けと言つただけなのだが、どうやら勘違いをしていたらしい。

モンモランシー嬢、ごめん。

随分と気まずい時間を過ごしただろうに……………。

「まあ、いいか。いずれ紹介もしただろうし。戦つた相手はワルド子爵かい？」

「ああ」

「そうか、君の事だから勝つたんだろうな」

「勿論、昨日のギーシュの犠牲のお蔭だ」

「へ？……………勝つたの？」

ニヤリと笑い、昨日のギーシュの滑りっぷりを思い出す。

ギーシュ自身は、あれを受けた身であり、俺が勝つことを疑問にも思つてないみたいだ。

逆にモンモランシーは口を開き唾然としている。

「わ、ワルド子爵つて……………あの『ワルド様』？」

「あのつてのが分からないが、グリフォン隊隊長のワルドならそうだよ」

「あなた……ラインよね？」

「ラインだね」

「嘘よっ!？」

モンモランシーの悲鳴の様な声が通路に木霊し、何事かと全員から注目を受ける。

注目された本人ははつとなり、口を両手で隠すと此方を睨んでくる。

叫んだのは其方なのだから俺を睨むのはお門違いだろう。

「嘘ではなく、勝ったよ」

「何処も怪我してないじゃない」

「魔法受ける前に倒したからね」

じろじろと人の体を眺めてくるモンモランシーに苦笑する。

これもまた、固定概念の弊害だろうな。

魔法を重ねられるほど強いと認識されてるせいか信じられないのだろう。

モンモランシーの認識も当たってはいるのだ。

魔法を重ねれば『偏在』のような強い魔法も扱えるので強いと言える。

しかしだ。コモンマジックだって、今回のように使い所を間違わなければスクウエアクラスの魔法と撃ち合える。

結局の所、使う人によって変わるのだ。

「信じられないだろうけど……『勝ったのは事実だ』……ですね」

言おうとした言葉を言われてしまった。

声の方へと向けば、元帥がニヤニヤと笑って此方を見ている。

「ヴァリエールから話は聞いた」

「……そうですか」

「これから学院に？」

「ええ……帰ります、なので戦術の件ギーシュに聞いて下さい」

「ん？」

「ギーシュとは毎日のように一緒に訓練してまして、俺の事をよく知っています」

「そうか！そうか!!」

「あれ？」

元帥は自分の言葉に嬉しそうにしギーシユの手を引つ張っていく。戦術の件を聞きたくてしようがなかったのだろうが、これから帰るのでギーシユを犠牲させてもらった。

流星に王宮に寝泊りとか嫌である。

主に何か核級の地雷を踏みそうで怖い。

「モンモランシーはこっちで連れてくからなー!!」

「頼んだー!!!」

残されたモンモランシーが居たので此方で引き取る事にした。

流星にこれ以上は気まず過ぎるだろう。

「公爵、時間が押していますのでそろそろ……」

「そうか、子爵のほうは私が何とかしておこう」

「お願いします」

そういえば、まだ落ち込んでいたのか。

広場で寝ている子爵をもう一度だけ見てから王城を後にした。

結局の所、時間もなくなり仕立て屋でカリオストロと才人の洋服を

受取った後、夕食を済まし帰ることにした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆

「それにしても参ったな」

「ふあく……何がだ」

夕食も終え、帰りの馬車の中でウイルが呟く。

その眩きに答えながらも辺りを見渡すと他の奴等は寝ているようだ。

学院の都合上、街に中々行けないのではしやぎ過ぎて疲れたのだろう。

「結婚しないと思ってた」

「そうか」

「コルベール先生見たいにさ……。何処かの小屋で一人で研究に没頭する物だと思ってたんだ」

見上げれば、ウイルは隙間から空を見上げていた。

その顔は、何処か遠くを見ていて……。

「実感湧かないか？」

「ああ、湧かない。ルイズの事は好きだよ。でも……」

「……………」

辺りをそれとなく見渡し、ルイズを見つける。

ルイズは、貰ってきた衣服をクッションにし寝ていた。

「恋愛感情じゃない」

ルイズが少しだけ動いたように見えた。

暫くの間、ルイズを見るも規則正しく肩を上下に動かしていた。

視線をウイルへと戻し、続きを促す。

「なんでそう思う」

「ん〜……小さい頃に好きになった子が居たんだ。その子と良く遊んで。お互いに好きだった」

「……………」

「その子は引越して遠くに行ってしまったってそれっきり。その後も色々な人に会って付き合って、別れて……。それでも結局最後までその子を忘れられなかった」

「……………」

「今でもたまに夢に見るんだ、生前は気付けなかったけど……。本当に本気で好きだったんだ。そして理解した、これが『愛』なんだってね」  
「そこまで言うとは恥ずかしくなったのか、ウイルは『女々しい奴だろ』  
と言い頬を掻く。」



「残念だけれどルイズにその感情を抱いてない」

「なるほどな……六十年近く経っても忘れられない相手か……強敵だな」

「あははは……それにしても知ってたんだ。六十年の事」

「体は騙せても魂までは騙せねー。お前の魂は年老いたソレだ」

そういうと、ウイルスは胸に手を当て『こればかりは無理だな』と笑う。

苦笑するウイルスを見て、心がざわめく、何処か幸せそうな顔で……イラついた。

「カリオストロ……？」

「ちつと疲れたから寝る」

「そうか……おやすみ」

「ああ……」

それだけ伝え、背を預け目を瞑る。

暗い暗い闇の中で思考する。

自分には忘れられない存在が居ただろうかと——思い出そうとするも誰も思い浮かばない。

六十年と二千年、ウイルスとカリオストロには大きな差がある。

二千年も生きてきた自分が忘れていても仕方が無い……それは分かってる。

それでもウイルスならきつと覚えているだろう。

二千年経つてもきつと……その子の事を……。

そこまで考えて急に胸が苦しくなった。

ぎゅつと縮むような感覚で涙が溢れそうになる。

『しい』『寂しい』『しい』

様々な負の感情が心を支配した。

「……！」

そんな感情に囚われていると不意にウイルスに抱きしめられる。

目を開き驚き上を見上げれば、ウイルスの澄ました表情が見えた。

「なっ——」「まだ……寒いしね」……

「そうか……落ちないようにしっかりと抱きしめておけよ」

「ああ」

何かを言おうとして言葉を遮られた。

ほんの少しだけ、自分の抱いた感情を告げようかと思うも口を閉じ目を瞑る。

告げてもどうにもならない。そう決め付けた。

目を瞑るとウイルの体温が自分の体へと移ってくる。

ああ、暖かい。火とは違う暖かさだ。

心地よく、くすぐったく……気持ちが良い。

それでも……それでもきつと——オレ様はこの暖かさを忘れるだろう。

今度こそ本当に眠りに就く。

## 十九話：杖を掲げ、名を示せ

「…………ちつ、何が物理で殴ればよ。こんな分厚い『固定化』破れるわけないじゃない」

ウイル達が城下町から帰ってきた夜。

暗い暗い闇の中、1人のフードを被った人が壁を歩きながら悪態をついていた。

足の裏にある壁を何度も叩くように踏みつける。

勿論、しつかりとした固定化の魔法がかかっており、傷一つつかなかった。

「…………オールド・オスマンが居ない日は、今日だけだつてのに」

足を止め、誰も居ないのに眩き、考え込むかのように腕を組み顎に手を当てた。

腕を組んだ際に豊満な胸が柔らかく動き、腕に合わせてその形が変化する。

「…………」

暫くの間、壁を歩き回り、カツンカツンと渴いた靴の音を鳴らす。

そして数分経った頃に懐に手を入れ、何かを取り出した。

取り出したものはナイフで、軽く壁を傷つける。

壁を切り付けるも効果はなく、傷一つつかなかった。

「取り合えず…………殴って駄目なら違う方法を探るか、別の所のを盗むか」

そう眩くと今まで働く事を忘れていた重力が働き、女性の足が壁から離れ落ちていく。

「…………『クリエイト・ゴーレム』」

女性が落ちながらも杖を振り呪文を唱え魔法を紡ぎ出す。

杖を地面へと向ければ、地面が盛り上がり女性へと迫る。

体を空中でぐるりと回し、迫ってきた土の壁へと着地した。

ゴゴゴゴゴツと大きな地響きを起こしながらも盛り上がりつついき、

先ほど女性が立っていた壁ほどまで大きくなった。

盛り上がった土は、『人型』をしており、大きさは三十メートルにも及

ぶ大きさであった。

『やれ』

杖を振り、命令するとゴーレムが動きだし、大きな腕で壁を思いつきり殴りつける。

壁を殴るとゴオンと大きな音と振動を起こし土ぼこりが舞う。

「げほげほ……やっぱり、無理か」

土ぼこりに咽ながらも壁を見れば、傷一つないことに落胆したように呟く。

壁はほんの少しだけ土で汚れた程度でまったくもって変わりがなかった。

「さて……どうするか。これを使うのも癪だしね。貰いもんだし何が起こるか」

大きな音を立ててしまい、見つかるのも時間の問題だろう。

そんな時であった――

「ったあ!？」

女性の隣にあつた壁が大きく爆発したのだ。

女性の体に爆発が直撃しなかったものの爆風で煽られ驚愕の声をだす。

己の身を隠すために着ていたであろうフードで顔を隠し耐えた。

「な、なんだい……いきなり」

爆発も収まり、何があつたのかと下を見下ろす。

下を見下ろせば、二人の男女が立って此方を見ていた。

女性の方は啞然としており、男性は呆れたように首を横に振っていた。

「にやろく……直撃してたらどうするのさー!」

チラッと後ろを見れば爆発した壁に罅が入っていた。

三十メートルの大きさのゴーレムでも罅すら入らなかつたのだ。

そんな壁に罅を付ける魔法をぶつけられそうになり怒りに怒つたのだろう。

「……んっ、罅?」

ふと、気付いたか、男女に杖を向けた所で女性が振り返り、壁を凝

視する。

「チャンスー！」

暫く凝視した後に、杖を男女から外し壁に向け、もう一度ゴーレムで殴りつける。

「はっはっはー！やったー！」

ゴーレムで殴りつけると先ほどの苦戦が嘘のように壁が崩れていく。

女性はフードを深く被りなおすとニヤリと笑い、中へと進入を果たす。

「破壊の杖はっと……」

中へ入ると様々な物がしつかりと並べられ大事に保管されている。

女性は最初からそこにある事を知っていたかのように淀みなく歩く。

「あつた、あつた♪」

目的の物が見つかり嬉しそうに鍵を壊し中身を取り出す。

目的の物は、真っ黒で大きな円筒型の物体であった。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。——土くれのフーケ』

腕で抱え込むと杖を取り出し壁に文字を刻む。

「これでいいね♪」

壁に書いた文字を見直し、機嫌よく走る。

結構ゆっくりしていたので流石にそろそろ人が集まりそうだ。

走り、空いた穴から外へと飛び出そう——として出来なかった。

「なっ!?」

壁からゴーレムに飛び移ろうとした瞬間、下から男性が湧いてきたのだ。

フライで飛んできたであろう人物に女性が驚き、口を開いたまま固まる。

「っ!!」

「ちっ!!」

啞然としていた女性だが、相手の次の行動に気付きしやがみ、攻撃を回避した。

月明かりに照らされ鈍く光り輝いていた剣が頭の上を通り過ぎていく。

『錬金っ!』

『フライ!!』

避けた瞬間、男性が地面に着地し、もう片方の籠手先を針に変化させ突き刺してくる。

まったくもって容赦ない攻撃に涙声ながらも女性は飛んで回避する。

女性は、飛びながら男性を避けるように上へ回りこみゴーレムへと逃げる。

攻撃を避けられた男性は、飛んだ女性に視線を合わせつつ自分の後ろに来た際に冷静に蹴りを入れた。

ガンツと大きな音を立て蹴りが女性が持っていた円筒へと当たり、女性が後ろに吹き飛ぶ。

「うくっ…… 『フライ!!』」

「……………」

女性は吹き飛びながらもフライを唱え、ゴーレムに突っ込むとそのまま姿をくらます。

男性も急いでフライで飛び上がり、女性を追おうとするもゴーレムの制御を切ったのか、ゴーレムが崩れ落ちていった。

「……無理かな」

「ウイルー!!」

困り顔でゴーレムを見ていると下に居たピンク色の少女に呼ばれる。

男性は、少し考え込むように土の塊になったゴーレムを一瞥するも下へと降りた。

「どうだった?」

「ごめん、逃した」

ピンク色の髪の少女が、結果を聞いてきたので男性は素直に頭を下げた。

「別にいいんだけど……ウイルから逃げるなんてすごいよね。『土く



「勝ったな」

「子爵は……えつと、す、スクウェアで一番凄くて。盗賊はトライアングル……っていう一段下のクラスだろ」

「それを言うなら、俺はラインだ。結局の所クラスなんて宛てにならないよ。今回は逃げに関しては相手の方が俺より一枚上手だった。それだけさ」

「そうか……相手が凄いなだな」

ようやく理解してくれたらしい。

その事にもう一度苦笑しながらも、部屋の前へと辿り着きノックをする。

何度か扉を叩くと『入れ』と重苦しい声が聴こえ、返事をして扉を開く。

扉を開くと、既に教員が勢ぞろいして、此方へと視線を向けていた。

「呼ばれましたので参上致しました」

「うむ、ぐ苦勞」

視線を無視してオールド・オスマンへとお辞儀をするにこやかな笑みを返してくれた。

此方が緊張しないようにと気を使ってくれたのだろう。

「……ごほん、先ほどの話の続きですが、土くれのフーケ！魔法学院に手を出しおつて！忌々しい！」

「衛兵はいったい何をしていたのかね？」

「平民が役に立つとでも？踏みつけられてお終いだろ」

「それより当直は！当直は誰だ！」

次々に教師が好き勝手言つて騒ぎ出す。

それを横目で見ながら行儀良く待っていると、ミセス・シユヴルーズが震え上がった。

どうやら彼女が昨日の当番だったらしい。

昨晚、駆けつけてくるのが遅かったところを見るにさぼって寝ていたのだろう。

本来であれば夜通し門の詰め所で待機をしておかなければいけないのにも関わらず。



「ミセス・シユヴルーズ！あなたが昨日の当直では！」

教師の1人が思い出したのか、早速とばかりに問い詰める。

自分に責任が回らないように先に釘を刺しておこうと言う魂胆か。

まあ、責任の所在をしつかりとさせておくことは良いことなので特に何も言わない。

しかしだ、秘宝を盗まれた、責任を追及されたミセス・シユヴルーズは泣き出してしまう。

「も、申し訳ありません」

素直に謝るミセス・シユヴルーズを見て好感を抱く。

言い訳をするのでもなく、しつかりと謝罪し自分が悪いのだと認め  
ていた。

「泣いてどうしますか！お宝は戻ってこないのですぞ!!それともなにか、あなたが弁償するとしても？」

「わ、わたくしは……」

ミセス・シユヴルーズ言葉に詰まる。

学院の秘宝ともなれば、値段がどのぐらい付くかも分からない品物だ。

弁償といわれても出来ないであろう。

そう思っている彼女が床に泣き崩れた。

「これこれ女性をそう責めるのはいかんよ」

「オールド・オスマン……しかしですね」

オールド・オスマンが彼女を鬨ぎ立てる教師に注意を促す。

ここで彼女を追及してもしょうがないと分かっているのだ。

「しかしですな！ミセスは当直なのに寝ていたのですぞ?!責任を取ってもらわねば！」

教師の言い分も良く判る、しかしだ。

この場において話すのは別の事だろうとも思った。

責任がミセス・シユヴルーズにある、と分かったのだ。

さっさと切り替えて次の話題に移るべきだろうに……しつこい人だ。

「あー……ミスタ、なんだっけ？」

「ギトーです!!お忘れですか!!」

「そうそう。ギート君。ギート君、そんな名前じゃった」  
「ギトー!」

「君は怒りっぽいのお……怖いわ。それはそれでじゃが、この中でまともに当直をしたことのある者が何人おられるかの?」

怒るギトー先生を流し、鋭い視線で辺りを見渡す。

教師達はお互いに顔を見合わせるも恥ずかしそうに顔を伏せた。

どうやら誰もまともにはやっただことがないらしい。

「さて、これが現実じゃが……。責任があるとすれば我々全員じゃ。この中の誰もが……。私含めて、まさか魔法学院に賊が入るとは思わなかった」

「……………」

全員がオールド・オスマンへと視線を集中させる。

「ここにいるのは優れたメイジ達、誰が好き好んで相手をしたと思うか。じゃが間違いであった」

穴が空いた壁を見て寂しそうに微笑む。

「この通り、賊は大胆不敵に入り込み、『破壊の杖』を奪っていきおつた。つまりは……油断じゃ、我々は油断していた。故に責任は我々にある」

オールド・オスマンが言い切るとミセス・シユヴルーズが感激したように抱きついていく。

「おおお、あなたの慈悲にお心に感謝いたします!!」

感謝する彼女のお尻をオールド・オスマンが撫で上げる。

おい、なんでここでセクハラをするんだよ、今ので好感度がぐんと下がったぞ。

「えんじゃよ……ええのお。ミセス……」

声が、心の声が漏れてます。オールド・オスマン。

「わたくしのお尻でよかったですら!いくらでも!」

ミセスの言葉で他の教員も気付き、じと目でオールド・オスマンを見つめる。

オスマンは、こほんと咳をして誤魔化した。

本人からしたら場を和ませようとしたのだろうが、いつもがいつもだ。

誰も突っ込まず、何時もの事だと呆れた。

「で、犯行の現場を見ていたのは……俺達です。オールド・オスマン」  
「……そうじゃった」

またお前かという視線で見ないで欲しい。

別に好き好んで事件に首を突っ込んだり、起しているわけではない。

「詳しく説明したまえ」

「はい」

ルイズをチラッと見て頷き自分が前に出ると視線で言うとき軽く頷いてくれた。

「なんじゃ……おぬし等のその「俺に任せろ」「分かってるわ、頼りにしてる」とか思える遣り取りは」

心を読まないで欲しい。

当たってるだけに性質が悪い。

「ルイズと昨晚散歩をしている時に……」「なんじゃ、デートか羨ましいの」……散歩です!!」

「あら、私達も一緒に居たじゃない」

ちやかしてくるオールド・オスマンの言葉を否定し捏造するキュルケを睨む。

「散歩していると壁にくっ付いていた人影がありましたので見上げた所。フードを被った人が壁に引っ付いてました」

「なにそのホラー」

「オールド・オスマン?」

「分かったわい、何もいわんよ」

何回口を挟めば気が済むのだ。

「暫く見ていると壁から足を離し、ゴーレムを呼び出すとそのまま壁を殴り始めまして、壁を破壊し中へと進入しました」

「ふむ」

「このままではと思い、自分がフライで飛び上がり、剣で応戦でしたの

ですが、蹴り上げた所をゴーレムの中に入れ逃げられまして」

「なんと！応戦までしたのか！」

「残念ながら……逃げられましたけど。情報も得られました」

「情報？」

「フーケは『女性』です」

自分の言葉に場がざわめきだす。

「して、理由は？」

「体つき、顔つき、声、ローブの下はスカートを履いており、女性と思われまます」

「さすがにスカートを履いた男性とは思いたくもないの」

「同感です」

オールド・オスマンの言葉に同意してしまった。

近くに心が男の体が女性の奴が居るがアレは、また別だ。

「ふむ……後を追うにも手がかりはなしか、そういえば……コルベール君」

「はい」

髭を撫でていたオールド・オスマンがコルベール先生へと問いかける。

何かに気付いたようだ。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「それが……、朝から姿を見ていません」

「この非常時に？」

「はい」

オールド・オスマンの顔が歪む。

露骨に怪しいので彼女がと思ったのだろう。

そんな事を話しているとミス・ロングビルが扉を開け、急ぎ足で此方へとやってくる。

「ミス・ロングビル！何処へ！この一大事に離れては疑ってくれと言ってるようなものですぞ！」

コルベール先生が彼女を心配し声を上げる。

しかし、ロングビルはコルベール先生を一瞥し落ち着き払った態度

でオールド・オスマンに告げる。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしております」  
「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎ。そしてこの宝物庫はこのありさま、すぐに壁のフーケのサインを見つけまして調査をしております」

「仕事が早いのも、それで結果は？」

オールド・オスマンが真剣な表情で問いかける。

「はい。フーケの居場所を突き止めました」

ミス・ロングビルの言葉に教師がざわめく。

「誰に聞いたんじゃない？」

「はい。近在の農民に聞き込みをした所、近くの森の廃屋に入っていた黒ずくめのローブの『男』を見たそうです」

「男？」

「男です」

場に何とも言えない空気が漂う。

視線がロングビルと自分に漂わせている。

「えーと……そのなんじゃ」

「はい？」

「悪いがそれは別人じゃない」

「わふ!？」

オールド・オスマンが哀想な子を見るような目でミス・ロングビルを見る。

他の教師も哀れむような視線であった。

「ミスター・ウイルが交戦してお」

「……はい」

「男でなく、フーケは女性であったと証言しとるんじゃないよ」

「……………じよ、女性？」

オールド・オスマンの言葉にミス・ロングビルの口元が引き曇る。

なんか、ごめんなさい。お疲れ様です。

「な、仲間の可能性は？」

「それもなくては……ないか」

「そ、そうですよね！ね！」

時間を掛けて調べたのを無駄足にしたくないのだろう。

ミス・ロングビルは一生懸命、訴えかける。

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で四時間といったところでしようか」

……半日、馬で四時間？

「すぐに王室に報告を!!手がかりも少ない今、そこに行くしか！」

コルベール先生がすぐに提案する。

いつもは冷静で思考深いのに今日はどうしたのだろうか。

こんなの考えればすぐに分かるだろうに、正直犯人が分かりやるせない気持ちになる。

「ばかもの！王室なんぞにしらせている間にフーケが逃げるわ！その上……身にかかる火の粉を己で払えぬようで、何が貴族か！」

ビリビリと腹の底から響き渡る怒号に全員が黙り込む。

「魔法学院のお宝が盗まれた！これは魔法学院の問題じゃ！当然我らで解決する!!」

この言葉にミス・ロングビルが嬉しそうに微笑む。

まるでこの答えを待っていたかのように。

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ」

オールド・オスマンが咳払いし、有志を募る。

しかし、誰も杖を挙げない。

全員困ったように視線を彷徨わせるばかりだ。

「おらんのか？おや？どうした！ラインメイジの彼でさえ応戦したのじゃぞ！フーケを捕まえて名をあげようと思わんのか！」

自分の事が挙げられるも誰も挙げない。

苦々しく自分を睨む者が大半で嫌気がさした。

「おお……杖を挙げたか……って『ミス・ヴァリエール』？」

ようやく杖を掲げた者が現れ、オールド・オスマンが破顔するも直ぐに強張る。

杖を挙げた一人目は……ルイズであった。

## 二十話：二人だけの舞踏会

「……ルイズ？」

「……………」

杖を掲げるルイズへと声を掛けるも返事はない。

ただただ、オールド・オスマンを真剣な表情で見つめ動かない。

「あーあー……ミス・ヴァリエール。君は生徒じゃろが」

「だって……誰も挙げないじゃないですか」

オールド・オスマンの言葉にルイズは悲痛な声で言い返す。

その声を聞いて教師達はばつが悪そうに視線を逸らすものの、それだけだ。

誰一人として杖を挙げない。

「……………なんで」

「……………」

ルイズが一人一人視線を向けるも、必死に目を背けるばかりだ。

これが教師、これが……トリステインだ。

ルイズが失望したような表情となり、目には涙を溜めていく。

ついには、下を向き声を出さずに泣き始める。

その間も決して杖を下げずに……。

そんなルイズに近づき、腕を掴み下げさせ抱きしめる。

頭を軽くあやすように叩き、ゆっくりと撫でた。

その際に服をぎゅっと掴まれ顔を押し付けられる。

ああ……本当に、本当にルイズは強く、優しく、気高い子だ。

ルイズが何をしようとしていたかを悟り、そんな事を思う。

ルイズはきつと、生徒である自分が杖を挙げる事によって、他の教師が立ち上がることを期待したのだろう。

魔法がまともにも成功しない自分が、失敗ばかりの自分が挙げれば、きつと奮起してくれると……。

だが、それは無駄だった。

此処に居る教師は、挫折や失敗を碌にしていな人物ばかりなのだ。

ルイズのように、失敗しても立ち上がる勇氣を持っていない／学んでいない。

ルイズのように、貶されても真つ直ぐ前を向いて歩ける強い／氣高い意思がない。

結局は、失敗し名が落ちるのが怖いのだ。

一度名が落ちたらお終いだと、終わりだと勘違いをしている。

「本当に終わらせるか」

「……………ウイル？」

気付けば、そんな事を口走っていた。

本来であれば、フーケを泳がした後でオールド・オスマンにこつそりと報告するつもりだった。

この場で俺がフーケを捕まえてしまえば、教師の名は落ちる。

こんな簡単な事が分からなかったのかと目の前で笑っているのに気付かなかったのかと。

一応部屋の恩義もあるし、他の教師に目を付けられるのも嫌だし、これ以上目立つのも嫌であったから泳がそうと思っていた。

だが…………だ。目の前でルイズが泣いているのに、何もしない、ほんくら共を庇って何になる？

腹の中が煮え返り、怒りが湧いてくる。

ここまで怒りを感じたのは何時以来だろうか。

「……………キュルケ、ルイズを頼む」

「え……………ええ」

今の自分はどんな顔をしていたのだろうか。

ルイズの肩を掴み、離すとキュルケに任せる。

キュルケは顔を引きつらせながら、ルイズを受取るとそのまま抱き寄せた。

「……………」

「ミスター・ウイル？」

先ほどから気まずそうにしていた教師達を見ずにロングビルの隣へと移動する。

その際にポケットに手を入れ予備の杖をぎゅつと握る。



「どうかしたのかね？」

「いえ、ミス・ロングビルにお聞きしたい事がありました」

「私に？」

ロングビルの隣に立つとオールド・オスマンが不思議そうに聞いてくる。

そんな二人に会心の笑みを浮かべた。

「まずは……場所を詳しく教えていただいても？」

「それは……私が案内すれば……」

「何故、そこまで渋るのです？そのぐらい教えてもいいでしょう……怪しいですね」

渋りだす彼女にそう言えば、顔をムッと不満気にし口を開く。

「いいでしょう、場所は——」

「なるほど、ありがとうございます」

「へっ？」

『ブレイド』

場所を教えてもらい、直ぐに杖を引き抜くと『ブレイド』の魔法を放つ。

杖先から銀色の鋭い刃が飛び出し、ミス・ロングビルの首を掠め停止させる。

「なにをつ!!」

「……」

ミス・ロングビルを人質に取ったように見えたのだろう。

教師達が俺へと杖を向け警戒をし始める。

辺りをぐるっと見渡し全員が自分へと杖を向けているのを確認して頷く。

これでいい、これで……ミス・ロングビルも逃げられない。

彼女と距離が近いため、魔法を撃てば彼女にも当たる。

「まだ、お聞きしたいことがあります……」

「ミスター・ウィル!!貴様!フーケの仲間か!!」

「……節穴の目と頭をお持ちの方は黙っててもらえますか?」  
「なっ!」

一人の教師が見当外れの事を言い、黙れと笑顔で命令をする。

正直自分でもやりすぎだとも思うも、既に我慢の限界を超えている。

「ミス・ロングビル……今何時だと思えますか？」

「は？」

「何時だと思えます？」

ブレイドの刃を首に当てたまま質問をする。

質問をすれば彼女が『何を言っているんだとばかり』に呆けた。

「……何時つて……朝の八時……っ！」

「そうですね。八時ですね、あなたは——何処で情報入手したんですっけ？」

「そ、それは——」

「おかしいですね、おかしいな。徒歩で半日、馬で片道四時間。少なくともあなたが聞き込みを行なったのは午前四時となるのですが」

辺りがざわめき始める。

どうやらようやく気付いたようだ。

遅すぎる、あまりに遅すぎた。

「聞き込みの時間も入れればもつと短いです。二時〜三時頃になります。何故農民がそんな時間に外を出歩いているので？」

「っ!!」

「この世界でその時間に平民がうろつけば、どうなるか常識でしょうに」

ハルケギニアには、多くの生物が生きている。

盗賊だけでなく亜人や吸血鬼、オークにゴブリン……人を害する生き物が多い。

力のない平民が夜に出れば彼等の餌食になるだろう。

それなのに……聞き込みが出来た？

しかも森の奥の廃屋を見ていた？

「あなたは……『朝方起きて調査を開始した』といっていましたけど、変わってますね。あなたの朝方は午後十一時からなんですわね」

「ああ……あ」

聞き込みが午前二時、三時から始めたとして其処に行くまでに更に

四時間。

午後十時から十一時となる。

昨日の事件があつたのが十一時を少し過ぎたところ……どう考えでも時間が合わない。

「更に言つてしまえば……実は応戦した時に刃に特殊な薬をつけてまして」

「特殊な……薬？」

「ええ、少し暖めれば青く浮かび上がる特殊な薬です。ほら……ミス・ロングビルの首元に『うそっ！』……嘘ですけど」

「はえ？」

慌てて首元を押さえるロングビルに全員が呆気に取られた。

なんと言うか、古典的な事に引つかかる人だ。

よくこれで色んな宝物を盗んでこれたものだ……宝物庫の壁を殴つてた様子を見るにもしかして、この人……力づくで盗んでいたのだろうか。

だとしたら、盗まれた貴族つて……。

「オールド・オスマン！」

「う、うむ。『束縛』」

「あぐっ……」

頭を振り、嫌な考えを吹き飛ばしてオールド・オスマンへと声をかける。

オールド・オスマンは、驚きながらも杖を振り、束縛の魔法でミス・ロングビルを拘束した。

それを見届けてからブレイドを解除し杖を下ろす。

「誰かを先ほど聞き出した場所へ向かわせるべきです」

「あい、分かった。ギトー君、コルベール君。君等二人が行きなさい。これは命令じゃ」

「………はい！」

「………そんな、まさか………彼女が……」

ギトー先生は、自分とオールド・オスマンに視線を何度か往復するも杖を掲げ答え。

コルベール先生は、信じられないとばかりに悲しそうに首を振った。

それを見届けた後に、踵を返し扉を開く。

「まてーミス・ロングビルがフーケだった場合、君に報酬と勲章が——『要りません』……」

「勲章を贈ると言うなら、誰よりも！先に杖を挙げ勇気を示したルイズです!!俺は要りません!では!」

限界だ……叫ぶように言い放ち、扉を強く閉め駆け出した。

「はあ………やっちゃったな」

「だいぶ、怒ってたものね」

「はしばゝみ」

「うふふ……ルイズが泣いてカツとなっちゃったのね」

「………そうだよ。久々に本気で怒った」

「はしばみ、むしゃむしゃ」

なんであんなに怒ったのか、なんであんな事をしたのか。

俺はルイズに恋愛感情を抱いてない筈。

あれは友人が泣いたから、怒った?いやでも………何かが違う。

一人で落ち着きたくなり、あの後には部屋へと戻り不貞寝した。

寝ていたお蔭か誰にも起されず、目が覚めれば夕暮れとなっていた。

新入生歓迎のパーティがあると思い出し、のそのそと着替え会場へと赴く。

途中で先生に会い気まずく、逃げた先はバルコニーでワイン片手のんびりと外を見続ける。

そんな風に行っているとキュルケとタバサがやってきて今の通りである。

キュルケは朝の事で楽しげにからかい、タバサはハシバミ草（物凄く苦い葉っぱ）を草食動物のように食べ続けている。

「婚約者を泣かされたんだものね。怒ってもしょうがないわね」

「婚約者か……ルイズはどう思ってるんだろ」

「はしば……みがない？」

キュルケの言葉にルイズの気持ちを聞いてない事に気付く。

『ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな〜〜り〜〜！』

思考に耽っているとホールの壮麗な扉が開き、ルイズが姿を現す。

ルイズは長い桃色の髪を、バレツタにまとめ、白いパーティドレスに身を包んでいた。

流石は公爵家の娘だけあって登場も他の貴族とは格が違う。

ルイズ自身も慣れているだろう、堂々としており、高貴さが眩いほどである。

名簿を見て全員を確認し揃った事を確認し楽士が音楽を奏で始めた。

音楽は小さく、耳障りにならないように気を使われていて耳心地が良い。

「あらあら……あれだけ馬鹿にしたのにね。調子いいわよね」

「そうだなー……」

「……はしばみ」

「はしばみは、あっちの奥に置かれてたよ」

「はしばーみ」

両手で持っていたお皿を掲げタバサが生徒を掻き分け消えていった。

それを見送り、ルイズを見れば、ルイズの高貴さと美貌に驚いた生徒達が群がり、さかんにダンスを申し込まれている。

男子生徒は遠めに見ただけでも鼻を伸ばしており、だらしない。

「馬鹿にした癖に美貌であれか」

「女の武器の一つだもの……それよりいいの？ルイズ取られちゃうんじゃない？」

「ないな。ルイズの性格からして」

キュルケの言葉に軽く返し、ワインを一口飲む。

飲んだ後にルイズを見れば、ルイズは断り此方に一直線に向かって来る。

「相変わらず、分かり合ってるのね。……私はお邪魔ね。おほほほ……」

近づいて来るルイズを見てキュルケは笑いながら楽しげに離れていった。

いつもならルイズが来た時に何かしら言ってからかうのだが、今回はそれもしないらしい。

「大丈夫？」

「大丈夫……だいぶ落ち着いた」

ルイズが目の前に立ち腰に手を当て首を傾げる。

そんなルイズに苦笑し答えた。

「朝はごめん」

「あれって私の為に怒ってくれたのよね？」

「……そうだね。そうだ」

「なら、謝る必要ないわよ」

そう言って、ルイズは腰に抱きつき見上げてくる。

お化粧もしているせい唇が綺麗に輝き艶っぽい。

「あの時、本当に悲しかった。私より優秀な人達が立ち上がろうとしなくて」

「……………」

「それで悲しくて泣いちゃって、ウイルに抱きしめてもらって……それだけで」

あの時の事を思い出し、ルイズを軽く抱きしめてみる。

するとルイズは、嬉しそうにはにかみ頬を摺り寄せてきた。

それを見て片手を離し頬に宛て軽く撫でると眼を潤ませ唇を此方に突き出してくる。

そんなルイズに顔を近づけて……

「……唇じゃないのね」

おでこに唇を落とした。

「なあ……ルイズは俺が好きか？」

ルイズの問いに答えず、前から聞きたかったことを聞いてみる。

場の雰囲気のせいかな、すんなりと聞いた。

「好きよ」

「……………あー」

暫しルイズは考え、その様な答えが返ってきた。

「ワルド様への気持ちか『憧れ』だった」

「……………」

「ウイルスへの気持ちとワルド様への気持ちは違う。お母様ともお父様

ともお姉様達とも」

「……………」

ルイズの言葉を真剣に聞く。

「こうやって抱きしめられて、傍に居てくれると胸が痛いほどドキドキとするの」

「……………」

「さっきの口付けも嫌じゃなかった。おでこだったけど……溶けて仕舞うほどに幸せ」

ルイズのくりくりとした目と視線が合う。

ルイズの目が真剣で本当の事を言っていると理解できた。

「好きって、これでいいと思うの。お互い傍に居て幸せ」

「一緒に居て……幸せ。シンプルだな」

「ウイルスが難しく考え過ぎなのよ」

「そうなのかな？」

「そうよ」

困ったような泣き出しそうな表情でルイズに問えば、ルイズは笑って返してくれた。

気持ちが悪くちやぐちやとなる。

「それにウイルのは『愛』じゃないと思うわ」

「何を……」

「ウイル……ウイルの好きな人は遠くへ行ってしまっただけよね？」

「っ——聞いてたんだ」

「うん。ねえ……なんでその人を探さなかったの？」

「それは……」

ルイズの言葉に答えようとして黙り込む。

そういえばだ、あの子は死んだわけじゃないのに何故探さなかった？

「本当に好きなら探すわよね？」

「……っ！」

「何も言わずに行ってしまった彼女に振られるのが怖かったんじゃない？」

「ああ——」

彼女への想いに罅が入る。

「ウイルは脅えていただけ、あの子を見つけて振られるのが。告げずに行ってしまった真実が怖いだけ」

「そんな——！」

「そんな自分が嫌で、彼女を忘れない事を自分への罰にした」  
「……」

今度こそ言葉が出ない。

ルイズの言うとおりで。

現代日本、探そうと思えば幾らでも方法はあった。

友人に聞きまわれれば簡単に分かる筈だ。

それなのに自分はしなかった、出来なかった。

何故……？それは怖いからだ、何も告げずに自分の前から居なくなつた、あの子が。

あの子に振られることが……忘れられている事が。

「ねえ……ウイル、踊りましょ？」

「っ……でも」



「今は踊って踊って疲れるまで踊って。眠って夢を見るの」

「……そうすると、どうなるんだ」

ルイズが離れ両手で此方を引っ張り出す。

バルコニーにくっ付いていた体が離れホールへと出る。

『きつと……夢の中でウイルの好きな人に会えるから、夢の中で思いつき振り振られてきなさい』

ルイズが笑顔でそう告げた。

それに驚き目を見開くも、微かに笑い、ルイズの手を取り音楽に合わせ、リズムを刻む。

楽しげに踊る、ルイズを見て嬉しくなる。

頬が緩み、笑みが自然と浮かぶ。

まだ、ルイズへの気持ち分からない、けど……取り敢えずは、

『ああ……夢の中で振られてくるよ』

最初の恋にけりをつけようと思う。

## 二十一話：月下美人

『夢の中で振られてきなさい』

「……………」

舞踏会が終わり、早くも四日ほどが過ぎていた。

ルイズとの関係は特に変わりなく、未だに友達関係だ。

それに特に文句を言うわけでもなく、待ち続けるルイズはやはり自分には勿体無いと思う。

そんな中、ルイズに言われた言葉をぼーと脳裏で考える。

あの言葉を聞いて以来、ずっとずっと考え続けているのだが、未だに答えが見つからない。

ルイズの言葉を受け、初恋に決着をつけようと思ったままでは良かった。

問題はどうかやって決着をつけるかだ。

一番良いのは実際に会って振られること……なのだが、出来たらこんな苦労はしていない。

ルイズもそれとなく理解しているからこそ、夢の中でと言ったのだろう。

結局は自分自身で振られたと終わったのだと思わなければいけないのだが、未だに実感が湧かなかった。

「何してるのー☆」

「……………カリオストロ」

火の塔の一番上で星を眺めていると声がかかる。

振り向かなくても分かる声にその人の名前を呼んで答えると、カリオストロは直ぐ隣に腰を下ろした。

特に会話もなく、二人して星を眺めるだけ。

持ってきていたワインとツمامミを口にしつつ、ただただ眺める。手を伸ばし、ツمامミを取ろうとするも手が空ぶった。

見れば皿には何もなく、カリオストロが最後の一切れを口にしていった。

「中々だな」

「そりや、良かった」

満足そうなカリオストロを横目にワインを軽く飲む。

カリオストロは爪楊枝らしきもので歯の間の物を取っている。

なんと言うか、可愛らしさを求めるくせに変な所で親父臭い。

「それで……何悩んでるの〜?」

「初恋の終わらせ方」

「あー……そりやオレ様にも分かんねーわ」

「だよな」

悩んでいる事を打ち明けるも予想通りの答えが返ってくる。

元男性であり、可愛いもの好きなカリオストロだ。

男性に興味が無い上に、自分より可愛い女子は敵。

自分以下の女子に目が移る事もないのだろう。

後は、自分以外を見下し、常に一人で居る事もあげられる……色々

と大変な奴だな。

「なんだ、人を可哀想なものを見るような目で見やがって」

「カリオストロの恋愛事情が酷いなと」

「まあ、それはしようがないだろ……今まで愛情なんて感じた事ない

しな」

「……親からも?」

「親からもだ。オレ様の故郷は医者もいない辺境だ」

「……」

カリオストロが軽く指を鳴らすとワイングラスが出来上がる。

そのグラスにワインを注ぐと軽く揺らし飲み、唇を濡らした。

「やれ『あいつは終わりだ』、やれ『可哀想に』、やれ『大人になるまで

に死ぬだろう』」

カリオストロが気だるげに指を折り、一つ一つ言葉を思い出す。

二千年経ってもその言葉を覚えてる事に少し思うところもあるが

口にはしない。

「思えば……病弱でも虐待されたり、殺されなかった。生かして貰っ

ていた事が愛情だったのかもな」

「……そうか」

「そうだよ」

なんと言えばいいのか分からずワインを口にする。

暫し無言でワインをお互いに飲み星空を眺めた。

「そういえば……カリオストロは妹が居たよね？」

「そこまで知ってるのかよ……まじで何なんだお前は……」

先ほどの話題を変える為に考え話すと渋い顔をされる。

「あいつは……なんだろうな。あまり覚えてねーな」

「仲悪かったのか？」

「だったような気がする……んー……覚えてないな！」

「……そっか、聞いて悪かった」

「覚えてねーし、別にいいけどな」

罰悪く、謝罪をする。

原作のグラブルで『クラリス』と言う、カリオストロの妹の子孫らしき人物が居たことを思い出した。

あまり覚えてないが、カリオストロの天敵だった筈。

カリオストロが此方の世界に来ている以上、あちらからまた何人か此方に来ているかも知れない。

もしも敵対すればカリオストロといえども危ないかと思い、少しでも情報をもったのだが、情報は乏しい様だ。

「なんでそんな事を聞くんだ」

「……カリオストロの妹の子孫でカリオストロの天敵が居たことを思い出したんだ」

「……オレ様の妹の子孫……天敵……？」

「たしか……開祖の家系の看板を掲げていた筈」

素直に口に出せば、カリオストロは腕を組み考え始めた。

それを横目にワインを飲み、自分もまた思い出そうと頭をひねる。

「あーあー……そんな奴等も居たかも知れねー」

「居たかもって……もしかしたら自分の妹の子孫だろうに」

「他人に興味ないしなー」

ツツコミを入れればカリオストロはケラケラと笑う。

本当に他人に興味がないのだろう。

「たくよーお前は自分の初恋に悩んだり、オレ様の事で悩んだりと抱えすぎじゃね？」

「とはいってもな。カリオストロはパートナーだし、安全を確保するのは当たり前だろう」

「……………パートナーね」

思った事を口にすればカリオストロが眉を潜め、首もとのルーンに触れた。

「カリオストロが俺に飽きたり、離れていくまでパートナーだよ」

「……………」

「それまで俺からは何があっても離れない」

今ここにカリオストロが居るのは、知識を貯め、愛情を知る機会があるからだ。

地盤を作り、知識を貯め、愛情を知れば、自分の下を離れていくかも知れない。

そのことを思うと胸が痛む、あの時の焼き増しのように痛い。

それでも……………。

「……………なんだ」

「カリオストロ？」

「えっと……………そ、そんなにオレ様の得た真理が知りたいか」

「いや、知りたくないけど」

「……………あー？」

胸を張り、答えるカリオストロに間もなく答える。

カリオストロの知った真理を教われれば、ほぼ不死身の体になる。

しかしだ、聞いたところで理解出来ると思えない。

猫に小判、豚に真珠、そんな訳で特に興味はない。

「カリオストロとこうやってお酒を共にして、一緒に過ごして、一緒に会話して……………それだけで十分だよ」

「……………」

前世の時に好きだったカリオストロと一緒に過ごさせて話せるだけで満足なのだ。

カリオストロを利用する気がないと言う事が伝わればなと思った

のだが……少しばかり、露骨過ぎただろうか。  
不自然に固まるカリオストロを見てそんな事を思った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「カリオストロとこうやってお酒を共にして、一緒に過ごして、一緒に  
会話して……それだけで十分だよ」

「――」  
ウイルの言葉に何も答えられなくなった。

真意を探ろうにも特に嘘を言ってる訳でもない、純粋な好意を此方  
に向けてきている事が分かる。

真っ直ぐな言葉に純粋な好意。

なんとというか……むず痒い。

体の奥からむず痒くなり、何とも言えない感情が生まれる。

冷静を装いつつ、首もとのルーンに触れた

ルーンからは力が感じられず、光もしていない。

つまりは、今の感情はルーンから与えられた物ではなく……オレ様  
自身が感じた感情だと分かる。

(ありえねー……あえりねー……)

二千年もの間、感じなかつた感情に驚愕し慌てふためき、何とも言  
えない感情に言葉が出ない。

暫く視線を辺りに彷徨わせるとウイルの顔へと視線がいく。

「……………」

ウイルは静かにワインを口にし空を見上げている。

そんなウイルの顔を見て、ストーンと納得が落ちてくる。  
そうか、そうだったのかと自分の中で結論付けた。

今まで自分に寄って来た奴等は、自分の真理や知識を必要とした者、または排除しようとしてきた奴等だ。

それに比べ、目の前の男は知識を求めず真理を求めず、排除するわけでもない。

むしろ傍に居るだけ、自分の事を知りながらも邪険にせず傍にいて一緒に過ごすだけ。

それが堪らなく……堪らなく……嬉しい。

(そうか……気に入ってんだな。オレ様)

自分の気持ちを知り、薄く笑う。

どうやら自分はこの生活が気に入ってるらしい。

「分かんないな」

そんな事を感じていると隣から声が聴こえる。

ウイルの呟きに隣を見ればまた眉を潜め悩んでいた。

「……………」

まだ悩んでるのかと呆れたため息を付く。

これだけ悩んでも分からないなら、他の面から考えれば良いものを

……………しようがない。

「ウロボロス！」

「……………カリオストロ？」

ウロボロスを呼び出し、跨るとウイルへと手を伸ばす。

ウイルはいきなりの事で驚き、手を見てウロボロスを見て困惑して

いた。

「乗れ」

「あーと？」

手を引っ張り、困惑するウイルを後ろに乗せると、そのまま空を飛んでいく。

「いくら考えても分かんねーなら、諦めろ」

「諦めろって……………」

「あくまで一時的にだ。案外後でポロリと解決策が出てくるもんだぜ

「？」

「……………」

「今だけは……………忘れる。疲れるだけだ」

暫く飛べば、雲をつき抜け星空の下へと出た。

雲を下に目の前に浮かぶ大きな双月を二人して眺める。

暫く塔の上よりも大きくなった双月に心が奪われるも、雲の上のせいか寒く身を震わせる。

普段着を着てきた為に寒い。

両手で体を抱きしめるも寒さは収まらず、歯がカチカチとなった。

(あ……………考えてなかった。流石にこの格好じゃ寒いな)

「おろ」

そんな事を思っていると腰に手が伸びてきて引つ張られた。

きよんとしているを抱き込まれ、マントに包まれる。

上を見ればウイルの顔があり、微笑している。

「寒いからね」

「前にも聞いたな……………そのセリフ」

「そうだっけか？」

「ああ……………確かに聞いたな」

聞いたことある言葉にツツコミを入れれば、ウイルは首を傾げ不思議そうに見つめてくる。

どうやらまったくもって、覚えてないらしい。

その事に対して笑えば、ウイルは視線を泳がせ頬を掻いた。

「恥ずかしいなら言わなければいいものを……………いや、自然と言葉にしてしまうのか。」

「本当こいつは……………天然物の人証しか。」

「……………」

暫く視線を泳がせた後、ウイルは杖を取り出し、何やら呪文を唱える。

それを静かに眺めていると効果がはつきりと分かった。

マントを巻かれても寒かったのに今はほんのりと温かみを感じられる。



「へー……便利だな。風を避けたか」

「初めて使う魔法なんだけど……よく分かったね」

「はっ！当たり前前だろ？オレ様は天才なんだからな！この位は軽い軽い」

風が自分達を避け始めたお蔭で寒さがぐんと減った。

「……………」

「……………」

その後、特に会話もなく、お互いに双月を眺め続ける。

この世界に来て、既に1ヶ月近く経つがこうやって、星々をじっくりと見るのは初めてかもしれない。

手を伸ばせば届きそうなのに届かない。

太陽もないのに明るく、優しく、それでいて冷たく自分達を照らしている。

「あんっ？」

怖いほどに綺麗な双月を見ていると頬に液体がかかる。

一瞬雨かと思つたが、雲より高い位置に居るのでそのはずは無い。頬を伝う雫に手を触れ見ると無色透明な水であった。

「……………ウイルス？」

「……………」

不思議に思い見上げればウイルスが静かに涙を流していた。

「どうした……何処か痛むのか？」

「……………痛くは無いよ」

「なら……………なんで泣いている」

「……………ただ、ただ……………二つの月が綺麗だなんて思っただけだよ」

そう言つて、ウイルスは腕で顔を拭き、真っ直ぐ双月を眺める。

そうしていれば、また静かに涙が流れる。

もう一回腕で拭くも結果は同じだ。

「……………おかしいな、おかしいな」

「……………止まらないなら、止まるまで泣いてろ」

「っ……………」

最後には腕で顔を隠し、嗚咽を漏らしながら泣き始める。

何故泣いたのだろうか、双月が綺麗なせいか？……違う気がする。  
なら何故泣いたのだろうか……理由が分からない。  
ただ、ルーンからウイルの感情が伝わってくる。

—————  
それだけが伝わってくる。

何故、———のか———のか理解が出来ない。

だけど……一つだけは理解出来た。

どうやら……泣かしてしまったのはオレ様のようなだ。

## エピソード・難易度HELL

「くっくっく、はーはははははは!!」

暗い暗い部屋の中で一人の男性が大声で笑う。

お腹を抱え込み、何度も何度も机を叩いての大笑いだ。

目には涙を溜め、笑いすぎて咳を何度かした。

「ジョゼフ様？」

「おおー……余の……げほげほ、み、水をくれ」

「は、はいー」

大笑いをしていた男性に一人のローブで身を隠した人が心配そうに声をかける。

声を掛けた人物は、ローブを羽織っているものの、声や体つきから女性だと判断できた。

その女性は、男性に恭しく水を入れたコップを渡すと男性は勢いよく飲み干し一息ついた。

「それで……いかがなさいましたか？」

「……忘れていた。これを見よ」

首を傾げ大笑いしていた男性を不思議そうに見つめる女性に、男性が一切れの手紙を手渡した。

「……………」

最初こそ真剣に中身を拝見していた女性だったが、次第に目は虚ろになり呆れた表情となる。

それを男性はニヤニヤと笑い、ただただ楽しそうに眺めた。

「どうだ？」

「……………酷い」

手紙から顔を上げた女性へと男性が問いかければ一言、そう返って来た。

女性の言葉に男性はまたもや笑い出す。

『手紙奪還の任務を請け負う』、まず絶対に請け負える理屈が書かれてません」

「あーはっはっはっは」

『彼より良い所を見せ付ける』、この前負けたばかりでしように」  
「ひーいっひっひっひっ」

『惚れさせ、結婚式を挙げ手に入れる（断られたら薬やギアスを使う）』、バレルでしよう!？」

「ぐふっ……こ、殺される」

手紙に書かれている内容を読めば読むほど、男性は笑い倒れた。

女性は呆れ手紙を放り出し、男性は床に倒れ込み腹を抱えビクビクと動くだけとなる。

「失敗しますね。これ」

「だろーうな……はあ、笑った笑った」

暫くし、男性が起き上がり手紙を拾い椅子に座った。

椅子に座ると手紙を机に放り投げ、女性へと顔を向ける。

「ミューズよ」

「はっ!」

「盗賊を五十ほどラ・ロシエールに集めよ」

「……はっ」

「そして盗賊を全員殺せ」

「……はっ……はい?」

恭しく項垂れていた女性は呆気に取られ男性を見上げる。

男性はニヤニヤと笑いながら指輪を撫でていた。

「!……承知しました。すぐさま受取りに戻ります」

呆気にとられていた女性であったが、男性の真意を悟ったのか嬉しそうに微笑む。

「くつくつく、後は……そうだな。イザベラのお気に入りを使うか」

「ふふふ……アレならさぞ役に立つでしょう」

二人だけにしか分からない会話を続けていく。

「更に……あの綺麗な客人には兄弟を使う」

「!あ、あの四人をお使いに?」

「ミューズやガンダールヴの件もあるからな、念のためだ。まあ……  
今回は一人だけにしとくか」

女性は兄弟と言う単語に顔を引き攣らせる。

そんな女性を男性は気にせず、手紙に新たな作戦を書き込んでいく。

「作戦は——」

嬉々として男性は作戦を立てていく。

ただただ、自分が楽しむために、物語を歪ませ、汚し、難易度を上げた。

## 二章：白き国の王子様 プロローグ：脱出

「参ったねい……ここでお終いか」

暗いくらい牢屋の中で一人の女性が呟いた。

その声は何処か疲れたような、諦めたような声に聞こえ女性の心情を語っている。

「やれやれ……変なドジしちゃった」

女性は苦笑するように呟き窓の外を眺める。

窓の外には綺麗に双月が並んでおり嫌味ったらしいほど美しかった。

「……………誰だい？」

「ほう」

そんな双月を暫しの間、眺めていると女性は徐に後ろを振り向き暗闇を見つめた。

誰か居るのか、声を掛けると暗闇から声が聴こえた。

声からして男性だろうか。

「変な客が来たねい」

暗闇から来た人物が、女性の鉄格子の前までやってきて月明かりに照らされる。

女性は月明かりに照らされる人物を見てそう呟いた。

その人物は、ローブを着ており、顔は仮面で隠している。

いかにもな人物に女性はため息を付いた。

「ふふふ……変なと来たか……これを見ても言えるかな？」

「それはっー」

そんな女性を気にせず、異様な人物は懐から一つの鍵を取り出し見せ付ける。

鍵は銀色に輝き、月の明かりで怪しく鈍く光っていた。

「……………私に『土くれのフーケ』に何をさせようと言うんだい」

「ふふふ……話が早くて助かるよ。フーケ」

その鍵を見た瞬間、女性……土くれのフーケは悟ったのか唇を尖らせた。

「なに、我等の組織に参加して欲しいだけさ」

「組織？」

「そうだー……我等、『レコン・キスタ』に!!」

フーケが疑わしそうに聞けば、目の前の人物は両腕を広げ、高らかに歌い上げるように言った。

「レコン・キスタ……あのアルビオン王族を攻めてる奴等かい」

「そうだ、我等レコン・キスタの目的は『聖地奪還』。故に胡坐をかいて座ってるだけの王族を静粛している」

「やれやれ、ずいぶん過激な団体様だね」

「時代を動かすにはそれぐらいが丁度良いのさ」

「……………」

フーケはその言葉を聞いて黙り込む。

腕を組み考えるかのように何度か天井と地面へと視線を彷徨させた。

「わかった、参加するよ」

「そうか、ようこそ。『レコン・キスタ』へ」

数十秒ほど経った後にフーケは顔を上げて答える。

それを若干嬉しそうな声でローブの人物は受け入れた。

「んくく、はあ……何がようこそだ。どうせ参加しなければ殺したろうに」

「……………」

ローブを受取り、着込みながら文句を言えども仮面の男性は無言のままだ。

「それで、ここからの脱出はどうなってるの？」

「見張りは眠らせてある。脱出経路はドウドゥーが確保している筈だ」

「ドウドゥー？」

「レコン・キスタの一員だ」

足早に歩きながら説明を受けていく。

手際が良いことに、歩きながらフーケは関心したようにため息を付く。

暫く歩けば入り口へと戻り、フーケは久々の外へと出た。

「はあ……いいね、外は」

ぐぐつと両腕を上にも伸ばし外の世界を全力で受け止めるかのように伸びをする。

「すべる子爵、遅いよ」

そんな事をしていると先ほどの仮面の男性とは、別の声が聴こえてくる。

「誰が！すべるだ!!」

「あー……なんだい。ワルド子爵だったのか」

「!？」

別の声に仮面の男が珍妙なあだ名で呼ばれた。

その珍妙なあだ名に仮面の男が怒ったように答えるもフーケは納得したかの様に手を叩き、仮面の男の素性を言い放つ。

これに驚いたのは仮面の男……ワルドだ。

「な、なぜ」

「いやだって……すべる子爵と言えばアンタしかいないし。有名だよ？牢屋番していた奴等も噂してたぐらいに」

「くっ!!」

「あっはっはっはっは」

あっけらかんとフーケが答えれば、ワルドは仮面を外し、地面に思いつき叩き付ける。

仮面の下から出てきた顔は、怒りに燃え、やりきれないとばかりに語っていた。

そんなワルドを先ほど声を掛けた人物がケラケラと指差して笑う。

「それは置いといて、アンタがドウドウーかい？」

「そうだよ、ドウドウー……あれ、名前って教えていいんだっけか？」

フーケはワルドを置いておいて、声を掛けた人物へと向き直った。

声を掛けた人物、ドウドウーは金髪が良く似合うハンサムな青年だ。



長い髪を後ろで束ね、目が細くのほほんとした雰囲気を出している。

「なんと言うか……こんな仕事をしている事が似合わない男だね」

「そうかな？これでも結構場数を踏んでるんだけど」

フーケの問いにドウドゥーは首を傾げ答える。

その仕草も柔らかく、ますます似合わない。

そんな話をしているとワルドが二人に近寄って来る。

「はあ……はあ……。ドウドゥー、脱出の件なんだが」

「あー、ごめんね？子爵、資料置いてきちゃってさ、経路忘れちゃった」  
「!!!」

先ほどの怒りを収めたワルドが問いかけるも、ドウドゥーは舌を出しコツンと頭を軽く叩き答えた。

そのドウドゥーの言葉を聞いてワルドは地面に崩れ落ち、何度も何度も手を地面に打ちつけ始める。

「……………この組織大丈夫かな」

「大丈夫、大丈夫。いつもこういう時は神様が助けてくれるんだよ」

変な同僚達に押されつつ、自分の未来に憂いているとドウドゥーが悪げなく肩を叩きながら笑った。

『そこで何をしているっ!!!』

「……………神様が何だって？」

「ひゅーひゅー……」

そんなドウドゥー達に誰かが声を掛ける。

仲間かとも思ったが、声の陰しさからして違う。

振り向けば、見回りの兵隊らしき男性達が四人ほど立っており、杖を此方に向けていた。

その事をフーケがドウドゥーに言えば、ドウドゥーは吹いていない口笛を吹いた。

「何を……フーケ？ワルド子爵？」

「しまった！仮面を!？」

「すべる子爵はうっかりさんだね」

その中のリーダーと思われる男性貴族が、フーケとワルドの顔を見て

驚愕した。

ワルドは仮面を探すも先ほど地面に叩き付けた際に割れていて効果はなさそうだ。

というより、今更被っても意味は無いだろう。

「くっ！」

「貴様ああ!!裏切ったか!!」

男性貴族の声に慌ててワルドも立ち上がり杖を構える。

構えるも汗を垂らし、苦しげな表情をしている。

「……あいつ強いのかい？」

「僕と同じ風のスクウエアだ」

そんなワルドを見てフーケがこっそりと聞けばその様な答えが返って来た。

その答えにフーケも汗を垂らし、顔を歪ませる。

「私は杖ないし……二人に任せるしかないんだけどね？」

「やってやるさ」

二人は、寄り添うように近寄り、油断無く会話を続けていく。

「はいはい、お手上げ。杖も渡すよー」

「おいー!ドウドウー!」

ワルドがやる気に満ちているとドウドウーは、逆にやる気なさげに降参をした。

持っていた杖をポンッと投げ捨て、両手を上げて投降していく。

「……杖を回収して奴を捕まえておけ」

「はっ！」

「くそ……!!」

リーダーと思わしき男は油断なく構え、他の隊員に杖の回収を促す。

それを忌々しげにワルドは睨むも動きは無い。

自分が不利だと察しているだけに動けないのだ。

「……………」

「たくっ…………手間かけさせやがって」

ドウドウーは両手を上げたまま、のんびりと歩き、杖を回収してい

る隊員とすれ違う。

その時だ――

「え?」

それは誰に眩きだったろうか。

気付けば、杖を回収しに来た隊員の顔が百八十度回転していた。

誰もが異様な光景に目を見開き固まった。

リーダーの男が辺りを見渡すも杖は構えているものの誰も魔法を  
発していない。

それなのにだ。

目の前の隊員はその場で倒れ息絶えている。

「他に仲間が居たか!!お前もそこで止まれ!」

「え?は?」

「わー怖いなー。いきなり人が死んだぞー」

リーダーの男がそう判断し、怒りをワルド達に向けるもフーケは何  
のことだとばかりにうろたえる。

ワルドでさえ、目を見開き驚いているのだ。

それでもリーダーの男は油断なくワルドとドウドゥーを睨み杖を  
向ける。

そして他の二人に周りを気をつけるように指示をした。

「あーら、首が曲がっちゃって、こんな病気もあるんだね?」

「黙れ!」

ドウドゥーが直ぐ隣に倒れている隊員を見て眩く。

それを忌々しそうにリーダーの男が吼えるように鋭く制した。

だが、それでもドウドゥーの口は止まらない。

「これって感染しないよね?したら僕やばいんだけど」

「黙れ!黙れ!!」

「いや、ほら……僕がここで死んだら困るでしょ?折角の情報源だし  
や」

「うるさいー!」

「だから……さう?そっちに行かせてもらおうね?」

「え?」

ヘラヘラと笑うドウドウの言葉にイラつきながら答えているとドウドウの姿がブレた。

霞のようになくなり、気付けばリーダーの男の前にドウドウが姿を現す。

「なにがっ……」

ブレイド  
「さようなら」

それがリーダーの男の最後の言葉となる。

ドスンと音と共にリーダーの男の背中から光り輝く魔法の剣が飛び出る。

「隊長！」

「はいはい、君は黙っててね」

ドウドウが隠していた杖から放たれたブレイドに串刺しにされ、リーダーの男は一撃で絶命する。

それを見て怒った隊員が、杖を振ろうとドウドウに杖を向ける。

「遅いよ」

「ぐああ?!目がああああああ」

杖を向けるもドウドウの動きの方が早かった。

杖を持っている手とは逆の手が素早く動き、何かを隊員に投げつける。

放たれた物は正確に隊員の両目に刺さり、隊員は目を押さえその場に倒れこんだ。

「接近戦で魔法とかないわー。断然こっちのほうが早いでしょうに」

「あー……ああああああ!!!」

目を押さえ蹲る隊員を冷たい目で見下ろす。

「ひい!!!」

「ああ……君も逃げちゃ駄目だよ」

そんな事をしてしていると恐怖に煽られたのか、残りの一人が背中を向け逃げ出す。

それをブレイドをリーダーの男から引き抜いたドウドウが呆れたような表情で見送った。

「ドウドウー！奴を逃がすな！」

「はいはい」

「ちっー!」

呆気にとられていたワルドであったが、隊員の一人が逃げ出した事により意識が覚醒する。

このまま逃げられたら自分の裏切りがバレ、策が台無しになってしまう。

そのことを鋭く投げかけると、ドウドゥーは面倒そうに杖を上には挙げた。

杖からブレイドがでたままだ。

既に隊員との距離は六メートルほど離れており、ブレイドでは届かない距離だ。

それなのに、ドウドゥーは頑なにブレイドの魔法を維持し続ける。

その事に対してワルドは舌打をしてドウドゥーに任せるのではなく、自分で仕留める為に杖を隊員に向ける。

それも無意味に終わったのだが。

「な」

「はい、お終い」

杖を隊員に向けた瞬間、隊員が光の柱に押しつぶされ、爆発したように体が四散する。

その光景に驚き、ドウドゥーに目を向ければ、ドウドゥーの杖から光の柱が放たれており、ブレイドの一部だと判断できた。

これは、ワルドもフーケも口を開いたまま固まってしまう。

本来ブレイドの長さは長くて二メートルちよつと、それなのにドウドゥーのブレイドは十メートルを超える大きさの物になっていた。

自分達の常識外の出来事を平然とこなすドウドゥーに恐怖を感じ、二人は何も言えずに立ち尽くす。

「いやいや、どうにかあったね。流石は僕」

「何が……『流石は僕』よ。ウスラトンカチ！」

「あいたっ!?!」

ワルドとフーケのほうを振り向きドウドゥーが自慢げに胸を張れば、他の声が聴こえてきて、ドウドゥーのお腹を蹴っ飛ばした。

蹴つ飛ばされたドウドウは、先ほどの動きが嘘のように吹き飛ばされ、三メートルほど地面を転がった。

「資料また忘れて……前から言ってるでしょ？『資料は渡されたときに覚えるもの』って!!」

「げほげほ、いやさ……僕は忘れっぽいからさ。持って無いと駄目なんだよ」

「持って無いとって、それも忘れるじゃない」

「あつはっは、痛いところを突いて来るね。ジャネット」

地面に転がっていたドウドウの上に立ち、一人の少女が文句を次々と告げる。

それにドウドウは怒る事も無く、楽しげに会話を続けた。

「誰だい……？ジャネット？」

「ドウドウーお兄様……？人の名前をバラさないでもらえますか？」

「あたたた、ごめんよ。ジャネット！だから踏まないで！」

いきなり現れた人物にフーケが問いかければ、ドウドウが件の少女に踏まれる。

「ほら、ドウドウーお兄様。資料よ」

「おおー!!流石は僕の妹！助かるよ。……すべる子爵、これで逃げるよ！」

ジャネットが何やら紙の束をドウドウに渡すと、ドウドウが喜んでように明るく手を振った。

それに対して、ワルドは顔を引き攣らせながらも手を振り返す。

「それじゃ、お仕事しつかりね」

「あれ？ジャネットは付いて来てくれないのかい？」

手を振り、帰ろうとするジャネットにドウドウが不思議そうに尋ねる。

「私はこれからお仕事なの」

「お仕事？」

「そうよ、『トリステイン魔法学院への編入』」

「はあ!?編入だって!？」

ジャネットの言葉にドウドウが飛び上がるほどに驚く。

「まてまて！編入したら一体誰が僕の資料を届けてくれるんだい！」

「そんなの自分でして下さないな」

「それに……それに、兄さん達が転入を許すと……」

「ダミアンお兄様は『しつかりと楽しんで来なさい』だって」

「えー………僕もそっちが良かった」

嬉しそうに頬を染めるジャネットにドウドウが肩を落す。

「そっちなら、楽しめだろうにな。ああ………戦ってみたかったな、『ガ

ンダールヴ』と『鍊金』」

「どちらにしる駄目よ。正体バレるじゃない」

「くそっ！」

「それじゃね？ドウドウお兄様。あと虚無の日は城下町で皆揃って  
お食事だからね？」

それだけを言うとジャネットは軽く微笑み、手を振り闇の中へと  
去っていった。

それをドウドウは羨ましそうに眺めつつもため息を付いて見送  
り、立ち上がる。

「はあ………すべる子爵と………ケープ？………さんだっけか、資料も手に  
入ったし逃げようか」

ドウドウの軽い物言いに二人は頷くしかなかった。

この夜、トリステインは土くれのフーケを逃し、四人の隊員を失い、  
物語の第二幕が開かれた。

## 一話：必殺技

「なあ……ウイルって必殺技とかってあるのか？」

「は？」

朝に鍛錬をしていると才人からそんな事を聞かれた。

「いきなり、なんだ？」

「いやさ、デルフと話してただけだよ。ギーシュはゴーレム。ルイズは爆発。キュルケは火球だろ？」

「そうだな」

「ウイルの戦い方見てると接近ばかりでこう……必殺というか目立つ魔法がないなと」

「……………」

才人に言われ、考える。

確かに自分の戦い方は、接近が多めで目立った魔法を使っではないない。

体術と戦術を絡めた方法が多いので、そう見えるのだろう。

「まあ……ラインメイジなんてこんなもんだ。ギーシュみたいにゴーレムを複数運用できればいいんだけどな」

「うん？……ウイルはゴーレム使えないのか？」

自分の言葉に才人は不思議そうに首を傾げている。

「無理だな。一体、二体位なら操れるけど……七体ものゴーレムの複数運用なんて出来ない」

「……ギーシュってすごい？」

「すごいぞ。ある意味で天才だな」

正直、ギーシュの頭の中はどうなってるのだろうかと思う。

普通一体、二体を操るだけでも頭が混乱するのにギーシュはアレだ。

マルチタスクに長け過ぎている。

「一体、二体のゴーレムを運用してもなー……正直ラインだと微妙だ」

「そんな物なのか」

「そんなものだよ。だから俺は戦術含め接近戦を好んだりする」



これでも結構悩んだり、考えたりしている。

ラインから一向に上がらない自分が戦いにおいて、上の敵に勝てるようにするにはと何時も悩んでいる。

そうでもしないとこの世界では、簡単に命を落としてしまう。

「これが火とか風のラインならまた違ったんだけど……」

「そういえば、ウィルは土だっけか」

「こそ、土も気に入ってるからいいんだけどね。派手な魔法を使ってはみたいな」

頭の中で幾つか自分でも出来そうな魔法を思い浮かべるも、直ぐに却下した。

どれもこれも精神的にも効果的にもよくない。

遊ぶだけならいいが、敵との命を懸けた戦いの時に適さなかった。

「効率良いのを選ぶと……どうしても地味になる」

「確かに見てるとそんな感じだな」

「サイトー！ウィルー！」

そんな話をしているとルイズの声が聴こえてくる。

上の太陽の傾きを見て朝食の時間だと判断する。

「先に行つててくれ、汗を拭いてから行くわ」

「ん、分かった。ルイズに言っておくよ」

「頼む」

木にかけていたタオルを手にして汗を拭きつつ才人達を見送った。

汗を拭きつつ、隣に座っていた人物へと視線を向ける。

「ご飯だし、移動しよっか。カリオストロ」

「ん……ああ、朝食か」

木にもたれ本を読んでいた、カリオストロへと声を掛ける。

カリオストロは、本から視線を外すと閉じて起き上がった。

「いこっか」

「ああ……そういえばだ」

「うん？」

歩きだすとカリオストロがニヤニヤと笑い、此方に言葉を投げかけてきた。

今度は何を企んでいるのだろうかと不安になる表情に些か眉を潜めた。

「必殺技……あるんでしょ？」

「……………」

良い笑みを浮かべるカリオストロの言葉に少しばかり足が止まる。

「なんでそう思った？」

「だって……サイトの問いに対して否定してなかったし」

「そうだったかな？」

「うん……ギーシュのゴーレムの話題をして逸らしてたもん☆」

カリオストロの言葉に首を振る。

才人は誤魔化せてもカリオストロはやはり無理らしい。

本を読んでいるので此方の話を聞いてないだろうと思っていたが、しつかりと耳にしてたらしい。

「……まあ、あるよ。切り札」

「やっぱりか、んでだ。どんなんだ？」

カリオストロの興味津々の目を見て暫し考え込む。

自分が考えた出した『必殺技』は、他の生徒に見せたり教えたりすると危ない物なのだ。

簡単に真似が出来て殺傷力が極めて高い。

「ん……まあ、カリオストロになら大丈夫か」

だが、此方の魔法が使えないカリオストロなら特に問題はないかと考え直す。

カリオストロが他の人にバラす筈もなく、教える事にした。

マントの後ろに隠していたナイフを手に取り、軽く木に向かって投げた。

手に持っていたナイフは綺麗な直進で木に向かっていき――

『――』

ナイフに魔法を当てるとその場で消えた。

「……………は？」

「これが俺の必殺技。切り札だ」

カリオストロは消えたナイフを追って目を細める。

しつかりと消えたナイフの方向を見据えるカリオストロを見て、内心冷や汗をかいた。

あれを追えたらしい、どれだけ目が良いのだろうか。

「……………んんん」

そんな事を考えていると、手で肘を支え、もう片方の手を顎に当て考え始める。

朝食の時間も押ししているが、カリオストロなら直ぐに思いつくだろう。

「なあ……………もしかして、『————』の魔法って物にも作用したり？」

「正解。あれは人だけでなく物にも作用するよ」

「つまりは……………だ。お前は————」

数十秒ほどの時間を置いて、カリオストロが正解を口にする。

あれだけのことでよく答えに辿り着く物だ。

「な、必殺技だろ？」

「何ていうか……………エグイな」

「だよな」

「簡単に真似出来る上に暗殺に適してる」

カリオストロの評価に苦笑する。

認められて嬉しいという気持ちもあるが、簡単に真似が出来る分、他の人にバレるのが怖い。

これを真似する人が出てきたら……………ハルケギニアは酷い事になるだろうな。

「まあ……………受けたら即死だろうし。いいんじゃないか？」

「見せる様な事がない事を祈るよ」

そんな会話をしながら並びながら朝食へと向かった。

後にこれがフラグだったんじゃないかと頭を悩ます原因ともなったのだが……………。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆

「懲りねーな」

「何時もの事だよ」

朝食も終え、授業を受ける為に教室へとやってくると、才人を取り合い、ルイズとキュルケが争っていた。

キュルケが才人を抱きしめ、才人の顔へと豊満な胸を押し付けている。

才人はそれが嬉しいのか幸せそうに鼻を伸ばしているが、後ろを見た方が良いと思っただ。

キュルケに抱きつかれた才人を他の男子生徒が、親の敵を見るような目で見ている。

それを呆れつつも見送り、真ん中辺りの席を確保し座った。

カリオストロも隣に座り、持っていた本を読み始める。

『お熱のキュルケ!!』

『お熱じゃなくて微熱よ！微熱！魔法もゼロなら記憶力もゼロなの？』

『はんつ、胸でしか釣れない癖に何が微熱よ』

『あるものを使って何が悪いのよ』

机に肘を置き、顔を支え、ボーと黒板を眺める。

意外にも時間があつたらしく、今だに先生はやってこない。

こんな事なら、カリオストロみたいに本の一冊でも持つてくるべきであつた。

「席に座りたまえ」

そんな事を思っていると扉が開いてギトー先生が入つて来た。

先ほどまでの騒ぎは嘘のように静まり返り、全員が席へと座る。

ルイズは何時ものように自分の隣にやってきて座り、才人も倅い座ろうとするもルイズに睨まれ、大人しく地面に座った。

先ほどの鼻を伸ばしていた罰なのだろう。

「では授業を始める。このクラスでは今期初めての授業だったな」

ギトー先生は、自分と同じく黒い髪に、漆黒のマントを纏っている。自分と違う所は髪を長髪にしており、冷たい雰囲気だろうか。

そのお蔭で不気味に思えてくる。

魔法使いらしい魔法使いだとも思った。

「知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』だ」

ギトー先生は自信満々に胸を張り、辺りを見渡す。

生徒は全員静かに真面目に先生を見返している。

それをギトー先生は満足げに頷き、話を続けていく。

「最強の系統は知っているかね？ミス・ツェルプストー」

先生の言葉を聞いて空を見上げる。

話の脈絡のなさに少しばかり外へと出て行きたくなった。

「『虚無』とかじゃないですか？」

「ちっち、伝説の話をしているわけではない。現実的な話をしているのだ」

「……………」

ギトー先生のキザったらしい嫌味な言い方に、キュルケが不機嫌そうに眉を潜めるのが見えた。

「それなら『火』に決まっていますわ。全てを溶かし、燃やし尽くす火こそ最強です。ミスター・ギトー」

キュルケが直ぐに澄ました表情となり、挑発的に髪をかき上げた。

「ほほう、なるほど、なるほど……………。残念ながら外れだ」

「むっ」

ギトーの言葉にキュルケは勿論、教室に居た『火』のメイジ達の表情が歪む。

自分が得意とする魔法を馬鹿にされたと感じたのだろう。

「試にだ。この私に君の得意な『火』の魔法をぶつけたまえ」

『これ何の授業だったかなー』とそんな事を思いつつも次に行なわれる光景を思い浮かべた。

どうせ、キュルケが出した火球を風の魔法で打ち消すのだろう。

「どうしたね？君は確か、『火』系統が得意であっただろう？」

怯んでいるキュルケにギトーが追い討ちを掛ける。

正直キュルケが怯むのも頷ける話だ。

いきなり人に向かって火球を放って無茶もいい所だろう。

もしも……だ。

もしも、他の人に当たったら？先生に当たってしまったら？

トラウマ確定だ。

「どうした？その有名なツエルプストー家の赤毛は飾りかね？」

「火傷ではすみませんよ？」

鼻を鳴らし、挑発すれば、キュルケの目が釣りあがった。

キュルケの顔から笑みが消え、静かに静かに燃える火の様な真剣さが伝わってくる。

キュルケが胸の谷間から杖を抜くと、赤毛が真つ赤な炎のように波打つ。

詠唱を唱え、キュルケの前に小さな火球が出来上がり、辺りの酸素を吸い取って大きく大きくなっていく。

どうやら全力で撃つ様だ。

近くに居た生徒達は慌てて机の下へと避難し隠れる。

キュルケは直径一メートルほどの大きさになった火球を見て満足げに頷くと、手首を回転させ胸元にひきつけ、火球を押し出すようにピシッと杖を先生へと向ける。

勢い良く迫り来る火球を先生は避けもせず、静かに静かに見据え、腰に差した杖を引き抜いた。

その杖を剣を振るうかのように薙ぎ払い烈風を巻き起こした。

烈風が一瞬にして火球が掻き消え、その向こうに居たキュルケを吹き飛ばす。

吹き飛ばされたキュルケを才人が心配そうに見ているのが見えたので、軽く蹴りを入れ顎でキュルケの方を示す。

それに気付いた才人は、頷きすぎさま動き出した。

倒れているキュルケを助け起す、才人を見ていると先生の声が聴こえてくる。

「諸君、これが『風』だ。最強たる所以だ。全てを薙ぎ払い、『水』も、

『火』も、『土』も、『風』の前では立つ事すらできない」  
「……………」

胸を張り言う先生の言葉に、本を読んでいたカリオストロがビクリと反応をする。

カリオストロが出たら酷い事になるので止めて欲しい。

服を掴み、立ち上がれないようにすれば、カリオストロに睨まれた。それでも放せない。

「残念ながら試した事はないが、『虚無』さえ吹き飛ばすだろう。それが『風』だ」

辺りをぐるっと見渡し演説は続いていく。

「目に見えぬ。『風』は見えずとも諸君等を守る盾となり、矛となる」  
先生の言葉に頷く。

先ほどの行為はどうかと思っただが、風の特徴をしつかりと理解し教えている。

……………最初の行為と自慢らしい言い方を除けばいいのだけだな。

「もう一つ、『風』の最強たる所以をお見せしよう。ユビキタス・デル・ウインデ……………」

先生の呪文を聞いて目を見開く。

まさか、ここでこの魔法は見れるとはと。

今後の対策として何かヒントを貰えるかも知れないと真剣に見始める。

しかしそのとき……………、教室の扉が開き、呪文が中断された。

教室に居た全員が入って来た人物へと視線を向けた。

そこに居たのは、珍妙な格好をしたコルベール先生だ。

頭に馬鹿でかい、ロールした金髪のカツラを被っている。

服もレースの飾りや刺繍やらがあり、めかしこんでいるが正直合っていない。

「あ……………ミスタ？」

「あややや、ミスター・ギトー！失礼しますぞ！」

「えーと……………あ……………どうぞ？」

同僚の珍妙な格好にギトー先生も呆気に取られている。

「今日の授業は全て中止であります！」

教室のあちら此方から歓声が上がった。

逆にギトー先生は不服そうに口をぎゅっと閉じた。

コルベール先生は両手を振り上げ、歓声を止めると重々しく喋りだす。

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

もったいぶった拍子にのけぞり、カツラが落ちる。

ずり落ちたカツラとコルベール先生の頭を見て、タバサがポツリと眩いた。

「滑りやすい」

教室が爆笑に包まれる。

キユルケがタバサの肩を叩き何か言っているが、声のせいで聴こえなかった。

そんな爆笑の中、コルベール先生が顔を真っ赤にさせ大きな声で怒鳴った。

「黙りなさい！黙りなさいこわっぱどもが！貴族は可笑しい時は下を向いてこっそりと笑う物ですぞ！これでは王室に教育の成果が疑われる！」

先生の剣幕に全員が一斉に黙り込んだ。

それを息を整えつつ見渡すとコルベール先生が咳をして、改めて言葉の続きを話始めた。

「えーおほん。皆さん、本日トリステイン魔法学院に、恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇れる可憐な一輪の花」

そんな口上を聞いて、ふと両隣を見る。

右にルイズ、左にカリオストロ。

一輪どころか咲き誇っているなど思った、勿論口にはしないが。

「アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸されます」

この言葉に教室はざわめくも自分の頭の中では警報が鳴り響く。  
なんだろうか、嫌な予感がする。



「したがって、急なことですが、今から全力で歓迎式典の準備を行います。生徒諸君は正装に着替え門に整列すること！」

先ほど笑っていた生徒もこれには黙り込み、神妙に頷いた。

「諸君の立派な姿を姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！ よろしいですな！」

先生の話も終わると生徒もギトー先生もざわめき慌て始める。

そんな中、自分だけが嫌そうな表情で見送った。

「……………休めないかな？」

「駄目よ」

「だよなー……………」

未だに消えない嫌な予感を胸に、机に項垂れた。

二話：ストレスでどうにかなりそうです

「おー……すげえ」

サイトの言葉に全員が頷いた。

綺麗に生徒と教員が整列している間を大きな馬車や兵士が並んで通っていく。

「なあなあ、姫様が乗ってるのってどれだ？」

「えつと……あれね」

興奮気味のサイトが此方に顔を向け、聞いてくる。

はしたないと思うも、初めて見る光景に感情を制御出来ないのだから。

無理矢理抑えると後がうるさいと思い質問に答える事にした。

「あの『ユニコーン』が引いてる馬車よ」

「あれかー……すっげー……まじで『ユニコーン』が引いてる」

指を指す事が出来ないので、引いている生物を教えた。

四頭立ての馬車で、所々に金と銀とプラチナをあしらったレリーフが施されている。

そのレリーフは王家の紋章であり、その中で一つだけ聖獣ユニコーンと水晶の杖が組み合わさった紋章があった。

「あの紋章が王女様を乗せる馬車だって印よ」

「なるほどな」

立っているだけでは暇でついつい長く話し込んでしまう。

「あれ？」

「今度は何？」

話し込んでいるとサイトが、首を傾げた。

「姫様の馬車は分かったけど……その後ろに続く馬車は誰のだ？」

「あれは……」

「姫様のより大きいし立派だけど」

「……」

サイトの言葉に口を閉じた。

視線を逸らせば、周りに居た生徒やウィル達も気まずげに視線を逸

らしていた。

「くつくつく……あれは、マザリーニ枢機卿のだろな」

「マザリーニ……枢機卿？」

口を閉じているとローブを着込んだ小柄な少女——カリオストロが答えた。

何が楽しいやら、笑い、ウイルの背の後ろから二つの馬車を見比べ、口を歪ませる。

「政治の一切を握る人物だ。馬車の風格の差が今のトリステインの現状を物語っているな」

「現状を？」

「はっ、トリステインの権力を誰が握っているか平民でも分かる」  
「……………」

カリオストロの小馬鹿にしたような声にサイトは困惑し、辺りを見渡す。

だが、誰もカリオストロの言葉を反論しない。

（少し前の私なら噛み付いたでしょうね。『そんな訳無いでしょ！』つて）

今の自分は、素直にトリステインの現状を受け入れる事が出来た。現状のトリステインはマザリーニ枢機卿一人で成り立っている。

それほどまでにこの国は、危機的状況で彼に依存していると……。「えーと……そうだ。わると……子爵だっけ！あの人も来てるんだ

な！しかも人気だし！」

少しばかり、空気が悪くなり重くなった。

それをサイトが一生懸命、変えようと他の話題を振っていく。何となく、サイトがモテる理由が分かった気がする。

こういう所が、あのメイドもキュルケもいいのだろう。

「ワルド子爵はすごいからね」

「……………え？」

「なんで驚くのさ」

ウイルが何気なく言えば、サイトが目を見開き驚いた。

「いや……ウイルって結構あの人の事を買ってるよな」

「子供の頃、憧れてたしね？見てみなよ。漆黒のマントに胸にはグリフォンの刺繍。彼の乗っている幻獣は、グリフォンだ」  
「……………」

「三つの魔法衛士隊の一つ、『グリフォン隊隊長殿』。選りすぐりの貴族で構成された魔法衛士隊。男子の誰もが憧れ目指し、少女は彼に恋し、彼の嫁を夢に見る」

ウイルがそつと微笑み、目を輝かせて言った。

ウイルの様子を見るに本気で言っていると分かる。

本当に、本当に尊敬しているのだろう。

「憧れ……前に滑らせたのに？」

「それはそれ、これはこれ。あの年でスクウエアで隊長だからね。才能だけでなく努力したんだらうなど……憧れる所はそこかな」

その事に少しばかり胸がぎゅつとした。

ああ……いけない、いけない。

今私は――

「ワルド様よー!!!」

「きやあー!!」

「見た？こつち見なかった？」

そこまで考えて、生徒達が騒ぎ始める。

はつとなり、顔を上げればワルド様の姿が見えた。

優雅にグリフォンに乗り、此方へと手を振っている。

それを少しばかり顔を引き攣らせて私は見た。

ワルド様の爽やかな笑顔と顔を引き攣らせる私……。

言えない、言えない……今あなたに嫉妬してましたとは。

「あははは……はあ………」

軽く手を振り返し、ため息を付いた。

何で私はこうなのだろうかと、嫉妬で心を燃やしながら思った。

最初の頃に比べて大分落ち着いたと言われるが、それは表面だけのお話だ。

ウイルと女性が話すだけで嫉妬が燃え上がる。

仲が良いとなおさらだ。

(前までは良かったのに)

思い出せばついついそんな事を思つて拗ねてしまう。

前までは、ウイルの周りに女性の欠片すらなかったのだ。

ウイル自身、そんなに女性と触れ合いたいと思つていないのか、女性の影は皆無だった。

それなのにだ。

「なー……姫様つてあれ?」

「そうだよ。トリステインが誇るお姫様」

「……オレ様のほうが可愛くね?」

「あはははは……」

ウイルとカリオストロが馬車から降りてきた姫様を見て、背中合わせで仲良く会話をしている。

そんな光景を見て少しばかり、ムスっとする。

召喚の儀式以来、全てが変わった。

前までは、ウイルは私以外とはあまりつるまなかった。

休み時間も放課後も一緒でたまにギーシュが居るぐらいだろうか。

それが、今では大勢に囲まれ騒がしい日々を送っている。

(今の騒がしさも好きだけど……できれば前みたいに二人つきりも)と思つてしまう。

「なあ、なあウイル……オレ様とあの姫様、どっちが可愛いよ?」

「好みで言えば……たぶん、カリオストロ?」

「おい、何で疑問系なんだよ」

「あいたつ!」

そんな事を考えているとカリオストロが姫様を見てウイルに感想を強請る。

本当に仲良いなと思いい口をぎゅっと閉じる。

(そもそも……距離が近過ぎ!)

今では普通に話し、触れ合っているがこれでも時間がかかったのだ。

最初なんて触れ合うどころか会話も長続きしなかった。

お互いに探り探り、距離を詰めていったのにカリオストロは一ヶ月



あそこならば遊び道具もある上にも結構な割合でいる為、暇をしない。

正直言えば、私も行きたいのだ。

髪を梳かしてもらいたいし、頭を撫でて貰いたい。

会話もしたいし、膝枕もして欲しい。

それでも今日ばかりは行けない。

「姫様がお泊りになられてるから、警備がきついだよ」

「あー……………」

「流石に今日ばかりは外を出歩かない方がいいわ」

『不審者として捕まりたくないでしょ?』と言えば、サイトは納得してくれた。

ただでさえ、姫様に近づこうと昼間に生徒が押し寄せたのだ。

警備に当てられた護衛隊もいい加減、嫌になってる頃だろう。

そんな中仕事を増やすような事をすれば、下手すれば捕まる。

捕まるといってもお説教とか軽いものであるだろうが、恥は掻きたくない。

「あれ、誰だろ?」

そんな事を思っていると扉が叩かれた。

初めに長く二回、それから短く三回……私はこの叩き方を知っている。

何故、今、この時間にと頭の中で混乱するも開けない訳にもいかない。

慌てて扉を開ければ、黒い頭巾を被った少女がするりと中へと入った。

その少女は入ると後ろ手で扉を閉めた。

「……………だれ?」

「しーっ」

サイトが疑問を挙げれば、件の少女は口元に人差し指を持って来てウィンクした。

それから頭巾と同じ漆黒のマントの隙間から杖を抜くと軽く振った。

同時に短いルーンが詠唱される。

その瞬間、部屋中に光の粉が舞い散った。

「ルイズ……？」

「ディテイクトマジック……探知魔法よ」

サイトがデルフを握ってるのを見て、慌てて止める。

「ごめんなさい、どこに耳が、目が光ってるかわかりませんか」

「探知魔法で聞き耳を立てる魔法や何処かに通じる覗き穴がないか確認したのよ」

「なるほど、魔法って便利だな」

魔法の便利さにサイトが羨ましそうな声を挙げるが私は、それどころではない。

なんで、なんでこの人が此処にいるのだろうか。

「ふう、お久しぶりね！ルイズ!!」

頭巾を取って嬉しそうに微笑む、アンリエッタ王女を見てそんな感想を抱いた。

姫様え……あなたは嬉しそうですけど、これからの事を考えて私は胃が痛いです。

こんな事ならウイルスの部屋で過ごせばよかったと内心思った。



### 三話：ルイズ泣く

「お久しぶりね、ルイズ」

「ええ……オヒサシブリデス、ヒメサマ」

目の前の人物を前に思考が回転する。何故この人が目の前に居るのだろうか、不思議でしょうがない。本来この人が一人でここに来る事自体がありえないのだ。

ゲルマニアと婚約前の御身に何かあつたらと思えば自然と護衛も付くし、護衛が目を離すわけがない。

それでも目の前には満足げに姫様が一人で立っていた。

これはどういうことだろうと思考の海に身を投じる。簡単に考えて、考えられるのは二つ。

一つは、マザリーニ枢機卿などが分かっているながらも見逃した。

もう一つは、暗殺者の類が姫様を誘い出し殺すために護衛を欺いた。

「どうかしましたか？」

「いえ……姫様は一人で此方にいらつしやったのですか？」

「はい……抜け出してきちやいました」

聞いてみれば、姫様はイタズラが成功したとばかりに嬉しそうに笑う。

そんな姿を見て二番目の線を疑う。今現在の姫様の価値は高い。

トリステインとゲルマニアが繋がる唯一の線なのだ。

暗殺者が狙って手を貸すのも領ける。

しかし、今現に姫様はここに居る事を考えると一番目の考えの方が当たりのようだ。

そこまで考えて、そつと窓に近づき耳を澄ますも外は静かであった。

姫様の泊まってる所とこの距離を考えれば十分な時間もあり二番目の線は完全に消えた。

今回の件は、マザリーニ枢機卿が見逃したのだろう。何のためにと問われれば、多分姫様への慰安なのだろうと簡単に思いついた。

「懐かしいわね、昔もこうしてよく会話をしましたね」

「そうですね、懐かしい限りです」

互いにベッドに座り、笑顔で答えつつも思考は止めない。

何があるか分からないのが自分の居る場所だ。

皆が皆腹黒く何かの目的を持ち魑魅魍魎が跋扈する世界。

それが自分の居る場所、立ち位置。子供と言えどもヴァリエール家の三女なのだ。

どんな些細な行動でも将来に関わる為考え続けた。

何よりウイル未来の夫の不利になるような問題を残しておく事は許されない。

「それにしても昼間もこうしてお喋りが出来たらよかったです  
……」

「そうですね、その時にお話をしたかったです」

笑顔で言い切るも『その時』を少し強めに言い出す。

勿論、純粹と言うべきかこういった事に疎い姫様は自分から同意を受け嬉しそうに笑った。

同時に此方はあまり笑えない、今の姫様の言葉で全て分かってしまったのだ。

マザリーニ枢機卿は、慰安と同時に自分を政治利用したのだと。やられたと頭を抱えそうになった。

こうして姫様の慰安だけに自分を使うなら昼間のお茶会で呼び出せばいい。

昔に姫様のお相手をした唯一の同世代なのだ。なのにそうせず、こ  
うやって夜中にそつと姫様を超越した。それは何故か考えれば簡単  
だ。『ヴァリエール家と王家は親しいのだぞ』と周りの貴族に知らし  
めるためだ。

昼間に呼び出しお茶会に参加させれば、周りはどう考えるだろう  
か。

『ヴァリエール家と王家は仲が良い』……否だ。姫様のお相手をする  
のに丁度良い格なのだろうと思う。しかしだ、夜に姫様がお忍びで  
ヴァリエール家三女の部屋に行ったとなればどうだろうか。

昼間の時と逆に『夜にお忍びで会うほど親しいのだ』と思うだろう。  
(……っ！ 姫様が外に嫁ぐとなると力を持っているヴァリエール家との仲は絶対)

「ルイズ？」

「い、いえ……何でもありませんわ。 おほほほ……」

「こわっ……」

笑顔を貼り付けるものの少し口元がひくついていることが自分でも分かった。

怪訝そうな姫様には優しく対応し、何かを言いたそうなサイトには鋭い視線を向けた。

『お前は何も喋るな』

『イエス！ マム！』

使い魔としての意思疎通機能がなくても視線だけで伝える。

そうしてみればサイトはビシッと手をおでこにあて背筋を伸ばし答える。

そのポーズの意味が分からないが意思が伝わっただけは分かり、視線を姫様へと戻した。

思う所はあるが、既に起きてしまった事、明日の朝には枢機卿が流した噂が広まっているだろう。

『ヴァリエール家と王家は親密な関係だと』周りの貴族からヴァリエール家の外堀を埋めるつもりだ。

色々と考えを巡らせるも人は諦めも肝心だと思ひ枢機卿の掌の上で姫様と会話を続けていく事にした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「姫様……楽しい時間でしたが、そろそろお戻りになられたほうが」

「……そうね、もうそんな時間なのね」

あれから三十分ほど話し姫様を部屋に戻そうと声をかける。  
流石にこれ以上の滞在は色々と問題が出てくる。

そもそも本当に枢機卿の計らいか分からないのだ。

これで姫様が本当に出し抜いて此処まで来ていたら騒ぎどころの話ではない。

「……」

「……姫様？」

ベッドから立ち上がり姫様の手を取り扉に向かおうとしたのだが、  
姫様は立ち上がらない。

なにやら視線をあちら此方に向け目を泳がせる。その仕草に見覚えがある。

何かしらの言いづらいことがある時や悪い事をした時に行なう仕草だ。

(……何だろうか、嫌な予感がするわね)

「……ルイズ、自由って素敵よね」

「は……？」

姫様の言葉で嫌な予感が更に膨れ上がり、勘が警報を鳴らす。

姫様を一刻も早く返そうと手に力を入れるも姫様自身力を入れて抵抗してるのでビクともしない。

「ひ、姫様。私だって貴族の娘……そんなに自由なんてありませんわ」

「くっ……ル、ルイズ、でも姫のわ、私より自由はあるわ。……な……  
なんで力を入れるのかしら？」

「こ、これ以上滞在なさると騒ぎになりますもの……おほほほほ」  
互いにぐぐと力を込めての引っ張り合い。

一応笑みを浮かべ行なっているが内心はふさげんなど思った。

絶対何かしらの面倒な事を言いに来たに違いないと確信し放り出そうと頑張る。

「わ、わたくしね……結婚する……のよっ!!」

「そ、それはおめでとうございます！」

もはや両腕で姫様の手を掴み力いっぱい引つ張った。

そうすればやっとの思いで姫様を立ち上がらせることに成功する。

しかし、姫様は意地でも話す気なのか足に力を入れ抵抗をする、生意気な。

「それで……!! わ、わたくしね、悩みがあるの！」

「そうですか、私より枢機卿のほうに相談なされたほうがよろしいですわ！」

「そ、そうもいかないのよ……何せ同盟が白紙になるかも知れない問題ですからっ！」

「はっ……?？」

「きやつ!？」

姫様の言葉を聞いて思わず呆け手を離す。

そうすれば、力を入れていた姫様が吹っ飛ぶが気にしてられない。

今このポンコツ姫はなんと言っただろうか、同盟が白紙になる……意味が分からなかった。

「いや……え? いやいや、姫様!？ むしろ同盟の問題でしたら枢機

卿に相談するべきですよね!？」

「あいたたた……そうしたいのですが、その……」

床に座り込む姫様に詰め寄り首元を掴み必死に揺らす。

冗談じゃない、これから私はウイルとの幸せな未来が待っているのだ。

ゲルマニアとの同盟が白紙になる。

そんなことが起きればレコン・キスタとの戦争はトリステイン単体で行なう事になる。

そうなればこの国は滅亡だ、この国に制空権を取られて単体で戦えるほどの力はない。

「何をしたんですかつ!!」

「えっと……その……アルビオン王家のウエールズ皇太子に手紙を……」

「……まさか恋文を?」

「てへ☆」

舌を出し可愛く決める姫様に首元を締めなくなるも我慢する。

同盟が白紙になる問題となれば、婚姻を妨げる話だと想像がつく。

その為、顔を真つ青にしたが恋文と聞いてほっとした。

「なんだ……恋文程度じゃ白紙にはなりませんわ」

「そ、そうかしら？」

「ええ」

恋文程度なら証拠として突き出されてもシラを切れれば問題ない。

何せ相手が作った偽者だと言って無視すればいいのだ。

ゲルマニアの皇帝だって恋文の一つや二つ程度で婚姻を取り止めなどにはしないだろう。

何しろ相手の目的が目的なのだ。小娘の恋の一つや二つ受け入れる技量ぐらいある筈だ。

「そうね……大丈夫よね！」

「はい、問題ありませんわ」

互いに落ち着きを取り戻し互いになっこりと笑い合う。

最初こそどうなるかと思っただが、平和に終わりそうだなによりだ。

落ち着けば、姫様が未だに地面に座ってる事に気付き慌てて立ち上がり、手を差し出す。

「ありがとう」

「いえ、数々の無礼申し訳ありませんでした」

「いいのよ……私達、親友でしょ？」

手を掴んで笑いかけそのような事を言う姫様に笑い返す。

「あー……良かったわ。そうよね、始祖ブリミルに誓った一文があるとしても問題ないわよね！」

「ええ!! ……ええ？」

「あいたっ!？」

手に力を込めて立ち上がるとうとする姫様の手を離す。

そうすれば、立ち上がる途中の姫様が再度転ぶが無視だ。

今なんと言ったのだろうか。意味が分からず笑顔が固まる。

(始祖ブリミルに誓った？ 何を？ ルイズわかんない！)

「……ルイズ？」

固まった笑顔から涙が溢れ出し床を濡らす。

色々と頭の中を過ぎるも早々に聞かなければいけないことが出来てしまった。

「……ブリミルに誓ったって……何をですか？」

「えっと……恋文の最後に『始祖ブリミルに誓います』と」

「オワツタ、オワツタ」

「あれ？」

出来たら違う文であってほしかった。

しかし、結果はこれだ。無情にも最悪な結末を迎えた。

ハルケギニアでは始祖ブリミルは絶対だ。何かあろうと彼への誓いは果たされ、確立される。

例えば戦争や何か起きてても始祖ブリミルの文を交えた偽者の証拠は作らない。

姫様の名前と文字で恋文を書き、ブリミルへと誓う文も書いた。

そんな物が敵の手に渡れば、姫様は始祖ブリミルに嘘をついたと言う事になる。

「わーんー！」

「えっと……やっぱり駄目でした？」

力なく地面に座り込み大きく泣く。

折角手に入る筈だった幸せは彼方へと遠のき消えていった。

取り合えず、自分の頭ではどうにもならない事態にウイ<sup>想</sup>ル<sup>人</sup>へと助けを求めた。

## 四話：ルイズ癒される

「取り乱しました……すみません」

「い、いえ」

あれから十分ぐらい泣き冷静になると開口一番に謝罪をする。

何とも言えない事を仕出かしてくれた人だが、相手はお姫様だ。

それでも思いが表情に出てしまい、少しばかり頬を膨らませて睨む。

「それで……その話を私にして何をしろと？」

「ルイズには、手紙の回収を頼みたいのです」

「……回収ですか」

「回収です」

あの話の流れから予測していたが改めて言葉で聞くとあまりにも酷い。

手紙の回収と簡単に言ってくれたが、相手の場所は空の上のアルビオンで今現在反乱の真つ最中だ。

そう簡単に会えるわけがない、むしろ会う前に命を落とす危険性のほうが高かった。

「絶対ですか？」

「はい、頼れるのがルイズだけと言う状態です」

「……そうですか」

顎に手を当て考え込む。

色々と混乱をしたが現状で自分を頼るといえるのは分かる。

手紙の回収を頼もうにも他の人の場合、信用しきれない所が出てくるのだ。

レコン・キスタがお城に入っている可能性が高い、いや確実に何人かは入っているだろう。

どれだけ人を規制しても影のように沸いてくるのが諜報員だ。

「人員はどれだけ割くおつもりで？ あと日にちなども」

「私が動かせるのは一人だけです。時間は明日には」

「一人……明日……どなたが？」



「グリフォン隊隊長、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールド様を」  
「……そうですか」

聞かされた人員に眉を潜めそうになるも当然かと思った。  
若き天才であり、実力もある、更にはヴァリエール家と深い繋がりもあると優良だ。

何より自分の元婚約者なのだ、信頼を置けると思ったのだろう。  
(時間もなし、送られてくる人も完全に信用できない。更には相手の居場所も不明と……)

「……ルイズ？」

情報を繋ぎ合せて考えれば、頭が痛くなった。

内容が内容なだけに他言出来ず、相談する時間も人も全くない。

(断りたいけど、断ったら国も傾く可能性がある……詰んでるわね、これ)

断りたい所だが、これを断った所で自分の危機が少し遠ざかるだけだ。

他の人が取りに行き成功したとして、その人がレコン・キスタの人員だったらそこでトリステインは終わる。

皇太子が手紙を燃やしてくれるのを期待するのもありだが、それはそれで怖い賭けだ。

普通なら燃やすであろう手紙だが相手も人間だ。

追い込まれた人間がどんな行動に出るか私には分からない。

「……此方からも人員を選出しても？」

「その方は信用できる方なのですか？」

「この世の誰よりも」

姫様の問いに笑顔で間も無く言い切る。

彼以上に信用も信頼も出来る人物はいない。

迷惑をかけることになるが、これ以上は自分の力量では無理がある。

ここは素直に頼る事にしようと決めた。

「わかりました、此方も無理を言ってますからね。許可します」

「はい、サイト！ ウイルを……」

「おう……呼んで来ればいいんだな？」

姫様の許可を頂き、サイト呼びかける。

先ほどの話を聞いてたのでサイト自身もある程度は危機感を持っているのだろう。

ウイルの名前を出せばあからさまにほっとした表情を見せた。

「お願いね」

「すぐに連れてくるさ」

ウイルを引き込むことに決めた瞬間、心が軽くなりサイト同様ほっとする。

多分今の自分の表情は今日一番安心しきった表情をしているだろうとそう確信出来る。

サイトは腰に差してあったナイフを手に取りルーンの効果を発動させる。

ルーンが光り輝けば目にも留まらぬ速さで動き扉を開く。

その様子を姫様は驚き、私自身は頼もしそうに見ていた……見えた。

この時、もつと深く考えていればと思う。

姫様に頼んで他の人に聴こえないように魔法をかけてもらうこと……。

姫様が私の部屋に向かつてる事を見た人が自分の友達で有る可能性を……。

その友達が女性関係に関しては何だらしがないが、義理堅く友達想いだった事を……。

扉を開いた先でギーシュが両手を軽く上げ、諦めた表情で立っている姿を見てそんな事を考えた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「んでだ……ギーシュも巻き込まれたと？」

「参ったよ、サイトがルーンを発動して動くとは考えてなかった」

「……ごめん」

ウイルの部屋で私とウイルとサイトとギーシュとカリオスト口の五人が顔を合わせる。

既に魔法を掛け声を外に出さないようにしており、先ほどの相談をしていた。

結局の所、他言無用であるはずの話をギーシュも聞いてしまい巻き込む羽目となった。

「よりによつてギーシュかー」

「ごめんなさい」

「ルイズのせいじゃないから」

ギーシュを巻き込むこととなり、ウイルがぼやく。

その言葉に思わずシュンとなり謝るとウイルは軽く私の頭を撫でてから私を抱き寄せ、自分の膝上に座らせた。

膝上に座り込むとそのままウイルは両腕で抱きしめるかのように包み込んでくれる。

そんなウイルの行動にまたもや涙腺が緩み泣きそうになるも耐えた。

腕の中は暖かく、お風呂に入ったばかりなのか匂いも石鹸の香りで落ち着いた。

「ギーシュだと何かあるのか？」

「問題大有りだな」

「これでもボクは元帥の息子だしね……これでボクが亡くなれば……」

「この国が割れるな、ちなみにルイズも同様だ。ルイズが亡くなったら公爵と元帥が手を組んで大暴れだろうね」

先ほどの言葉が引っかけたのだろう。

サイトが不思議そうにウイルに質問を投げかける。

その質問に対してウイルとギーシュは何て事無く問題点を指摘した。

「な、なるほどな……でも軍人だしお姫様の命令とかで『名誉』だ！とかはないんだな」

「任務が任務だし、名誉でも何でもないさ」

「とうとう？」

「今回の任務は秘密裏に行なわれる行為、姫様に感謝されど他の人はまったくもって知らないことだ。戦争で勇敢に戦い死んでいくのはわけが違う。死んでも世間的には名も何も残らない任務なんだ」

「……」

サイトはその言葉に対して思うところがあつたのか更に眉を潜め腕を組んで考え込んだ。

暫く唸るような声を出していたが、結局何が言いたいか思いつかなかつたのだろう。

そのまま不服そうに頷き、先を促した。

「取り敢えずは情報整理かな」

「それがいいね。サイトもよく分かってないだろうし」

「あー……頼むわ」

腕の中で落ち着き大人しくしていれば男性三人が相談を続けていく。

その光景を見るだけで先ほどの不安がなくなる。

やはり、頼れる人が居るということは本当に幸運なんだと幸せな事なのだと改めて思った。

「姫様から渡された任務は、『恋文の奪還』。相手はアルビオンのウェールズ皇太子。時間の猶予なしで明日の早朝には出て欲しいと」  
「オマケにアルビオンはレコン・キスタによる内戦中、手紙の所在も皇太子も危ういかな」

「その無謀な任務を俺とギーシュとルイズとサイトとワルド子爵のみで行なう」

「あれ……カリオストロは？」

「カリオストロは……気分次第かな」

改めてウイルとギーシュが任務の内容などを整理していれば、サイトが不思議そうに首を傾げた。

そのサイトの言葉にウイルは少し眉を潜め、横に居たカリオストロへと視線を向けた。

カリオストロはパジャマ姿でベッドに寝転び、つまんなそうに手紙を眺めていた。

カリオストロのしている手紙は、任務を言い渡された際に姫様から受取っていた物だ。

その手紙は、姫様用の刻印でしつかりと封をされていたのだがカリオストロは気にせず開けていた。

「……はっ、つまんねー。なんだよこれ」

「勝手に開けて……それで内容は？」

「亡命しませんか」、アホだろ……こいつ」

勝手に読むのはいけないと思ったが此方も命が掛かっている。

このぐらいなら許されるだろうと思ひ押し黙り、二人の会話に耳を澄ます。

ウイルに内容を聞かれたカリオストロは短く答え、手紙を戻すと手でパンツと手紙を軽く叩いた。

そうすれば、切られた筈の封は元通りとなりカリオストロの手を離れ、ひらひらとベッドの上に落ちる。

魔法をまともに使用できない私から見ても本当に凄い技術だと思う。

ウイルが言うには錬金術を使用しているとのことだが、まったくもって理解が出来ない。

詠唱はなし動作も最低限で最高の効果を発揮する、そんな錬金術があるのだろうかと驚いた物だ。

「亡命の催促か……ないな」

「国を滅ぼす気満々だな、こりゃ」

「あー……ごめん、何で亡命を促すと国が滅ぶんだ？」

何とも酷い姫様の評価をしている二人に対してサイトが縮こまりながら手を上げた。

他国から呼ばれているせいもあり、状況がよく飲み込めていないのだろう。

そんな縮こまったサイトを呆れる人も居らず、ウイルが微笑んで答えていく。

「亡命なんてされたらアルビオン制圧後、それを理由に此方に襲い掛かってくるよ」

「あー……でもさ、亡命しようがしないが、どの道攻められるだろ……これ」

ウイルの言葉にサイトは壁に貼つてある地図を示して告げた。

レコン・キスタの目的は『王政から共和制』と『聖地奪還』。

王家からの共和制ということは、トリステインにまでその思想を押し付けてくる可能性がある。

更には聖地奪還のほうも問題だろう。聖地がアルビオンの反対側にあり、その進路の途中にトリステインがあるのだ。

どうみても同盟もしくは、アルビオン同様制圧してくると考えられた。

更に言ってしまうえば、ガリアとゲルマニアにも進路を取れるが相手は大国だ。

大国を相手にするよりは、小国のトリステインを落とし二つの国と同盟をする際の手土産にするほうが楽である。

「されるだろうね。でも亡命の有無で結構変わるものなんだ」「というと？」

サイトの質問に対してウイルは一度言葉を切ってから続ける。

その際にウイルが此方の頭を優しく何度も撫でてくれた。

私はそれに目を細め、体の向きを逆にし抱きつくと頭を胸板に押し付けぐりぐりとする。

そうすれば、ウイルは手を腰に回してきてぎゅっと抱きしめてくれた、本当に幸せな時間だ。

「時間の問題だね。亡命してなければ相手が此方に攻めて来る動機がなく時間を稼げる。逆に亡命していればそれを理由に間髪を容れずに攻められる」

「ふむ」

「相手は戦いの最中だし、その延長戦として攻めて来れる訳だ。ほとんど準備をしてないトリステインなんてすぐに終わるよ」

「なるほどな……準備する時間が違うのか」

「そういうこと……まあ時間あっても足が揃わないのがトリステインなんだけど」

見も蓋もない言葉に誰も笑えない。

ウイルの言った言葉が事実なので笑いにすらならない。

笑ってるのはカリオストロぐらいでサイトなんかは顔を引き攣らせていた。

「何より姫様の婚姻による同盟もまだ終えてない。とにかくトリステインに必要なのが時間だ」

「それをこの手紙が軽くぶち壊そうとしてるんだから笑えるよな」

「……でもさ、亡命してもバレなければ」

「可能性を残してはいけない、諜報員が居る事は確実に思った方がいい。どれだけ隠しても見つかるものだよ」

「そうか」

サイトが手を軽く上げ希望を述べてみるも即座に反論された。

サイト自身、無理だと思っていたのだろう。

反論されればすぐに黙り込み静かに頷いた。

「……と話を戻して任務の事を話そうか」

「だな。脱線させちゃってすまない」

「いいさ、改めて危機を実感出来たからさ」

その後、どうするかの話し合いや準備を含め夜を深く過ごしていった。

五話：朝っつていつさ！ 日が昇ったら！

「……眠いな」

「そうだね……まあ、ウイルスよりはましじゃないか？」

「だな、最後まで起きてたらしいし」

朝早く、使用人しか起きてないような時間帯にサイトとギーシュは馬に鞍を付けていく。

そんな様子を本を読みつつ先に用意された馬に乗り見ていた。

「それにしてもだ……意外だったな」

「何がだい？」

「カリオストロが付いてきたの」

「ああ……なるほど」

男同士の話もつまらなくなり、本へと集中すればそんな事を呟かれた。

なんともタイミングが悪い問いに少しばかり不機嫌になるも、しようがないと耐える。

「空を浮かぶ島なんて早々いけないからね！ 錬金術士として興味があるんだ☆」

「……そういえば、ボク達の錬金とは違うんだっけ？」

「そうだね……だいたい違うかな」

本当は空に浮かぶ大陸なんて見飽きているのだが、何しろ行く大陸の名称が『アルビオン』だ。

自分の居た世界にもあつた浮遊大陸で些か気になっていた。

特に隠すこともないので素直に言えば話題が飛ぶ。

二人にとっても然して気になる話題でもなく、準備が終わるまでの暇つぶしなのだろう。

「用意は出来た？」

「おう、こっちは出来た。 そっちは？」

「送ってきた」

それから眠気で集中力が途切れるせいか二人の話題はあちら此方へと飛び跳ねた。



そんな主体性のない会話を聞いていればウイルとルイズが戻って来た。

サイトの問いに準備を終えたのか、疲れたようにルイズが一言呟く。

「ギーシュ、使い魔は？」

「居るよ」

「うおっ!? でかっ!」

戻ってきて開口一番にウイルがギーシュへと問いかける。

ギーシュはその問いかけに足のつま先で何度か地面を叩けば、土が盛り上がり一匹の生物が姿を現した。

「ジャイアントモールか」

「そう、ボクの相棒『ヴェルダンデ』さ」

茶色く少し硬めの毛皮に退化した小さな瞳の巨大なモグラ。

土のメイジの使い魔の定番、ジャイアントモールだ。

こんななりをしてるが、土の中で馬と同じ速さで潜り、光物が好きな性質を持つ。

土メイジが必要とする、貴重な鉱石や宝石を持って来てくれるので素敵な協力者と言えるらしい。

「ああ……ヴェルダンデ、今日も素敵だね! いっぱい食事をしてきたかい?」

モグラを呼んだギーシュはすぐさまに地面に膝を突き、ひしっと抱きつく。

そんな様子をサイトは苦笑しながら見て、ルイズは呆れたようにため息をついた。

一生の相棒とも言える使い魔を可愛がることは普通であると思うのだが、人間を使い魔にした二人には些か難易度が高いのだろう。

(……あん?)

野郎とモグラの戯れを見てるほど暇ではないので視線を逸らせば、とある人物の表情に気付いた。その表情を見て馬から飛び降り近づき、目に付いた人物の脛を軽く蹴る。

「あいたっ!? ……カリオストロ?」

「……」

羨ましそうに眺めていたウイルの脛を蹴り、しやがませると襟を掴み顔を引き寄せる。

「てめー……オレ様を呼んでおいて何だ……その顔は」

「あはははは……いや、カリオストロを呼ぶ前は憧れてたからさ」

「ちっ……」

何やらモグラを見て羨ましそうにしていたウイルに文句を言った。鍊金術の生みの親のオレ様を呼んだんだ、モグラ如きに現を抜かすとはどういう見だ。

何より、モグラと比べられるのが癪に障る。

文句を言えば、ウイルは視線を逸らし謝りオレ様の体を持ち上げ馬へと向かう。

そのまま抱き上げられ馬に乗せられるとウイルもまた後ろに乗って抱きしめる形で収まった。

「……騙されないぞ」

「分かってる、目一杯可愛がるさ」

頭を優しく撫でて来るウイルに対して厳しい目つきで睨む。

そうすればウイルが折れてそう告げた。

少しばかり考えそれを受け入れる事にした。

「それにしても……モグラか、アルビオンって浮かぶ大陸だろ？ 何で連れてくんだ？」

準備も出来、それぞれが馬へと乗馬していく。

サイトは乗りなれてないのでルイズの後ろに、ギーシュは一人で乗っている。

後は協力者の子爵を待つだけとなった。

「商人からの情報だと皇太子のほうは旗色が悪く追い込まれるようだ」

「追い込まれて？」

「そう……俺等が着く頃にはやられてるか、追い込まれてるか」

ルイズ達の足元で何やら必死に鼻を動かすモグラを見てサイトが聞いて来た。

その問いには何時ものようにウイルが答えていく。

「追い込まれていた場合は攻城してるだろうし、敵に囲まれてるだろうね」

「うげ……まじか」

「そんな中、皇太子に接触する為に必要なのがヴェルダンデ」

「あー……土の中を移動するのか」

「空よりも安全だよ」

空を飛ばば打ち落とされ、中を突っ込めばリンチ。

必然と会うには土の中と行動が限られる形となる。

相手もバカではないので土の中の対策をしてるだろうが、他の二箇所よりはましだ。

「……それよりギーシュ、なんかこのモグラ私に引っ付いて来るんだけど」

サイトに説明していれば、ルイズが眉を潜め足元を見ていた。

そこには先ほど同様モグラが何やら必死にルイズの足に引っ付いている。

「え？ あー、貴重な宝石類とか持ってるかい？」

「姫様に貰った水のルビー持ってるわ」

「ならそれだね。ヴェルダンデは宝石類が好きだから、貴重な宝石を持つてるルイズに反応してるんだ」

ギーシュが少し匂いを嗅がせれば満足するよと発言し、それにルイズは頷くと馬から降りて胸元から皮袋を取り出す。

皮袋は首元からぶら下げられており、中から綺麗な青い色のルビーの指輪が出てきた。

それを差し出せば、ヴェルダンデは匂いを夢中で嗅ぎ取る。

「これでその匂いを覚えた筈だから、ルイズがそれを持つてる限りは追いつくことが出来る」

「へー……便利ね。このモグラ」

ある程度満足したのだろう。

モグラは満足気に鼻を宝石から離し土の中へと戻っていった。

それを見送るとそのまま両手を上に伸ばしウイルの頬を引っ張る。



『遅い!!』

結局、港町ラ・ロシエールへ足を進めたのは集まってから一時間後だった。

朝日は昇りきり、霧が立ち込める時になって子爵がやってきた。

驚いた様子の子爵に全員が噛み付き、馬に乗り走らせる。

そんな六人をアンリエッタは学院長室の窓から見送る。

目を閉じて、手を組んで祈る姿は様になり女神のように見えた。

「彼女達に、加護をお与え下さい。始祖ブリミルよ……」

「あつ、いた」

「……はあ」

祈りを捧げていれば、不釣合いな声が聴こえて来た。

アンリエッタがため息をついて其方を見ればオスマンは鼻毛を抜いていた。

「見送らないのですか？ オールド・オスマン」

「ほほほ、姫様見てのとおり、この老いぼれは鼻毛を抜いております」

暢気にそんなことを言うオルマンにアンリエッタは口元を引き攣らせて答える。

何か言おうかとするもこんな状況になれてないアンリエッタは、結局ため息を吐き窓の外へと視線を向けた。

「ため息をつくとき幸せが逃げます」

「……元より幸せなんて全くなかりましたわ」

何やら含みのある表情でオスマンを軽く睨み本音と思わしき言葉をバラす。

こんなお調子者であるがアンリエッタの中ではまだ本音を話せる人物らしい。

首を振りそう答えれば、扉がどんと叩かれた。

アンリエッタは一瞬身を竦ませるもオスマンは『入りなさい』と呟き、相手を部屋へと招き入れる。

「いいいい、一大事ですよ！ オールド・オスマン！」

「またか……君がここに来る時はいつも一大事じゃな」

「ここに来る理由なんてそれしかないのよ」

「……ごほん、それで何が一大事なんじゃ？ ミスター・コルベール」  
入って来た人物は、コルベールであった。

慌てるコルベールに対してオスマンが呆れて声を出し指摘するも  
冷静に返された。

案外余裕があるやり取りである。

「そうでした……城からの知らせです。なんと、チエルノボーグの  
牢獄からフーケが脱獄したようです！」

「ふむ……」

「え？」

オスマンは報告を受けて髭を撫でて考え込み。

アンリエッタは信じられないと目を見開いた。

「見つけた兵士の話では、門番は眠らされており、巡回していた兵士達  
が殺害されていたようです」

「……これこれ、姫様の前じゃ言葉は柔らかかくの」

「……これは失礼しました」

オスマンの言葉でコルベールがアンリエッタに気付き、慌てて頭を  
下げた。

それをアンリエッタは手で押さえると先を促すようにと言葉を告  
げる。

「今回の学院の訪問は急遽決まったこと……それなのに魔法衛士隊  
が、居ない時を狙ったという事は裏切り者が……」

「まあー居るじやろうな」

コルベールの言葉にオスマンは何気なく軽く答えた。

その成り行きを見ていたアンリエッタは顔を蒼白にし窓へと継る。

既に外にはルイズ達の姿はない、そのことを確認し力なく膝を突い  
た。

「……コルベール君、ちよつと」

「はい」

そんなアンリエッタをオスマンはチラッと見るとコルベールを小  
さな声で呼び出し、小声で話していく。

「頼んだ」

「……任されました」

ある程度用件を伝えれば、些か顔を顰めているコルベールを手で追い払うようにし退出を促す。

コルベールが扉を閉めて退室したことを確認し、アンリエッタへと声をかける。

「すでに杖は振られたのですぞ。我々に出来る事は、待つだけ……違いますか?」

「そうですが……」

「なあに、彼らならば、どんな道中も越えてくれますぞな」

「……彼とは、あのギーシュという少年? それともルイズの使い魔の子? ああ……ワルド子爵か?」

オスマンは静かに首を振る。

「では……ルイズが協力を求めた少年ですか?」

「ほっほっほ、アヤツは些か他の貴族とは変わってましてな」

「変わってる?」

オスマンの言葉を想像できなかつたのかアンリエッタは首を傾げた。

それを見てオスマンはパイプを取り出し口にするると軽く笑う。

「異国の地のメイジを呼び出し、本人もまた手段を問わないという性格でしてな」

「なんというか……それは」

「まあ……こんな時は頼りになる人物ですじや」

それ以外は何を仕出かすか分からず怖いけど……と小さく呟く。

しかし、その言葉はアンリエッタに聴こえず静かに考え込む。

「……名前は何と言いましたか?」

「ウイル・ツチール……ツチール家の次男坊」

「……もしかして、この間お城でワルド子爵に勝った?」

その名前に聞き覚えがあった。

アンリエッタ自身は見えないが、ラインメイジでありながら異色な方法でスクウェアであるワルド子爵を圧倒したと、お城の中で噂になっていた。

その方法が方法なので戦争や戦いに参加してない貴族からは受けが悪く、戦争や戦いに赴いた事のある貴族からは受けが良かった。そのことを思い出し、聞いてみればオスマンは静かに微笑み頷く。

「……ウイル」

その言葉を記憶に刻むように呟くとアンリエッタは、遠くを見るように目になった。

無意識か唇を指で軽くなぞり、目をつむると微笑んだ。

「ならば祈りましょう。　異国の使い魔と異色な彼に」



## 六話：餌

港町ラ・ロシエールは、トリステインから離れる事、早馬で二日の距離だ。

アルビオンの玄関口であり、同時に港町であるが、狭い溪谷の間の山道に設けられている小さな町。人口こそ三百そこらだが、アルビオンを歩き来する人で溢れかえり人は多く居る。

「てな所かな」

「なるほどな、ありがと」

「いや、いいさ」

馬を走らせ、隣に並走している才人にラ・ロシエールを説明している。

先ほどからカリオストロが熟睡しているので暇でしようがない。

故に才人の隣を並走しつつ会話を続けて眠気を抑える。

「あとさ……俺達目立つ格好だけどいいのか？」

「んー……特に問題ないな」

「でもさ、あまり人目に付かない方がいいんじゃない？」

自分の服を摘み、俺たちのほうへと才人は視線を向けた。

自分含め、ルイズ達の格好は普段と変わらぬ格好である。

手紙の奪還、隠密任務なので才人は人目に付くのはまずいとは思っているのだろう。

「どちらにしろ人目に付くしな、この面々だと」

「あー……」

最初こそ、服装を正す事も考えたが諦めた。

カリオストロやルイズなんかは平民の格好をすれば逆に目立ってしまうが。

ギーシュも同じ理由だ、どうやっても姿だけが平民の貴族が出来上がってしまう。

「それに平民が早馬に乗って向かってる時点で怪しまれる」

「そうなのか」

「平民の移動だと普通は徒歩か共同の馬車ぐらいかな」

「それじゃ無理だな」

「間に合わないな」

ラ・ロシエールに馬車で行く事も考えたが、時間が足りない計算となつてしまった。

船が出るまでに二日あるとは言え、情報も集めないといけない。

そのことを考えれば結局は速度を優先することとなった。

「まあ……子爵が貴族の格好で来た時点で意味なかったけど」

「……うん」

そう言つて、才人と一緒に上を飛んでいるグリフォンを見上げた。少し遠めに見える米粒大のグリフォン。

それにルイズと子爵が乗っており、危険がないかを哨戒してくれている。

「……なあ」

「なんだー」

今日で何度目かの才人の質問が飛んでくる。

それに対して欠伸を一つして聞き返した。

「どんどんと離れていつてね? ……子爵」

「だな、何の報告もないし忘れられてるかね」

「……哨戒つてなんだ?」

「ギーシュがしてる事」

才人の言葉に後ろを振り向き答えた。

そこには少し後ろに居て辺りを探っているギーシュが居た。

軽く手を上げれば、ギーシュが気付き速度を上げて追いついてくる。

「何かあったかい?」

「いや、何も……そっちは?」

「付いて来る人は居ないね」

「そっか」

ギーシュと情報のやり取りを行い、安全を確認する。

「それで前は……」

「ないかな」

「情報がない、むしろ子爵が遠ざかってく」

子爵が飛ばすせいで当初予定していた休憩が出来ない。

それ故、疲れと怒りが溜まりフォローする気力も沸いて来なかった。

素直に告げれば全員が黙り込み、遠くを見る。

そこには先ほどより小さくなったグリフオンの姿があった。

「止まれ」

「どうした?」

休憩を入れず飛ばしたせいか、二日の距離を一日で突破してしまった。

ラ・ロシエールまで目と鼻の先となり、ほつとするのも束の間二人を止める。

目の前には両側に聳え立つ大きな壁のような崖があり、奇襲の可能性があった。

こういった時にグリフオンで空を飛びながら魔法を使える子爵の出番なのだが、残念ながらない。

「ヴェルダンテは?」

「少し遅れてるかな」

自分で空を飛んで確認をと思うが、空を飛んでる最中は無防備となる。

その間に弓で狙われる危険性もあり、どうしようかと悩んだ。

ヴェルダンテで土の中から調べて貰おうかとも思ったが、飛ばしていたせいか遅れてるようだ。

(……面倒だけど少し戻ってフライで確認するか)

安全には代えられない。

疲れていてすぐにもベッドで眠りたかったが、馬を切り返し道を戻る事を決意する。

大きいため息をついて、才人とギーシュに事情を話そうとした時だ。

振り返った先で何やら飛んでくる一つの生物が目に入った。

「あー……まじか」

「どうかしたのか?」

「面倒なのが来た」

「は?」

徐々に大きくなる生物を見て何が来たのかを察した。

本を読む代価として幾度なく爪や鱗などを採取させてもらっていたのでよく分かる。

面倒な相手にどうしようかと更に頭を悩ませた。

「はあ、いい、ダーリン」

「キュルケ?」

「……」

「それにタバサも」

数分後やって来たのはシルフィードに乗ったタバサとキュルケであった。

キュルケはシルフィードから飛び降りると才人に抱きつき、タバサは寝巻きのまま本を読み続けている。

「……」一応聞くけど何しに来たんだ?」

「何って……楽しそうな匂いがしたから付いてきたのよ」

大体の予想はついていたが一応聞いてみれば、思ったとおりの答えが返ってきた。

出発した時間が時間だ、起きている生徒も居るだろうと思っていた。

しかしだ、その中の一人にキュルケが居たのは不幸である。

「帰れと言っても聞かないよな」

「流石に分かってるわね」

眉を潜め、聞いてみるとにこやかに言い返された。

楽しい事が好きなキュルケの事だ、いつものメンバーが揃ってこん

な事をしていけば興味を引くだろう。素直に任務の件を話したところでラ・ロシエールまで付いて来るのも確定済み。

それなら……

「なら、宿に付いたら一筆書け、それと付いて来るのはラ・ロシエールまでだ」

「何を？」

「『私は自分の意思でここに来ました。命を落としてもトリステインのせいではありません』って感じで実家にな」

「あー……もしかしてやばい？」

「非常に」

焼け石に水程度の対策だが何もしないよりはましだ。

この依頼を達成したとしてもキュルケ達が付いて来て怪我や死んだら元も子もない。

キュルケの実家はヴァリエール家とたぬを張るぐらいに大きなもの。

その一人娘がトリステインの事情で怪我をしました！　なんて言おうものなら遺恨が残るだろう。

なるべく最低限にする為に行動をしておく。

「ついでに空を飛んで崖の上に待ち伏せがないかの確認頼むわ」

「んっ」

「ふあ……オレ様も行く」

馬からシルフィードへと飛び乗り、タバサへと声を掛ける。

その際によくやく起きたのかカリオストロも此方へと移動した。

何も説明してないのに察したらしい、相変わらずの頭の回転の速さだ。

「このまま先行するから、注意しつつ付いて来てくれ」

「ちよ、ちよっと！　私はどうするのよ！」

「俺の馬よろしく」

慌てるキュルケに馬を押し付けると終わったとばかりにシルフィードが飛んだ。

個人で浮かび上がるよりも早く、あっという間に才人達を見下ろす

立場となった。

「さてと……」

「奇襲はなさそうだな」

弓の届かない距離となり、カリオストロと共に下を見下ろす。

崖の上には少しの森が広がっており絶好の狩場でありながら人の気配を感じ取れない。

誰かが崖の上で待ち構えてるわけでもなく、森に潜んでるわけでもない。

そのことを時間を掛けて両側を調べ、下に居る才人達にライトの魔法を使って合図を出した。

そして、そのままタバサに頼みラ・ロシエールへと入っていった。

「子爵何処だろ」

「……グリフォンを探すか」

ラ・ロシエールへと入り、才人達と合流した後、先に来てるであろう子爵を探す。

特に何の情報もないのでグリフォンを目印に探していくしかない。

「子爵って？」

「ワルド子爵……姫様が寄越してくれたんだけど……」

「何で居ないのよ……それにルイズも」

探していれば、子爵という言葉にキュルケが食いつき才人が説明を始める。

「あー……子爵と合流した時に『婚約者と交流を深めたい』とか言ってるんだろって」

「あれ……婚約者って解消されたんじゃない？」

「まだ途中なんだろ、だからこそ子爵も焦ってるルイズにアピールしてるんだろってさ」

婚約者の件はこっちの予測でしかなく公爵から実際に聞いたわけではない。

故に何処まで話が進んでるか、本当にあるのかすら分からなかったが、今回の子爵の焦りようから話し自体は持ち上がったのだらうと

予測が付いた。

アピールして婚約者から外れないように必死なのだろう。

しかし、任務を一緒にこなす自分達を忘れられるのは些か気分が悪いものである。

「タバサ、これ着といてくれ」

「……わかった」

辺りを見渡し、宿を中心に探していれば何やら悪目立ちしてる事に気づく。

貴族の子供が大量に居る事に加え、タバサが未だに寝巻き姿であったこと思い出す。

タバサに自分のマントを羽織らせ早く宿にと更に注意深く辺りを探した。

「あつ……居た」

「何処？」

「あそこの高そうな宿」

暫く探せば、才人が呆れた声を出し一角の宿に指を差した。

その先を見れば、確かに宿の横の馬宿にグリフォンが繋がれている。

「なあ……こういう時って安い宿に泊まるってのが定番だけど……どうなの？」

見つけられたことにほっとし、全員で宿に向かえば才人が不思議そうに首を傾げた。

才人は日本生まれでこういったこともしたことがない。

精々書物やゲームなどで少し知識がある程度なのだろう、故に疑問を抱く。

「これでいいんだよ」

「へ？」

説明をしようとするそれより早く、カリオストロが噛み付いた。

機嫌悪そうに目つきを鋭くし口元を歪めている。

「貴族が平民の宿に泊まったら変だろ」

「……貴族である事がバレてるから、安い宿に泊まると悪目立ちす

るってこと?」

「分かってるじゃねーか、あとこういった所は金をかけた方がいい場合もある」

「どういうことだ?」

「高い宿は相応の人が使用する。その為従業員から何まで細心の注意を払っている、間違っても客の情報を外にださねーのさ」

「お店にとって大事なのは信用だ。」

「しかも貴族を相手にするようなお店は他の店よりも信用が大事なのだ。」

「平民を相手にするのは違い、注意を必要以上に払い、余計な事をしない。」

「と言う訳で……子爵の対応は間違ってるよ」

「……そうなのか」

「今までの子爵の行動が行動なので悪く見がちなのだろう。」

「何処か納得できなさそうな才人を見て苦笑した。」

「……」

「子爵は?」

「棧橋へ交渉に行ってるわ」

「宿に入れば、椅子に座り込み不機嫌そうなルイズが居た。」

「手を上げて挨拶をしてから見えない子爵の事を聞いてみると更に不機嫌そうな声で答えた。」

「それで、なんでキュルケが居るわけ?」

「朝に出かけるダーリン達を見て追いかけてきたのよ」

「……そう」

「宿は?」

「まだね」

「なら私が取って来るわね」

ルイズがキュルケとタバサに気付き、眉を潜め聞いて来た。



キュルケがその事に何気なく答えるもルイズは短く答えて終わる。いつもなら噛み付き口喧嘩が始まるのだがそれすらない。キュルケより頭にくることがあったのだろうかとうと予測した。

「機嫌悪そうだな、ルイズ」

「当たり前でしょ、これ任務よ？ 任務！ なんで一緒に任務をこなす相手を置いて疾走してるわけ？ しかも空の上で何て言ったと思う？」

「あー……えー？」

そんな爆弾みたいなルイズに才人がわざわざ触りに行った。

才人が声を掛けた瞬間、聞いてくれとばかりにルイズは口から言葉を吐き出す。

それに対して才人はタジタジとなり助けを求めて来るが皆顔を逸らした。

タバサは本を読み、キュルケは自分達の宿を取りにギーシユは辺りを見渡して警戒している。

カリオストロは助けしてくれるわけもなく、何て言ったんだと笑いながらルイズを促すばかりだ。

「放っておいた事の謝罪と言いつつ……それで私の対応が鈍かったら、『旅はいい機会だ、いっしょに旅を続けていれば、またあの懐かしい気持ちになるさ』って」

「あー……」

「旅って何よ、これは任務よ、任務ー」

何時間もの鬱憤を吐き出すように言葉が続いていく。

流星に周りのことに気遣う理性はあるのか、小声で話すため呪詛のようにも聴こえた。

「……なあ、子爵って」

「言うな……可哀想になつてきた」

才人の言葉に首を振る。

全ての対応が空回りをしている子爵にどう言えばいいか分からなくなつた。

これ以上のフォローも出来ないし、する気すらない。

「ああ……着いていたのか、すまなかった。婚約者と久しぶりに時間を取れて浮かれていたみたいだ」

「そうですか、それじゃしようがないですね」

そんな事を話していれば、子爵が入り口から戻って来た。

俺達の姿を見て開口一番で謝罪をするも何処か感情がないように思える。

子爵からしたら俺は婚約者を奪っていく敵なのでしょうがないのかも知れない。

そんな事を思い笑顔で対応すると横に居た才人が変な物を見るような目で見てくる。

こんな人でも一緒に任務をこなすのだ、仲悪くしておいては損しかないだろうに。

「取って来たわよ」

「君は……？」

にこやかに会話をしていけば、キュルケが戻ってきて子爵と顔を合わせた。

子爵は宿の鍵を持ってきたキュルケに首を傾げる。

「お久しぶりですわ、子爵様。まさか旅行先で偶然会えるなんて」

「……旅行？」

キュルケの問いに寝巻きでマントを羽織っているタバサを見てからこつちを見てくる。

特に何もいう事もなく、素直に頷けば、相手も察したのか頷き返された。

「それで部屋なんだけど……三人部屋が二つと二人部屋が一つだけ取れたわ」

「なら……二人部屋は私とルイズで……」

「二人部屋は俺とカリオストロ、他は男女で分かれましょう。旅行中なのに悪いなキュルケ」

「別にいいわ。ルイズとはお友達ですもん、女性同士楽しむわ」

子爵からとんでも発言が聞こえたような気がして即座に割り込む。

そうすれば、キュルケは察したのかにこやかに対応してくれる。



「……寝たか」

ウイルがベッドに潜り込み数分後。

ウイルはすぐに寝息をたてて寝始めた。

流石にここまで休憩なしにやってきたので無理もないと思った。

「たくよー……ちつとは考えろよ」

寝ているウイルを手で触り確認した後、舌打ちをしてベッドから降り窓を開け放つ。

窓を開け放てば、そこには今まさに此方の窓に飛び込んでこようとするフードを被った人物が居た。

「!？」

「おせーつての」

その人物が此方を確認し慌てながら腰に手を伸ばすも全てが遅い。

相手に向かって呆れながらも、指を鳴らし錬金術を実行した。

「がはっ……!？」

「じゃーな」

錬金術が正しく起動し、フードの男の体から剣や斧が突き出て一撃の下絶命させた。

相手の体を利用した錬金術。相手の血を代価に剣を、相手の骨を代価に斧を生成する。

抵抗する暇もなく、対応する暇もなく、何も出来ぬまま男はその場で煙のように消え去った。

そのことを確認すると宙に浮いた剣や斧をもう一度指を鳴らし消して窓を閉める。

「ウイル達は幾度なく追っ手が居ないかを確認していた」

欠伸を一つしてベッドに戻り、ウイルのお腹を枕に寝転ぶ。

その際に誰が居るでもないのに説明するののかのように口を開いた。

「街に入って追っ手が此方を見張っていたと言えばウイル達の泊まる場所は分かる。……でもなー、なんでウイルがこの部屋を選んだのが分かったんだらうな」

下の時に部屋割りを決める時に居た人間は、ルイズとギーシユと才人とキユルケとタバサに子爵、オレ様達を含めて八人。

部屋割りもその時に決めたものだ、誰がどの部屋に入るかはそこに居た人間しか分からない。

更には部屋の場所もウイルが部屋に行く際に聞いた一瞬のみ、子爵以外の人が裏切り者で仲間に連絡を取ったと思っただが行動が早すぎる。

「しかも、差し向けた追っ手は『偏在』……詰め甘くね？　ワルド子爵様よ」

八人の中で風に対応し偏在が使えるスクウエアなのは子爵のみだ。

タバサが実力を偽ってる可能性もあるが、今の偏在はどう見ても男性ほどの身長だ。

故に……犯人は一人しか居ない。

「オレ様じゃなければバレてお終いだったことを考えれば運はいいか」

今あつた襲撃の件等を話せばワルドを捕縛できるだろう。

しかし、それではウイルが成長しないし、つまらない。

だからこそ報告しない、このまま黙り込む。

今現在、自分の心に居るのは一人だけ、それ以外は全てがどうでもいい。

己の主人の血と肉にする以外は利用価値のないものだ。

『精々足掻いて糧になってくれよ……レコン・キスタ』

暗い部屋の中、薄く笑いレコン・キスタ餌にそう呟いた。

## 閑話：最悪

「ここかね」

夜が更けた頃、フードを被った女性——フーケが一つの宿屋兼酒場へと辿り着いた。

その酒場はラ・ロシエールの隅つこのほうにあり、酒樽の形をした看板には『金の酒樽亭』と書かれている。金どころか、一見すると廃屋のようにも見えるほどに小汚い中にフーケは足を踏み入れていった。

「つ……なにが」

仲間のドウドゥーに呼ばれてこの酒場に來たのだが、中に足を踏み入れ眉を潜めた。

未だ営業している時間帯だというの中には真っ暗で何も見えない。しかも人の気配もなく、まさに廃屋といった状態であった。

昨日街を歩いて居た時にこの前を通ったが、その時はやっていた事を考えれば不気味である。

休みであれば扉が閉まっている筈、そう思い調べるために杖に手を掛けた。

「ああ……ごめん、来てたんだ」

「……その声、ドウドゥーかい？」

杖を握った瞬間、先ほどまで気配がなかった酒場の真ん中に人の気配が現れた。

その気配は突如現れたように浮き出てきて更に異様さを増す。

それでも声がここに呼んだ仲間の声と分かりフーケはほっとした。

「まったく……人を呼んでおいてなんだい、この部屋は」

「あはははは、仕事してたから灯りを灯せなくてね。今灯すよ」

「そうかい」

「……そと動くドウドゥーにため息をつき、近づく。」

「そうすれば何かを足が蹴っ飛ばした。」

その蹴っ飛ばした物は大分大きく重いのか、少し蹴っ飛ばしても場所を変えない。

更に入り口部分から風が入り込み気付かなかったが、何か異臭のようなものも感じ取った。

「何か……足に……」

「動かない方がいいよ、そこら辺いっぱい転がってるし、転ぶよ」

「転がってる?」

「ああ……点いた」

ドウドゥーの言葉に首を傾げつつも地面を見て自分の蹴っ飛ばした物を見ていれば、灯りが灯った。

暗闇に居たせいか眩く照らす灯りに目を細めつつも、そのまま地面を見る。

「え?」

「いやー……もつと数増やせて言うから大変だったよ」

ケラケラとドウドゥーが笑う中、フーケは地面から目を離せずに居た。

フーケの視線の先には、見覚えのある物があった。

此処から出て通りを歩けば何処にでも居る存在、何処でも目にする者。

——酒場の地面を多い尽くすように人が倒れていた。

「なっ……あっ……」

「なるべく首を飛ばさないように、五体満足で殺せって言うからさ。首の骨を折ったり、心臓を貫いたり……」

明るくなった店内へと視線を巡らせる。

そこには赤く染まった地面や壁、そこに横たわる白い肌の死体、死体。

この酒場でのんびりと笑って、酒を楽しんで居たであろう人達の残骸が残っていた。

「な、なん……で……?」

「上司がもつと数を増やしなさいってさ、何でも滑る子爵で試した相

手が予想以上だったみたいだよ?」

恐怖に顔が引き攣り、声が出ない。

それでも何とか聞けば、ドウドウーは特に何も思っていないかのよう  
うに答えた。

(異常だつ……こいつらは……異常だつ!!)

前の時、フーケが脱獄する時も人を殺していた。

あの時は脱獄するという目的があつた上に相手も敵意を持ってい  
た。

しかしだ、今この場の殺人は違う。

何も知らずに酒を楽しみ喉を潤し、仲間と語り合っていた一般人。  
それを何の躊躇いもなく目的の為に殺したのだ。

「うふふふ……気に入りませんか?」

「だつ誰だいつ!!」

顔を青ざめ、そんなことを考えていれば階段から誰かが降りてき  
た。

その人物は、フードを深く被り薄く氷を突き立てるような声で笑っ  
ている。

それでも身のこなしや、体型と声から女性だと分かった。

「あなただつて……目的の為に殺すでしょう?」

「わ、私はつ……」

フードを被った女性は、軽い足取りでフーケに近づくと耳元でそう  
囁く。

その囁きにフーケは何も言えなくなった。

フーケ自身にも目的がある、その目的の為に今現在動いており、目  
的の為ならば人をも殺す。

今こうして目的の為に罪もない人を殺したこいつ等と一緒にではな  
いかと思つてしまった。

「あー……匂いが酷くなってきた」

「そうね、そろそろ動かないと怪しまれるわね」

人を大量に殺したのだ、血や尿といった様々な液体が溢れ異臭を放  
つ。



それにドウドゥーが鼻を摘み臭いとアピールすれば、女性も頷き肯定する。

「ふふ……起きなさい」

「……え？」

女性は手を前へと差し出す。

女性の手には綺麗な水色の指輪が付けられており、その指輪が水の波紋を描くように蠢いた。

何度か蠢いた後、ポタリと一粒の雫が酒場の地面へと落ちる。

雫が落ちれば、それは波紋のように地面を伝っていく。

そして——それが起きた。

先ほどまで白目を剥き、舌をだらしなく出していた死体がゆっくりと動き起き上がった。

首を折られている者、心臓を一突きされている者、首を搔つ切られている者。

その全てが一斉に立ち上がったのである。

「っ……!!」

「生きる屍……『リビングゲット』かしら」

フーケが指を一つの死体に向けて示せば、フードの女性はにこやかに告げた。

「生きてると色々と不便なのよ……死んでいれば痛みも悲しみも何も感じない」

女性が言うように動いた死体達は、痛みも感じてないのか何も表情に出していない。

その事にフーケは理解が追いつかず、ただただ見つめているだけとなった。

全員が立ち上がった事を確認すると女性は、手を軽く叩く。

叩けば、首が折れている者は自分の手で無理矢理首を元に戻し。

心臓を突かれていた者は服を脱ぎ血をそれで拭うと準備されていた鎧を着込む。

他の者もそうだ、自分達の姿が生者と変わらぬ姿になるように準備を整える。

「まだ揃えますか？」

「いや、もう十分に揃ったから要らないわ。それに今回はただの余興ですし」

(十分に……そろった)

その言葉を聞いてフーケは力なく、その場に崩れ落ち座り込んだ。

「……わ、私が教えた……盗賊は……」

「勿論……立派な兵士に」

地面を見て、何とか希望を持っていった言葉。

その言葉でさえ相手に呆気なく打ち砕かれた。

今回の襲撃で盗賊団の力が必要と言われて、ここら辺を仕切る知り合いを紹介した。

あまり関わりはないが、それでも多少なりの縁があったのだ。

「あゝっああ……」

「あーあー……泣かしちゃった」

「あらら、刺激が強かったかしら……まあいいわ。役に立たなければ同じようにすればいいし」

最後にはフーケは己の迂闊さを恨み、自分の未来を想像して絶望した。

体が冷え込み、両腕で自分を抱きしめわんわんと泣く。

それを見てもドウドウもフードの女性も態度を変えない。

むしろ女性のほうは楽しそうに笑うだけだ。

「それじゃ……頼むわね。ドウドウ」

「いいけど……あの使い魔はどうするの？」

「こつちで引き付けるから、その間に……」

「了解！ フーケも作戦通りに動いてね、そうじゃないとこの人達みたいにされるから」

そして、そのまま死の兵士を引き連れドウドウも女性も去って行った。

酒場に残ったのは、あらゆる体液と異臭と一人泣き崩れる女性だけであった。

この夜、一件の酒場が火事を起し消えていった。  
大きな火事であったが、奇跡的に死者は零であった。

## 七話：プレゼント

「乾杯」

「乾杯」

貴族の相手の宿、『女神の杵』亭の二階の一室でルイズとワルドはグラスをぶつけた。

「姫殿下から預かった手紙は、きちんと持っているかい？」

「それならウイルが持つてるわね」

「……彼が？」

「うん、魔法が使えない私より安全じゃない」

アンリエッタから預かっている手紙の安全を確かめる会話をしていればワルドが眉を潜める。

そんなワルドに対してルイズもまた怪訝そうに目を細めた。

ルイズは手紙の中身を知っている為、奪われる可能性が一番高い自分でなく安全なウイルへと渡していた。ルイズが魔法を使えない事を知っている人ならば、誰もが納得する、あるいは考える事だ。それなのにワルドは何処か厳しい表情をしていた。

「……どうかしたの？」

「何でもないよ、色々と変わったなと思って」

「変わった……私の事？」

「そうだね、前までの君なら姫殿下から預かった手紙を他人に預けようと思わなかっただろう？」

「……それもそうね」

ワルドの指摘にルイズは苦々しくも肯定した。

前までのルイズ、ウイルに会う前の一人ぼっちのルイズ。

あの時であれば、アンリエッタの依頼に舞い上がり、嬉しがり手紙を大事に持っていただろう。

「人は変わるものよ……環境が違えば」

「ははは、そうだね。変わるものだね」

そう言ってワルドがワインを一口目を煽る中、ルイズは少しだけワインを舌に付けて何かを確かめる。

「何をしてるんだい？」

「毒がないか調べてる」

ほんの少し舌に付けてじっと待っているルイズの行動にワールドが聞けば、その様な答えが返って来た。暫くしてルイズが、舌に痺れはないわねと言って飲むまでワールドは視線を泳がせて言葉に詰まる。毒の警戒などなく口にしていたので恥ずかしいのだろう。それでも何とか笑みを保って会話を続けた。

「へ、へー……彼に教わったのかい？」

「うん、ウイルが『初めて口にするような物があつた時は、舌先で少し確かめろ』って」

「ふむ」

「舌先が痺れたり、痛みを発したり、違和感があつたら毒の可能性が高いって言ってたわ」

「ははは……なるほど、彼は発想力だけでなく博識でもあるのか」  
「……うん」

貴族は暗殺される可能性が平民と比べて段違いに大きい。

故に食べ物や飲み物には一層注意を払うようにと言われていた。

本来であれば『ディティクトマジック』などを使い魔法薬が入っているか調べる方法が一般的だ。

しかし、ルイズはその魔法を使えないため、少しでもルイズの身を守れるようにとウイルが教えていた。

「一滴でも掛かってしまう魔法薬があるから効果は殆どないだろうけど……」

そこまで言葉にしてルイズは頬を染めはにかむ。

ウイルが自分の身を案じてこの方法を教えてくれた事が嬉しいのだろう。

「……彼を信頼してるな」

「信用も信頼もしてるわ」

目を細め、そんな事を言うワールドに対してルイズは間も無く答えた。

「……彼が君に隠し事をしていても信じるのかい？」

「誰にだって隠したいことはあるでしょ？」

「確かにそうだ……自分の恥ずかしい思い出や秘密。隠したいことは山ほどある」

「……そうね」

「しかしだ、それは自分の場合だ」

「何が言いたいかわからないわ」

一口だけでワインに酔った様にワルドは口を大げさに滑らせていく。

そんなワルドにルイズは眉を潜め、少しばかりイラついたような表情をした。

「彼の隠し事に君の秘密があっても信用するのか？」

「……私の？」

「そうだよ……ルイズ、君の秘密だ。君が知らない君の秘密を彼は知っている」

ワルドの言葉にルイズは己の胸に不思議そうに手を置いた。

「きみの使い魔」

「サイト？」

「彼は普通の使い魔ではない」

「……それは分かっている。人間を呼んだ人なんて私とウイル位だもの」

「そうじゃない……その中でも彼は異端だ」

「……異端？」

「そうだ。彼が武器を掴んだ時に、左手に浮かびあがったルーン……。あれは伝説の使い魔の印だ」

「伝説の使い魔？」

「そうさ。あれは『ガンダールヴ』の印だ。始祖ブリミルが用いたという、伝説の使い魔さ」

ワルドの目が細めまり、ルイズを見つめる。

「ガンダールヴ」

「誰もが持てる力ではない、君だけが持つ力だ。話を聞けば、彼はサイト君に的確な助言を与えていると言うじゃないか」

「サイトも嬉しそうに言ってたわね」

「ガンダールヴのルーン自体は、学院のフェニアのライブラリーでも確認出来る。彼はそこを見れるんだろ？」

「……なんで知ってるの？」

「情報は大事だ。何より婚約者の君の傍に居る彼がどういう人物か知りたかったんだ」

「……」

「博識で君の事を想う彼が、サイト君の事を調べない訳がない。調べたとすれば数々の正しい助言も領ける」

その言葉にルイズも確かにと頷く。

「僕だって考え付いたんだ、君の秘密に……。それを彼は君に話さず、隠している。それでも……」

「信じる」

ワルドの言葉にルイズはきっぱりと答えた。

そのきっぱりとした態度にワルドは、口を開き呆気にとられた。

「ここまで清々しく言い切られると言葉すら出てこない。」

「ああ……うん、そうか。信じるか」

「それにしても……私が魔法を使えない理由は、そこだったのね」

「……たぶんね。他の四属性の魔法と君の属性では合わないんだろ  
う」

ルイズはそれを聞くと憂いを帯びた表情をしてワインを軽く揺すった。

始祖ブリミルの用いた使い魔、誰もが羨むであろう使い魔だ。

そんな使い魔を得たと言うのにルイズは喜ばず、逆に悲しそうだ。

「嬉しくないのかい？」

「そうね。……前までの私なら嬉しかったでしょうけど、今は逆ね」

「何を言っているんだい！ 彼が伝説の使い魔と言うならだ！ 君は  
……」

「ワルド様、何処に耳があるか分からないわ」

「……そうだったね、失敬」

ルイズの態度に逆上したかのように立ち上がり告げるワルドをル

イズは冷ややかに見つめた。

見つめてワルドが座った後は、ワインを回しそれを静かにじっと眺める。

「名誉……とは考えないのかい？」

「うん……特別な力つてことは、特別な役割を求められるってことでしょ？」

ワルドが静かに頷いた。

「なら要らない。私は人並みの静かな幸せがいい」

「分からないな……偉大な力だ。国を……、このハルケギニアを動かせるほどの大きな」

「人には相応の器がある。私の器は小さな物、小さな小屋で好きな人と幸せに暮らすぐらいの……」

脳裏にその光景を浮かべているのだろう。

ルイズは先ほどの憂いた表情と違い、幸せそうに微笑んでいた。

ルイズの脳内で誰を想って、誰と暮らしているのかは誰から見ても分かった。

「そうか……君の心には本当に彼が住み着いているんだね」

「はい……ごめんなさい」

そんなルイズの表情を見て、ワルドは力なく笑う。

「これも君を放っておいてた罰か……」

「ワルド様……」

「しようがない、君の事は諦めるよ。……幸せにルイズ」

「絶対に幸せになります」

もう一度ワインを継ぎ足すとお互いにグラスを合わせた。

「そうだ、君に渡しておく物がある」

「私に？」

それからの会話は比較的、穏やかなものであった。

和やかにお互いの日常を語り合う程度のもの。





「そうか、なら情報を集めながら何か食べるか」

「ああ、お腹ぺこぺこだ」

起き上がり、仕度をしながらも今日の予定を口にする。

そうするとカリオストロがお腹を押さえて肯定してくれた。

「どうやら俺が寝ている間、ずっと傍に居てくれたらしい。」

「何か食べたい物ある?」

「そうだな」

朝食は、その事に感謝してカリオストロの食べたい物にしようと決めた。

「おはよう、ルイズ」

「おはよー☆」

「はあ……やっと起きたのね」

仕度をして廊下に出ればルイズと出会った。

軽く手を上げてルイズに挨拶をすれば、ルイズは腰に両手を当てて

そう言ってきた。

「だいぶ疲れてたみたいだ」

「それは分かっているけど……敵が何処に潜んでいるか分からないんだから」

「そうだな、気をつけるよ」

ルイズの危機感足りないんじゃないと言う言葉に素直に頷き、軽く微笑む。

そうすれば、ルイズも手を腰から外し微笑んだ。

「朝食は?」

「カリオストロと外で食べてくる。ついでに情報もね」

「分かったわ。なら別行動ね」

「おう……ところで」

「なに?」

今日の予定を話し合った後、先ほどから気になっていたことを確認する事にした。

ルイズの顔に顔を近づけ、ルイズの肩付近で匂いを嗅いだ。

「ちよ！ 何してるのよ！」

「……香水の匂いが」

顔を近づかせたせいで驚くルイズにそう聞いて見た。

先ほどからルイズから匂う香水が気になってしょうがない。

「ああ……持ってきたのが切れちゃって、ワルド様から貰ったのだけ  
ど……」

「……そうなんだ。正直この匂いは少しきついと思うぞ」

「やっぱりそうかしら……もっと大人しい匂いだったら良かったのだけ  
けど」

そんな日常的な会話をして軽くルイズと笑いあった後、ルイズと別  
れる。

「顔がやばいことになってるぞ、どうした？」

「……何でもない、何でもない」

別れたあと、カリオストロに指摘されるも拳を痛いほど握り締め答  
えた。

## 八話：亡者の群れ

「……」

ウイルと分かれた後、ルイズは静かに廊下を歩く。

暫し歩けば、目的の部屋に着いたのか控えめに扉をノックした。

「誰だい？」

「ルイズです」

ノックをすれば中から男性の声が聴こえてきて、ルイズは名前を名乗った。

名前を名乗れば少しの空白の後、入っていいよと声が掛かり中へと入っていく。

「やあ……ルイズ」

「……こんにちは、ワルド様」

中に入ればワルドがにこやかにルイズを迎え入れ、ルイズもまたにっこりと笑い答えた。

「ああ……僕のルイズ……がっ」

「……」

にこやかに笑いかけるルイズにワルドは涙ぐみ、手を広げて抱きつこうと寄って来た。

今の今ままでルイズに冷たくされていたせいか、今のルイズが輝いて見えたのだろう。

しかし、その輝きも束の間のこと。

ワルドが抱きしめようとした瞬間、ルイズが身軽に飛び、膝をワルドのお腹へと決めた。

「……」

「ぐふっ」

幾ら体を鍛えているとは言え、勢いをつけていたせいかそのまま床へと崩れ落ちた。

それをルイズは冷ややかな目で見下ろすとそのままベッドに移動し、靴を脱いで上がった。

上がれば、あぐらを掻き肘を太股に置いてその手で頭を支える。

「あのよー……オレ様はお前と乳くり会うために来たわけじゃないんだぜ？」

「うぐぐぐ」

そんな女子がしそうなない格好のままルイズは呆れた表情で床に転がるワルドを見る。

既に前までのルイズとは何もかもが違う存在となっているもワルドは指摘をしない。

むしろ床に転がり悶絶してるので出来ないのだが。

「テメーの性癖を解消するのは、この娘っ子と結婚ごっこを終わってからにしやがれ」

「くっ……このっ！」

上から見下ろした発言にワルドは怒りを表情に出し睨む。それをルイズも目を吊り上げ、きつい視線で受け止めた。

「……」

「……っ、それで何のようだ」

暫くの間無言で睨み合うも時間の無駄と悟ったのだろう。

ワルドが苦々しげに怒りを抑え、ルイズへと声を掛けた。

「ちつと聞きたいことがあってな」

「……聞きたい事？」

ルイズはそう言つて、困ったような表情で呟く。

「……この娘っ子は、香水にこだわりとかってあるのか？」

「なに？」

「だから、香水だよ。香水」

そう言つて、ルイズは自分の手を動かし匂いを嗅ぐしぐさをする。

それを見てワルドは眉を潜め考え込むも首を横に振った。

「僕が覚えている限りだと特になかった筈だ」

「そうか……なら、単純に匂いが気になつたせいかな？ それとも……」

「何があつたんだ？」

ワルドの問いにルイズは、腕を組み唸るようになら始める。

そんなルイズにワルドも不安になつたのだろう、目を細めて聞き返した。

「いやな、先ほど旦那のお気に入りにあつたんだが」

「旦那？ お気に入りに？」

「あー……ウイルってガキだ」

「あいつか」

「んでだ……アイツに挨拶をしたんだが、『……香水の匂いが』と言ってなんか気にしててな」

話題に上がったのは先ほどのウイルとの邂逅。

その時にウイルが香水の匂いを嗅いで困惑していたことを話していく。

「……匂いがきついからじゃないか？」

「あーオレ様は匂いなんか嗅げないしな。備え付けの適当な香水を使ったんだが、失敗したか。つーか、女性なら香水の一つや二つ持つてるはずだろ。なんでこいつは一つも持っていないんだよ」

「僕に言われてもね。ここ数年近くのルイズは知らないんだ」

ワルドの言葉に使えねーとルイズが眩き、ワルドは膝から崩れ落ちた。

「まあ……いい、それよりだ。大丈夫なのか？」

「最悪はバレてると考えて行動すべきだな」

「っ……」

ルイズの言葉にワルドは歯を噛み締め、怒りを露にする。

そんなワルドを見てルイズはニヤニヤと笑った。

「相手も迂闊には手を出せないだろうし、様子見かね」

「……ウイルに触れさせて操り、首を搔っ切るのは？」

「無理だね。出来るけど……それは無理な相談だ」

「何故だ？ アイツが一番厄介だろう」

ルイズの物言いにワルドは理解出来ないと言を振る。

今回の任務を達成するにあたって一番邪魔な存在なのだとワルドは指摘した。

「オレ様の雇い主がそれをゆるさねーのよ」

「雇い主？ お前の主人はレコン・キスタではないのか？」

「違うな、あくまでレコン・キスタの協力者って立場だ。んでだ、雇い

主様があの坊主に夢中でな。アイツを煽る程度で危害は直接加えるなど言われてるのよ」

「っ……………」

「ああ、あくまでオレ様が危害を加えるのが駄目ってことでお前さんが奴を殺すのは止めねーよ」

「そうか、まあ…………ルイズが手に入るなら、それぐらいは目を瞑るか」  
「ケケケケ、こんなスタイルが悪い娘っ子が趣味かい」

ルイズはニヤニヤと笑うとベッドから飛び降り靴を履くとスカート  
の裾を掴み少し持ち上げる。

そうすれば、白い綺麗な太股と太股に付いているナイフホルダーが  
ワルドの目に入った。

「…………ルイズの体には興味ないさ。欲しいのは魔法だ」

「なんでい…………つまんね」

「まったく、それでこれからどうするんだ」

「一旦娘っ子に体を返す。勿論これまでの記憶は消してだ」

「戻すのか？」

「戻すさ、相手は操られてると疑ってるんだぜ？ その最中に娘っ子  
が元に戻れば混乱するだろ。『どうして一瞬だけ操ったんだ』と」

ワルドの指摘にルイズはくすくすと笑い、扉を開き外へと出た。

そして扉を閉めると廊下で目を瞑り、一呼吸置いた。

「…………あれ、私こんな所で何をしてるんだろ？」

暫くするとルイズは不思議そうに辺りを見渡し首を傾げた後、自分  
の匂いを嗅いで眉を潜めた。

「なんで香水してるのよ。ウィルが苦手できてなかったのに」

朝からお風呂に入れるかしらと一階へと降りていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

その夜、個室で椅子に座り考え込む。

考えている内容はこれからの行動とルイズをどうするかだ。

(……分かんないな。一時的な魔法薬か？ それだとしたら今操る意味が分からないし)

「手止まってるぞ」

「おう」

朝のルイズを見て違和感を覚えたもののその後は何時も通りのルイズであった。

香水もしてない上に表情や仕草、此方への態度もあまり変わりない。

(朝の出来事を覚えてない時点で確定なんだけど……治し方が分からない)

あの後、会った時に香水の件を聞くもルイズも不思議そうにするばかりであった。

曰く、気付いたらサイト達が泊まってる部屋の前に居て香水も付けていたと教えてくれる。

『私……もしかして……』

『ちよつと疲れてるのかもね、出発までゆつくりと休むといい』

『……ウイル……分かったわ。後はお願いね?』

『おう』

その時の出来事でルイズ自身気付いてるのも分かっている。

しかし事を荒げれば相手がどう出るか分からない。

朝の出来事を解明し、適切な対応をしなければ悪化するばかりだ。

確実に治さなければ、その後で一人行方を暗ます。ルイズを自殺に追い込む、などその他色んな所で利用される。

(やはり香水が肝か？ カリオストロなら……分かってるんだろかな)

「はあ……相変わらず、オレ様は可愛いな」

人の膝の上で手鏡を見ているカリオストロを見つめる。



カリオストロなら既にルイズの状態も予測もついているだろう。しかしだ。

(教えてくれるわけないよな)

元より自分の興味を引く存在以外はどうでもいいと思ってるのがカリオストロ。

自分に害、もしくはイラつくことがない限りは手伝いはしてくれないだろう。

必死に頼めばもしかしたら手伝ってくれるかもしれないが、不機嫌になるだけで終わるかもしれない。

どちらにしろレコン・キスタより厄介なカリオストロだ、軽く扱えない。

(考えろ、思考を止めるな。何か何か情報があるはずだ)

カリオストロの髪を梳かしつつも考える。

何か何か見落としてはないだろうかと……。

「ウイル!!」

「才人？」

「ああん？」

そんな時だ。

扉が荒々しく開き、息を切らした才人が入って来た。

「襲撃だ！ 一階が襲われてる！」

「は？」

才人の言葉に意味が分からず、少し惚ける。

急いで耳を澄ますも戦闘音は聞こえてこない。

むしろ、昨日よりも静かであった。

(……待て、何で外の喧騒も聞こえてこない?)

「ウイル！」

「ああ……くそっ！ やられた！ 『ディテクトマジック!!』」

静かな事に気づき、慌てて杖を振り探知魔法を唱えれば、部屋全体が淡色で満たされた。

光る理由は魔法がかけられているから、部屋に魔法をかけられていた。

「なんだ……これ」

『サイレント』の魔法だ。辺りの音を消してくれる魔法、それを部屋に使われてたんだ！」

カリオストロを抱き上げ、そのまま廊下へと飛び出る。

すると先ほどの静けさが嘘のようになくなり、様々な音が耳を満たす。

「一階は？」

「大混乱だ。キュルケ達が抑えてるけど数が多い、中は勿論外までいっぱいだ」

「くそっ！」

才人と廊下を駆け抜け、階段手前で才人に合図を送り止める。

「ウイル？」

「状況を確認しないまま突っ込んだら更に混乱がますだろ、少しだけ時間を掛けて探る」

「っ……でも」

「ほんの少しだ」

「分かった」

才人はどうなってるか分かっているだろうが、俺は分かっている。い。

故に階段をゆつくりと居り、ぎりぎり一階が見える位置で様子を伺う。

そこには複数の鎧を着込んだ兵士らしき者達が、己の持っている武器を振り上げ攻撃をしていた。

ルイズ達は、大きな丸テーブルを盾に相手の攻撃を耐え、魔法を撃って対処をしている。

相手の剣や弓がテーブルに通らない所を見るに『固定化』の魔法をテーブルに使用しているのだろう。

「ウイル……まだか」

『落ち着け相棒！ 焦る気持ちは分かるが、抑えろ』

「くっ」

「……」



「ああ……サイト、呼んできてくれたかい」

階段から飛び降りて相手をいなし、テーブルまでやってくると全員がほっと一息ついた。

そんな皆の様子を見て、ウイルは本当に頼りにされてるんだと微笑む。

「取り敢えず……子爵とタバサは相手を一度壁際に押し込んでください」

「分かった」「了解だ」

ウイルは皆の様子に手を軽く上げるだけで答え、指示をすぐさま出していく。

「ギーシュは俺とそこの酒樽を『レビテーション』で店の中央へ運び中身をぶちまけろ」

「なるほど……そういうことか、わかったよ」

「キュルケは酒をぶちまいたらそれに火を！」

「なるほどね……よく考え付くわね」

指示に従い、それぞれが行動をしていけば、お店の中央で酒が燃え一時的な火の壁が作り出された。

相手はそれを見ても突っ込んで来るも体が燃え上がり、風の魔法でまた店先へと追い返される。

「うぷっ……」

「大丈夫か、才人。あまり見ない方がいい」

人が燃える光景と人が焼ける異臭で吐き気を催した。

それを見ていれば首根っこを捕まれ、机の下へと戻された。

「っ……おえ」

『相棒、大丈夫かよ』

「だいたいよばない」

今まで人の死に触れる機会がなかった才人にはきついものがあった。

(なんでこいつらは平気なんだ)

先ほどの光景を見ても具合悪そうにするのは、俺のみ。

ギーシュもキュルケも若干顔が青いぐらいで俺より酷くない。

なんだか、自分だけが浮いてる状況に苛立ちが募り、別の世界に居るのだと改めて思い知らされた。

「……それでこれからどうするんだい？」

「……」

鼻を押さえ異臭を嗅がないようにし、ウイル達を見る。

会話に耳をすませば丁度これからの行動に関する話し合いをしていた。

全員が全員、腕を組み考え込むウイルを期待した目で見る。

「……逃げる」

「え？」

期待して見ていた時、ウイルが静かに腕組を解きそう言った。

ウイルの言葉に全員がシンツとなる。

聴こえてくるのは外の喧騒と店が燃える音のみ。

「……そうか、それしかないか」

「ない。どう考えてもこれだけ」

そんな状況で最初に口を開いたのはギーシユだ。

ギーシユは軽く息を吐き、そう言うのと天井を仰ぐ。

「具体的には」

「裏口から出て、俺とルイズと才人と子爵は棧橋に行きアルビオン行きの船へ。ギーシユとキュルケはタバサと共にシルフィードで王都へ飛んでくれ」

「それしかないのね」

「最良の行動だと思う」

次はタバサが、その次はキュルケがウイルに言葉を投げかけ納得し頷く。

ルイズも子爵もウイルの言葉に頷き、カリオストロは静かにそれを静観していた。

「それじゃ……行動を……」「なあ」……どうした？ 才人」

ふとそれを聞いて思った事があり、手を軽く上げ割り込んだ。

割り込めば、全員が今度はこっちに注目した。

「……俺達が逃げてだ。アレはどうなるんだ？」

「屍人鬼のことか」

「あれってゾンビとかそういうの？ 俺達が逃げたら……」

外の居る屍人鬼を指差し、聞いて見る。

正直な話、屍人鬼とかよく分からないが人を襲うゾンビ同様な存在と認識は出来た。

そんな存在を放置したら……この町はどうなるのだろうか。

「どうなるだろう……大人しく戻っていくのか、そのまま人を町を襲うのか」

「っ……！」

その言葉を聞いた瞬間、頭に血が上った。

衝動的な感情だと分かっているけど止められずウイルスの胸元を掴む。

「サイト！」

「放っておくのか？ あれを……町の人を襲うかも知れないんだろ？」

「……」

思い出したのは先ほどの焼けた死体だ。

あれは自分達を襲ってきた存在であったが、それがこの町に住む人になるかも知れないのだ。

それを知りつつも冷静に逃げる算段をしていた事に腹が立った。

「俺達には時間がないんだよ！」

「船が出るのは明日だろう？ 皆で倒してから行けば……」

「無理だ」

希望的観測を言うも即座に否定された。

「あれだけの屍人鬼の騒ぎ……そんなことが広まらないとでも？ 間違いないと広まり桟橋にも情報が行く」

「っ……」

「そうだったら船なんか皆飛び立って逃げるだろうか」

「……」

「シルフィードでも行けない。他国の人間である二人をこれ以上巻き込めないんだよ！ グリフォンだと人数制限やあそこまで飛べない」  
ウイルスの言葉に歯を噛み締めた。

「任務を忘れるな、才人。俺達の任務一つで国が滅ぶかもしれないだ」

「っ……でもよー！」

「サイト……町の人も馬鹿じゃない。警備隊も居る。ボク達に注意を少しの間でも向けたんだ。ある程度の人は逃げてるよ」

ぐっと腕に力を込めるとギーシュが横からその腕を優しく押さえってくる。

暫くウイルとギーシュの顔を交互に見てから震える手を解いた。

「……本当にこれしかないのか」

「これが一番人が死なない」

俺はそれほど頭がいいとは言えない。

それでもギーシュの言葉が今ではなく未来の事を話していることぐらいは分かった。

「くそ……情けねえ」

『……相棒』

床を見つめ、溢れ落ちる涙を眺める。

これだけのことがありながら出来る事は逃げるだけ、それが悔しく悲しく、犠牲になる人进行うと泣けた。

『相棒……お前さんの気持ちは皆分かるけど、これを決断したウイルの気持ちも分かってやれや』

「……デルフ」

デルフの言葉にウイルへと視線を向ける。

ウイルは移動し、カリオスト口を後ろからぎゅ、と抱きしめていた。  
(……そうだよな。ウイルも不安だよな)

その光景を見て思い出す。

一番辛いのは、この作戦を考えたウイルだ。

人を犠牲にし逃げる事を選択したウイル……彼の心を考えれば自分なんかより辛いだろう。

「ウイル……ごめん」

「……いいさ。それより早く行こう」

「おう」

ウイルに先ほどの件を謝り、後ろ髪引かれる思いで駆け出した。

「それじゃボク達は王宮に報告に行く！ 無事で！」

「ギーシユもな！」

シルフィードに乗り、空を飛んでいく三人を見送るとそのまま棧橋へと走る。

「すっげー……」

「ボサつとしないの」

「あつ……悪い」

走って棧橋に着けば、そこは大きな樹木であった。

見た事がないような大きな樹木でその枝の先に幾つもの船が停泊していた。

「だいぶ飛んでるな」

「急がなければ」

ルイズに急かされ足を動かし階段を登っていく。

その際にウイルと子爵が空を飛ぶ船を見て顔を顰めた。

ウイルの言ったとおり、下の騒ぎを聞きつけ船が逃げているのだろう。

「……あつた」

「よし、あの船にしよう」

「交渉はお任せしても？」

「ああ、君には出番を取られてばかりだからね。ここで私も役に立つさ」

未だに停泊している船を一隻見つけ、子爵が交渉へと前に出た。

その光景を少しだけ見つけてから下の町を眺める。

そこでは先ほどの宿が燃えてるのか赤々しく光が灯っていた。

「……やっぱり気になる？」

「……ああ、気になる」

見ていれば、ウイルがやってきて声を掛けてきた。

先ほど謝ったからと言っても、やっぱり気まずく顔を見れない。



「最善の策はうった……後は祈るだけしかできない」

「……」

ウイルの言葉に耳を傾けつつ、首を振る。

そして町から視線を逸らし、ルイズ達のほうを見て気付く。

「……なあ、ウイル」

「なんだ？」

「……カリオストロは？」

子爵にルイズにデルフにウイル。

ここに居るのは自分含め四人と一体。

何処を見ても先ほどの宿に居たカリオストロが見えない。

シルフィードに乗ったのかと思い、思い出すも乗っていなかった。

「ウイル！ カリオストロが！」

まさか置いてきてしまったのかと思い慌ててウイルへと投げかける。

するとウイルはニヤリと笑い口を開いた。

「言つたろ？ 最善の策だつて」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「たくよー……ここでオレ様を使うか」

宿が燃え、異様な集団を見て人々が逃げ惑う中、カリオストロは拗ねたように唇を尖らす。

出てくる言葉全てウイルに対するものが殆どで文句たらたらだ。

「まあ……言い出したのはオレ様なんけどな」

そう言っと思いついたのは先ほどのこと。

逃げる算段が付いた後、ウイルが自分に抱きついてきた。

その時の事を思い出した。

『……カリオストロ』

『ねえねえ、カリオストロの力がひつようー?』

『ああ……カリオストロの力が必要だ』

『分断が敵の策ってわかってるう? ここでカリオストロを使えば敵の思う壺だよ☆』

『分かってる、それも……切り札をここで使う意味も』

「……切り札か、切り札。いい響きだ」

会話を思い出し、斧を振り上げ近づいてきた輩を軽く血祭りに上げニヤニヤと悶えた。

(何より……アレだな。ウイルが他の奴等に目もくれずオレ様だけを頼ってくるのもいい)

本来であれば、自分に助けを求める行為など言語道断、あまり好きな部類ではない。

助けを求める前に全力でやってそれでも無理な時に頼る程度でないとは人は成長しないのだ。

今回助けを承諾したのは及第点に達した為だ。

(一応相手の策に対して、しっかりと最善の策も出した。全員で敵を倒してウロボロスに乗って行くとか言ったら見放してたぜ)

ウロボロスならアルビオンまで全員を乗せて行けると言い切れた。しかし、それだけなのだ……それだけ。

運べてもアルビオンの位置も上陸する位置も分からない。

今日手に入れた情報では、王党派は既に最後の砦に籠ってるのとことだ。

誰から見ても時間が足りない状況なのに右も左も分からず進むのは馬鹿がやること。

(船乗りならアルビオンの位置も停泊すべき位置もしつかりと分かっている。時間を無駄にしない)

しっかりと決められた所で上陸すれば地図が使える。

適当な所で上陸すると何処に居るのかを確認する時間が必要となる。

ウイルの策は確かに最善であった。

「……後はだ。オレ様がこいつ等をぶっ倒して被害を最小限にすれば万事OKだ」

「あなたにそれが出来るか？」

「出来るさ……何せ、オレ様は——」

『天才美少女錬金術師だ』

先ほどから此方の様子を伺っていたフードを被った女性にそう啖呵を切った。

## 九話：それぞれの戦い

「なあ……」

「何だ？」

宙に浮かぶ船の上から、街を見下ろす。

見下ろした街は、音こそ聞こえないが人々が逃げ惑う光景が見え胸を締め付ける。

それでも自分の起した行動は正しいと信じ進むしかなかった。

王宮に向かったギーシュ達の事、操られているであろうルイズの事、そしてこれから戦場へと赴く自分達の事。

様々な事を考えていれば、隣で座り込んでいた才人が声を掛けてくる。

残念ながら才人は船の床を見ており、表情は見えない。

しかし、声色からだいぶ参ってるのがよく分かった。

「……ギーシュ達は」

「安全……とは言えないな。敵が竜を持って来ていたら追いつかれる」

「ルイズは？」

「気付いてたのか？」

才人の言葉に少し驚き、目を見開いた。

まさかルイズの事で勘付いてると思っても見なかった。

「……昨日の夜からさ。胸がざわめくんのだ」

「……」

「デルフの話では使い魔の契約のお蔭で主人に危険が迫ってることを伝えてるって」

その言葉に黙って目を瞑った。

その際に思い浮かんだのは、ルイズの笑顔だ。

暗闇の中でのルイズは何時ものように可愛らしく穏やかに笑っている。

「……っ！」

目をゆっくりと開き、手に力を込める。

このままにしておけば確実に見れなくなる笑顔だ。  
そのことを考えれば、怒りが湧き上がり胸をさつきより締め付けられた。

苦しい程に鼓動が鳴り、操ってる相手に初めての感情を抱いた。  
今まで抱いたことのない感情だが、その感情をなんと言うか理解は出来ている。

「ウイル？」

「はあ……確かに今ルイズは操られている」

「……そうか。原因は？」

「分からない……分からないんだ」

才人の言葉に我に返り、答える。

素直にそういえば、才人の声もなくなり、風の音だけが辺りを支配した。

怒りを胸の内に収め、冷静になるように何度も呼吸を意図的に繰り返す。

「……カリオストロは大丈夫かな？」

「そっちは問題ないな」

「呆気なく答えるな」

「ははは」

暫く黙っていれば、才人がポツリと呟く。

その言葉には軽く答えられた。

才人はカリオストロの強さを見ていないし、教えていない。

ただ俺より強いと伝えているだけである。

だから、よく分かかってないのだろう。

カリオストロの実力を……。

「カリオストロは問題ないさ」

「本当にか？」

「あぁ……」

才人の言葉にしっかりと頷き、目を瞑る。

これからが本番だ、今の内に休んでおくべきかも知れない。

そう思い、目を開けると才人を引き連れて用意された部屋へと戻っ

た。

ルイズが操られてる事もあり、才人と交互に眠りに就き襲撃に対して警戒をする。

最初に才人に寝かせて、ぼーとしていれば扉が開く。

それに対して構えるも入って来たのはルイズであった。

「寝ちやったの？」

「ああ……だいたい堪えたらしい」

ベッドに眠る才人を見てルイズがわざとらしく首を傾げる。

それを静かに見守り続けた。

「……子爵は？」

「馬車馬の如く魔法を使わせられてる」

「そうか」

「そうよ」

短く言葉を切つて息を付く。

そうしていれば、ルイズは黙り込みベッドに座るとあぐらをかいた。

そんなルイズに眉を潜める。

「お前……」

「はっはっは、初めましてだ」

目の前でルイズが笑う。

笑うが、それは先ほど思い出したルイズの笑顔と異なる物。

そのことで強く強く再認識させられた。

「おまえっ!!」

「名前は『地下水』、暗殺者をしてる……よろしく頼むぜ。旦那」

下品にニヤニヤと笑い、此方を挑発する地下水と名乗るルイズ。

それに対して怒りで叫ぶもすぐに目を細め静かに見据えた。

これはある意味でチャンスだと、相手を探るべく口火を切る。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ウイルと地下水が顔を合わせている頃、ラ・ロシエールの戦いは佳境を迎えていた。

その少女は屍の山を前に少女は不敵に笑い、自らが作り出した椅子に座り込む。

「はあ……終わるかよ。つまんねー」

「っ……なに、これっ！」

それは叫びだ。

心の叫び、フードの女性は地面に倒れ伏せ信じられないと呟く。

それでも今現在の状況が現実である。

百体近く居たりビングデットの群れは、一瞬にして崩壊した。

胸を吹き飛ばれようが、腕を無くそうが痛みも感じない恐ろしい存在だ。

その存在が、少女が指を鳴らすだけで地面から現れた武器に当たり、空高く舞う。

そして地面に叩き付けられ、動かなくなるのだ。

頭を吹き飛ばされるか、燃やされないと動き続ける存在がだ。

「くっ……なんで動かない！」

「なんだ……分かってなかったのか」

「分かってない？」

足を組むと手を頬に当て面倒臭そうに少女はフードの女性を見つめる。

「オレ様に掛かれれば人の体も錬金出来るのさ」

「人を……錬金？」

フードの女性は、人体を錬金出来る存在が居た事に驚き、その脅威

に身を振るわせた。

ハルケギニアの錬金では人を練成する事が出来ない。

むしろそんな恐ろしい発想をする人も少ない。

何回も人体を錬金しようとしても何故か出来ないのだ。

だからこそ、諦められ、そういった魔法なのだと認識が広まった。

しかし……だ。

それを可能とする存在が目の前に居る。

「そうさ……どうやらお前等はやり方を知らないようだけだよ」

「出来るというの……人を？」

「その証拠に……ほれ」

もう一度見せ付けるかのように少女が指を鳴らす。

そうすれば傍にあった、リビングデットの山が塵となり、風に乗り消えていく。

それを見てフードの女性は、目を見開く。

呆気ない……あまりにも人が呆気なく消えていった。

「上に吹き飛ばした際に内部を錬金して空っぽにした。中身が無ければ動けないだろ？」

「……悪魔？」

「悪魔とは失礼な……どっから、どう見ても！　かわいい……美少女でしょ？」

両腕を口もとに持っていき、甘ったるい声で少女が言う。

日常で見れば彼女の容姿も相まって惚れ惚れとするだろう。

しかし、今この場に置いてはそれが不気味さを産み、フードの女性からは魔王のように見えた。

「ひい……」

「ちっ……おいおい、なんだその怯えた面は……最初の余裕のある勢いはどうしたよ？」

椅子から降りると少女は気だるげにフードの女性へと足を進める。

一歩一歩余裕を持ち歩く少女の姿は不気味でしようがない。

「くっー」

「ほらほら……どうした」



そんな余裕ある態度に対して、フードの女性は地面を這いずるように逃げる。

それを少女は薄く笑い追い詰める。

「ふふふ……掛かったわね」

「あんつ？」

とある一軒家の壁際まで這いずり壁を背にすると女性が振り向く。

フードの隙間から見える口元が恐怖でなく、嬉しそうに歪む。

それを少女は怪訝そうに見つめ……。

「クリエイトゴーレム!!」

「……」

少女が声に反応し振り向けば、大きな三十メートルほどのゴーレムが拳を振り上げ少女に打ち込まれた。

打ち込んだ際に辺りの民家を巻き込み盛大に砂煙を上げる。

「げほげほっ……どれだけ強くてもこれなら……」

「これで……私は……」

目の前にある大きなゴーレムの拳を見つめ、フードの女性が笑う。

先ほどまで追い詰められていた強敵を引っ掛ける事に成功したのだ。

それが嬉しくて堪らないのだろう。

「はっ！ 折角引っかかってやったのにお粗末だな！」

「はえ？」

しかし、その優越もその声が聴こえるまでだ。

目の前の砂煙が晴れば、そこに居た。

「な、なんで……」

「どうせお前等の事だ……今までのオレ様の攻撃を見て重量のある攻撃なら押せると……倒せると思ったんだろ」

少女は、先ほどと同様フードの女性を見つめている姿勢を保っていた。

腕を組み、何一つ変わらぬ姿で三十メートルもの巨体のゴーレムの拳を防いでいる。

「これは……ゴーレム？」

「正解だ。いいだろ……美しいだろ？ 前に読んだ書物に書かれていた奴だ……名前は——『砂神グラフィオス』」

ゴーレムの手を止めていたのは一体のゴーレムだ。綺麗な砂色をしていて見方によっては上品な金色に見える。

大きさは三メートルほどではあるが、片手で三十メートルのゴーレムの手を止めている。

「フーケエエエ!! 殴れ!」

「っ!! やれっ!!」

「いやはや、一目見て気に言つてな。こいつを擬似的に作り出せないかと研究してたんだ」

フードの女性の言葉にフーケがゴーレムを動かさず、何度も拳を打ち込む。

「無駄無駄……無理だつての。まあ、丁度いいし起動テストさせてもらうか」

「くっ!」

何度も打ち込まれる拳に合わせ、砂神グラフィオスも拳を合わせる。

フーケのゴーレムが形振り構わず打ち込むのに対して、少女のゴーレムは的確に適切に捌いていく。

その時点でどちらが上なのかは決していた。

「拳つてのはなあ……!」

「ひい!」

暫くそれが続けていけばフーケのゴーレムが耐えられなくなり、手から崩壊を始める。

指が落ち、土へと変わり辺りを隠す。

そんな光景を見て少女が、腰に手を持っていきトドメとばかりに腰の入った一撃を空へと撃つ。

「こうすんだよっ!!」

「な!」

挟りこまれるような一撃を少女に合わせ、グラフィオスも繰り出す。

グラフィオスの拳が崩壊しかかっているフーケのゴーレムの拳へと当たると、全てが吹き飛ばすように崩壊しゴーレムが崩れ落ちる。

「はっはっは、格が違うんだよ！ 格がよっ！」

全てが土へと変わり、それを見て少女は高らかに笑う。

暫くの間笑うも、すぐに顔を顰め後ろを振り向く。

「……忘れてた」

そう呟く少女の先には、誰も居なくなっていた。

どうやらゴーレムを操るのに夢中になり逃げられたようだ。

「……」

それを見て少女——カリオストロは、気まずそうに頭を掻き、己の主人になんと言おうかと頭を悩ませた。